Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

Kodak Gray Scale

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

1.5
95
N

081.5
G95
N
00212208

新校羣書類從

第十七卷

内外書籍株式會社

新校

羣書類從

合戰部二
武家部一

第十七卷

内外書籍株式會社

新校羣書類從

監修

文學博士　上田萬年先生
文學博士　和田萬吉先生
文學博士　藤井乙男先生
文學博士　三浦周行先生
文學博士　新村出先生
文學博士　幸田成行先生
文學博士　辻善之助先生
文學博士　藤村作先生

顧問

文學博士　一黑板勝美先生
文學博士　三上參次先生

081.5
G95
N

212208

（明治廿九年十二月四國の方紀行を終り故郷に帰れり。）

この事ども、ふるき友達の故郷なれば、しるしとどめ、一編の紀行を書きつづるなり。

高知縣人。

土佐の大海は、天の涯なり。波は、白き波濤。水は、色なき水。空は、青き空。

ときどきに、この海面を、白き帆、ただ一つ、遠き海面の彼方に、

ゆく。この海面に、浮かれ出でし者は、何ぞ、何ぞ、何ぞ、

つねに、涙ぐみ、顔を、真赤にそしり、絶叫の、絶叫、ただ、絶叫、

海鷗の、絶叫を、聞くのみ。、、、

關城書並裏書

（親房卿被贈結城狀　寫本一冊　內閣文庫所藏）

內閣文庫　樋口龍太郎

こゝに寫眞版として掲げたのは、關城書の首尾を寫したものであるが、正保四年暮春向陽子（林恕）が奥州の民間から發見したものであることは、末尾の考證文によつて窺ひ知られる。

その來由するところ、林家より弘文學士院（昌平校の前身）に遷り、後昌平坂學問所に收められ、維新後淺草文庫を經て、內閣文庫の有となつたものである。

本書の體裁は大本茶標紙、本文九行七枚、裏書十行三枚半、向陽子考證文一枚から成る。

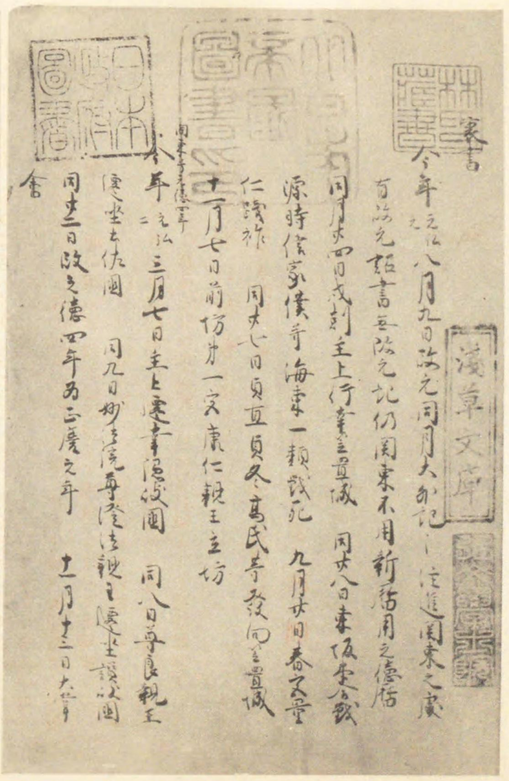
この書は北畠親房が奥州軍糾合の計劃を樹て、孤軍常陸に據り、南朝の恢復を計つたが、賴む所の白河の豪族結城親朝、言を左右にして來援せず、關の孤城にあつて焦燥の裡に認めた書狀と稱せられるも、その眞僞に就ては古來屢〻論議されてゐる。

きりながら南風競はざるに當り、渾身報國の念に燃え、

「大義之成否不必係心府。運命云極者。失一命之外無他事。更不可爲遺恨。」

と叫んで至誠を披瀝せるところ、一讀暗涙を催さしめる。

（昭和五年十二月內閣の允許を得て撮影印行す。）



之邊。偶在關城。忽會敵兵來圍。而作此書。以贈白河結城氏求援兵乎。猶待他日之重援耳。

正保四辛暮春　向陽子

例言

一、本卷は第十七卷合戰部(二)、武家部(一)とし、蘆名家記以下走衆故實に至る六十五種を收錄した。

一、刊行に際しては、特に本卷は史家の信憑し、引證する重要なる種類のものであるが爲に、忠實なる塙本の複刻を意圖し、殆ど一點一劃の末に至るまで、すべて塙本の舊態を存するに努めた。卽ち極端なる誤字、宛字、假名の混用、誤用、更に甚しき文法の誤謬に至るまで、故意に看過して、原本そのまゝの形態を殘した。

一、從來の方針により、濁點、句讀點を附し、漢文には反り點を施した。尙宛字、誤字、古字の傍には正字を充て、疑はしき字句には、傍に(衍歟)の二字を併記した。是等は凡て編者の私見によるものである。

一、本卷も前卷の如く、覓め能ふかぎりの善古寫本を以て嚴密に對比校合した。闕字を補ひ、誤字を闡め、闕文を增補する等、得るところ多大であつたことを信ずる。

一、試に對校に用ひた善本を擧ぐれば、卽ち蒲生氏鄕記は內閣文庫所藏本によつて序及系圖を補入し、建武以來追加は同じく同文庫所藏本により、大內家壁書は毛利公爵家所藏本によつて、各その闕けたるを補ひ、その異れるは併記して置いた。また、豫章記は內閣文庫所藏本に依り、難太平記は宮內省圖書寮所藏本に依つて補入した所が多く、其上傍訓、送假名をも補載した。

一、更に、柴田退治記、別所長治記、大內義隆記、中國治亂記、阿州將裔記、三好別記、豫章記、荒木略記、親房卿被贈結城狀、侍所沙汰篇、普廣院殿御元服記、普廣院殿左大臣御拜賀記、三好筑前守義長朝臣亭に御成之記は、內閣文庫所藏本により、赤松再興記、難太平記、殿中申次記、年中定例記、公方樣正月御事始之記、畠山亭御成記、朝倉亭御成記、

例言

文祿三年卯月八日加賀之中納言殿に御成之事、文祿四年御成記、諸大名衆御成被申入記、走衆故實は宮内省圖書寮所藏本により、又、飯尾宅御成記、伊勢守貞忠亭御成記は、内閣文庫、宮内省圖書寮兩所所藏相良文書によつて夫々嚴密なる校合を遂げた。

一、異本竝載の形式は凡て前卷に准據した。卽ち塙本所載の異本は何々ィ、この度の校合はィ何々、ィ(……)は異本による補入、「……」は異本になきもの、(但し、前回までは「……」(イナシ)の如く傍にィナシの三字を附記したが、本卷よりはこれを省略して、單に「……」と改めた。尤も二種以上の異本と校合した場合は已前の樣にィナシ、ロナシの符號を用ゐた。)ィィ何々は異本所載の異本、ィ何々ィは塙本所載の異本と校合の異本との一致せるもの、行外のィ(……)は異本の傍註等である。又行間の狹隘、振假名等に妨げられて以上の形式をとることの出來なかつた場合は、これを文中に入れて、……ィ(……)……、……(ィ何々)……、……(何々ィ)……、……(ィ何々ィ)……等の形式をとつた。尙異本二種によつて、校合したものは、ィ何々、ロ何々の符號を以て區別した。

一、本卷の解題は東京帝國大學史料編纂官花見朔巳氏の執筆を煩した。

一、本卷は東京商科大學豫科教授川上多助之を擔任した。

新校羣書類從 第十七卷 目次

解題……一

合戰部(二)

卷第三百八十九

蘆名家記……一

蒲生氏鄕記……一七

卷第三百九十

伊達日記上……三

伊達日記中……五三

伊達日記下……七八

卷第三百九十一

柴田退治記……八九

富樫記……九七

小松軍記……一一〇

卷第三百九十二

荒山合戰記……一二三

末森記……一三〇

卷第三百九十三

赤松記……一四八

赤松再興記……一五七

別所長治記……一五九

播磨御征伐之事……一七五

卷第三百九十四

大内義隆記……一七九

中國治亂記……一九五

卷第三百九十五

阿州將裔記……二〇五

三好家成立之事……二二五

三好別記……二三四

十河物語……二三一

卷第三百九十六

豫章記……二三五

卷第三百九十七

大友記……二七三

卷第三百九十八
難太平記……二〇五
上月記……三三
荒木略記……三四
卷第三百九十九
親房卿被贈結城狀　稱關城書……三六
吉野御事書案……三三
阿蘇大宮司惟澄申狀……三四
菊池武朝申狀……三七
上杉輝虎注進狀……三九
豐臣太閤御事書……三四
沙彌洞然長狀……三六
武家部（一）
卷第四百
御成敗式條……三七
御成敗式目追加……三六
卷第四百一
建武式目條々……二八〇
建武以來追加……二八三
卷第四百二
侍所沙汰篇……四〇七
大內家壁書……四一八
政所壁書……四三一
卷第四百三
早雲寺殿廿一箇條……四三
信玄家法上……四六
信玄家法下……四〇
長曾我部元親百箇條……四五
朝倉敏景十七箇條……四五二
卷第四百四
鹿苑院殿御元服記……四五四
普廣院殿御元服記……四五八
光源院殿御元服記……四六六
常德院殿樣御馬召初らるゝ事……四七七
卷第四百五
寶篋院殿將軍宣下記……四七九
普廣院殿任大臣節會次第……四八二
普廣院殿左大臣御拜賀記……四八七
普廣院殿大將御拜賀雜事……四八九
鹿苑院殿御直衣始記……四九二
卷第四百六
長祿二年以來申次記……四九四
卷第四百七
殿中申次記……五三七
年中定例記……五五四
公方樣正月御事始之記……五六六
卷第四百八
殿中以下年中行事……五七二
卷第四百九
飯尾宅御成記……五九九
畠山亭御成記……六〇五
祇園會御見物御成記……六〇八
伊勢守貞忠亭御成記……六一一
三好筑前守義長朝臣亭に御成之記……六一四
朝倉亭御成記……六二七
文祿三年卯月八日加賀之中納言殿に御成之事……六三〇
文祿四年御成記……六三七
卷第四百十
諸大名衆御成被申入記……六四二
供立之日記……六四七
御供古實……六五〇
走衆故實……六六一

解題

合戰部（二）

蘆名家記 三卷

本書は陸奥會津の蘆名氏の家記である。蘆名氏は彼の源頼朝擧兵の際に有名な三浦義明の子佐原十郎左衞門尉時連より出でたるもので、實に東北の一大名族であつたのである。而してその氏の蘆名は或は葦名とも書き、その孰れが正しいか遽に定め難い。蘆名氏の最盛期を劃した盛氏の木像國寶の銘にも蘆名とも葦名とも書いてあるのを見ると、天文・天正の交にも既に兩様に書いたことがわかる。

さて本書は蘆名氏の家記とはあるけれども、冒頭既に「蘆名家滅亡濫觴之事」とある如く、本書の取扱つてゐる範圍も實は伊達・蘆名二氏葛藤の始まりより筆を起し、遂に天正十七年伊達政宗が蘆名盛重を滅ぼし、やがて豐太閤の北條氏を滅ぼし、ついで會津下向となり、更に政宗より會津を奪つて蒲生氏郷をこの地に封ずるに至るまでを記したものである。蘆名氏は佐原義連が源頼朝の藤原泰衡を滅して、奥羽二州を併すに及んで、會津に封ぜられたもので、東北に在つては伊達氏と相ならんで舊族であり、天文より天正の始めにかけて盛氏の時代は武威最も輝いたものであつた。然るにその後繼嗣問題相ついで起り、天正十三年盛重が常陸の佐竹氏より入つて繼ぐに及んで、不幸にして滅亡の歴史となつたのであるが、かゝる名族でありながら、何等纒まつた歴史の見るべきもののないことは、實に滅亡の悲哀を最も適切に物語るものである。

蒲生氏郷記　一卷

本書は氏郷の生立より一生の戰功を記したもので、特に天正十八年小田原役の後、秀吉から會津・仙道を與へられてより、伊達政宗との關係を敍するあたりが最も精しく記されてある。然るに本書卷尾に「一氏郷武篇物語被レ致ニ」として、いかにも氏郷の直話の如く書いてある一條に、小牧・長久手陣と、秀吉の柴田勝家との合戰を前後して年代に矛盾あるのは何としたことであらう。要するにこれ等の戰記物は到底參考史料たる範圍を出でざるものであらう。改定史籍集覽第十四冊にも「氏郷記」並に「蒲生氏郷記」を收めてゐるが、これは異本といはんよりは全然別種の書であることを注意して置きたい。

伊達日記　三卷

一に伊達成實記と稱せられるもので、本書に既に「成實公御作仙道御弓矢之卷」とある如く、伊達政宗の老臣伊達成實の錄する所であるから、記事も比較的正確である。たゞ伊達日記とはいふものの、その主として記してある所は、政宗が仙道に進出して會津の蘆名氏を滅ぼすに至つたことを記せるもので、最後の下卷には葛西・大崎の亂に伴ふ政宗對蒲生氏郷の關係や、豐太閤征韓役に關して秀吉や家康と政宗との關係を記してある。然し何と言つても本書の中心は政宗の會津征伐にあるので、從つてそれを中心として政宗對相馬・二本松・田村諸氏の關係も自ら明かにするを得るのである。されば本書は前記蘆名家記と併せ讀めば、更に大に得る所あるであらう。當時成實は片倉小十郎景綱と共に最も活躍した中心人物であつたから、その作にかゝる本書の價値や知るべきである。

柴田退治記　一卷

大村由巳

本書は秀吉の右筆として知られた大村由巳の著で、その書名の示す如く、秀吉の柴田勝家退治の一件を記したものである。實は大村由巳にはこの外播州御征伐記と惟任退治記・紀州御發向之事及び四國御發向並北國御動座事の三部、卽ち合せて四部の著があつて、これを總稱して秀吉事記といふのである。然るに羣書類從にはこの中本書と播州御征伐記の二部のみを收めて他はこれを收錄するに及ばなかつた。仍つて正編の方に漏れたものを續羣書類從に收めたのであるが、その續羣書類從にも柴田退治記が採つてあるのは、何等かの間違から起つたものであらう。この文中に天正十一年四月二十日秀吉は賤ヶ岳役の初めに當り、中川淸秀討死の報を聞き、同夜申刻大垣を出立して「三十六町路十三里」の處を戌の刻まで僅に二時半卽ち五時間で驅けつけたことを記してあるのは、三十六町一里制の研究に屈强な史料である。斯くて本書は勝家退治のことより、四國征伐の準備に著手したこと、竝に大阪築城に至るまでを記してある。本書終末の識語に「大田由巳謹誌之」とある大田は、勿論大村の誤であること言ふまでもない。

富樫記　一卷

加賀の守護富樫氏興起のことに筆を起し、寛正の頃富樫介泰高が病氣によつて隱居し、中務大輔泰成家督をついだが早世したため、子政親に相續せしむべき筈のところ、若輩の身として政道如何あらんかと危ぶまれた。然るに泰高の病氣本復したため卽ち再家督の命があつた。一方政親に志を寄せるものもあつて、畠山持國を賴み、守護を申請ひ、こゝに祖父・孫の間に室町時代特有の家督の爭が起つたのである。時恰も彼の本願寺の蓮如が北國に下り、やがて一向一揆となり、長享・天文の交に於て政親・泰高相ついで討死したることを記したものである。

小松軍記　一卷

慶長三年豐太閤薨去の當時、加賀小松城には丹羽長重が鎭し、金澤には前田利家の子利長が鎭して、加賀半國及び能登・

越中を領してゐた。然るにその後石田三成・增田長盛等妄に謀を弄し、諸國の大名が大坂・伏見に詰めて居ては事を擧げ難しとして、言葉巧に利長を歸國せしめた。ところが利長の國中よく治り、三ケ國の諸士喜悅の餘り、酒肴はいふに及ばず、弓馬矢石の類に至るまで持參する有樣であつた。然るに豫て密探を放つてゐた三成等は、これを以て由々しき大事であるとなし、これを誅して向後の戒めとなすべしといふ程こそあれ、德川家康に於てもこれを以て心許なしとて誅伐することに決した。併しこれは後から考へると皆三成等の策で、實は利長は當時最も有力な大名で、且つ父利家以來家康に親しいところから、これを敵に引受けては難儀であるとて、先づ利長を家康に讒してこれを失はんとの術であつたのである。けれどもこの巧妙な策謀を知らう筈もなかつた家康は、丹羽長重を召し、急ぎ歸國して變に備へしめた。利長はこれを聞いて、長重の仕打を以て豫て親しい間柄の事とも覺えず、この上は兎も角も上洛して家康に謁し陳謝すべしとて、陰に上洛し、且つ老母を江戸に人質にやり、家康の疑を解いたのであつた。斯くて上杉景勝の兵を擧げるに及んで、家康の會津征伐となるや、家康は利長をして越後路より會津を攻めさせることになつた。依て利長は長重の許にもこの旨を通じ、近國の兵を催したところが、長重はまた曾て家康からの餘儀ない依賴によつて利長と絶つたのに、今家康が自分に一言の挨拶もなく、利長と和睦せられたのは誠に心得ぬことであるとて、利長の催促に應じなかつたため、利長も不審に思ひ、頻に催促をした。恰もその頃長重の許に大坂方からも合力を依賴して來り、家康からもたつての催促があつたから、長重は愈々疑念を重ねて中立の態度を取るに至つた。そこで利長は然らば先づ小松を踏散らして上方に打つて出るか、それとも奧州に向ふべきか、その時宜に依るべしとて、爰に小松征伐の軍を起し、やがて和睦の一條となつたのであるが、この間の經緯を記したものが卽ちこの小松軍記である。

荒山合戰記　一卷

天正十年六月本能寺の變に織田信長が敢ない死を遂げたことは、何としても織田氏側に大いなる衝動を與へたのであつた。幸に信長の寵臣木下秀吉が巧に事局を拾收して一絲紊れざるを得たが、そのやり方如何によつては確に混亂時代を出現したかも知れなかつたのである。本書は卽ちこの間の事情を窺ふに足るものである。さきに信長の爲め能登國に居る能はずして越後の上杉景勝をたよつて走つた能登の守護畠山氏の臣遊佐長員・溫井實正・三宅正數等が、これも信長の壓迫を受けた石動山天平寺衆徒と共にこの機會に兵を擧げ、以て舊業を回復しようとしたので、前田利家は大に驚き、柴田勝家・佐久間玄蕃允の援を得て石動山・荒山等の邊に於て戰ひ、遂にこれ等の徒を屈した記事が卽ちこの荒山合戰記である。この時は實に織田氏側に在つては、文字通りの危機に臨んだもので、これに類した事實は決してこの一つのみではなかつたのである。これ私が信長歿後の時局を述べて、やゝもすれば拾收すべからざる混亂に陷つたかも知れなかつたといふ所以である。

末森記　一卷

信長の後を承けて、今や將に天下を支配せんとする形勢にあつた秀吉には、少からざる前途の難關があつた。その第一難關たる柴田勝家・佐久間盛政等は幸にして早くこれを處分することを得たが、第二の難關たる織田信雄と德川家康の聯合軍には大に手をやかせられた。秀吉がこの第二の難關と正に衝突中に當つて、遙に北國に在つて、信雄・家康と結び、以て秀吉を謀らうとしたものは、實に本篇一方の主人公たる佐々成政である。成政は秀吉の先輩として功を以て越中に封ぜられたが、秀吉の將に小牧・長久手に家康・信雄と對陣中なるに乘じ、先づ前田利家の油斷に乘じて加賀を侵さんとした。今その事の次第を見るに成政には男子がなかつたから、利家の次男利政を迎へて己の女に配さんとした。利家これを喜び婚約正に成つたところが、成政の同朋正林といふもの、嘗て利家の老臣に死命を救はれた恩義を蒙つてゐたので、成政の謀計を密告し、こゝに利家・成政の對戰となつた。この戰爭の記事が卽ちこの末森記で、この戰爭中に、秀吉對信雄・家康の媾和が成立し、やがて秀吉の成政征伐となり、而して成政は信雄によりて降を秀吉に請ひ、秀吉これを利家にはかり、遂に成政の請を允したこと等を記して終つてゐる。

赤松記　一卷

因幡入道定阿

赤松氏が村上天皇の御子具平親王より出で、播磨國佐田莊赤松谷に住してより赤松氏と名乗るに至つたことから筆を起し、則村圓心に至つて、足利尊氏に仕へて功あり、播磨・備前・美作の三國を領し、勢強大となり、遂に滿祐に至つて將軍義教を誅し、やがて赤松征伐となり、滿祐自殺して赤松氏も殆んど衰亡に至つたのである。その後赤松氏の再興をはかつたが、遂に應仁亂に乘じて滿祐の弟義雅の孫次郎法師政則を立て、赤松氏を繼がしめて、漸く再興するを得た。その後子義村、孫晴政繼承の事情、並にその臣浦上氏との關係などを說いたもので、天正十六年因幡守入道定阿といふ者が八十四歲にして記したものであるから、大凡記事信憑すべきものである。文中定阿の曾祖父因幡守が嘉吉の亂に殉じて討死したことなども見えてゐる。

赤松再興記　一卷

本書も亦前揭赤松記とほゞ似たもので、政則の赤松氏再興に筆を起し、永正十六年細川高國が將軍義晴擁立の事より、更にその後政村に至り、浦上氏を滅して播磨守護となり、遂に天文八年左京大夫に任ぜられ、將軍義晴の偏諱を得て晴政と號したことを記したものである。

別所長治記　一卷

播磨御征伐記　一卷

大村由巳

別所氏は村上源氏で赤松圓心の末葉である。永祿八年將軍義輝が三好・松永等惡逆の徒に弑せられるや、弟義昭は織田信長の援を得て上洛し、三好・松永の徒を征して將軍職につくを得たのであるが、この時義昭は同じく長治の合力を請ひ、長治もこれに應じたのであつた。然るにその後信長は中國經營の著手として援を長治に請ふや、長治またこれに應じたのであつたが、信長が秀吉を以てその將となすや、長治頗る不快に感じ、「信長ハ僞ヲ專ラ成給フニヨリ、家風下々マデ輕薄多シ」となし、中國征伐についても、「先長治ニ中國ノ先手ヲサセ、西國於二靜謐一、初ノ變レ約往々長治ヲ退治シ、播州ハ秀吉ニ可二與行一、信長ノ心底如レ移レ鏡」とて、爰に斷然信長に對して反抗の態度を決するに至つたのである。斯くて秀吉は三木城攻擊となつたのであるが、この戰爭のことを記したものが卽ち本書である。長治は敵せずして自刄して開城せんとするに臨み、士卒雜人以下何等の科なくして首を刎らるゝことは不愍の至りなれば、特別の憐愍を以て助命せられんことを請ふや、秀吉これを容れ、贈るに美酒を以てしたことは、戰陣の一佳話として傳ふる所である。斯くてこの二書は相似たるものであるが、後者卽ち大村由巳の「播磨御征代之記」を以て最も正しとすべきや言ふまでもない。この書は所謂秀吉事記の一である。

大內義隆記　一卷

大內氏は百濟の王子琳聖太子の後裔と稱せられ、累世周防の山口に據り、居然として地方に重きをなし、特に義弘の時に至り、南北朝合一に主として斡旋し、その後義興の時に至り將軍義稙の復職に勳功があつたので有名である。義隆は義興の子として生れ、敬神尊王の志厚く、國力も非常に發展したのであつたが、山口を中心とする文化事業に餘りに花を咲かせ過ぎ、遂に文弱に陷り、やがて叛臣陶隆房（晴賢）に滅ぼされたのである。本書は卽ちこの義隆一氏の經歷を記したもので、筆を義隆の敬神に起し、天文二十年大寧寺で自殺したことに終つてゐる。

中國治亂記　一卷

本書は中國治亂記とはいふものの、その實は尼子氏の興亡を記したもので、近江佐々木氏の一族尼子持久が出雲の守護代として、同國に下向したことに筆を起し、大内氏や毛利氏との關係を敍し、義久に至つて遂に毛利元就に降るに至つたことを記したものである。中に彼の陶隆房が大内義隆に叛するに至つた事情なども記してある。

阿州將裔記　一卷

將軍足利義稙の養子義冬（實は十二代將軍義晴の弟で義維と稱す）が阿波の平島に下向して、所謂平島公方となつたことより、三好氏の系圖を掲げて三好氏との關係を敍し、三好氏が土佐の長曾我部元親に降るに至つたことを記したものである。

三好家成立之事　一卷

細川家の被官三好氏の事蹟を記したもので、細川氏との關係や、天正十年長曾我部元親に降るに至つたことを述べたものである。

三好別記　一卷

初めに三好氏の略系を擧げ、小笠原長淸の子長經阿波に下つて三好氏と稱してより、足利氏に至り、細川氏に臣事してやがて勢を得たが、遂に織田信長に滅ぼされた事情を記したもので、終りに三好家の家譜を掲げてある。

十河物語　一卷

十河氏はもと三好氏に出で、三好長慶の弟義賢（實休）の子政泰が一代の事を記したもので、政泰は後年豐太閤の四國經營の初めに當り、仙石秀久に屬し、後更に秀久に從つて九州陣に赴き、天正十四年島津勢と戰つて戰死した。

豫章記

本書は伊豫河野氏の歷史を記したもので、初めにその系譜を載せ、次に伊豫國名の起原より越智氏及び河野氏の因つて起れる所以を記し、更にその家紋の次第をも述べて河野氏歷代の事蹟を記し、應永の始めに至り、更に天正十五年河野氏の沒落に筆を擱いたものである。終りの萬治二年七月十六日の識語にある如松子とあるは黑川道祐をいふ。

大友記

一名を九州治亂記といふ。初めに大友一家の系圖及び大友氏の旗本四家、並に肥前・筑前・筑後・肥後・豐前諸國に於ける大友氏方の大名卽ち龍造寺・筑紫・秋月・原田・蒲池等を擧げ、次に大友氏の由來より曩祖能直九代の孫親世に至つて九州の探題職に補せられたることを記し、更に天文・永祿の頃に至つて著はれたる義鎭の代に至り、肥前の龍造寺隆信が義鎭に叛いて兵を交へるに至つたこと、並に日向の伊東義祐が島津義久に攻められ、援を義鎭に請ふに及んで、島津・大友の戰となり、天正五年耳川の戰に義鎭大敗して、これより勢を失ふに至つた事情などを明にしてゐる。この間に義鎭卽ち後の宗麟が吉利支丹を信仰して神社佛閣を破却した事なども勿論記されて、我邦に於ける一の耶蘇教史料を提供してゐるのである。

難太平記　一卷

今川了俊

本書は今川了俊卽ち貞世が太平記の誤謬多きを難じて書いたといふ所から、この書名があるのである。本書に太平記の誤謬多いことを記して、

六波羅合戰の時、大將名越うたれしかば、今一方の大將足利殿先皇に降參せられけりと太平記に書たり、返々無念の事也、此記の作者は宮方深重の者にて、無案内にて押て如此書たるにや、寔に尾籠のいたりなり。

と云ひ、或は更に「此太平記事あやまりも空ごともおほきにや」と記して、

昔等持寺にて法勝寺の惠珍上人此記を先三十餘卷持參し給ひて、錦小路殿の御目にかけられしを、玄惠法印によませられしに、おほく惡ことも誤も有しかば、仰に云、是は且見及ぶ中にも以の外ちがひめ多し、追て書入、又切出すべき事等有、其程不レ可レ有二外聞一之由仰有し。

とあるに依つて、本書が太平記の誤謬を訂正する意味にて撰まれたことがわかるであらう。

本書に源義家の置文といふことを述べて、足利氏の天下の權を執るに至つた次第を記してあるのは世に有名な事であるが、これは全く異聞とすべきである。そはともかく、著書了俊は自らその先祖(家氏)が足利氏の祖(賴氏)の兄に當ることを記して、

まして天下をとらせ給ひて後は、日本國の人誰かは此御恩の下ならぬ人有べき、一族達などは殊更、今は謙下て可レ然事也、家によりて身を云べしと努々思ふべからず、文道をたしなみて御代の助となりて、其德によりて可二立身一と朝夕錦小路殿仰有き。

とて、徒に家柄を論じて、その主に反抗すべきにあらずとの意を寓してゐる。この事は了俊の特に意を用ひてゐる所で、山名時氏の話として、主の恩の辱なきを感得すべきことを訓戒してゐるのである。蓋し當時下剋上の勢滔々として止む所を知らなかつたからであらう。

上月記

嘉吉の變に赤松滿祐が將軍足利義教を弑して罪を得、幕府に討たれてより勢を失つたが、遺臣石見太郎左衞門といふもの内大臣三條實量に仕へ、主家の再興を圖り、旨を實量に告げて神璽の吉野にあるを奪ひ、以て舊主滿祐の大罪を贖はんとし、長祿元年十二月上月滿吉、中村貞友等と謀り、雪夜に乘じて一ノ宮及び二ノ宮を弑し奉り、遂に神璽を奪つたことを記したものである。その上月記と稱する所以は、二ノ宮を討ち奉つた上月滿吉といふもの、幸に生を得て末代の證據の爲めに物語りをしたことの大概を記したものが、即ち本書であるといふ所から名付けられたものである。併しこの事に就いては尙不明のことが少くない。南朝宮方の一ノ宮・二ノ宮の如何なる皇子にわたらせられるかも實は甚だ明かでないやうである。尙研究を要すべきでものである。

荒木略記　一卷

本書は荒木攝津守村重一家の事を記したもので、天文・弘治以後天正の初め頃に至る攝津の豪族關係を徵するに足るものである。後村重が信長に叛き、居城在岡をのがれて毛利輝元をたよつて赴き、本能寺變後豐臣秀吉に召出されるに至つたことまでを記したものである。

親房卿被贈結城狀　一卷

本書一名を關城書と稱す。蓋し北畠親房卿が常陸關にありて結城親朝に贈つたものであるといふ所から、この稱ある所以であるが、水戸の學者中山信名の研究する所に據れば、元來この書は興國二年十二月の事書を本とし、同三年三月二十八日の書狀竝に同年十月廿日・十一月廿八日の書狀等を合して作爲したもので、後世の僞物であると論じてゐる。その論如何にも正確にして事理極めて明白である。この中山信名の考證は可謂關城書考と題する著書であるが、先年國書刊行會に於て史籍雜纂第三の中に收めて刊行したから、精しくはその書に就いて參看せられたい。

吉野御事書案

正平六年三月南北兩朝御媾和の議あるや、南朝に於ては書を足利直義に賜ひ、幕府はまた僧疎石(夢窓國師)をして光嚴

上皇に謁して兩朝媾和の事を奏せしめるなど、漸くその議が進み、その四月二十七日、幕府は事書を南朝に上つたことが觀應二年日次記といふものに見えてゐる。さてその事書とはどんなものか明かではないが、本書は正にこの事實に關係あるものの如くに見える。その吉野から送られたものは傳へて北畠親房の作といはれてゐるが、文中源頼朝・北條泰時の功績を稱してゐるあたりは、神皇正統記の意見と同じで、且つ總じて文章の體裁も酷似してゐる。而して當時兩朝御和議といふ如き重大なる事件に當つて、吉野朝廷側で主として事に當る人は恐らくは親房であつたであらうと推考せられるから、本書は恐らくは親房の著とすべきであらう。終りに「錦小路殿より御返事」として、この時主として京都の側にあつて、折衝した足利直義の返書を添へてある。勿論この和議は一時後村上天皇も勅許あらせられ、天皇も京都行幸を思召立たれ、北朝の觀應の年號をやめて尊氏以下皆正平の年號を用ゐることとなつたのである。併しこの時の媾和運動は固より成功しなかつたことは言ふまでもない。

阿蘇大宮司惟澄申狀　一卷

正平三年九月阿蘇大宮司惟澄軍忠の次第を言上したものである。初め惟時の時、元弘三年楠木正成の金剛山に據つて關東の兵を拒いだ時に、勤王の志ありて惟直を遣し正成に應ぜしめやうとしたが、適々護良親王の令旨を得て備後鞆より國に歸り、兵を擧げて賊を討ち、これより愈々王事に勤めるに至つたことを記し、ついで惟澄の時に至り、大小數百戰毎に寡を以て衆を擊ち、屢々創を被り、門族多く死したるも尙沮撓の色なかつた次第を言上したもので、吉野時代に於ける九州の形勢を徵するに足るものである。

菊地武朝申狀　一卷

本書も吉野朝の忠臣と聞えた肥後の菊池氏が、元弘三年より弘和四年に至る五十二年間の勤王事蹟を述べたるもので、武朝が弘和四年七月に言上したものである。前記惟澄申狀と共に九州に於ける形勢を見るに足るものである。本書の奥書によつて、阿蘇大宮司惟澄申狀と共に、羣書類從に收められるに至つた事狀も明瞭にするを得るのである。

上杉輝虎注進狀　一卷

本書は上杉謙信が有名な川中島役の事を大館伊豫守に注進したものであると傳へられてゐるが、恐らくは甲陽軍鑑などによつて、後人の作爲したものであらう。而して後世川中島役を論ずるもの、多く本書や甲陽軍鑑によつて說をなし、從つてその眞を傳へ難き憾みがあつたのである。

豐臣太閤御事書　一卷

本書は天正二十年五月關白秀次に宛てた事書で、征韓の役に關したものである。秀吉が兵粮・軍用金の用意等について注意を拂つたことも、本書に據つて之を窺ふべく、また支那征服の後は、秀次を以て「大唐關白」となし、日本の關白は異父弟大和大納言秀長か池田輝政の兩人より仕命すべしといふ如き、豪壯敵を呑めるやうな痛快な文に滿ちたものである。

沙彌洞然長狀　一卷

相良長國

本書は沙彌洞然卽ち相良長國が、天文五年十一月二十二日を以て撮所新兵衞尉に宛てた長狀で、肥後の豪族相良家の事を述べたものである。文中相良家先祖が遠江相良に住して氏となしたことから、長賴に至り建久九年を以て鎭西に下向し、その後肥後求麻山に住し、これより薩摩の島津氏や、日向の伊東氏と關係を生じたことを記したもので、戰國時代に於ける南九州の事情を徵するに足るものである。而してまた本書に據りて、相良氏が啻に軍事につとめたのみならず、心を文事に寄せ、神佛を尊び、孝養をすゝめ、民を憫むべきことなどを說けるは、戰國時代豪族の治國策や子女敎養の一端を見るに足るものである。

武家部（一）

御成敗式條　一卷

御成敗式目追加　一卷

御成敗式條（式條また式目に作る。）はまた貞永式目と稱さらる。後堀河天皇の貞永元年、鎌倉幕府の執權北條泰時によつて制定せられたものである。當時幕府に於ては訴訟の裁判に關することは、概ね慣例によつて決したものであるが、時代の經るに從つて、動もすれば疑義を生じ、公平を保ち難きにより、その統一公平を期せんが爲めに規定せられたものである。吾妻鏡是年五月十四日の條に、

武州（北條泰時）專二政道一給之餘、試二御成敗式條一之由、日來内々有二沙汰一、今日已令レ始之給云々、偏所レ被レ仰二合玄蕃允康連一（太田）也、法橋圓全執筆、是關東諸人訴論事、兼日被レ定法不レ幾之間、於レ時綷亘三兩段一、議不二一揆一、依レ之固二其法一、爲レ斷二濫訴之所一レ起也。

とあつて、卽ち泰時が康連を補助として案を立て、法橋圓全起草執筆した次第を明にし得るであらう。斯くて約八十日を經過して八月十日に至り、全部五十一箇條が脫稿し、やがてこれを御成敗式目と名づけたのである。この式目は普通貞永式目と呼ばれるが、こは言ふ迄もなく貞永元年に成れるを以てこの稱ある所以である。併し吾妻鏡には先に引けるが如く御成敗式條とあるが、その脫稿のことを記した八月十日の條には御成敗式目と記してある。この類從本に式條となつてゐるのは、蓋し前者に據つたものであらうか。然し泰時より京都六波羅なる北條重時に送つた書狀には、目錄と名付くべきを、政の體を注（シルス）したもの故、執筆の人々が氣をきかして式條といふ字を充てたけれども、それも事々しいから式目と書換

へたといふ意味を認めてゐる。式目といひ式條といふも、つまりは式目の名の目錄に過ぎずして、孰れにしても可なるわけであるが、貞永式目聞書に、

公家ノ御成敗ニ式條ト云アリ、憚レ之心ニ式目ト改ム。

とあり、又は式目抄に「公家ノ式條ヲ憚ニヨテ也」とある如く、泰時は當時公家の法制が一般に式條と呼ばれてゐるので、これを避け、而かも公家の法制に對して一新生面を開かんとしたものであらう。（三浦周行博士說）

この式目は實に後世武家法則の規準となつたもので、德川家康の如きも常にこれを座右に置いたと稱せられる。而して更に注意すべきことは、近世に至ると、本書は普通教育の教科書として習字の手本となり、愈々天下に普及し、從つてその刊行も頗る多種に上つたことである。今植木直一郎氏の著「御成敗式目研究」に據つてその刊行せられたものだけを擧げると、享保二年の刊行を最古とし、四種の明治年間版を最新として、總て百三十二種に上り、それに無年號のものを入れると更に五十三の多きを加へることとなる。以てその普及の程度を案知すべきである。從つてその寫本も頗る多いことであるが、中にも「康永二年三月三日於高辻富小路宿所書寫之訖」の識語ある平林治德氏所藏本は書寫の年代を記したものでは最も古いものとして知られてゐる。この書は最近昭和五年九月、古典保存會から例によつて玻璃版にして出版せられたから、就いて見られることをすゝめる。

本書は右の如く古來有名なもので、特に武家法制の研究には先づ第一に指を屈せられる書であるから、從つて本書についての研究も決して少くないが、最もその委曲を悉してゐるものでは、三浦周行博士の著、續法制史の研究に收められた「貞永式目」及び最近出版せられた植木直一郎氏の著「御成敗式目研究」の二を推すことを得る。

貞永式目制定の當時は固よりそれで十分であつたであらうが、それにしてもその條目は僅に五十一箇條に過ぎなかつたから、これを以て總ての場合に當てはめることは困難であつたであらう。特に世の進むにつれて、社會の複雜になり行くは自然の數である。それで幕府は式目の制定後も、幕府一代の間、常に必要に應じて、その缺陷を補充すべく色々の法制

をつぎ〳〵に定めたものが卽ちこの追加である。

建武式目條々　一卷

建武以來追加　一卷

建武式目は、足利尊氏が建武三年を以て前民部卿日野藤範・二階堂道昭入道是圓・僧玄惠等八人に政治の大綱を諮問し、これに對して答申した意見書で、總て十七條から成つてゐる。固より一時的必要に應ずるのを目的としたには相違ないから、本書を以てその性質上意見書とか答申書とかいふべきもので、式目として御成敗式目の如く發布したものではあるまいとの說もあるのであるが、苟も法律として尊氏がこれを採用して發布したものである以上、これを法制として取扱ふ分に何等差支はあるまい。而してこゝに當時の歷史上から見て注意すべきことは、本書の出來た事情である。尊氏が九州から大軍を率ゐて東上し、兵庫湊川の合戰で楠木正成・新田義貞等を破つて京都に攻入り、後醍醐天皇が神器を奉じて叡山に遷幸あらせられたのは延元元年五月である。而して尊氏が叡山に御和睦を申入れ、天皇これを嘉納あらせられて京都に還幸遊ばされのが十月である。然るに尊氏は畏多くも天皇を花山院に幽し奉ると同時に、神器を光明院に御授けあらせられんことを奏請したから、天皇は止むを得ず十一月二日を以て內侍所及び劍・璽を光明院に傳へられ、間もなく天皇は花山院をのがれて吉野へ潛幸遊ばされ、これより兩朝併立の形となつたのであるが、尊氏は後醍醐天皇を花山院に幽し奉ると共に、公卿・將士の官職を削り、幕府開設の方針を立て、是圓等に諮り、その答申書卽ち本書の出來上つたのは實に建武三年十一月七日で、卽ち神器の御授受後六日目である。以て尊氏が幕府開設の意圖の旣に早く決する所あつたことを見るべきであらう。而してその初めに幕府の開設地をもとの如く鎌倉に定むべきか、將た他の地に於てすべきかに就いて諮問してゐるのであるが、これについて鎌倉の地をすてゝ京都に定めるに至つた事情なども明にするを得るのである。併しこゝに面白いことは、この式目に於て儉約を行ふべきことや、權貴・女性・律僧の口入を禁止し、禮節を重んじ、淸廉の政治を行はうとして勉めてゐるが、これが室町幕府を通じて殆んど實行せられてゐないことである。

建武以來追加に就ては、三浦博士の說に從へば、本書は建武以來幕府の發布せる諸般の規定を蒐集せるものであるといふ所から、或はこれを以て建武式目の追加となすものもあるけれども、元來建武式目は貞永式目とその性質を異にし、一時的必要に應ずるために制定したものであるから、初めから追加法などといふもののあるべき理由がない。然らば何ものの追加であるかといふに、やはり貞永式目の追加たるに過ぎないのである。蓋し室町幕府の政治的組織は、大體鎌倉幕府を蹈襲し、賴朝以來の遺法と、貞永式目及びその追加とは、代を替ふるも依然として效力を有してゐたのである。さればこの建武以來追加の第一に收められた建武五年の追加にも、守護の越權を指摘して「固守二貞永式目一大犯三箇條之外不レ可二相繪一」と規定せるを始め、所謂右大將家の舊法及び貞永式目の法文を擧げてその遵守を命ずるに當り、本法・先條若しくは本條といへるものが頗る多いことであるが、これ實にかゝる理由に基くものであると說かれてある。以て本書の性質を見るべきである。併しながらその追加の規定といふ中には、單に奉行等の意見として定めただけで、果して公布せられたものか否か、換言すれば法律として効力を發揮するに至らなかつたものもあるやに思はれることを注意しなければならぬ。例へば「近年申給神領御判地依二本主訴訟一可レ被二返付一否事」といふ文明元年六月廿一日付左衞門尉貞賴外十一名の連署にかゝる條規の如きは卽ちそれで、この條の最初に「意見」と明記してあるのを見てもわかるのである。併しこの追加の性質が如何樣であつても、室町幕府の政治や社會の狀態を徵するに好箇の史料たることは言ふまでもない。

侍所沙汰篇　一卷

檢斷條目を始め、幕府侍所の沙汰に關する法令を集めたもので、鎌倉時代に屬するもの多きを占めてゐるが、また南北朝時代の貞和以後室町幕府時代の永正年間に至るものも收めてゐる。蓋し侍所の沙汰に於て、その時の必要に應じて法規

を制し、且又先規として鎌倉幕府時代の法律をも錄して批判の資としたものであらう。併しこの沙汰篇もまた中には單に評議にとゞまるか、又は單に意見として提出したに止るものもあるやうであるから、果して公布せられたものか否か不明のものも少くない。例へば永正七年八月九日の「神職輩自身致害事」といふ一條は、神祇大副吉田兼倶の意見にとゞまるもののやうであり、又四月二十日評定と註せる「盜賊贓物事」の條の如き、又中には「右條々尤可二定下一候歟」と記せるが如きその一例である。

大内家壁書　一卷

大内氏が室町時代中國の名族として富强を極めてゐたことは言ふまでもなく、戰國時代には京都に出でて、一時管領の職をも執つたのである。本書は長祿三年五月廿二日の壁書（首闕）より、明應四年八月に至るまでの大内家の制法を集めたものである。大凡は年次によつて認められてあるが、必ずしも然らざるは、また必要に應じて追加した故でもあらうか。壁書とは元來支那では廳の壁間に條文を書いて遺忘なからしめることをいふのであるが、我が國に於ては概ね木又は紙に書いて、これを壁又は門などに貼り、若しくは懸けたものである。故に一に張文とも押紙とも或は又懸札とも稱した。この押紙の押は貼の義である。されば壁書の目的は公衆の觀覽に便なる所に法令の要旨を掲示するにあるのであるが、大内氏の壁書は、三浦博士が既に法制史の研究に於て說かれた如く、これとはやゝその趣を異にして、通達法によれるもあり、又高札に類したものもあり、その文例に於ても「…之由可レ被二仰出一也、壁書如レ件」、又は「執達如レ件」と結ぶ例である。これその壁書の意義が餘程廣くなつたものと見得るであらう。

政所壁書　一卷

永享二年以後文正元年に至る間の幕府の政所の壁書を集めたもので、總て十二箇條ある。

早雲寺殿廿一箇條　一卷

早雲寺殿とは言ふまでもなく北條早雲のことである。卽ち北條早雲が制定した廿一箇條の規定である。併し本書は法令と言はんよりは、寧ろ武士奉公の心得、若しくは武士の心懸を示したものといふ方が適切である。神佛を崇敬すべきことを第一條として、以下つぎ〳〵に出仕の心得、學問の心得、虛言を戒しめ、歌道を奬勵するなど、武士日常の心得を說き、最後に「文武弓馬の道は常なり、記すに及ばず」とて文武兼ね備はらんことを望んでゐる。

信玄家法　二卷

本書に就ては曩に三浦博士が詳細な研究を公にせられ、後これを博士の高著「續法制史の研究」に收められてあるから、今專らこれに據ることとする。

本書は古寫本の多くが甲州法度之次第と題し、而してこの名が寧ろ古いものらしいといふことであるが、上下二卷に分れ、上卷は五十七條より成り、專ら法律規定に關する條項を含み、下卷は九十九條より成り、論語・孟子・史記などの漢籍の本文を引用して、日常行爲の軌範となるべき事項を列擧したものである。而して上卷五十七條の內五十五條は天文十六年六月卽ち晴信（信玄）がその父信虎を逐うて自ら甲斐の國主となつた天文十年より六年の後に制定したもので、最後の二條は天文二十三年五月に制定追加したものである。而して下卷に收められた箇條中には、或は假託に出でたと思はれる節節があるけれども、元來信玄の文書には往々古語を引用するものもあるから、必すしも假託とは見るべからざる如しと言はれてある。斯くて本書は永祿元年四月訓戒の爲に武田信繁の世子に進めたものであるが、貞永式目の影響の多いことを注意すべきである。上卷第五十五條に、

一晴信於二行儀其外法度以下一有二旨趣相違一之事、不レ撰二貴賤一以二目安一可二申訴一、依二時宜一可二其覺悟一者也。

とて、信玄の定めた法度に對して意見を異にするものは、貴賤を論ぜずこれを具申すべく、時宜に依つては修正を加ふべしといへることは、何事にも部下に對しては壓制を事とせる戰國時代にあつて、下聞を恥ぢず、一旦制定せる法律に對してすらも修正を加ふべきことを示せる態度は誠に見あげたもので、信玄が立法家として時流に卓越し、從つてこの家法が當時殆んど同時に制定せられた他の國法に比して種々の特色を有するは偶然でないといはれてゐる。

長曾我部元親百箇條　一卷

本書は慶長三年長曾我部氏が領内に布ける所で、禁令法度を初め、家臣の心得等に至るまで委曲を盡して規定したものである。

朝倉敏景十七箇條　一卷

朝倉氏はもと越前の守護斯波氏の目代として代々坂井郡黑丸城に據つてゐたが、敏景（後孝景と稱す）の時に至り一條谷に移り、且つ越前の守護として雄を北國に稱するに至つた。孝景は神佛を崇敬し、皇室を尊びてよく國内を治め、以てこの遺訓を制したのであるが、この後歷代多くこれに則つて政治の根本となしたのである。この訓誡は獨り朝倉氏の憲法となつたのみならず、隣國若狹の武田氏でもこれを採つて政治の資としたと稱せられる。その第一條に朝倉の家にあつては別に宿老を定めず、その身の器用忠節によつて家老となすといへるが如きは、卽ち有功の士を抜擢任用してその才能を發揮せしめたことを見るべく、又一乘谷の朝倉氏の居館以外、國中に城郭を築くを禁じたる甲斐の武田氏の制と頗る相似たるを覺ゆるのである。

鹿苑院殿御元服記　一卷

松田貞秀

本書は應安元年四月朔日、足利義滿が元服の式を擧げたる折の記事で、儀式の次第より評定始・御判始・除目・石清水八幡宮社參・初參内等のことを記したものである。時の奉行松田貞秀の手記にかゝるものである。

普廣院殿御元服記　一卷

正長二年三月九日、將軍足利義教元服のことより、右近衞大將に昇進並に拜賀のことに至るまでを記したものである。

光源院殿御元服記　一卷

本書は天文十五年十二月十九日、將軍足利義藤（後義輝と改む）が近江日吉社の社職樹下成保の宅なる假御所にて元服の式を擧げたることを記したもので、ついで近江の守護六角定賴の旅館に赴いたことをも記してある。

常德院殿樣御馬召初めらるゝ事　一卷

本書一名を御乘馬始記といふ。文明五年四月十日花の御所に於て、將軍足利義尙が始めて馬を召したる儀式の次第を記したものである。

寶篋院殿將軍宣下記　一卷

延文三年十二月十八日、足利義詮將軍宣下の記事である。

普廣院殿任大臣節會次第　一卷

永享四年七月二十五日、將軍足利義教が内大臣に任ぜられた時、大饗節會の次第を記したもので、最後に當日出仕の公

卿や少納言及び辨官等の交名をも記してある。

普廣院殿左大臣御拜賀記　一卷

永享四年八月二十八日、義教が左大臣に昇進し、同十二月九日天皇御元服由奉幣日時定の上卿として參内し、奉賀の儀式があつた時の事を記したものであるが、今この文を薩戒記の文と比較すると全く同文であるから、本書は卽ち薩戒記の抄錄であることがわかる。

普廣院殿大將御拜賀雜事　一卷

本書は將軍足利義教が大將拜賀の時の雜事を記したものであるが、義教は永享元年三月を以て參議に任じ、左近衞大將を兼ね征夷大將軍となり、八月右近衞大將を兼ねた。本書は恐らくは右大將拜賀の時のものであらう。

鹿苑院殿御直衣始記　一卷

康曆二年正月二十日、將軍足利義滿の直衣始の記事である。直衣は大臣以下貴人の略服なれば勅許なければ之を著して參内する能はざるのである。

長祿二年以來申次記　一卷

申次とは、貞丈雜記に「奏者の事也、古は公方樣のを申次と云、私のをば奏者と云、今は公私共に奏者と云」とあるに據つて、大凡のことがわかるであらう。本書は長祿二年以來の三職・御相伴衆・國持衆・准國持人數・外樣衆・御供衆・御部屋衆などの交名を首め、武家の故實に關する事どもを記し、終りに申次人數の事、番衆等のことを記したものである。本書の奥書に據れば、文明十八年二月伊勢貞宗の進上する所に係り、永正六年四月、大館尙氏が安東政藤の家督平六に傳へたものである。

殿中申次記　一卷

長祿二年正月朔日の將軍（足利義政）對面について、殿中申次の事より永正十三年乃至十七年に亙る記錄であつて、奥書によれば伊勢貞維（宗瑞）の自筆本に據つて寫したものである。

年中定例記　一卷

正月より十二月に至る間、殿中にて御對面御祝以下の定例の事を記したものである。

公方樣正月御事始之記　一卷

將軍の正月二日乘馬始以下、四日の諮始、七日の吉書始、十日の參内始等を始め、殿中に於ける定例・臨時の儀式の事を略記したものであるが、十月猪の子の事や、或は永正十五年七月五日三條御所普請事始め、永正十一年三月七日大内義興被二相尋一條々等の事をも記されてある。

殿中以下年中行事　二卷

本書は一に成氏年中行事又は鎌倉年中行事と稱し、鎌倉公方足利成氏の時の年中行事を記したもので、享德三年の撰にかゝる。

飯尾宅御成記　一　卷

神山數連

寛正七年文正元年二月二十五日將軍足利義政が飯尾肥前守之種の邸に臨んだ時の記事で、その翌々二十七日神山數連が後證の爲めに記し置いたものたることが、その奥書によつてわかる。

畠山亭御成記　一　卷

本書は永正十五年三月十七日將軍星利義稙が畠山順光が亭へ臨んだ時の記事で、伊勢家書の抄錄である。

祇園會御見物御成記　一　卷

本書は將軍足利義晴が大永二年六月、祇園會を見物した時の記で、是年六月二十八日、下津屋信直の記し置いたものである。

伊勢守貞忠亭御成記　一　卷

本書も亦將軍足利義晴が大永三年八月五日伊勢貞忠亭へ臨んだ時の記事である。この書は永祿四年四月十一日伊勢貞助の寫本に據つたものであるが、本書の終に記されてある貞助の識語と覺しきものに據ると、本書は將軍足利義輝が永祿四年三月三好義長の亭へ臨んだ時の參考となつたものである。

三好筑前守義長朝臣亭に御成之記　一　卷

永祿四年正月三好長慶の長子義興、時の將軍義輝より偏諱を賜りて義長と稱し、父長慶と共に相伴衆となり、且つ桐の紋を附與せられ、一家の面目を施したので、長慶父子は慶びの禮としてその亭に義輝の台臨を仰ぎ、是月三十日義輝の御成となつたのであるが、本書は卽ちこの御成の時の記事である。

朝倉亭御成記　一　卷

永祿八年五月三好義繼・松永久通等將軍義輝の二條邸を襲ひ、義輝敵せずして自盡し　その弟鹿苑院周嵩また害せられ、一乘院覺慶は賊に捕へられた。覺慶は後遁れて近江に走り、還俗して義秋と稱し、入洛して幕府を再興せんと志したけれども意の如くならなかつたため、是歲若狹に奔り、姉婿の武田義統をたよつて再興を圖つた。然るにこゝでも幕府再興の計劃意の如くでなかつたから、翌十年九月更に越前に奔り、朝倉義景によつて謀を廻らすこととなり、義景喜んで之を迎へたのであつた。斯くて義秋は越前に在つて加冠し、名を義昭と改めた。これ卽ち後年信長に推戴せられて上洛し、幕府を再興して將軍職に就いたのであるが、その越前滯在中永祿十一年五月十七日義景が義昭をその亭に迎へて饗應した時の記事が卽ち本書である。

文祿三年卯月八日加賀之中納言殿に御成之事　一　卷

本書は文祿三年四月豐太閤が加賀中納言卽ち前田利家の亭へ臨みたる折の記事である。

文祿四年御成記　一　卷

松波重隆

本書は文祿四年三月、豐太閤が德川家康の亭へ臨みたる時のことを記したものである。

諸大名衆御成被申入記　一　卷

本書は足利將軍が諸大名へ御成の時申入れられることに關する故實を記したものである。奥書に據れば寶秀院卽ち大館常興の自筆本を拔萃したるもののやうである。

供立之日記　一卷

伊勢貞藤

本書は將軍の社參・參内などの御成の時、供立に關する故實を記したものである。

御供古實　一卷

本書は將軍御成の時供奉に關する心得を記したもので、文明十四年七月伊勢貞藤が子孫の爲めに註し置いたものである。

走衆故實　一卷

本書は走衆の故實を記したもので、初めにその裝束を記し、以下それ〴〵の故實に及んでゐる。而して將軍足利義尙が伊勢亭へ御成の時とか、足利義政の時若しくは義滿・義持の時などの實例を以て示したものもある。本書の成りたる時は勿論わからないが、正親町天皇永祿三年二月將軍足利義輝が參内したる折のことを記せるを見れば、恐らくはその頃に出來たものであらう。

以上解題　花見朔巳

合戰部（二）

新校羣書類從　卷第三百八十九

合戰部廿一

蘆名家記卷第一目錄

蘆名家滅亡濫觴之事
附盛興簾中之事
盛隆生害之事
米澤正宗從二檜原越一働二入會津一事
關柴備中守謀反之事
關柴合戰之事

蘆名家記卷第一

蘆名家滅亡濫觴之事

爰ニ會津之守護蘆名修理太夫盛氏ハ桓武天皇之末葉三浦大助之七男佐原十郎左衞門尉義連ヨリ十六代ナリ。然ルニ盛氏天正七年ニ向羽黑城ヲ築キ、是ノ處ニ隱居仕給ヒ、入道シテ法名ヲ竹岩ト號ス。御子息盛興家督ヲツガセ玉ヒケルガ、御病氣ヲモラセ玉ヒ、同年七月廿三日、御年廿九歲ニシテ逝去シ玉フ。依レ是竹岩公小田山之城ヘ歸リ玉ヒ、二度會津之政道ヲ執行玉フ也。同八年六月十七日、竹岩公六十歲ニテ逝去シ玉フナリ。法名ヲ瑞雲院宗關大庵主ト號シケル。

盛興ノ簾中ハ伊達正宗ノ伯母也。輝宗ノ御爲ニハ御妹也。于レ時盛興ニ御息女オハシマシ候ヘドモ、御幼雅(稚)ニテ御座マセバ、御聟名跡之段モ不レ叶。依レ其須賀川二階堂盛吉之嫡男盛隆者蘆名御一家ニテマシマセバ、是ヲ會津ヘ呼コシ奉リ、盛興ノ簾中ト取合セ參セテ、會津ノ家督ヲ繼セ申ス。天正九年三月十一日、盛隆羽黑ヘ御成リノ節、笈川ノ住人松本太郎十六歲ニテ謀反ヲ匠ミ、森代ノ地頭栗村下野守トハ男色ノ知音ナリケレバ、此人ヲカタライ、兩勢八百餘騎ニテヲダ山ノ城ヲ乘取ケリ。盛隆羽黑ニ於テ此事ヲ聞召、大キニ驚セ玉ヒテ、急ギヲダ山之城ヲ可レ責トテ、佐瀨河內守、平田兩人ニ稻河ノ庄那麻郡之勢ドモ、折節御番ニ相詰タリシヲ二千餘騎遣シ、松本ヲ責玉フ。松本、栗村一日戰ヒ暮シ、兩人モニ討死ヲシタリケル。其夜盛隆ヲダ山ニ歸城仕玉フ。抑此松本太郎が逆心ヲ企ルヿハ盛隆ニ恨ル事有テ不レ得レ止也。其故如何トナレバ、會津蘆

名代々四天ノ宿老トテ、平田、松本、佐瀬、富田、四人ノ衆奉行トシテ會津ノ仕置ヲ代々執行。然處ニ松本太郎ガ親松本源兵衛尉ハ太郎三歳ノ年ニ病死ス。然リトハイヘモ盛氏公ヨリ親ノ家督ヲ相違ナク賜テ、七歳ノ年盛氏ヘ御目見ヲトゲ、四天ノ宿老ノ中ニ任ゼラル。然ルニ盛氏御逝去ノ後、盛隆代ヲ取玉ヒテ仰ラニハ、松本太郎ハ若輩ノ者ヲ宿老ノ中ニハ心得ガタシトテ、奉行ノ内ヲハヅシ玉ヒ、其上松本ガ上屋敷ハ三ノ丸ニ有シテ、屋敷ヲモ取上ゲ、米代ノ西ノ方ニテ少ノ所ヲ上屋敷ニ被レ下。松本ガ本屋敷ヲバ沼澤出雲ニ賜リケル。因レ玆松本盛隆ヲ恨トイヘモ、身不肖ナル故ニ本意ヲモトゲズ、討死シテケルト也。松本ガ一類盛隆ニ恨ノナキ者ハナシ。

盛隆生害之事

去程ニ天正十年夏ノ比、盛隆ニ若君誕生アリ。龜王殿ト號ス。天正十一年六月廿二日、大庭三左衛門ト云者不慮ニ恨ル事有テ盛隆ヲ討奉リ、其身モ卽時ニ討レヌ。抑此大庭三左衛門ト云者ハ須賀川諏訪大明神ノ神主大場ノ何某ガ子也。然ルニ相馬合戰ノ時、此三左衛門十三ノ年、盛隆ノ御前ニテ、一日ノ内ニ三度マデ敵ニ懸合セシヲ御覽有テ、幼若ニシテ武勇ノラ甚御感有テ御側近ク召仕レケリ。器量人ニ超エ美男ノホマレ有シカバ、盛隆御寵愛不レ斜。去ルニ依テ諸人三左衛門ヲ崇敬スル事カギリナシ。其後三左衛門十九歳ニテ元服シ、盛隆ノ御腰ノ物番ニ被レ成ケリ。尤御近習トハ申ナガラ、盛隆モ前方ノ樣ニハ寵愛モアサハカニ成行ケル。殊ニ彼三左衛門ハ奢第一ノ者ナレバ、主恩ヲ笠ニ著テ我意ヲ働キケレバ、家中ノ諸士皆々ニクミアヘリ。サルニ依テ三左衛門思ケルハ、傍輩ニモウトミハテラレシハ只君ノ御心ユヘナリ。兎角盛隆ヲ恨奉テ本意ヲトゲベシト思ヒ立テ、盛隆ヲ討奉リ、其身モ忽亡ビケルコソ薄情ナレ。

米澤正宗檜原越ヨリ會津ヘ働之事

去程ニ伊達正宗ハ蘆名家ヘ遺恨ノ事有テ、檜原ヲ正宗ヨリ攻玉ヘモ、穴澤善右衛門尉ツナギ峠ニ物見ヲ差置、正宗寄玉ヘバ見下シニ鐵炮ヲウタセ、用心キビシク仕リシ故、左右ナク正宗檜原ヲ攻取玉フ事不レ叶。然ル處ニ穴澤一黨ノ内ニ遠藤武藏ト云者蘆名ヘ謀反ニ依テ、穴澤一黨ノ者ヲ風呂ノ内ニテ燒殺シケル。穴澤善右衛門、同親右衛門丞バカリ大鹽ヘ引取リ三瓶大藏ヲ賴ミ是ト一所ニ有テ右ノ條々ヲ黑川ヘ注進申上ケレバ、執權衆ヨリ、羽黑川ヨリ其口堅ク可ニ相守一トノ上意ヲ蒙リテ、則三瓶大藏、穴澤兄弟、大鹽ニ勢モヲ揃テ堅ク守リケリ。黑川ヨリ猪苗代盛國ヘモ使者ヲ立ラレ、頃日正宗檜原ヘ寄來ルヨシ檜原ヨリ注進アリ。其口慥ニ可レ被ニ相守一トノ上意ニテ、早速猪苗代勢ヲ城ヘ集メ置、并ニ檜原口ヲモ堅守リケリ。斯ニテ伊達正宗ハ檜原ヲ攻取テ移リ玉ヒ、向ヘ城ヲ築キ、要害堅固ニシテ住宅セシメタマフ。

關柴備中守謀反之事

去程ニ關柴備中守ハ松本太郎ガ一類ノ者ナレバ、蘆名家ヘハ多年恨ミ深シ。サルニ依テ謀反ヲ企テ、己ガ居城ヘ正宗ヲ引入、會津ヲ攻亡ント思ヒケレバ、天正十二年四月ノ比ヨリ檜原ヘ内通シ、五月始ツカタニハ備中守檜原ヘ立越エ、正宗ニ對面シ軍評定シ、内決シテ關柴ヘ歸リケリ。松本太郎ガ伯父松本源兵衛尉ハ四天ノ宿薦ノ中ニナシ置レ候シガ、彼源兵衛尉方ヘ關柴ヨリ密ニ使者ヲ以テ謀反ノ巨細ヲ云遣シ、正宗ヲ引入可レ申ノ由内談シケレバ、松本源兵衛尉返答ニハ、假令バ君々タラズト云モ、臣々タルコソ誠ノ忠臣トハ申ベキナリ。某ニ於テハ此度正宗方ヘ與スル事ハ思モヨラヌラ也ト云送リケレバ、備中守聞レ之、センナキ事ヲ告知タル者哉。此上ハ片時モ早ク正宗ヲ引入奉ントテ、檜原ヘ早々以ニ使者一申遣シケレバ、正宗聞召、急ギ會津ヲ攻玉フベキトノ御返答アリ。則今月十日ノ夜、老中ニ勢ヲ相副ヘ貴殿ノ舘マデ遣スベク候間、左樣ニ相心得用意致サルベキ旨返答有テ、備中守ト相圖ヲ定テ、其日限ヲ待レケリ。

關柴合戰之事

去程ニ天正十二年五月十日ノ夜、伊達正宗檜原ヲ打立玉フ。三人ノ老中ヲ始其勢三千餘騎ニテ、入田付ノ山ヲ越エ會津ニ赴キ玉フ。檜原ノ御留守居ニハ、大森四郎左衛門尉國直ニ二千餘騎ノ勢ヲ相添ヘ殘置玉フ。去程ニ正宗ハ近習ノ待五百餘騎入田付ニ指置、其身モ爰ニ居玉フ。三人ノ老中ニ二千殘リ勢ヲ差添ヘ、關柴ガ城ヘゾ遣シ玉フ。關柴備中守ハ手ノ者共百人余引具シテ、其夜ノ戌剋バカリニ、近所ノ村々二十四ケ所ニ火ヲカケテ地燒ヲシ、謀反ノ色ヲコソアラハシケル。サルニ依テ會津四天ノ内、平田ガ執權源太安廣鏡ガ城ニ在シガ、關柴カ叛逆ノ由、馬ヲ飛セテ黑川ヘ言上ス。黑川ニハ四天ノ宿薦ヲダ山ノ城ニ登城有テ軍評定ナリ。其夜ノ子刻バカリニ黑川ヲ立、午刻計ニ濱崎ニ著テ爰ニ陣ヲゾ取テケリ。會津ノ執權金上遠江守盛春ハ居住津川ヘ立越、折節留守ナリ。其外ノ諸士己ガ居城々々ニ居住シケレバ、纔黑川御番ニ在合勢計濱崎ヘハ參リケリ。四天ノ宿老ノ内富田申ケルハ、此川ヲ越シ敵ニ向テ合戰仕ランヤ、亦河ヲ前ニ當テ戰ンニ利有ベキカ如何アラント被レ申ケレバ、松本源兵衛聞テ、兎角片時モ早ク橋ヲ渡シ、關柴ガ城ヘ一サンニ押寄攻落ンニハシカジ。先ズル則ハ人ヲ制シ、後ル、則ハ人ニ制セラル、。兎角時刻ヲ移シ候テハ那麻ノ郡ノ侍、皆備中守ニ與シ候者畢竟難タルベシ。早打立ントテ云。平田兵部少輔被レ申ケルハ、松本殿ノ申サレ分一理ハ有レ之ト存候ヘモ、龜王殿ハ御若年也。後室ハ女性ノコトニテマシマセバ小田山ノ城無ニ覺束一。若橋ヲ渡シ候テハ、萬一裏切ノ者有リテ橋ヲ引レ候ハヾ、籠ノ内ノ鳥ノゴトク何國ヘ引取ンニモ不レ及。我々ハヤミ〳〵ト討死センニハ目ノアタリタルベシ。所詮四人ノ内一人ハチダ山ノ城ニ歸リ城ヲ堅ク相守リ、安積、長沼、猪苗代衆ヘ相觸、重テ關柴討手ノ後詰ヲ被ニ仰

付ニ尤タリ。一人ハ濱崎ニ殘、稻川之勢ヲ招キ、濱崎ヲ關ト定相サヽヘ、殘ル二人ハ橋ヲ渡シ、關柴ノ城ヘ二手ニ成押寄候者、身ヲ全シ敵ヲ亡サンヿハクビスヲ廻スベカラズ。此義如何候ハンヤト申ケル。其時佐瀨河内守被レ申ケルハ、各宣フ處一トシテ利ナキニアラズ。乍レ去關柴備中守反叛スルモ何程ノ事カ候ハンヤ。諸大將ヘ相觸申迄モ候マジ。其内備中守ヨモコラヘ候ハジ。一時ニ關柴ノ城ヲ攻落サンニハ何ノ子細ノ候ハンヤ。兎角評定ノ長詮議ノ内ニ時刻移、敵ニ手立ノ出來ン、早打立候ハントゾ勇ミケリ。平田、富田押留ノ、尤貴殿ノ玉フゴトク、備中守ガ分トシテ何程ノ事カ候ハン。然リトハイヘモ伊達正宗ノ老中、關柴ノ城ヘ楯籠ト聞エケレバ、ヨモヲロカニテハ叶ヒ候マジ。暫ク御待候ヘトゾ被レ申ケル。爰ニ佐瀨河内守ガ兄ニ中ノ目式部太夫ト申者侍リケルガ、進ミ出テ申ハ、某ハ軍ノ法ヲ破ルニテ候ヘモ、御暇玉ツテ慶德ヘ參リ度候。其子細ハ慶德善五郎トハ年來無二ノ入魂ニテ候ヘバ敵ノ中ニ慶德一人指置候ヘハ無二覺束一候。我等馳參テ善五郎ニカヲ合セ候ベシ。若又善五郎、敵ニ罷成ニ於テハ他人ノ手ニ不レ懸、善五郎ト刺チガヘ申ベシ。各暫ク評定有テ能樣ニ被レ成候ベシトテ、騎馬三十足輕二百人ヲ引卒シ、橋ヲ渡シ、マダシノ、メノ明ヤラヌ比、慶德ニ著陣シ、善五郎ガ門外ニテ馬ヨリ下リ立テ見レバ、マダ善五郎ガ館ニハ門ヲモ不レ開。中ノ目式部大輔是マデ來ルナリト番ノ者マデ云遣シケレバ、善五郎立出對シ、扨々關柴ガ謀叛ノ事驚入テ候。兎角備中守ガ城ヘ時ヲ不レ移押寄申サントテ、式部太輔(大)ト一所ニ其勢五百余ニテ、慶德ヲ立テ下柴川原ニ著。爰所ニ陳ヲ取テ扣ヘタリ。濱崎ニテ佐瀨河内守申シケルハ、我ハ兄ニテ候、式部太輔(大)早橋ヲ渡シ候ヘバ某モ罷向ハントテ、其勢三百余ニテ下柴川原ヘ馳著、中ノ目慶德ガ勢ニゾ加リケル。三人ノ宿薦今ハ詮義スベキ樣ナシ。兎角橋ヲ渡セヤトテ、惣勢二千餘騎、十一日ノ辰ノ刻ニ、先淵(クヽシ)村ヘ著テ爰ニ陳ヲゾ取テケリ。去程ニ關柴ノ城ニテハ會津勢悉ク押寄ルヨシ聞エシカバ、先淵ヘノ先陣ハ伊達重實ヲ大將トシテ二千餘騎ニテ向ヒケル。先鉾ハ關柴備中守ナリ。片倉小十郎、原田左馬助兩人二千余騎ニテ下柴川原ヘゾ向ヒケル。サル程ニ兩陣淵村、下柴川原兩所ニテ、辰ノ剋ノ終リヨリ申ノ刻ノ始迄、追ツ返シツ散々ニ戰ヒケル。敵味方討ツ討レツ、父子兄弟主從ヲモ不レ知ケル。爰ニ金上遠江守盛春ハ津川ニ在シガ、十日ノ夜、津川ヲ立テ本城金上ヘ立寄ケル處ニ、道ニテ關柴ガ謀叛ヲ企ル由黑川ヨリノ飛脚ノ者ニ行逢、委細ニ聞屆ケ、夫ヨリモ五百余騎ヲ卒シテ、其日ノ申ノ刻計ニ下柴川原ニ著陣ナリ。四天ノ衆ヘ使者ヲ以テ被レ申ケルハ、某事聞打ニ只今爰許ヘ參著仕リ候。就レ夫某其方ヘ加勢申度候ヘモ、其方ハ多勢ノ由承テ候。此方ハ味方小勢ニテ候ヘバ、コナタヘ加勢仕ラン。今日モ馳テ日暮候ハン。軍ハ定テ明日ナラン。然バ會津勢皆々馳參ルベシ。隨分合戰ヲ排玉ハンヿ肝要ニ御座ト云遣シ、扨慶德、中ノ目、佐瀨三人之衆ニ向テ、偖偖敵ハ大勢ナリ。身方ハ不勢ヲ以テコラヘ玉フヿ名譽ノ手柄ナリ。後日ノ證據ニハ此金上立申サン。先方々ハ暫ク御休ミ候ヘ。某荒手ナレバ一軍仕ラント被レ申ケレバ、慶德善五郎仰ノ段忝存候。今少シ御待被レ成候ヘ。御覽ゼラレ候前ニテ、某一軍シ候ハント云モハテヌニ、手勢百五十騎計ニテ、原田左馬助ガ五百餘騎ニテヒカヘタル旗本ヘ會釋モナク一文子ニ懸入、ウシロ迄サツトカケ散シテ通リケレバ、原田左馬助雜翼ニ開キ、引ツヽミ慶德ヲ討ントス。サレモ善五郎物ナレタル者ニテ、魚鱗ニツラナリテスカサズ、餘ノ羽武者ニハ目ナカケソ。大將原田ト組ヤ組メトテヲメキサケンデ、散々ニ懸散シ馳廻リケレバ、原田左馬助コラヘズ、三町計ゾ引タリケル。慶德ナヲモ勝ニ乘テ是ヲ追フ。片倉小十郎横鎗ヲ入慶德ニ打テ懸ル。佐瀨河内守、中ノ目式部大輔、金上遠江守一手ニ成テ、片倉ガ勢ノ眞中ヘヲメイテ懸リケレバ、片倉ガ勢モ敗軍シテ、原田ト一所ニナリテ中田付ヲ指テ引ケリ。伊達重實ハ此由ヲ聞テ、敵ニ後ヲマカレナバ事難義タルベシトテ、是モ中田付ヲサシテ引取、片倉、原田ト一所ニ成ル。淵ノ會津勢、勝ニ乘テ下柴川原ノ勢ト一所ニ成、暫ク人馬ノ息ヲ休メ、勇袴テ中田付ヲサシテ攻寄ケリ。去程ニ伊達正宗入田付ニテ身方利ヲ失ヒ中田付ヘ引ヨシ聞召、老中ヲ討セテハ如何スベシ。今ハ何ヲカ期スベキ。我モ中田付ニ向テ討死スベシトテ、五百餘騎ニテ中田付ヘ來リ玉ヒ、三人ノ老中ト一所ニ成、龍泉寺林ニゾ籠リケリ。會津勢スカサズ中田付ヘ寄セ、正宗ノ陣ヘ打テ懸レバ、伊達勢モ命ヲヲシマズ、爰ヲ最期ト思ヒ切、五六度迄懸合排戰ケレモ、臆シタル勢ナレバ、爰ニテモ不レ叶入田付ヘ引退ク。會津勢猶モ入田付マデ追ントシケレモ、正宗爰ニモタマリ兼テ檜原ニゾ歸リ玉フ。斯リシ處ニ今度ノ謀反人關柴備中守ハ何トカシタリケン。淵ヨリ引ヲクレ、家來四五人ニテ下柴川原ニ扣ヘテ居タリシガ、如何ハスベシトアキレハテタル處ヘ、高柳ノ地頭戸石四郎兵衞心替リシテ、備中守ガ前ヘ往、我如何ニモシテ一方ヲ打破リ、正宗公ヘ降參致度由申ケレバ、備中守大キニ悅ビ、願フ處幸ト思ヒケレバ、サラバ我等モ參ラントテ下柴川原ヲ立ントス。于レ時關柴、高柳ノ敗軍ノ勢集テケレバ、人數百人計ニ成ル。備中守是ニテハ一方ヲ打破リ、正宗公ヘ參ランニハ何ノ子細ノ候ハントテ、早下柴川原ヲ立ケル處ニ、沼澤出雲、中ノ目式部太輔(大)兩將ハ今朝ヨリノ軍ニサセル高名モナカリケレバ、扨モ本意ナキヿナリトテ打連語ナガラ下柴川原ヘ來リツヽ、若味方ノ内ニ手負アリナンヤ。其義ナラバ助ントテ其日ノ軍場ヲ懸メグル處ニ、其日モ黃昏ニ及ビケレバ物ノアヤメモサダカニ見エワカヌ頃、百人計ノ勢ニテ扣ヘタル者アリ。タレカト伺見テケレバ、謀反ノ棟梁備中守ナリ。沼澤、中ノ目是ヲ見テ、偖モ關柴ハ何トシテ引ヲクレケルヤ。是コソ願所ノ幸トハカヽルヿヲ云ラント、兩勢三

十五騎ニテ關柴ニ討テ懸ル。備中守ガ手勢モ皆悉ク敗軍ス。ムザンヤ關柴、高柳兩人ハ六七騎ニ成テ、爰ヲ最後ゾト懸テハ引引テハ懸出デ、四五度迄モミ合シガ、今朝ヨリ數ケ度ノ戰ニ情ツキタルラン。備中守ヲバ沼澤出雲ゾ討テケリ。高柳ハ落行ントセシヲ、中ノ目式部(大)太輔ガ手ニテ討取ケリ。去程ニ金上遠江守ハ會津勢ヲ隨ヘテ、其夜ハ濱崎ヘ歸リ玉ヒ、今日ノ武功ヲ一々ニ御諏義(議)有テ、其後入田付ヘハ太郎丸掃部ニ三百餘騎ヲ相添テ、檜原ノ押ヘニ指置レ、金上遠江守ヲ始メ四天ノ宿老衆ハ黑川ニゾ歸陣ナリ。其夜太郎丸掃部者兼テヨリ恨ノヿ有テ、入田付ヲ捨テ檜原ヘ降參ス。其夜關柴ガ親宮内少輔ト申テ、九十一歳極老ニテアリケレバ、行歩モ不レ叶シテ關柴ノ城ニ有シガ、會津勢ヨリモ關柴ガ城ヘ火ヲ懸モヘ立ケレバ、無三是非一宮内少輔ヨロボイ出シヲ、雜人ドモ生捕ニシテ黑川ヘ參スル。金上是ヲ聞玉ヒテ反叛人親ナレバ、武士ドモノ見セシメノタメニトテ、同十二日天寧寺川原ニテ串指ニシ玉ヒケル。誠ニ備中守ハ主君ヘ不忠ヲナシ、アマツサヘ九十余ニアマル親ヲカク物ウキ罪ニ行ハセケル、ムクヒノ程コソヲソロシケト悪マヌ人ハナカリケリ。同所ニテ仙道多田ノ城主多田野十郎ガ妻子モ同時ニ串刺ニセラル、時、女房辭世ニ云、

淺マシヤ我ハタヾ野ニ捨ラレテネミダレガミノ串ノツラサヨ

ト讀ケルトナン。多田野モ知行一萬石程取タルヨシキコエケル。扨又重テ入田付ヘハ中ノ目式部大輔ヲ檜原ノ押ヘニハ遣シ置レケル。大鹽ニハ右ノ如ク穴澤一黨、三瓶大藏ヲ指置レケリ。

蘆名家記卷第二目錄

穴澤善右衞門尉武勇之事
蘆名家養子之事
高田間合戰之事

蘆名家記卷第二

穴澤善右衞門尉武勇之事

一或時正宗檜原ニ馬場ヲ搆ヘ、陳中ノ遊慰ノタメ馬モヲ出シ諸士ニ乘セシメ、其身モ乘玉フ。每日如レ斯。此由ヲ傳エ聞キ、穴澤善右衞門尉ハ矢二筋持弓ヲゾ取、人ヲツレズ只一人、大鹽ヲ忍ビ出テ、山傳ヘヲシテ檜原ヘ忍ビ入、馬場末ノ所ニ木ノ二本有ケル陰ニ立ヨリ、正宗卿馬場末ヘ迄馬ヲ乘來リ玉ハヾ、一矢射テ鬱憤ヲ散ゼント待居ケル處ニ、正宗ノ運ヤツヨカリケン、其日ハ正宗馬場中マデ三度乘出テ、馬ヲヤメテ城ニ入玉フ。其日モ暮ケレバ善右衞門矢立ヲ取出シ矢ニ書付ケルハ、扨モ正宗公ハ御運强キ大將カトハヤ、モスレバ確執ニ及ビ、國ヲ爭フ事數年ノ儀ナリ。其上正道ヲ聟ニ取、假天下ノ望ミ有トテモ、正宗公ハ兄ニテマシマセバ、正宗コソハ天下ノ主トハ成玉ハンズレ。其儀ニ及ナラバ蘆名家ハ正宗ノ家來ト成ベシ。然ラバ蘆名ノ家ノ疵ヲバ、方々ト我等ノ分別ニテ付タルニテハナキヤ。左アレバ佐竹義重ノ御子義廣ヲ聟ニ取候ベシ。殊更佐竹ノ御家ハ、元來蘆名ト御一家ナリ。之ニ過タル御養子不レ可レ有ト。何モ一決シテ頓テ佐竹ヘ使者ヲ遣シ、其年八月中旬ニ義廣ヲ會津ヘ呼越シ奉リ、盛興ノ御息女ヘアハセ奉リ、義廣ヲ盛重ト改メ、蘆名ノ家督ヲ相繼ナサセ、各安堵ノ思ヲナシケル。然ルニ盛重佐竹ヨリ付來ル衆中ニハ大繩讃岐守、洲(石)不駿河守、平井薩摩助三人御供ニ來リケル。件ノ衆中會津ノ支置ヲセントス。四天ノ宿薦衆申ケルハ、盛重公コソ佐竹ヨリ招キ奉リ主君トハ仰ギ申ナリ。我々ハ蘆名家代々奉行トシテ會津ノ支置ヲ執行フナリ。其中ヘ各三人ヲ加ヘ入ル、ヿハ成マジキ由ヲ盛重公ヘ言上申ケレバ、盛重公ハ御若年ナリケレバ、兎角ノ上意モナク、トカク佐竹ヘ云遣シ、重テ可レ被二仰付一之旨仰出サレケレバ、四天ノ宿薦モ承テ、何ゾ當家ノ御支置ヲ佐竹ヨリ御支配アルベキヤ。假令被二仰付一候トテモ此方ニテハ用モ申難候。其故者蘆名ノ家コソハ主君トハ仰ギ奉レ、佐竹殿ノ被官ニアラザレバ中々用ヒ申事叶マジキ由申切テ、夫ヨリハ何レモ登城ヲモ致サズ、前々ノ例ナ。今日馬場末マデ乘玉ハヾ、此矢ヲ進上仕ルベキ物ヲ、アツバレアヤウキ御命カナ。重而智畧ヲ以御命玉ハラン物ヲト書付、穴澤善右衞門尉ト假名ヲ記、右ノ馬場ノ中ニ矢ヲ立置、大鹽ヘ歸リケリ。此矢正宗公ノ方ニテ番兵見付、則正宗公ヘ指上ゲケレバ、正宗公是ヲ御覽有テ、穴澤ガ謀事如何樣ノ方便之アランモ不レ知。サラバ米澤ヘ歸ラントテ、檜原ノ堅メニハ片倉小十郎ヲ殘シ置レ、米澤ヘ御歸陣ナリ。敵モ味方、善右衞門ガ武知知謀ノ拔羣ナルヿヲ感アヘリ。

蘆名家養子之事

一天正十三年夏ノ比、蘆名龜王殿早世シ玉フ。サルニ依テ四天ノ宿老、十六人ノ蘆名御一家ノ衆、執權金上遠江守、皆々ヲダ山ノ城ニ集テ、御聟名跡之義評定有ケリ。先四天ノ宿薦被レ申ケルハ、正宗ノ御舍弟正道公ヲ御養子ニ被レ成候ハバ伊達ト蘆名ト彌和睦シ、國家ヲダヤカニ治ルベシ。左樣ニ候ハバ日本ニ蘆名ノ御家ホド繁昌ノ御家ハ有マジキ也。越後ノ長尾景勝ハ御親類ナリ。關東ノ北條氏康ハ同平氏ノ流レナリ。然レバ此衆中ヘ心ヲ合セテ武田信玄ヲサヘ攻亡テ、其後都ヘ打テ登ルホドナラバ、終ニハ蘆名家ヨリ天下ヲ治メンヿ何ノ子細候ハンヤ。旁ハ如何思ハレ候ヤト一樣ニ申サレケリ。十六人ノ御一家衆有無ノ返事モナキ處ニ、執權金上遠江守申サル、ハ、サレバ正宗ノ舍弟正道ヲ聟ニ取ランヿハ、且ハ蘆名ノ武勇スクナキニ似タリ。其故ハ伊達ト蘆名

ノ如ク會津ノ支置ヲ執行ケリ。因レ茲盛重ニ付來ル老中三人ハ、我々ノ主君蘆名ノ家ヲ繼ギ玉フ處ニ、四天ノ宿薦ノ内ヘ我々ヲ入ズ、各ガ下手ニ付ホドナラバ、四天ノ者共ト討果サンニハ別儀ナシト憤リケル。去ニ依テ家中二ツニナリ、四天ノ方モアリ、又佐竹ヨリ來ル三人ノ者ノ方モアリ。既ニ軍ヲヲコシテ珍事ニ及バントス。後室大キニ驚カセ給ヒ、金上遠江守ヲ召テ、如何ニモシテ四天ノ者ヒ、又三人ノ者ヒヲナダメテ、事ヲ靜謐ニ取成クレヨト被仰下ケレバ、金上畏テ四天ノ宿薦衆ヘ異見被レ申ケルハ、尤御邊達ノ御イキ通リハ至極仕テ候。然レヒ軍ニ及ビ双方討果シ候ハヾ、蘆名家二十代ニテ家滅亡センコ必定也。然レバ先祖蘆名代々ノ四天ノ宿薦ニハ似合申間敷候。一旦ハナダメテ三人ノ者ヒヲ奉行ノ座ニツラネ、折ヲ伺ヒ、誤リヲ以テ一人宛曲事ニ申付候ハンニハ何ノ子細カアルベキトヒソカニ異見被レ申ケレバ、四天ノ宿老達モ心ナラネヒ、御内意ト申、執權ノ異見故、其後ハ三人ノ者ヒト和睦有テ奉行ノ座ニツラナリケル。誠ニ友ニ依テ家亡ストハケ樣ノコトヤ申ベキ。蘆名家ノ滅亡ハ是時ヨリゾ發リケリ。三人ノ者ドモハ譜代昵近ノ身ナレバ、日增奢リツノリ、主君ヲ笠ニキテ次第々々ニ我儘ヲコソ振舞ケル。ウタテカリケル次第也。扨四人ノ旗下猪苗代盛國、是者蘆名平二郎ノ末葉ナリ。南ノ山ニハ蘆名平三郎、是ハ元來結城ノ末ナリ。横田ニハ横田刑部大輔、是ハ山内ノ嫡家ニテ幕ノ紋一文字ナリ。伊南ニハ河原田治部少輔盛次者小山ノ末葉ナリ。幕ノ紋二ツ頭右巴ナリ。是皆蘆名家ノ旗下衆ナリ。然ニ今度盛重公ヘ始テク御禮ニ次第悉ク相違候テ、何レモ深ク遺恨ニ成テ憤リケリ。斯ル處ニ太郎村ノ侍太郎丸掃部、是モ盛重ノ家老ヒノ仕方ヲ憤リ、正宗ヘ内通スルト聞エケル。盛國モ右ノ事ヒウラミ憤リテ、正宗ヘ内通スル也。扨又檜原口ノ番人遠藤四郎兵衛、後年正宗ニテ武藏ト名乘ル。此者モ掃部ト一味シテ正宗ヘ内通ナリ。其比盛國ハ猪苗代ヲ忍ビ出デ、潛ニ須賀川口土湯越ヲシテ米澤ニ立越、正宗ヘ參會スルトナン。其後正宗ヲ盛國ガ居城猪苗代ヘ引入テ軍評定有ケルヨシ、後日ニ申傳ル也。偖又盛重會津ヘ御入城ノ後、家中家老中ノ出入最中ニハ正宗ヨリ太寄金助ト云侍ヲ黑川ノ内大町柳ノ下ニ風呂屋アリ、彼者ヲ忍ビニ用テ此所ニ付置、日々蘆名家ノ侍双方ノ爭論ヲ聞出シ、正宗卿ヘ羽檄ヲ飛スト云々。彼是後々沙汰アリケリ。

高田間合戰

一天正十三年ヨリ同十五年迄、伊達正宗卿仙道ヲ攻玉フ。大森ノ城ヲ始トシテ城數八ケ所責落シ押領シ玉フ。然レヒ二本松右京亮吉次、仙道旗頭トシテ城ヲ堅ク守リ候故、此城ハ落城セズ。アマツサヘ天正十六年八月十七日伊達輝宗、二本松右京亮計ラレ擒ト成テ討レ、右京亮モ其儘正宗ニ討レケリ。右京亮ガ家臣ニ鹿子田和泉ト云者、二本松ノ城ニ楯籠リ、右京亮ガ息子梅王丸トテ、二歳ニ成給フヲ守護シテ守城ス。去ニ依テ正宗卿二本松ノ城ヲ攻玉フ。十月中旬時分不思儀ニ大雪降ケレバ、正宗ハ軍ヲ止メ米澤ヘ歸玉フ。鹿子田和泉モ梅王丸ヲ連レ參セテ城ヲ明、會津ヘ落テ來リケル。サルニ依テ天正十七年四月中旬ニ正宗卿二本松ノ城ニ移リ玉ヒ、五月末方マデ二本松ニ居テ仙道ヲ隨ヘ玉フ。去程ニ仙道勢皆々正宗卿ヘ降參ス。猫代盛國モ兼テヨリ正宗公ヘ内通シテ御身方ト成ケレバ、時節ヲ伺ヒ會津ヲ攻落サント晝夜軍評定有ケリ。黑川ニハ盛重ノ老中四天ノ宿薦衆ヨリモ盛國ヘ使節ヲ以被レ申ケルハ、正宗仙道ヲ伐隨ヘ申サレ候ヘバ、定テ會津ヘモ押寄ラルベシト存ル也。其口ハ大事ノ所ニテ候ヘバ堅ク御守候ヘ。時分ヲ計テ此方ヨリ仙道ヘ討手ヲ差向ケ候ハン由申遣シケレバ、盛國畏テ候、此口ヨリハ正宗幾千萬騎ニテ寄來リ候共、某請取申候間、御心安ク思召候ヘト、イト賴母子ク御返事ヲゾ申サレケル。又中路口ヘハ新國上總守、鵜浦甲斐守兩人ヲゾ被レ遣ケル。同天正十七年六月廿二日、伊達正宗二本松ヲ立テ本宮ニ出陣有テ軍勢ヲ揃ヘラルヽニ、米澤、信夫、田村勢、仙道勢合二萬余騎トゾ聞エケリ。近邊近郷ノ住人我モ〳〵ト降參スル程ニ、其勢日ニ增大勢ニゾ見エニケル。爰ニ高田間太郎右衞門、正宗ヘ降參セズ、阿子ガ島ノ地頭ヘ使者ヲ以テ申送リケルハ、扨モ御分モ我等モ數代蘆名ノ旗下トシテ厚恩深キ者ヒ也。今度正宗ヘハ降參ハ申マジ、所詮城ヲ枕トシテ討死スベキヨシ、云送リケレバ、阿子ガ島ハ返答ニモ不レ及シテ早正宗ヘ降參ス。太郎右衞門ガ妹聟荒井新兵衞ハ義ヲ一途ニ守テ、高田間ト一所ニ死ントテ、我居城ヲバ捨テ、夫婦モロヒ高田間ノ城ニ來リ、以上人數六十三人ニテ城ヲ堅メ、正宗ヨリノ討手ノ勢ヲゾ待ケルハタノモシキ義士ナリ。去程ニ同二十三日、正宗本宮ヲ立玉ヒテ苗代田ニ陣ヲ取、同二十四日、高田間ノ城ニゾ寄ラレケル。正宗公モ會津責ノ門出ナレバトテ御馬ヲ出サレケルガ、其勢一萬餘騎ニテ、高田間ノ小城ナルヲ十重ニ引ツヽミ、闕ヲ作リカケ攻入ラントス。高田間太郎右衞門ハ追手ヲ堅メ、荒井新兵衞尉ハ裏門ヲ堅メケルガ、廿四日ノ辰ノ刻ヨリ軍始テ巳刻ノ終リマデ戰ヒケルガ、城中兵ヒ心ハタケク勇メヒ、數度ノ荒手ニ過半討レケレバ、城中ハ殘リスクナニ討ナサレケル。荒井新兵衞ハ少シ敵ヲ追ナビケ、其隙ニ高田間ト一所ニ死ントテ大手ニ馳來リケル。太郎右衞門見テ、ソコラフセギテタベ、軍ハ是マデト覺ユレバ、某ハ妻女ニ最期ヲ進ントテ本城ニ歸リ、女房ヲ近付テ、今ハ最期ナルゾ、心得候ヘト申ケレバ、女房西ニ向テ手ヲ合セ念佛シケルヲ、頓テ首ヲゾ打落テケリ。其後高田間ハ表ヲサシテ討テ出ントゾシケレバ、妹見テ如何ニ兄上、我ヲモ同ジ道ニトナシ玉ヘト泪トヒニ申シケレバ、太郎右門聞テ、イヤトヨ、汝ハ新兵衞尉唯今來ランニ、荒井ガ手ニカヽレ

ト申ケレバ、妹聞モアエズ、何ソレ迄モ有ベキカトテ、守刀ヲ口ニクワヘ、ウツ伏ニ伏テ失ニケリ。雪ノ肌タチマチニ朱ニソミテ、數行虞子氏ガ泪トヨミシモ斯コソアラメト、聞人袂ヲ濡ヌハナカリケリ。誠ニ哀成ル有サマナリ。其後太郎右衛門ハ大手ニ懸出、如何ニ荒井殿、今ハ女房モ妹モ最期ヲトゲタリ。心ニカヽルヿナシ。貴殿ハ定テ草臥玉ン、暫ク休ミ候ヘトテ鑓ヲ持、ヤアイカニ敵ノ者ヒ、高田間太郎右衛門爰ニ有トテ突テ出ケレバ、一度ニドツトクヅレケリ。然處ニウシロヲ見レバ、敵ハヤ裏門ヲ押破テ込入ケリ。高田間、荒井心得タリトテ取テ返シ込入敵ニ突テ懸レバ、其勢イニ辟易シテ引退。又後口ヲ顧レバ大手ノ門ヨリ大勢攻入ケリ。高田間、荒井駈合スレバ、敵又サツト引、追手ヘ突テ出ル間ニハ裏門ヨリ攻入、裏門ヲ突テ懸バ追手ヨリモ攻入ケル程ニ、兩人ノ者ヒ、已ノ剋ヨリ未ノ剋迄防戰ケル。賴ミ切タル郎等モ悉ク討レケレバ、兩人今ハツカレ果テ、何日マデ角テコラウベキ。イザサシ違ヘテ死ントテ、追手ノ門ノ影ニ立ヨリケル處ニ、裏門ヨリ大勢攻入。廣間口ニ正宗ノ旗立ケレバ、高田間、荒井キツト見テ、スハ願フ處ハ爰也ト、正宗ノ旗本ヘ伐テ入ント一文字ニ進ミ寄ル處ニ、荒井新兵衛ナガレ矢ニ當テ討レヌ。高田間太郎右衛門ハ猶モ正宗ノ陣ヘ駈入、正宗ト其間五六間ニ成シ處ニ、牛越宗兵衛、高田間ヲ組留、頓テ首ヲ取テケリ。是ハ牛越内膳十六歳ノ時ト云云。扨モ高田間、荒井ガ働キ功ナル哉〳〵。アツタラ勇士ヲヤミ〳〵ト討セケルヿノ本意ナサト、憐惜セヌ者ハナカリケリ。高田間ハ元來二本松右京亮吉次ガ弟ナレヒ、高田間ノ家督ヲ繼ケルト也。其時正宗公仰ケルハ、當城ヲ攻落シ、大將二人討取、軍ノカド出吉トテ悦ビ玉ヒ、二本松ヘ歸陣有テ、暫ク陣ヲヤスメ玉フ。

蘆名家記卷第三目錄

摺上一戰
金上遠江守討死之叓
附河原田新國武勇之事

蘆名家記卷第三

摺上一戰

一同七月五日ノ夜、正宗公ヘ盛國ヨリ相圖シテ、盤梯ノ下摺上、其外猪苗代龜ガ城ニゾ入玉フ。此事カクレナク黑川ニ聞エシカバ、盛重大ニ驚カセ玉ヒ、サラバ新橋ヲ越、大寺ニ陣ヲ取可レ戰。先年關柴一亂ノ節モ鹽川ノ橋ヲ越テ合戰ヲナシ、勝利ト聞ナレバ、吉例ニ任セ今度モ新橋ヲ越、敵ヲ一途追散サンニ何ゾ時ヲウツサンヤ。早打立ト宣テ、士卒物ノ具ヲ堅メ、馬引寄ウチ乘〳〵、其夜ノ丑ノ剋バカリニ黑川ヲゾ出馬シ給フ。角テ會津勢大寺ニ著シカバ、軍ノ備ヲ設ケ玉フ。先陣ハ富田將監ト相定メラル。時ニ將監盛重公ノ御前ニ畏テ申シケルハ、今度某ニ先陣ヲ玉ハルヿ、生前ノ眉目死後ノ譽レ、何ヿカ如レ之哉。然バ少々存ル旨候ノ間、他ノ勢ヲ雜ヘズ、手勢バカリニテ先陣仕度由申シケレバ、盛重公聞シ召、頓テ御免サレ有ケリ。去程ニ富田將監手勢五百餘騎ニテ摺上ノ原マデ打テ出、如何ニ身方ノ者ヒ、今度某ハ存ル旨有之間、討死ヲ遂ベキナリ。汝等モ最期ノ供ヲセント思ハヾ、甲ノシノビノ緒ヲシメ、一足モシリゾカズ、只一サンニ敵陣ヘ駈入テ、イサギヨク討死ヲセヨ。亦落ント思フ者ハ落行ベシト云ケレバ、五百余キノ兵ヒ、サスガニ名ヲ惜ム義士ヒナレバ、何レモ御供仕ラント申シテ、皆々甲ノシノビノ緒ヲ押シメ、東頭ニ馬ヲナシ、今日ヲ最期トゾ見エタリケル。二陣佐瀨河内守、稻河、川沼ノ勢二千餘騎、三陣松本源兵衛二千余騎、本陣盛重三人ノ年寄ヲ始メ佐竹勢、大沼ノ勢七千餘騎、五陣平田那麻郡ノ勢以上五千余騎、菅堂、源橋、一ノ澤ニ篝ヲ燒キ、明ケ行ク空ヲゾ待居タル。又正宗公ノ方ニモ先陣猪苗代盛國、會津案内者トシテ三引兩ノ旗一ナガレ眞先ニ進マセタリ。其勢二千余騎我先ニト競進ム。二陣原田左馬助三千余騎、三陣片倉小十郎三千余騎、本陣ハ正宗公一萬余騎ニテ、盤梯山ノ腰ヲ通リ八ケ森ニゾ扣ヘ玉フ。後陣伊達重實五千余騎ニテ陣ヲ取ル。爰ニ又太郎丸掃部ハ正宗ヨリノ仰トシテ足輕二百人ニ鐵炮ヲ持セ、摺上ヨリ南ノ手ニゾ置レケリ。是ハ身方敗軍ノ時、敵勝ニ乘テ追掛ナバ横合ニウテトノ計策ナリ。盛重ト正宗トノ本陣ノ間ハ、坂東道ノ積リ七里ヲゾ隔テケル。去程ニ明レバ六日ノ卯ノ剋ニ、先陣富田將監方ヨリ、二陣佐瀨河内守ガ方ヘ使者ヲ以テ云遣シケルハ、何トシテ貴公ノ御勢ハツヾカズ候ヤ。某一戰仕ラン。必二陣入替リ玉フベシト云送リケレヒ、河内守心得候ト返答ニハ及ビケレヒ、更ニ馬ヲモ不レ出、又盛重公ヨリモ、急ギ富田ガ勢ト相續テ、二陣スキ間モナク入替レト上意ナリケレヒ、畏リ候ト返答バカリニテ更ニ馬ヲモ不レ出ケリ。係ル處ニ富田將監味方ニ向テ申シケルハ、某以前ヨリ兎角討死ト申ツルハ爰ノヿニテ候也。四天ノ傍輩ノ中サヘ心替リト覺エタリ。偖モ蘆名ノ家代々ノ家老トシテ、時ノ遺恨ヲ以テ家ヲ亡ス者ハ大キナル惡人哉。ヨシソレトテモ此期ニ及テハ力ナシ。假令バ味方一騎モ不レ殘討ル、ヒカヘリ見ザレ。一人モナガラヘ在者、何トゾシテ正宗ノ本陣ニ駈入討死シテ、富田ガ家ノ名ヲアゲテ玉ハレ。譬バ此度遁テ在トテモ、終ニ行ク道一筋ハ遁ル、ニ所ナシ。ワルビレテ後代迄ノ武名ヲ汚シ玉フナト惣勢ニ下知ヲシテ、猶モ摺上ノ原ヲ東ノ方ヘゾ向ヒケル。去ホドニ盛國鬨ノ聲

ヲ上テ富田ガ勢ニ打テ懸ル。富田是ヲ見、誰成ラント思ヒシニ盛國目ニテ有ケルヨナ。誠ニメイ〳〵鳥ノ如ク、己ガ命ヲモ間モナク失フベシ。蘆名ノ一家ヲ滅亡ヲ計ル悪人ナレバ、天罰立處ニ當ルベシ。自餘ノ敵ヲバ追散シ、盛國ヲ手ドリニセヨヤ者ヒトテ、五百余騎一面ニ打テカヽレバ、盛國猛勇ニヤ怖レケン。一戰ニモ不レ及サツト引バ、二陣原田入替テ戰ヒケレヒ、富田ハ今日ヲ最期ト思ヒ切、命ヲ不レ惜一戰ヲ勵ミケレバ、原田ガ陣モコラヘズ崩レケリ。三陣片倉不レ透入替テ、五六度迄追ツ返ツモミ合シガ、富田三陣モ破リ、イサミニイサンデ攻戰ヒケレバ、片倉ガ陣モ崩レ正宗ノ本陣ニ引入ル。富田猶モ是ヲ追カヽリケル處ニ、太郎丸掃部横合ニ懸テ、二百人ノ足輕ヲ進テ鐵炮ヲシキリニ打セケレバ、富田ガ勢、矢庭ニ五十四人ゾ討レケル。富田是ヲ急度見テ、サテハ太郎丸掃部ニテ有ケルヨナ。蘆名ノ御恩ヲ忘却シ、正宗ヘ降參シ、アマツサヘ我々ニ向テケ様ノ振舞コソ安カラネ。只懸入テ太郎丸ヲ生捕ニセヨヤ者共トテ、馬ノ手綱ヲ引返シ、太郎丸ガ陣ニ打テ懸ル。太郎丸ガ足輕ヒ爰ヲ先途ト玉薬ヲ込カヘ〳〵散々ニ打テケリ。然リトハ云ドモ富田勢モ鐵炮ニ中リ、馬ヨリ落レヒカヘリ見ズ。イキ殘リタル富田ガ者ヒ、太郎丸ト組ヤクメトテ高聲ニノヽシツテ、一命ヲ塵芥ヨリモカロンジ一散ニ駈入ケレバ、太郎丸ガ足輕ヒ、鐵炮ヲ捨テ我先ニト逃散ス。太郎丸是ヲ見テ叶ハジトヤ思ヒケン、馬ニムチヲ當テ落行處ヲ富田將監馳付、太郎丸ヲ馬ヨリ引落シ、我乘タル馬ノ鞍ノ前輪ニ引カケテ首カキ落シ、家臣七ノ宮主膳ニ向テ、是々見候ヘ。能首取タリ。然レヒ命ナガラヘテ軍功感狀ニモ預ラバコソ、今日ヲ限リノ軍ナレバ、此首モ何ニセントテ、カシコヘドウト投捨、馬ヨリ下リ立テ暫ク息ヲゾツキ居タリ。偖モ此富田ハ當年二十一歳ニナリケルガ、無二比類一キ働キ也。サレバ富田、今ハ主從五六騎ニ成テ扣ヘケルガ、七ノ宮主膳貝ヲ吹、再拜ヲヲツ取招キケレバ、敗軍ノ勢ヒ百人計ニゾナリニケル。然レヒ手勢アマツサヘウス手痛手ヲ負ハザル者、漸ク十騎ニハ過ザリケリ。富田將監ハ辻モ死ナンズル命ナレバ、正宗ノ本陣ニ駈入テ、討死ヲスベシトテ各馬ニ乘リ、正宗ノ扣ヘ玉フ八ケ森ニ押寄、鬨ヲ作リ懸一文字ニ伐テ入レバ、伊達勢モヌキ連テ、富田ヲ直中ニ引包ミ散々ニ戰ヒケル。富田將監敵ヲサツト懸散シ、一方ヲ伐破リツツ拔テ見レバ、纔ニ十騎計ニゾ成ニケリ。富田又取テ返シ、敵ノ中ヘ割テ入、四方八面ニ伐廻リ、サツト引テ見レバ、只富田ト七ノ宮バカリニ成ニケリ。其後主從二騎ノ中ヘ駈入シガ、其後ハ死生ヲ不レ知。角テ正宗ハ摺上原ニ打テ出玉ヒテ、盛重ノ陣ヲ見渡セバ、多勢チツヒ働ズ。皆備ヲクヅサズ扣ヘケレバ、正宗是ヲ見玉ヒ、先陣富田將監小勢ヲ以テ大イ成ル働、是ニ積テ會津勢二陣三陣入替テ我勢ニ駈合スル者ナラバ、身方必定利ヲ失フベキト猶豫アツテ、盛重ノ勢サハガズ備ヲ立候ハ、如何ナル軍法ノ有モヤセント暫ク扣ヘ玉フ。然ル處ニ片倉小十郎鐵炮百丁出シ、敵ヲバ不レ打シテ、會津ノ方ヨリモ軍見物ノ爲ニ出タリシ雜人ヒ、爰カシコノ山ノ上ニ居タリシヲ悉ク討セケレバ、雜人ヒ是ヲ見、アハヤ敵ノ方ヨリモ鐵炮ヲ打ゾ、サラバ逃ヨト云程コソアレ。一度ニムラ〳〵バツト崩レケリ。盛重ノ御陣平田ガ勢等ハ、味方ノ勢カケ負テ落行勢ゾト心得ケン。亦内々心替リニヤ一度ニドツト崩レケリ。佐瀨河内守松本ガ勢モ、ヤレ裏切アルゾ、片時モ早ク落行トテ一度ニ崩レテ引テケリ。時ニ何者カシタリケン。新シ橋ヲ引落シケル程ニ、兵共川中ニ馬ヲ乘入、或ハ飛込、サカ卷水ニセカレ、侍七十六騎、雜兵八百人余、水溺レテ失ニケリ。サレヒ盛重ノ本陣佐竹勢ハ少シモ驚カズ、是コソ侍ノ役ナレ。合戰ノ上ニカバネヲ土中ニ埋、名ヲ末代ニ殘スハ武士ノ道ナレバ、サラバ最期ノ軍ヲセントテ其勢四百余騎、責太鼓ヲ打テ摺上原ニ打テ出、正宗一萬余ニテ扣エ玉フ所ヘ、會釋（劍歟）モナクヲメキサケンデ駈懸リ、東西南北ニ馳違ヒ、交レ及合レ釗（劍歟）、鐵炮ヲ飛スル其聲ハ、上梵天下地神ナラクヘモ通ゼント思レテ夥シ。盛重ノ股肱ト賴レシ平井薩摩助ハ敵ノ首二ツ取テ、暫休息スル所ヘ、正宗ノ家ノ子柴田三郎兵衞馳來テ、薩摩助ト渡シ合ヒ、相討ニシテ兩人ヒニ死テケリ。大繩讃岐、洲石駿河死ヲ一遍ニ極メ、カバネハ摺上ノ原ノ苔ノ下ニ埋、名ヲバ雲井ニ上ンニ何ノ子細カ是アラン。如何ニモシテ正宗ト渡リ合、有無ノ勝負ヲ決セント、自余ノ敵ニハ目モカケズ、只正宗ノ旗本ヲゾ尋ケル。盛重不勢トハ申セヒ、今日ヲ限リノ軍ナレバサゾ有ントテ、正宗モ物ノ具ヲ召替、旗印ヲ引替テ、自余ノ敵ト交ツテ攻擊ノ下知ヲゾ成シ玉フ。御近習ニハ山階、水田、信夫、大森トテ大力ノ者共、御馬廻リヲ守護シ、只盛重ヲ一圖ニ取ヒシガントゾ攻合ケリ。盛重ト正宗ノ軍、未刻ヨリ始テ申ノ刻ノ終マデ、息ヲモツカセズ戰シガ、盛重ハ三十騎バカリニ討ナサレ、猶モ戰ハントシ玉フヲ、兩人ノ家老御馬ノ口ニスガツテ、一先ヅ敵ヲ退ケ黑川ニ皈リ玉ヘトテ、敵ヲ少シ追散シテ引退玉フ。斯ル處ニ川原田治部少輔ガ手勢二百騎計ニテ、二ツ頭ノ右巴ノ籏ヲ押立テ靜ニ押出ス。正宗是ヲ見玉ヒ、アレハ川原田ト見ルナリ。荒手ナレバ片倉向フベシト仰ラレケル。小十郎畏テツリ鐘ノ小旗ヲ指立サセ、相ガカリニ川原田陣ヘ拔テ懸ケル處ニ、小十郎ガ兵打負テ引退ク。摺上ノ原ヨリ牛右衞門マデ追立ラレケル。西陽田ノ澤ニテ治部少輔家來伊南源助ト云モノ、猪ノ小旗ヲ指組討ヲゾシタリケル。其外足輕ノ首ヒニ七級、川原田方ヘ討トル。片倉ガ手ヘハ足輕ノ首二ツ取タリ。此後ハ盛重モ引取玉ヘバ川原田モ引退キ、其夜ハ坂下ノ近所ニ野陣スル也。因レ茲伊達勢ハ競ヒ誇テ、猶モ盛重ヲ討取ント追詰々々攻近ヅク。

大寺ニテハ盛重アヤウク見エサモ玉ヘバ、佐瀨平八郎十六歳ト名乘テ蹈止リ討死ナリ。西林寺ニテハ金上大和蹈止テ敵ヲ追散シ討死ス。其隙ニ盛重ハ堂島ヲ渡リテ黑川ニ皈リ玉フ。然ルニ四天ノ宿萬ヨリ言上申シケルハ、盛重公ノ御了簡悪ク、其上佐竹ヨリ被ニ召連一者共無作法故如レ斯成行キ、蘆名家滅亡ニ候ヘバ、此上ハ片時モ早ク城ヲ御明ナサレ、佐竹ヘ歸リ玉フベシ。サナク候ハヾ何レモ押寄、乍レ恐御頸ヲ玉ハラント事アラケナク申上ケレバ、盛重モ此上ハ力ナシトテ、佐竹勢ヲ百人バカリ召具シテ、其夜ノ内ニ小田山ノ城ヲ立出テ倉川ヲ、越テ、江戸ヲ指テ落行キ玉フ。哀レナリケル次第也。其後正宗ハ盛重ヲ追散シ、得ニ大利一悦喜不レ斜。其夜ハ大寺ニ陣取玉フ。扨又横田刑部太輔ハ摺上原ニテハ一軍モセズ引退ケルガ、心替リト見エテ、重代ノ太刀一振、正宗ヘ進上シテ、黑川ニ於テ目見ヲ遂タリケリ。

金上遠江守討死之事

摺上ノ軍破レケル跡ニ、津川ノ城主金上遠江守盛春ハ其比津川之居城ニ在シガ、正宗猪苗代ヘ打入玉フヨシ聞エシカバ、諸侍ニ相觸候迄モナク、手勢十四五騎ニテ津川ヲ立テ、モミニモシテ急ギ玉フガ、盛春ノ乘玉フ馬ハ會津ニカクレナキ胴白鹿毛ト申テ、逸物ノ早馬成シガ、殊更盛春片時モ閑ガントテ一散ニ乘玉ヘバ、供ノ士卒モ續クヿ不レ叶、家ノ若黨只二人御馬ニ續キ、六日之酉ノ刻バカリニ大寺ニ著テ見レバ、盛重早ハ盛重公御敗軍ノ御供仕候處ニ、途中ニテ敵急ニ追詰、アヤウク見エサセ玉フニヨリ、平八郎蹈止テ防戰ヒ討死ヲ仕ル。我等モ供ヲ可レ仕者ナレモ、敵ニ相隔テラレシ故、主人ト一所ニ討死セズシテ殘多存候。サリトテモ私体一人敵ノ中ヘ懸入テ討死センハ、誠ニ犬死同意ニ存ジ、今迄時節ヲ待請テナガラヘ候處ニ、唯今殿ニ逢奉ルヿ、三世ノ緣モ存ズル間、御供ヲ仕ラント申上ル。金上盛春聞召、イヤトヨ汝ハ立歸リ、平八郎ガ最期ノ躰又ハ某ガ討死ノ樣子ヲモ世人ニ語リ傳ヘヨヤ。最期ノ供ニモ增リナント宣ヘバ、彼者承リ、コハ御諚モワキマヘズ候。我モイヤシクモ武士ノ家ニ生ル、身ノ、甲斐ナキ命タスカリテナガラヘ、主人ノ最期ノ躰又ハ殿ノ討死ノ事何人ニ語ランヤ。サラバ御先ヲ仕ラント進ケレバ、金上是非ナク彼ノ侍ヲモ召連ラレ、主從三人ニテ片倉ガ手ヘ駈入テ、蘆名ノ執權金上遠江守平盛春ト大音聲ニテ名乘カケ、六十三歳ニテ終ニ討死ヲ遂玉フ。二人ノ者共モ一所ニ駈入討死ス。去程ニ正宗公金上ガ首ヲ御實撿有テ、忝モ金上ハ諸大夫ニ任ラレシ者ヲトテ、死骸ヲ取集テ墓ヲ築セテ、葬禮シ玉フコソ有難ケレ。其後正宗公諸方ノ軍ニ打勝テ、黑川近所コガイノ宮迄乘入ラル。小田山ノ城ノ留守ニハ新國上總守ト申テ、仙道長沼ノ城主ナルガ、漸ク手勢五六十騎ニテ籠リケルガ、新國城中ヨリ正宗ヲ見テ、使者ヲ以テ申ケルハ、今度義重云甲斐ナク摺上ノ一戰ニ打負ケ、行方モナク罷成候由不レ及ニ是非一候。就レ夫難

打負、黑川ヘ引入玉フト聞シカバ、金上家ノ若黨ニ白橋權左衞門ヲ近付、汝ハ津川ニ皈リ子共ニ此ノ狀ヲ見セヨトテ、矢立ヲ取出シ一通ヲ認メ、權左衞門ニ被レ渡。サテ仰ラル、ニハ、如何ニ汝物ヲ聞ケ、蘆名廿代ニ當テ不慮ノ亂出來リ、終ニ家亡ヌ、時ニ今日ノ合戰ニ蘆名ノ侍、敵ノ方ヘ降參ノ者ハ多ケレモ、名有者ハ討死セズ。明日正宗黑川ヘ移リ玉フ時、伊達勢ノ者共、昨日ノ合戰ニ、蘆名ノ者モヲ追討ニ仕タルハ心地ヨシナンドトイハレンヿコソ口惜シケレ。某ハ代々蘆名ノ家ノ執權ニテ、御ヲン厚ク蒙リシ身ガ、其甲斐モナク今日ノ合戰ニ逢ヌヿコソ易カラネ。兎角ハ敵ノ中ヘ欠入テ討死ヲ遂ベシ。汝ハ津川ヘ皈リ子共ドモニ可レ申ハ、必命ヲ全フシテ義兵ヲアゲ、山ノ内勢ヲ賴テ本意ヲ可レ遂ト能々申含メヨヤ。片時モ早ク皈ルベシトアリケレバ、權左衞門承リ、御人數モ不レ參候ヘバ、是非モ只今ハ君之御最期見届ケ、何國マデモ御供仕度ハ奉レ存候ヘモ、一旦此御大切ナル御意ヲ津川ヘ罷皈リ、若公達ヘ申上奉ン爲ナレバ、殘念至極ニハ存ズレモ、ワリナキ御事哉トテ泪ヲナガシツ、、御暇ヲ玉ハリテ津川ヲサシテゾ皈リケル。去程ニ金上盛春ハ馬ノ腹帶ヲシメテ、打乘テ駈出ントシ玉フ處ヘ、侍一人來テ御前ニ畏テ申ケルハ、是ハ誰人ニテ渡ラセ玉フゾト、金上ノ若黨ニ問ケルハ、是ハ遠江守殿ニテ御渡リ候ガ、何事ニ依テ尋玉フト答ヘケレバ、其時此侍申ケルハ、某ハ佐瀨平八郎ガ若黨ニテ候ガ、主ニテ候平八郎ナク當城ヘ入ント思召シ候ハン。去ナガラ私不肖ニ候ヘモ、義重ヨリ當城ヲ預ケ置候ノ間、左右ナクハ相渡シ申間敷候。早ク上總ガ首ヲ切テ、其上御入城候ヘト申遣候ニ依テ、正宗公モ案ニ相違シテ城ニ入玉フヿ不レ得シテ、コガイノ宮ニ二三夜陣ヲ張テ居玉ヒケル處ニ、又河原田治部少輔方ヨリ使者ヲ以テ申サレケルハ、今度摺上ノ軍ニ御勝ナサレ、義重ヲ千里ノ外ヘ追拂ヒ、案堵ニ思召候ト云モ、城ニハ新國上總守罷在候之條、定テ左右ナク城ヲ相渡スヿ有間敷候。然ラバ上總守ヲ攻玉ハヾ、私後詰仕リ候ハン爲ニ、坂下ノ近所ニ野陣ヲ搆ヘ罷在候。急ギ上總ト盛次ヲ討亡シテ、御心易ク居住ナサレ候ヘト申越ケルニ依テ、正宗彌城ヘ入事ヲ得ズシテ、亦城ヲモ攻ザリケル。上總中々是ニ屈退シテケレバ、正宗ヘ重テ上總使者ヲ以テ申遣シ候ハ、御馬ヲ向ラル、カト一兩日相待候ヘモ、一向其儀ナシ。然ル上ハ城ヲ開キ退キ本城ヘ罷皈リ候ハン。重テ居城長沼ニ於テ御進發ヲ相待申サントテ、城ヲ開キ長沼ヘ歸リケリ。河原田治部少輔モ伊南ノ居城ヘ引退キケレバ、正宗ハ心易ク城ヘ移リ玉ヒ、明ル年迄居住セラレケル。其内正宗家老片倉意休、原田休說、兩人之方ヨリ河原田治部少輔方ヘ、小能大學ト申者ヲ使節トシテ申越候ハ、今度正宗、義重ヲ攻亡スヿ、是全ク正宗卿ノ私欲ニ非ズ。義重當家ニ入テ政務悪逆無道ニシテ、上下萬民モニ愁ニシヅムヿ甚シ。然ルヲ正宗卿近國ニ在ナガラ何ゾ是ヲ靜メザランヤ。是偏ニ萬民ノ

愁ヲ救ンガ爲ナラズヤ。然ニ無道仁ノ義重ニ與シテ正宗ニ敵對申サル、ヤ。シカハアレドモ一旦族頭ト御賴ミ被レ成ニ依テ忠義ノ志ヲ勵レンヿ、誰カ是ヲ不レ感ト云ヿナカランヤ。今ヨリ後ハ正宗ト御和睦有テ、御對面可レ然ノ由理ヲ盡シテ兩度迄申越ケレバ、盛次返答ニハ、御理尤ニテ候ヘモ、舊恩ヲ忘却シ、正宗公ヘ與シ下知ニ隨ンヿハ思ヒモ寄ラザルヿナリ。早ク討手ヲ指向ラルベシ。一戰ノ中ニ討死仕ラント、言葉ヲ放テ正宗ノ下知ニ不レ隨。新國上總守方ヘモ右兩家老ヨリ此旨再三ニ及ビ云遣シケレモ、新國モ盛次ト同意ニシテ返答ヲモセザリケリ。係リケル處ニ太閤秀吉公北條ヲ攻亡シ、直ニ會津ヘ御下向被レ成、正宗ヨリ會津ヲ御取上ゲナサレ、其跡ヲバ蒲生氏卿(郷)ヘ被レ遣也。河原田治部少輔ニハ關東下總ニテ五萬石ノ知行下サレ、新國上總ニハ仙道ニテ二萬石被レ下ケルト也。上總ハ田舍ソダチノ者ニテ、秀吉公ノ御前ニテ御請悪キ由ニテ、知行召カヘサル、ノヨシ。

右蘆名記以二一本一挍合。

蒲生氏郷記

（以下「蒲生氏郷記序」及び「蒲生家系圖」は、内閣文庫所藏本に據て補入す。）

蒲生氏郷記序

感翁子撰

俵藤太秀郷公者、大職冠之末裔也。蒲生飛驛守氏郷公者、秀郷公二十四代之末孫也。一生之武功、數度雖レ多、今此書ニ記ス所其大略ヲ書ス。今世蒲生飛驛記ト名付テ市ニ出ス。其僞多キ事ヲ家臣ノ未是ヲ悲ミ、氏郷公之家來滿田出雲ト云士、傍輩ヨリ依二所望一、功戰バカリヲ文ニ綴テ、氏郷記ト名付テ蒲生家中ニ有レ之。文法其數不レ違、予其代々ヲ書記ス者也。松平中務大輔忠知迄、二十七代任二從四位下侍從一。悲哉。寛永三年八月十八日、於二京師一三十歳ニテ卒ス。其代々ハ系圖有レ之也。

蒲生家系圖

大職冠曰二鎌子一。後改二鎌足一。正二位内大臣。天津兒屋根命二十二代之孫。御食子卿之男也。皇極天皇三年甲辰六月十四日。誅二大臣入鹿於大極殿一。依二其忠一始賜二藤原姓一也。鎌子嗣子不比等淡海公左大臣贈正一位。實天智天皇之皇子也。不比等之子。房前參議正三位式部卿贈左大臣。此家一流之祖也。房前之子。眞楯大納言。兼中衛大將。本名八束。近衛九條二條一條家之祖也。眞楯之弟魚名。右大將正二位左大臣。光仁天皇。寶龜九年三月晦日任二忠臣一。號二河邊左府一。六十一歳而薨。或曰桓武天皇。延曆元壬戌六月左迁云云。六條四條山科等之祖也。魚名之子藤成伊勢守。藤成之子陸奥守豐澤。豐澤之子長門守村雄。村雄之子秀郷。始住二江州田原一。故號二田原藤太一。後改二俵之字一。醍醐天皇。延喜十八年戊刁十月廿一日之夜。到二于龍宮城一而斬二白蛇一。是既非二人力所レ及也。依レ之自二龍神一與二十種珍寶於秀郷一。秀郷皈來之後。當帝叡感甚深而任二從五位下下野押領使一。又朱雀院。天慶三年庚子。誅二平親王將門一。下總相馬郡一是依二勅命一也。依二其忠一任二從四位下兼武藏守鎭守府將軍一訖。凡一生之德業見二于當家之別記一也。秀郷之長子千常。下野守鎭守府將軍。小山結城之祖也。千常之弟千晴。鎭守府將軍。千晴之子千淸。將軍太郎。千淸之長子賴遠。五郎大夫。奥州國司秀衡以下之祖也。賴遠之弟賴淸。賴淸之子賴俊。賴俊之子行俊。内藤兼仗内舍人。行俊之子惟季。内藤之祖也。賴俊之長子季俊右馬允。季俊之長子從五位下季俊。其弟惟俊。惟俊之子惟賢。初權七。改二俊賢一。始領二江州蒲生郡一。惟賢之長子俊綱。俊綱之弟俊影。號二和田權二郎一。別有二家系一。俊影之弟號二小谷俊房權三郎一。別有二家系一。俊綱改二俊信一。修理亮左京進。俊綱長子俊久藤三郎。俊久之長男俊春藤三郎太郎又次郎。二男能俊又次郎。三男永俊僧師房金

剛寺。四男俊長三郎左衞門尉。法名佛道。五男俊恒五郎。法名淨念。俊綱次男俊宗左衞門尉。法名乘願。俊宗二男信俊左衞門二郎。信俊之子眞蓮無レ子。眞蓮之弟秀俊新三郎。秀俊之子秀信藤内。法名道敎。秀信之子秀忠。俊宗三男定信僧石塔寺空房。俊宗長子重俊。重俊之長子氏俊左衞門尉。法名淨心。氏俊之弟公俊孫次郎。法名道忍。爲二重俊養子一。實治部入道子也。公俊之子秀連二郎太郎。秀連之子俊秀藤七。公俊之弟左衞門三郎實俊。法名禪信。實俊之一男三郎次郎兼俊。兼俊之子弘俊。兼俊之弟尾張守俊季。氏俊之長子俊綱。尊氏代太夫右衞門尉。法名心覺。俊綱之弟孫三郎俊澄。俊綱之長子秀朝左衞門尉。法名秀戒。二子ハ山僧侍從房。三子ハ惟秀。惟秀之子惟氏。二男貞信。俊綱四男秀宗。秀宗之子秀基。秀朝之一男高秀左衞門尉。法名道全。二男秀直早世。三男時秀三郎左衞門。四男左近將監師秀。於二神樂岡一討死。高秀之長子秀胤左衞門尉。法名常椿。秀胤之弟俊胤。秀胤之長子左衞門尉秀兼。法名寶松。秀兼之弟秀重。秀重之弟盛秀。秀兼之子左衞門太夫。下野守秀貞。法名信正。秀貞之子政秀。後改二秀憲一。號二丹波守一。法名源雄。爲二和田豐秀之子一。實蒲生秀貞之三男也。政秀之弟賢俊。中山金光院。後任二正覺院一。秀貞之子秀綱下野守。法名正綱。秀綱之子貞秀刑部太夫。五十歲而出家。法名知閑。號二信樂院一。實和田秀憲之子也。貞季之子太郎刑部太夫秀行。法名宗福。秀行之子秀紀刑部太夫藤兵衞尉。法名宗閑。貞秀之次子小次郎右衞門太夫高江。號二接敢院眞清一。高江之弟秀順與十郎左馬允。法名宗悟。秀順弟相秀與十郎左馬允。後稱二上總介一。相秀之子秀識與十郎左馬允。高江之子定秀藤十郎左兵衞太夫下野守。法名宗知。號二定秀院一。五十歲而入道。號二快幹軒一。天正七年二月十七日卒去。弟女子岩室、橘内右衞門之妻。次女河井甲斐守妻。三女藤兵衞尉秀紀妻。四男堯清淨嚴坊門弟。五女美乃部下總妻。六男賢洪中山金光院。七男山城守秀洪。八男梵純青木玄蕃允。後號三二河守一。定秀之子賢秀藤太郎左兵衞太夫。母ハ馬淵山城女。天正十二年三月十日五十一歲卒去。號二惠倫寺一。次男茂綱式部少輔。後號二駿河守一。爲二青地氏一。三女神部藏人妻。四女美乃部上總介妻。五男左近將監實隆相二續小倉一。六女池田二郎左衞門尉忠知妻早世。七女關安藝守妻。賢秀之長子氏郷忠三郎始賦秀敎秀飛驛守。從四位下宰相。天正十二年自二江州一遷二於勢州一而領二南五郡一。同天正十八年庚寅移二奥州一而領二會津百餘萬石一。文祿四乙未二月七日於二京師一逝去。于レ時四十歲。號二昌林院高岩宗忠一。凡一生之功業。見二當家記錄一也。氏郷之弟女子關右兵衞尉妻。次女子田丸中務妻。次女子小倉左衞門尉妻。氏郷之長男秀行藤三郎始秀朝又改二秀隆一。飛彈守從四位下侍從。慶長四年自二京師一移二于野州一而領二字都宮一。同六年移二于會津一而領二父之遺跡一。同十二年五月十四日逝去。三十歲。號二弘眞院覺山靜雲一。母ハ信長卿ノ女。秀行之妹。前田孫四郎妻。秀行長女加藤肥後守忠廣之妻。母ハ家康公之女。次男忠郷下野守從四位下侍從。寛永三任二從四位上宰相一。猶領二會津一。同四年正月四日逝去。二十五歲。號二見樹院得譽玄光一。母同レ上。三男忠知中務太輔。寛永三年從四位下侍從。同年領二羽州上之山一。同四年迁二與州一領二十二郡一。同十一年八月十八日於二京師一卒去。三十歲。號二興聖院華岳宗榮居士一。母同レ上。

秀郷ヘ自二龍宮一賜ハリケル寶物、系圖ニハ十種トアレ𪜈、七種有レ之也。

太刀　鎧　弓箭　卷絹　鍋　俵　鐘

太刀、鎧ハ惣領ヘ傳ハリ有二小山之家一。弓箭有二佐野家一。絹、俵、鍋在二蒲生家一。鐘在二三井寺一。此外賴朝三代御敎書、尊氏兄弟ノ下シ文アリ。又依二建武之武功一、尊氏自筆ニ蒲生六郎左衞門ト御書付御判形有レ之。血ノ付タル母衣絹モ又不動ノ尊容ノ繪、其外守リ本尊ノ繪、二三軸、皆此等ノ分蒲生家ニ有レ之也。

（以上、内閣文庫所藏本に據て補入す。）

永祿十一年戊辰氏郷十三歲。鶴千代ト申時、信長公得父蒲生兵衞大夫、爲二證人一岐阜得被二相越一。於二御前一毎度武篇雜談有レ之刻、雖レ及二深更一終不レ眠、一心不亂ニ語ル人ノ口本守テ被レ居タルヲ、稻葉伊豫守是ヲ見テ、蒲生ガ子ハタヾ者ニテハ有マジ。アレガ一定勝タル武勇之者ニテナラズンバ、成者ハアラジトイハレケルト也。信長公時々御感アリ。依レ之爲二聟君一信長公彈正忠ノ字ヲ賜。號二蒲生忠三郎敎秀一。後改二賦秀一。越前表御出馬之比ハ十五ノ年、一羽緒十郎兵衞召ツレ、自身鎗ヲ合高名ヲ仕、初文祿四年乙未二月七日逝去。歲四十。其内ニ二十六度手ニ合、越前ヨリ叛陣後同國甲賀ノ侍共不レ隨。及二三度一自身相働、名有侍共討果シ或ハ隨ガヘ、自身高名ナキ事一度無レ之。又同國一原之侍共我意ヲイタスヲ二度相働、自身高名手イタキ働ニ付テ大形近邊相隨ナリ。一攝津國池田可二相働一、ト信長公被二仰付一。彼地得押寄ル處ニ敵カケ出、氏郷先手ノ者共被二追立一、崩ル處ニ氏郷掛合、岡左内（後越後）、西村左馬丞（後志賀三左衞門）ツヾク敵追返ス。氏郷高名堅固ニ陣ヲ取、及二夕日時一又敵打テ出ル。氏郷眞先ヲ掛、ヲメイテ四角八方ニアタリ戰ヒ敵追返ス。敵無念ニ思、其夜ヲ明シ、又敵打出切カ、ル。氏郷一番ニ鑓ヲ合、我モトカケ合追ヒ崩シ、氏郷高名。其後ハ敵出ズ成ヌ。

一信長公御切腹ノ後、羽柴筑前守味方ニ賴ミ被レ申ニ付テ、小牧表得押ツメラル。敵是ヲ見テ清次ノ城（須歟）ニ被二引退一。大閤樣清次ノ城際マデ押ツメヤガテ又御引返シ被レ成候。其時後拂誰ニ可レ被二仰付一カト思召定テ、城ヨリ可レ付一大事ノ儀ナリ。イカヾト御思案アッテ、此度ノ後拂ヒ氏郷ニ仕候得ト被二仰付一。氏郷承リ、御心易ヲボサレ候得。敵出候ハヾ段々人數ヲ立テ一マクリニ追返シ申ベシ。御心易クノカセ

ラレ候得ト被二申上一。大閤様御感不レ斜。其次々段々被レ爲二仰付一。大梯得參著被レ成候。今度尾州表御人數御引取被レ成。御一代ノ大事ト被二思召一候ニ、氏郷堅固ニ後ヲ仕、緩々ト被二引取一御滿足被レ成之由被二仰聞一候。氏郷一代ノ覺ハ此儀也。子細ハ何モレモミノ中ニ御一代ノ大事ト思召儀ヲ、氏郷被二仰付一事面目之至リ不レ過レ之トイツモ語リ被レ申シナリ。敵出ネバ手ニハ合ネ兎、是ヲ第一ノ事トスルナリト被レ申ケルトゾ。

柴田殿衆 佐久間備前　同大膳
武田信玄衆 南部越後　大閤様衆 木村伊勢守
會津衆 會根内匠　兼信衆 上田越中
新國上總　正宗衆 須田伯耆
同 牛越内膳　家一衆 木田三彌
北條衆 松田金七　同 金子十助
瀧川殿衆 谷崎忠右衛門
同彌一右衛門
信州衆 眞田隱岐
同 山戸田八兵衛
同 才織部
道家與兵衛

一信長公御切腹後、尾張ノ國ヲ三介殿被二御知行一。南伊勢五郡ハ信長公被レ追二御本知一。然處ニ秀吉公ト御間不和ニ成、南伊勢御知行ニナラズ。其後天正十二甲申之年、羽柴飛驒守、氏郷ニ南伊勢五郡十二萬石被レ下。六月下旬入郡アル。木作左衛門佐ト云ハ三介殿御下ニ候ヘドモ、屋形ト申合居殘、日置ト云城ニ楯籠有レ之。其近邊ヲ押領メ上野知行ヘモ夜討シ、矢錢ヲカケ我儘ヲ振舞ニ付テ、上野殿日置表ヘ雖レ被レ出、人數近邊ヘモヨセ付ズメ、度々被レ失二勝利一。然其氏郷松ガ島ヘ入城候。其節勢州ニ不レ限、諸國未二靜謐一ニ付テ、先郡中仕置ヲ本トシ、日置ヘハ押寄スル儀モ無レ之處ニ、氏郷領分ヘモ夜毎ニ日置ヨリ出テ苅田ナド仕ニ付テ、切々氏郷掛二合眞先ヲシテカケ破リ〳〵働高名十二度、氏郷眞先ヲ掛ラル、ヲ敵分別メ、小川内ト云處ニフセヲ置待所ニ、小川内ノ谷ヲ夜中ニ氏郷被レ寄、一番ニ川瀨與五兵衛、次ニ赤佐隼人（後蒲生四郎兵衛）、次ニ關小番、其次横山喜内、次蒲生主計、周防長丞、次布施良次郎右衛門、少ヒキサガツテ馬廻小性行處ニ、先伏ニ近付ケレバ、鐵炮ヲ打カケケルニ何毛覺ズ馬ヲ引返ス所ニ、氏郷一騎敵ノ眞中ヘカケイレ散散ニタ、カハル。彼ノ鯰尾ノ甲敵ノ中ニヒラメクヲ見テ、我モ〳〵トトツテ返シ、敵ヲ追崩シ、首十八討捕。トキヲドツトツクツテ松ガ島ヘ被レ皈ケリ。

一其後又木作小川内ノ川裔迄出タルト聞テ、氏郷ムカハル、ニ、日暮闇クナルト退ク。又謀ニゲ行ヲ氏郷白馬ノ足バヤナルニ乘テ追被レ行。石橋ノ有ヲ被レ過ト天景寺ノ勘太郎ト云敵、氏郷ノ馬ノ平頸ヲ切落ス。ハヌレバヲリ立アヤウク見ユル處ニ、跡ヨリツヾク勢ヲ見テカヒフイテニグル。ツヾイテ追掛。氏郷ユカレケレ共、敵達者モノニテ逃ノビヌ。首二十三討取、松ガ島ヘ歸ラル也。

一内々氏郷被レ存ハ、木作足長ニ出ヨカシ。討果トテ方々ニ物聞ヲ置、指出候バ鐵炮ヲ打候ヘ。ソレ次第ニ松ガ島ヨリ

掛付可二討捕一ト相圖メ度々掛合追散ス。氏郷早馬ヲ以テ眞先ニ被二乘付一ヲ見テ、方便リ可二討取一ト木作工夫メ、九月十五日ノ夜木造内ニテ物頭ヲシ口ヲモ聞程ノ兵ヲ、不レ殘氏郷領分曾原ト申表ヘ押出シ、ヨキツマリニ伏置テ、氏郷被二掛付一バ可二討捕一支度メ、イツモノ如ク苅田ヲサセケルヲ、物聞共聞付、鐵炮ヲ打音ヲ聞テ、松ガ島ヨリ月サヤカニテ如二日中一ナルニ、氏郷二千ノ兵ヲ以テ被二掛付一。曾原ヨリ卅町計此方ニ千餘ノ人數ヲ備テ控ヘ置。ソレヨリ三四町進デ氏郷五百餘ニテ備ラレ、胴勢千餘ノ兵兼テ下知セラル、ハ、敵カ、リ來ル比、我五百ノ備ツボミテ一所ニ成ベシ。ソレヲ不レ可二周章一ト示シ置、殘ル四百余之兵ヲ苅田ノ敵ニカ、ラセラル、。木造ガカクシ置タル兵ス、ンデカカリ、氏郷方ヲ追カ、ル。氏郷ノ五百兼テ如レ定胴勢千余ト一所ニ成テ追來ル敵ヲ引受、氏郷眞先ヲカケラル、。馬達者也。馬ハイチモツナリ。四角八面ニ掛リ破リ、突倒シテハ駈廻リ、乘チラシ乘返シ戰ル、。其内ニ外池、長吉、黑川、西、田中新平ナンド云者散々ニ戰討死ス。小性立ニ外池孫左衛門、氏郷ノ矢面ニ立フサガリ防戰フ。氏郷鯰尾ノ甲ニ鐵炮三アタル。鎧ニモ疵數ケ所雖レ有レ之、身ニハ薄手モ負給ズ。東西北南ニ掛破リ蹴散サレ、敗北スルヲ手下ニ討捕モアリ。追討ニ日置之城下マデ追ツメ、木造内ニテ物頭ヲスル究竟ノ兵三十七人、其外甲付三十六、雜兵數多討捕テ勝鬨咄ドツト作リ、日置之城下十町計引取テ被二陣取一。此時氏郷ノ家老共諫テ、此キヲイニ直ニ城ヘ付入、城ヲ乘取、木造ヲ討亡シタマヘトス、ムル。氏郷ノ云、勿論手間入ベカラズ。然ドモ木造ヲ討亡スニヲイテハ、自餘ノ敵城兎迚モノガレザルト思テ固ク守リ手間取ベシ。今夜ノ合戰ニ過半物頭、其外能士多クウタレタル間、大方木造ハ降參スベシトテ付入ニセラレズ。如レ案翌日木造降參ス。命ヲ助ルノミナラズ、傳馬人足以下被二申付一念比ニメヲクラル。是ヲ聞テ其後氏郷ツモリノ如ク、此外ノ小城共降參メ明渡、或ハ被官ニナル。□關等ハ被官ニナリタリ。日置ノ合戰ト云ハ是ナリ。氏郷廿六歳ノ時ナリ。

一薩摩ノ大守島津ノ某、九州七ケ國切取、任二雅意一京都得出仕スル事モ依レ無レ之、彼ヲ可レ有二御退治一トテ、天正十五年丁亥三月一日、關白秀吉公花洛ヲ打出サセラル。同月廿八日ニ關ノ渡御越、豐前國小倉ノ城得御著陣。翌廿九日同國至馬嶽得被レ移二御座一。其ヨリ秋月ノ間ニ岩酌ト云城ニ、熊谷越中ト申者人數多楯籠路次ノ障リヲナス。然所ニ先手ノ大將堀左衛門督被二仰付一、萬事先手ノ儀左衛門下知ニ可レ隨ト依レ被二仰出一、左衛門督下知次第ニ有レ之所ニ、岩酌ハ能城ナリ。責ソンジテ如何ト思ハレケルニヨツテ、岩酌ノ押得ニ氏郷ヲ申付。主ハ秋月得被レ越ル。氏郷此ヲサヱニ居ル吏ヲ無念ニ被レ存、岩酌ニ近ヨリ見渡シテ如何思ハレケン。物

見二人被二指越一。吉田兵助、周防長丞ナリ。岩酌麓在々ニ人有レ之カ、又ハイツ麓ノ者共退候カト能見ヨト有レ之。二人麓ヲ見マハルニ人一人モナシ。食ナド給タルアト有ニ食ツブ大形干テアリ。ケ様ノトテリ見届、其由申ヲ聞テ、又布施次郎衛門、土田久介二人ツカハシ、猶以能見ヨトノ儀ニテ被二指越一。二人歸リ、別ニ見トムルシルシモナシ。右之通リニ食ツブヨリ外イツ退タルト云シルシ無レ之ト申。又蒲生四郎兵衛ニ見テ歸レト被二申付一。四郎兵衛見テ申様ハ、岩酌ノ麓ノ者ハ十日先ニ退タルト云。申様ハイカニト尋ラル、ニ、雨十日先ニ降タリ。其後不レ降。道々ニ足跡ナシ。雨後迄居タラバ足跡可レ有ト云。能見タリト被レ申タルナリ。扨町野左近ヲヨビヨセ、御陣得參リ、牧村兵部大輔、戸田三郎四郎ヲ以可二申上一ハ、岩酌ノ躰見申ニ可二責落一城ニ御座候條、被二仰付一被レ下候様ニト被二申上一。關白様被レ爲レ成二御意一候ハ、岩酌ハ名城ト云、又ハ能者共數人楯籠タル城ナリ。九州ノカタメト思召。若責アグミタラバ、島津ムヅカシク可レ成ト思召ス。勿論責落シタラバイヅクモ即時ニ可レ治。大事儀ヲ飛驒申上ルトテ御免シ無レ之。左近立歸リ、此由氏郷ニ申聞セケレバ、重テ參可レ申ハ、イカニモ安ク可二責落一ト申上候得ト被レ申ニ付テ、又御本陣得參、右ノ兩人以テ被二申上一。トカク無用ト被レ爲レ成二御意一御免シ無レ之。又是非被二仰付一被レ下候様ニト被レ申レバ、其時ノ御返事ニ然可

被二仰付一。若シ責アグミタラバ切腹仕レトノ儀ナリ。氏郷殊外悅ビ、責アグムホドナラバトク討死ゾ、皆其用意セヨト下知セラル。家中ノ者ドモヒシ〳〵ト用意ス。重テ關白様被二仰出一候ハ、越中人數澤山ニ楯籠トノ儀候間、氏郷人數計ニテハイカバト思召。羽柴肥前守利長、丹波ノ少將殿、石川伯耆守被二指加一。關白様大ニ御感有テ早朝被レ寄二御馬一、後詰シテ可レ被レ爲二御見物一旨被二仰出一。明レバ四月一日之日、早天ニ押ツメ、氏郷ハ本道通リ、利長ハ城ノ尾筋被レ責。口麓三搆有レ之ヲ即時踏破リ、追付々々攻上ル。城中ヨリ鐵炮タケニナル時分、關白様數萬騎被二召連一、板原ト云野山得御動座有テ金ノフクベノ御馬印ヲ打フラセラレ、鬨ノ聲作カケ〳〵給。氏郷其木戸破レト下知シテエイヤ聲ヲ上無二隙透間一責上ル。城中モ爰ヲ先途ト防ギケル。蒲生源左衛門、後栗生美濃寺井半左衛門、門屋助右衛門、岡左内一二ヲアラソイ飛入、殘ル兵我モ〳〵ト押破懸入二ノ丸ヲ乘取。關白様被二御覽一。ハヤ城ハヲツルゾ、シタ〳〵ト御感不レ斜メ此羽織ヲ著テ本丸得乘候得ト被レ成二御諚一。薄淺黄ニ柳ヲ縫タル紅梅裏ノ御羽織ヲ被レ下。氏郷是ヲ頂戴有テ著用ノ、馬廻小性モ不レ殘本丸得懸レ〳〵ト下知シテ、我身モ侍共ノ先ヲ掛ラル。四方ノ寄手モ是ヲ見テ、我劣ラジト嘆呼(喚聲)デ責上ル。越中ノ兵モ今ヲ寂後ト火水ニ成テ雖二防戰一、是ヲ事共セズ乘込刎越頸ヲ取。突立ニ責戰、即刻ニ乘崩ス。敵煙ニ少將殿責口得崩落ル所ヲ押得テ頸ヲゾ取タリケル。關白様不レ斜御感悅有テ、此馬ニ乘テ早々御前得參候得トテ、鹿毛ノ御馬大遣キニ梨地ノ鞍置牽セ給ル。氏郷則拜領シ、之ニ打乘參上ノ處ニ御祝不レ淺、猶軍忠ヲ盡ベシ。神妙ナリトテ被二仰聞一。蒲生源左衛門、寺村半左衛門モ分捕高名仕ル。彼等ガ指物忝モ御手ニ取セラレ、此指物眞先ニ進デ見得タリ。手柄ナリト御諚ニテ、御羽織ヲ頂戴ス。面目ノ至リナリ。其外分取高名仕者共ニ金錢ヲ被レ下ケル。少將殿手、羽柴肥前守手、頸ノ數三百計ヅツ、雜兵頸多シ。氏郷手ニハ頸百二拾計有。甲付ノ頸九十三有。關白様御覽ジテ、飛驒守手ニ頸數甲付多シ。飛驒守働ナヲモツテ骨折ト御感被レ成ルト也。此響ヲ以テ島津分國數ケ所ノ城々悉ク退散メ、島津ガ居所鹿籠島得引籠ル。依レ之御手間不レ入。同三日ニ秋月ノ城得御移、五六日御逗留。其ヨリ薩摩國ナカ仙代ト申マデ御動座有。此河大川ニテ兵粮ノ大船數百艘押入ル。此所ニ二三日人馬息被レ休、鹿籠島得押詰ラルベキト有レ之處ニ、島津及二難儀一降參仕。仙代川得罷出御禮申上ル。如レ此早速九州平均屬スルコト、岩酌落ノ響故トゾ聞エケル。

一小田原氏直御退治ノ刻、氏直陣所仕寄塲得城中ヨリ夜討ヲ仕、先手ノ者共相働。其刻氏郷ハ具足モキズ鎧ヒツサゲテ、敵ニカマハズ、敵ノ後得タヾ一人マハリ、敵ノ後ヨリ突タヲシサン〳〵相働ル。敵城中得可二引取一トスレ共、氏郷一人ニ被レ責堀ニ飛入ナドシケル。ソレヲ見テ後ヨリ懸合タル侍共、我モ〳〵ト頸ヲ討捕。氏郷其時ノ鎧ヲヲクビノビタル鎧ニテ有レ之。カミネヂ〳〵テ後マデ有レ之。敵ヲツキタヲサレタルハ數多有ヲ、頸取者共モ多シトゾ申ケル。關白様右之働ノ様子被二聞召一御感。氏郷働雖レ不レ珍、此度ノ夜討ニ敵ノ後得マハリ、跡ヲ一人シテ取切數多頸ヲ討捕ル哀、當意ノ氣轉、古今稀ナル働ト被二仰聞一ナリ。

一羽柴飛驒守氏郷會津拜領ハ、天正十八年庚寅八月十五日。會津郡大沼、河沼、稻川、山部、猪苗代、南ノ山、以上六郡、拾仙道、白川、石川、岩瀨、安積、二本松、以上五郡、合十一郡、知行高七十萬石。右郡中在々所々仕置丈夫ニ被二申付一。正宗ハ本知無二相違一長井郡米澤在城。木村伊勢守父子ハ葛西、大崎ヲ拜領也。此節氏郷、伊勢守ヲ關白様御前被二召出一、伊勢守、氏郷ヲ主共親共存ベシ。自今以後京都得不レ及二出仕一候。會津得出仕候得。氏郷ハ伊勢守ヲ子共弟共存候得。木村ハ小身ニ候間、一揆蜂起スル哀モ有ベシ。然バ正宗ヲ先立、氏郷、葛西、大崎得出勢シテ一揆ヲ切隨ベシ。木村ヲ見ステザルヤウニト被二仰聞一候。關白様八月廿日前ニ被レ爲レ成二御上洛一畢。

一葛西、大崎一揆悉蜂起候。伊勢守ハ葛西ニ在城候。子息彌一右衛門ハ大崎ニ居城候ツルガ、伊勢守ハ彌一右衛門ヲ無二心許一被レ存、一所ニ可レ成タメ大崎得ト心ガケ、又々彌一右

衞(門脇歟)ハ伊勢守ヲ無二心許一被レ存、葛西得ト心掛居城ヲ被レ出、中途ニテ父子被二行合一候。其内ニ一揆跡先ヲ引ツヽムニ依テ、數度鑓ヲ合、討ツ討レツ雖レ被レ竭二粉骨ヲ一、一揆如二雲霞一競來間、多勢ニ無勢不レ叶シテ伊勢守小性立成合平左衞門ト申者、佐沼ト預リ居候其城得父子一所ニ被レ籠候ヲ、一揆十重二十重ニ取卷候。城中ニ兵粮無レ之及二難儀一之由、十月廿二三日比風説候。氏郷聞レ之。於二実實一者今一左右次第可レ有二出馬一。無二油斷一用意可レ仕旨被二申觸一候。會津拜領候テ百日ニモ不レ足候得バ、諸事ウイ〳〵シク雖レ爲二不如意一、ヒシ〳〵ト用意候處ニ、彌必定ノ由、廿六日ニ相聞候ニ付テ、會津留守居ハ小倉豐前守子息孫作、關方鉄右衞門父蒲生左門、蒲生喜内、北川平左衞門等ヲ指置。仙道ニハ田丸中務少輔ヲ殘置、仕置丈夫ニ申ツケ、サテ正宗得使者ヲ遣シ、近近大崎表得出馬候間、被レ得二其意一可二出馬一由申越サレ、扨氏郷ハ究竟ノモノナレタル兵二千余騎引卒シ、先手ノ者ハ十月廿八九日ニ打立。氏郷ハ十一月朔日ニ可レ有二出馬一候處ニ、廿九日一日チヾメテ大雪フリ降、會津山麓猪苗代ト申所マデ田舍道三十里ノ間雪夥フリ積リ、馬ノ通ヒ留リ候ニ付テ、多勢ヲ以テ雪ヲハラハセ、猶フカキ所ニハ莚ヲシキタヽミヲシキ、十一月五日ニ會津ヲ立。其日ハ猪苗代ニ居陣。翌日大雨洪水ニ付テ阿子ガ島ト云所ニ滯溜、同七日ニ正宗領境至二二本松一著陣候。政宗一萬余騎ヲ卒シテ信夫郡ノ鎌田、本折、杉ノ目邊ニ正宗勢ト入組陣ヲトリ有レ之所ニ、正宗内々下心有ニ依テ、イツ可レ被二打立一躰共不レ見ニ付テ、先手ヨリ蒲生四郎兵衞、王井數馬兩人ヲ以テ二本松得申越候ハ、右ノ様子ニ候間、下々喧吒口論モ不レ仕様ニ隨分申付候。又正宗謀叛歴然ノ様ニ專申候間、是ニ二三日モ御逗留有テ、正宗ノ躰ヲ被二御覽一計可レ然モヤ候ハント申處ニ、氏郷聞レ之以外腹立有テ、愚叟ヲ申物哉。正宗逆心スベキトハ於二會津一覺悟候。何方ニテ成トモ其色ヲ立候バ、正宗ト一戰ヲトゲ可レ決二勝負一ト思定メ打立間、今更不二相違一。正宗ハ兎モ角モアレ。明日未明ニ打立、正宗勢ヨリサキヘ押テ通ルベシ。氏郷モ明早天ヨリ可二打立一間、何方ニテ成共道ヲ基キ(塞歟)障リスル處ニテ、一戰ヲトゲント令二覺悟一候得。爰ニテ見合候得ナド臆シタル申叟ドモ大ニ怒ラレケレバ、兩人是非ヲ不二申得一閉口ス。扨其夜ノ半バカリヨリ大雨篠ヲツク如クフルトイヘ共、氏郷拂曉ニ二本松ヲ打立、正宗領分大森城下得著陳アリ。正宗於二油斷一ハ氏郷ハ先可二押通一躰ヲ、正宗モ無間被二打立一候ヲ、押立々々夜ヲ日ニツイデ雖レ被レ急、猛勢氏郷者押ニ付テ、大崎ノサカイ、正宗領分黑川ト申所迄十一月十七日著陳アル。明日早天ヨリ敵地ヘ働也。正宗ヘ參會有テ行程ノ様子相談有ベシトテ、正宗陣所ヘ氏郷被レ參。初テノ參會ナリ。扨葛西、大崎ノ叟無案内ニ候。一揆ノ城々何ケ所候哉。又伊勢守籠城佐沼得ノ道ノ行程如何ト被レ尋候得バ、佐沼迄ハ田舍道百四十里計可レ有レ之候。其内ニ一揆ノ城高清水ト申テ、佐沼ヨリ三十里此方ニ有レ之通ニ候。其外ニハ一揆ノ城一城モ無レ之由正宗被レ申候。佐候ハヾ明日早々ヨリ大崎得打テ出、道通ノ民屋令二放火一、急高清水得押寄蹴散、伊勢守ト手ヲ可レ合ニ相定。翌日十八日早天ニ打立。氏郷ハ本海道筋、正宗ハ右手ニ付テ押入、在々放火イタシ、黑川ヨリ三十里四十里ノ間ニ鹿間、中新田兩城、海道スヂニ候ツルガ難レ抱シテ明退ク。其日ハ氏郷中新田ノ居陳。正宗ハ七八町間ヲヲキ古城ニ居陣候。中新田ヨリ高清水迄ハ六十里有レ之由ニ付テ、明日ハ一番鳥ニ打立、高清水得午剋以前ニ參著候ハヾ則可レ被レ責候。若晩日ニ成候ハヾ(シ歟)チト〳〵ト陣取、明後早天ヨリ可レ被レ責トテ陣ヘ被レ觸候處ニ、其夜亥刻時分ニ正宗ヨリ使者ヲ以テ被レ申候ハヽ、持病俄ニ再發候間、明日ノ働被二相延一候様ニト被二申越一候。氏郷返事ニハ御煩無二心許一候。明日之働可レ申儀ニアラズ候間、我ハ早々可二打立一候。御氣色能成候ハヾ跡ヨリ可レ有二御出一由、其後氏郷ヨリ正宗ヘ以レ使、彌明日ハ先ヘマイリ候間、其御心得有テ、御快氣次第ニ跡ヨリ御出候様ニト念ヲ入被二申越一。扨陣中得明日十九日一番鳥ニ打立ト申フレ候ヘドモ、正宗煩ニ候間先ヘ可レ働候。左候ヘバ不知案内ノ所ニ候間、夜中道ナド踏迷候テハイカヾニ候。夜ノホノ〴〵明ヨリ打立、先々ヲ見晴シ可レ行候間、寅ノ刻ニ支度シテ夜ノ明ルヲ待候ヘト陣中ヘ被觸。其ゴトク用意有テ、東ノシラムト打立レ候。兼テノ武者ノ段々、一番蒲生源左衞門、蒲生忠右衞門、二番蒲生四郎兵衞、町野新三郎、三番五手組、六手組、七手組、四番寄組、其次弓鐵炮ノ頭、扨旗本馬廻組、小性組、跡備ハ關忠五郎何モ備押、ヲシ太鼓(鼓歟)如レ此候シテ、正宗虚病ニ付テ、五手六手七手三與ヲ跡備ニ置。關ヲ三與ノ跡得入替ラル。先ニ名生ノ城有レ之ヲモ不レ知。右ノ段々押行處ニ、名生ノ城ヨリ鐵炮ヲ出シ打カクル處ヲ、源左衞門マヅ先カケテ先掛テ、先手ノ四人、馬ヲ入追崩シ、其マヽ付入ニ乘取。本丸計ニナリ候ヨシ注進ニ付テ、氏郷馬ヲ早メ城際得乘付、馬廻小性モ本丸ヘ掛リ、卽刻責ヤブレト下知メ、自身本丸得カケ入ル、裡ニ、ナジカハタマルベク責ヲトス。扨跡備三組ニハ跡ヘ旗頭ヲ成、三段ニ人數ヲ立候ヘ。唯今正宗押來事可レ有レ之間、油斷スナト下知セラル、處ニ、如二案ノ一正宗、重實、片倉小十郎眞先馳來トイヘ共、三段ニ立來、人數鐵炮ニ火ヲハサミ持カケイタルヲ見テ、案ニ相違スト相見得、正宗勢ハ左ノ野ヘ馬ヲ乘ヒソリ在レ之内、名生ノ城本丸二揆トハ云ナガラ、大崎ノ侍共楯籠ノ間堅固ニ相抱、塀柵ニ取付、乘越ル所ヲツキ落シ切テ落シ、爰ヲ先途ト防戰トイヘ共、飛入ハネコヘ込入中ニ、道家孫市、粟六右衞門、町野新兵衞、田付理介ナンド云者、火花ヲ散シ切落シケルガ枕ヲ双テ討死ス。其外兵共討ツ討レツ引

組デ上ニ成下ニ成、首ヲ取モ有、取ラル、モ有、息モツカセズ責戰。卽時フミヤブリ男女共ニ一人モ不レ殘ナデ切ニシテ、首五百八十余、討捕火ヲカケ候刻、岩手、宮澤、古川、松山、四ケ所ノ城ヨリ一揆働トイヘ𪜈、名生ノ城卽時ニ落去ノ躰ヲ見テ、肝ヲ消タル風情ニテ敗北ス。氏郷被レ申ハ、如レ此今ニ一揆ノ城有レ之トハ不レ知、殊ニマヂカク有レ之事ニ候間、此城ニ今夜ハ居陣候。掃除仕候ヘト申付、切捨タル死骸𪜈取捨居陣候處ニ、正宗ヨリ使ヲ以テ、カヤウニ城責ヲ被レ成ソウロハヾ、我等モ一方被ニ仰付一ソフロハデ、京都ヘノ聞エ無二面目一由申越サレソフロフ。氏郷返事ニハ、カク城ノ有レ之ヲモ不レ承候テ、如レ此ノ樣子我ラモ全相違。先テノ者𪜈申モ不二申聞一攻崩候間、其方ヘ申入間モ無レ之候。然ラバ此向ニ宮澤トヤラン申城有レ之由ニ候。アレヲ責ラレ候ト返事ニ付テ、正宗宮澤ヘ被ニ押寄一候。サテ氏郷ハ明日廿日早天ヨリ高清水ヘ押寄、卽刻ニケ散シ、伊勢守ニ手ヲ可レ合ト被二相定一候。諸人勇進其覺悟ヲ成ス。然處ニ其夜亥剋バカリ、正宗譜代ノ侍ニ須田伯耆ト申者、蒲生源左衞門ガ陣所得走入。正宗逆心定ノ間、明日之御働ヲ被ニ相止一、正宗爲レ躰可二御覽ズ一候。高清水ノ城モ明退由聞エ候。旁以御働可レ有二御延引一候。猶以子細ノダン可二申上一候ト申ヲ聞屆、源左衞門雖ニ手負候一罷出、氏郷得右ノ通申處ニ、氏郷此由ヲ聞、譜代ノ主ノ隱謀ヲ可二告知一ト申儀不審

候。何トゾ心ヲ引見ンタメ計策ニテモ有ベシ。須田ガ口ヲ念ヲ入タヅネ問候處ニ、御不審尤ニ候。正宗譜代ト申セドモ、重々ダン〳〵無レ曲子細候テ、不足千萬故如レ此。其子細ハ須田親ニハ正宗親父照宗ノ代ニ、相馬境ニテカキアゲ城ヲモ被二預ケ一、家老脇ニモ罷成身躰ニテ、照宗二本松ニテ討死ノ刻、須田父追腹ヲ切候間、其感モ可レ有レ之處ニ、左ハナク狂氣メ切候ナドト申成シ、今我等ヘノアテガヒ無レ曲次第ニ付テ斯申上候。此儀氏郷公ヘ忠節ニ申ニテハ無レ之候。關白樣ヘ被二仰上一子共數多持申候間、子共ノ安穩ニ罷有候ヤウニ仕度存念マデニ候。正宗叛逆ノ樣子ハ、氏郷公可レ討タクミ及二數度一候。去ル十七日、黑川ニテ御參會ノ刻、既ニ可レ奉レ討ト候ヲ、是ニテ正宗無二遁所一候。今度被二攻崩一候名生ノ城ニ、大崎ノ侍共、弓鐵炮ヲ丈夫ニ籠置候間、氏郷可レ責間手負死人可レ有レ之。責アグミ候時分、城中ニ火ノ手ヲ揚ヨ。其煙ニ付テ宮澤、古川、岩手山、松山、此四ケ所ノ城々ヨリ人數ヲ出シ、後切シテ氏郷ヲウチハタシ、城仕損ジ討死ト可レ申工夫仕候得ドモ、氏郷公御運ツヨク、御手柄ヲ以テ、名生城息ヲモツカセズ被二責崩一ケブリヲ可レ揚際ナク、諸方ノ手ハゲレ仕、正宗モ手ヲ失候。宮澤ノ城卽時可二落去一城ニ候ヘ𪜈、一揆ト内々ノ申合有レ之故、中々責可レ申念モナク候。是ヲ御覽候テモ合點可レ參候ト申ニ付テ、高清水モ開退キ候者、伊勢守取卷一揆𪜈敗北スル支有。左

アラバ明日ノ働ヲ述、樣子見ヨト有レ之内ニ伊勢守ヨリ飛脚到來シテ、一揆共ヨリ申候ハ、氏郷公大崎マデ出勢候テ名生ノ城ヲ責ラレ、此表得働ニ付テ取退候。木村ヲ不二責殺一無念ニ候得𪜈、力不レ及由訇リ悉逃散ル間、可二御心易一由申來ニ付テ、彌働ヲ止、名生ニ居陣候。伊勢守ヘハ其城兵粮無レ之由ニ候間、此表ヘ引取一所ニ可レ有レ之候。可レ被レ得二其意一旨返事候テ、翌日迎ヲ遣ス。廿三日ニ被二引取一候。伊勢守父子氏郷ヘ對面アツテ泪ヲ流シ、手ヲ合被レ申ハ、會津御拜領幾程モナク、シカモ御在付モ有レ之マジ。殊ニ寒天ノ刻彼此以テ早速如レ斯可レ有二御出勢一トハ夢ニモ不二存寄一候之處ニ、不思儀ノ御働前代未聞ニモ無レ之、廿日ニ余リ增水ヲ給候。ソレサエ今三日ノ粮ナラデハ無二御座一候間、切テ出討死可レ仕ニ相究候處ニ、無二比類一御覺悟ヲ以、存ノ外ノ命ヲ繼申儀、トカウ可二申上一樣無二御座一候。命ノ親トハ加樣ノ事ニ候。此上ナガラ我ハ流罪カ死罪、イカ樣ニ可二仰付一モ不レ存候。若左モナク候ハヾ一世御草履ヲサゲ可レ申ト涙ヲ流被レ申候。氏郷挨拶ニ、今度ノ働全貴所ノ非二忠節一。關白樣貴所當地被レ遣刻、於二會津一兩人御前ヘ被二召出一、御詞ヲ無二不レ成樣ニト夜ヲ日ニ繼テ是マデ參候ハ上樣ヘノ御奉公ニ候。若貴所切腹候ハヾ無二生甲斐一存支ニ候間、二度會津ヘハ皈間敷候。葛西、大崎中ノ一揆楯籠所ヘ押寄々々、精ノ限リ切捨、其上討死セント令二覺悟一候。左有トテモ後世マデ耻辱タルベキニ、無二何支一只今對面、生前ノ大幸不レ過レ之候。正宗ハ逆心ト相見候。定テ一揆ト一ツニ成、寄來支モ有ベシ。何萬騎來ト云𪜈、貴所ト手合シテ一所ニ討死候ト有レ之儀、後日ノ聞エ於二京都一カクレ有マジク候間、大慶此事ト被レ申候。扨正宗ヘ使ヲ立、何トテ其城不二責破一候ヤ。不レ成所候ハヾ一方被二相渡一候ヘ。卽刻可二責破一由度々雖𪜈及二催促一候𪜈、内々一揆ト云合有二依テ手痛責候事モ無レ之、早落去ス云々トノ返事ニテ被レ送二數日一。又次田(須賀)馳入候テ逆心旨申候ヲ、迷惑ニ被レ存、氏郷ヘ種々樣々理リ被レ申候返答ハ、今程貴所別心候テモ支立儀ニテ無レ之候間、不實ニ存候。不レ及二御理一、只關白樣ヘ御忠節肝要ト返支被レ申候ヘ𪜈、終宮澤ヲ不二攻落一シテ引拂、我館ヘ取退キ、名生ノ城ニハ兵粮有間敷候間及二餓死一、獨コロビ有ベキナドト高言ノ由相聞得、氏郷ハ名生ノ近邊在々ニ刈置稻共取重、兵粮丈夫ニ支度候。一揆モ國中平均靜候間、當城ニ越年候テ、上樣御仕置ヲ相(待)ヘソレニ隨ベキト緩々ト居陣候。扨又淺野彈正少弼、奥州、關東、甲斐、信濃仕置仕舞被二罷登一候ツルガ、右之樣子注進之飛脚駿府ニテ追付候。聞ト等ク引返シ、江戸ニテ家一得シカ〳〵ノ支候間、急ギ氏郷領分二本松マデ參陣仕候。早々御出勢尤ト申入急被レ下候。極月中旬ニ到二二本松一著陣候。家一ヨリモ結城三河守ニ榊原式部大輔ヲ相副得二本松マデ被二著下一。正宗此由ヲ聞、叶ガ

タクシテ小性二三人、重實、小太郎相具シテ二本松得馳入。全以無二逆心一趣陳ジ被レ申候。偏彈正殿頼入由被レ申候。彈正殿是ヲ聞レ、尤心得申候。上樣得ノ御取成之儀被二任置一候得。疎畧有マジキヨシ被レ申候得バ、葛西、大崎一揆ノ仕置、上樣ヨリ可レ被二仰出一候間、氏郷歸陣候樣ニ可二申遣一候間、貴所ヨリ爲二人質一重實、盛重兩人被二著越一候ト被レ申候得バ、如何樣ニモ御差圖次第ニ可レ仕トテ、正宗被二退出一候。彈正少弼ヨリ、氏郷得其表兵粮モ有マジク候。御歸陣候得。正宗ヨリ爲二證人一盛重、重實兩人可レ被二差越一候。召具シテ早々歸陣候得ト有レ之處ニ、盛重一人相越、重實不レ參候。氏郷被レ申候ハ、正宗不レ及二證人一皈陣ニ異儀有マジク候得共、首尾相違シテ盛重一人來候ニ歸陣候ハバ、此表ニ在陣シカネ、ソコ〳〵ニテ引取候ナドト後難如何ニ候。首尾相違候間歸陣有マジキトテ、盛重被二追返一。其後盛重、重實兩人被二差越一。極月廿八日ニ名生ノ城得到著ス。明レバ天正十九年正月元日ノ祝心間ニ取行ヒ、名生ノ城ヲ引拂ヒ歸陣有。一揆慕ヒ付奚モ無レ之候。餘寒モ深キ叱分ニ、僕從等草刈アトニサガリ候ハバ、皈陣ノ道ヲ急捨候ナドト褒貶モ有レ之カトテ、如何ニモ緩々ト、七日路ノ所ヲ十一日ニ下。今迄念ヲ入、人足一人モ不レ殘、伊勢守同道有テ二本松マデ皈陣アル。彈正少弼迎ニ出ラレ、氏郷ノ手ヲ取、扨々今度ノ手柄絶二言語一候ト被レ申、感涙ヲ被レ流候。扨其以前京都得ノ聞得ハ、正宗別心有テ大崎ヲ引ハラヒ我館ヘ引籠リ、氏郷、木村ハ大崎ニ在城候ヲ可二責討一支度之由、極月廿日比ニ注進有。上樣被二聞召一大ニ被レ成二御腹立一、氏郷手柄ヲ以テ木村ガ命ヲ助候ヲ氏郷ヲウタセテハ予ガ不覺也。急度可レ被レ成二働座一候間、陣觸仕レ。先石田治部少輔ハ明日ヨリ馳下、於二江戸一家一早々出勢候得ト申渡。其ヨリ岩城、相馬得相越、佐竹右京大夫義宣ヲ引卒ノ、正宗領分伊具日利、柴田口得得可二相働一旨奉二仰ヲ一、正月十日相馬マデ下著候處ニ、氏郷無二異儀一歸陣ニ付テ、治部少モ引返シ上洛也。氏郷ハ會津歸陣候テ、閏正月上旬上洛候。關白樣御感不レ斜也。

一同年南部大膳大夫一門九戸ト申者不レ恐二公儀一、南部ニモ不レ隨、我意ヲ振舞之由被二聞召一、可レ有二御誅伐一トテ、討手ノ大將氏郷ニ被二仰付一。六月下旬歸國候テ二萬八千騎ノ兵モ十三段備軍法ヲ定。七月廿四日會津ヲ打立。不レ移二時日一至二糠夫一發向ス。關白樣ヨリ爲二御横目一淺野彈正少弼、中納言樣ヨリ堀尾帶刀、家一ヨリ井伊兵部少被二相副一。九月一日九戸端城和賀、突井ト云城有。氏郷先陣蒲生源左衛門、蒲生忠右衛門ニ彼二申付一。行ガカリニ和賀城責落ス。和賀ノ城ヨリ上方道三里ホドノアナタ九戸ノ方ニ突井ノ城有。突井ノ者落、九戸得一ツニナル事モ可レ有ト被レ存。突井ト九戸ノ間得夜中ニ關右兵衛、五手與、門屋助右衛門、寺村半左衛門、森氏部丞、梅原彌左衛門、新國下總ナンド九戸ト突井ノ間得越、人數ヲカクシ相待、先手ノ蒲生源左衛門、蒲生忠右衛門、蒲生四郎兵衛、町野新三郎相加リ、又行掛ニ突井ヲ責ル處ニ、城中ノ兵髮ヲ先途ト雖二防戰一不レ屑。源左衛門内ニテ物頭ヲ仕ル石黑喜助、坂九助ト云者、一番ニ乘込討死ス。忠右衛門ガ内谷崎三十郎モ眞先掛テ鑓疵ヲ被ル。其内岡部内記與ノ者、氏郷下知ニテ遣ス。松尾小才次、山田十太夫ナド掛入高名ス。四郎兵衛、新三郎、源左衛門、忠右衛門四人透間モナク下知ノ則刻ニ乘破ル。敵崩レ落、九戸得ト心ザシ落シ所ヲ、右兵衛、五手與指向下知ノ、一人モ不レ殘切捨ル。又突井ノ近邊根曾利ト云城ヨリ三百騎計、突井得ト心指カケキタル所得、中務少輔、蒲生主計、蒲生喜内ナド是ヲ見テ、行掛リニ馬ヲ入懸破散々ニ相戰、追付追廻シ討取、其マ、九戸居城得被二押懸一。櫛引ト云者モ己ガ居城ヲ引拂ヒ、九戸上所ニ楯籠ル。如レ斯城々責落サル。堀尾帶刀、井伊兵部少輔、氏郷得淺野彈正ヲ以被レ申候ハ、城共御手間不レ入、則時ニ被二責落一候。兩人是得罷越御用不レ立候儀、上樣思召候所、外聞如何ニ候。九戸ノ責口一方被レ渡可レ給ト被レ申ハ、定テ九戸モ行ガカリニ可レ被二責ト被レ存申ケルトゾ。然所ニ九戸ノ繪圖ヲ以テ責口ヲ被レ分、兩人ノ衆得足ガカリ能方ヲ相渡シ、其日ハ人馬ヲ休メントテ、九戸ヨリ上方道二里程ヒカエ人數ヲ被レ立。兩人衆ハ行掛リニ可レ責ト被レ存、近々押寄人數被レ立ニヨツテ、城中ヨリ鐵炮シゲク打カケ申ニ付テ、人數立カネラル。ヤウ〳〵夜ニ入人數被二引取一。定テ今日ハ人馬ヲ休メ、明朝可レ被二責一、油斷仕ナト被レ申處ニ、氏郷ハ其日竹タバヲ用意シ、夜中ニ仕寄竹タバヲ被レ付。故ニ手負一人モ無レ之。兩人衆又寄ラル、ニ竹タバナケレバ手負數多有レ之。九戸究竟ノ地ニテ容易ク責ラルベキ樣ナキヲ、氏郷分別シテ竹タバヲ近々ト付テ、鐵炮ヲ數千挺ヲ以打スクメ候處ニ、城中及二難儀一、コラエカネ降參仕ルニ依テ身命ヲ助、京都得可レ被レ上トテ三ノ丸得出シ本城ヲ請取。九戸、櫛引ニハ警固ノ武士ヲ付置ル。家中ノ者ハ三ノ丸長屋得押入、燒殺ニ逃ントスル者ヲバ、弓鐵炮ニテ打殺ス。目モアテラレヌ有樣ナリ。

一其年正宗本領ヲ被二召置一。葛西大崎得クリ被レ遣ニ付テ、爲二御仕置一中納言樣三廻マデ御下向。九戸櫛引兩人共ニ於二三廻一生害サセラレ畢。家一ハ岩手澤マデ被二下城一、御普請被二仰付一正宗居城トス。扨糠夫中ヲ南部ニ被レ下。御仕置相濟、中納言樣平泉被レ成二御見物一上洛也。正宗本領ノ内長井郡上下、奥州田村、塩松、伊達、信夫、苅田、米澤、合七郡、氏郷得高三十萬石爲二御加增一被レ下。都合百萬石、正宗本知ノ内ヲ氏郷拜領。遺恨ニ被レ存候テ伊達、信夫、苅田、田村、塩松、所々ノ一揆可レ起旨興行候テ、既ニ可二蜂起一剋、正宗小性山戸田八兵衛、手越内膳ト云者、正宗深重恨ノ子細在レ之テ氏郷得走入、此由カクト告知ラス。就レ夫糺明候處

ニ兩人申通歴然ニ付テ、可レ企ニ一揆一トエミテナス奴原於ニ所々一踏殺ス。依レ之氏郷領分靜謐ス。此節正宗ヲ不ニ仰付一事イカヾト、下々マデモ存候ツル。然ニ朝鮮御征伐ノ剋、九州名護屋御陣中ニテ、正宗儀ヲ施藥院御取成餘リニ結搆ニ被ニ申過一、太閤樣御耳ニ當リ、正宗妻先年企ニ逆意一、氏郷ヲ可レ討ト籌策ヲ廻ス事雖レ及ニ度々一、氏郷大剛之者故、手ハグレ仕不レ得レ討候キ。其節正宗切腹可レ被ニ仰付一候得共、島津ノ者、安藝ノ毛利、景勝、佐竹ヲ始、其外遠國ノ侍共氣可レ仕ト就レ被ニ思召一、被レ成ニ御用捨一被ニ指置一候ニ、何ゾ正宗ニ賴レ、唯今ノ申ヤウ沙汰ノカギリ不屆儀ニ候。アレ引立ヨト（施股歟）・藥院ヲ被レ爲ニ追立一候。此時前廉被ニ思召一、御内意被レ仰頭（本ノマヽ）御思慮ノ深キ御事ト奉レ感也。

一氏郷武篇物語被レ致ニ、先年尾張、内府家一一所ニ成テ尾州小牧表得出馬ノ刻、大閤樣濃州大柿ノ城ニ御在陣。關白秀次樣尾州犬山御働ノ刻、先手敗軍。秀次公敗北被レ成由、大閤樣被レ聞御腹立有テ、其マヽ、御出馬被レ爲レ成。尤筑前守殿主ノカタキヲ討被レ申上ハ、自余ニ可ニ申合一ニ非ズトテ秀吉公得同心、其後柴田修理勝家ト秀吉公ト合戰ノ刻ハ、伊賀、伊勢ノ敵無ニ心許一トテ氏郷ヲ兩國ノ押得ニ賴被レ置、江州日野ノ居城ニ被レ居。其節伊賀ヨリ八度マデ甲賀得伊賀守打出、氏郷其度毎ニカケ合戰追返ス。一度モ自身高名ナキ事ハ無レ之。其刻伊賀ヲ可レ被レ責ト被レ存ツレモ、伊勢ヲ無ニ心許一被レ思、敵ノ謀叉ニ伊賀守戰度毎ニ崩ルカト、ケツク不審ニ思ヒ指置レ、其後勝家切腹、別ノ儀モ無レ之ニ付テ、伊賀守ヒヂ山ヲ立出ル叉モナク楯籠間、是ヲ可レ責ト氏郷被レ申、家老共ニ相談ノ處ニ、面々申樣ハ、端城六ツ有レ之。先端城ヲ責落シ、サテヒヂ山ヲ可レ被レ責カト申處ニ、氏郷被レ申ハ、イヤ〳〵端城（端慰）責ハ一ツ二ツ責落ナバ、殘ル城ドモ皆ヒヂ山得逃ゲ籠ベシ。ヒヂ山ヲ責落バ端城ニニゲノタベシ（タ慰）。只ヒヂ山ヲ責ヨトテ、日野ヨリ打立、ヒヂ山ニ取カヽリ被レ責。城中ニモ命モ不レ惜防戰。氏郷先手ノ者共、マクリ被レ立逃カヽル。氏郷貝吹ナラシ鼓ヲ打テ、眞先ニ進ミ敵ヲ追返シ、其マヽツケ入ニシテ城中ニ火ヲカケ燒アグル。案ノゴトク六ツノ端城ハ不レ戰メ退散ス。自身ノ高名日ノ内ニ三ツ有レ之。

一其後筑前守秀吉公感ジ、高名神妙也トテ同名ニナシ、號ニ羽柴飛驒守ト一。然メ秀ノ字憚有トテ秀郷ノ郷ヲ取テ號ニ氏郷ト一、任ニ參議從四位一。其後天下治テ於ニ伏見一任ニ宰相一。

右蒲生氏郷記。以ニ一本一校合。

合戰部二十二

伊達日記上成實公御作仙道御弓矢之卷

一輝宗公御代ハ佐竹、會津、岩城、岩瀨、石川、何レモ御骨肉ノ御間ニテ御入魂ニ候。右之御大名衆、數年田村ヘ御弓矢被レ成。清顯公御手結ニ候。政宗公御舅ニ御座候ヘ共、輝宗公御代之間不レ及ニ是非一御座被レ成候處ニ、天正十二年十月、政宗公十八歳ニテ御代ヲ御請取候ニ付テ、方々ヨリ御祝儀ノ御使參候。四本松ノ主大内備前被レ參候處ニ、大内事ハ代々伊達ヲ賴入由被レ及ニ聞食一。近年無ニ左樣一候間、此儘ニ米澤ニ相詰可レ申候由被ニ仰出一候。備前被ニ申上一候ハヽ、忝御意ニ候。我等親代ヨリ御奉公仕候エドモ、御洞御弓矢ニ付テ田村ヲ賴入候處ニ、少ノ儀ヲ以清顯背ニ御意一候。其後會津佐竹ヲ賴入、御介抱ヲ以身上ヲ相續候。尤唯今ヨリ米澤ニ相詰御奉公可レ仕候條、御屋敷可レ被レ下候。妻子ヲ引越申ベキ由申上、米澤ニ越年仕候。翌年正月大内申上候ハヽ、雪深普請等モ不ニ罷成一候間歸宅仕、妻子ヲ召連可レ致ニ參上一候。又數年佐竹、會津、御恩賞ヲ相請候御禮ヲモ申上度由

檢校保己一集

申ニ付、御イトマ被レ下候處ニ、雪消候テモ不ニ罷上一候間、可ニ罷上一由指南、遠藤山城所ヨリ度々被ニ申越一候ヘドモ、罷上間敷由申拂候。大内御退治候ハヾ會津、岩城、石川ヘ御敵被レ成候事、輝宗公御笑止ニ被ニ思召一。宮川一毛齋、五十嵐芦舟齋、兩使ヲ以色々被レ仰候ヘドモ、滅亡覺悟ノ前ニ候由被レ申參不レ申候テ、重テ片倉意休、原田休雪、兩使ヲ以テ、政宗モ田村ヘ御首尾ヲ以强被レ仰候間、機遣尤ニ候、人質計モ上可レ申由被ニ仰遣一候ヘドモ、堅々罷上間敷由申候。其上大内長門ト申者備前好身候。節々米澤ヘ使ニ參、御父子共ニ御存知之者ニ候。後加齋ト申候。此者休雪、意休ニ會申、瓜ノツルニハ瓜ガナリ、夕顔ノツルニハ夕顔ガナリ申候間、深事ハ有間敷候。政宗大内ヲ御退治ハ成間敷由申候。晴宗公、輝宗公二代御父子御弓矢ニ付テ、御洞別々ニ成、御弓矢被レ成ニク、候。ヨハキ樣ニ世上ニテ申候故左樣ニ申候。兩使腹立、其方米澤ヘ被ニ召上一候カ御退治被レ成候歟。末ニ見ヘ可レ申ト申候ヘモ、兎角不レ被レ申罷歸。其樣子言上候間、御父子共ニ口惜被ニ思召一候。政宗公、原田

左馬助、片倉小十郎ヲ御前ヘ被ニ召出一、會津ヨリ大内備前御赦免候ハヾ、米澤ヘ可レ被レ遣候。御介抱被レ成間敷由、使ヲ以被ニ仰越一候ヘドモ、會津底意ヲ以大内申候由被ニ聞召一候。何トテ大内一人ニテ敵對可レ申候哉。會津ヨリノ御表裏御無念ニ候間、會津ヘ御事切被レ成度候。乍レ去何方ヨリモ大難所ニ候間、會津ノ内ニ御奉公仕者一兩人モ候ハヾ、御弓矢可レ被レ成由御意ニ候。原田左馬助被ニ申上一候ハ、會津ヨリ一段御念比ナル御使者ニテ、大内備前申通不審ニ候處ニ、會津御底意ヲ以申候哉。左候ハヾ御手切可レ然候。我等與力ニ平田太郎右衞門ト申者、會津牢人ニ候間、彼者ヲ指越拵見可レ申由被レ申上一ニ、政宗公左樣ノ才覺モ可レ仕モノニ候哉ト御諚ニ候。左馬助底意ノ儀ハ不レ存候。先才覺ハヨク御座候。其上御奉公ノ儀ニ候間、如在仕間敷ト被ニ申上一候。左候ハヾ遣可レ申由被ニ仰付一被ニ指越一候處ニ、會津北方ニ柴野彈正ト申モノ御一味仕候。其外二三人モ同心衆候間、御出馬被レ成候ハヾ手切可レ仕由申ニ付テ、五月二日ニ左馬助ヲ猿倉越ト申難所ヲ越被レ遣候。彈正ハ城ハ持不レ申、少抱ノ能屋敷ニ居申候テ手替仕候。火ノ手ヲアゲ申候間、會津ヘ方々ヨリ馳集候ヘドモ、何方モ手替候歟ト氣ヲ付取ミダシ候所ヘ、平田太郎右衞門會津ヘ欠入。替衆ハ彈正壹人ニテ原田左馬助無人數ニテ一頭參候由申ニ付、會津衆一戰ヲ仕懸候間、左馬助敗軍仕リ、與力家中數輩討死、彈正妻子共ニ

召連漸引除候。三日ニ政宗公ハ檜原ヘ御出馬被レ成、檜原ハ御手ニ入候。御隱蜜(密)之御手切衆故、長井之人數計被ニ召連一候。惣人數ハ未レ參候間、二日ニ御陣觸被レ成惣人數參。大鹽ノ城ヘ八日ニ御働候。大難處ニテ御備ヲ可レ被レ立地形モ無レ之、山路一筋ニテ、後陣ノ衆ハ檜原未ニ引離一躰ニ候間、一働被レ成。少身ノ衆ハ被ニ相返一、檜原ニ御在馬被レ成候。二木松(本)境八町目ニ私親實元隱居申サレ候。二本松ノ義繼ヨリ節々使ヲ預御念比候。會津、佐竹ヘ御一味候ヘ乍、元來二本松、四本松ハ何方ヘモ弓矢强方ヘタノミ身ヲ被レ持候。此度モ伊達募候ハヾ、實元ヲタノミ伊達ヘ御奉公可ニ仕申一由、義繼思召御念頃ニ候故境目シヅカニ候。我等ハ八日ニ大森ヲ立九日ニ檜原御陣場ヘ參候ヘドモ、二本松境如何候哉ト御タヅネ候。先以シヅカニ御座候。義繼モ大事ニ思召候(音歟)ノ哉。不ニ打絶一實元處ヘ遊佐下總ト申者ヲ、實元久敷知意ノ由ニテ使ニ預、又飛脚モ被レ遣候。彼境ハ御意次第ニ手切可レ仕由申上候ヘバ、御前之人ヲ相除カレ、會津ヘノ手切ノ段、左馬助合戰ニ負候樣子被ニ仰聞一。會津一味ノ衆無レ之、何方モ大難所ニ候間、可レ被レ成樣ナク候テ御人數相返候。定メテ昨日人數ニ會申ベキ由御意ニ候間、我等申上候ハ、猪苗代彈正ヲコシラヘ見可レ申候哉ト由上候ヘバ、手筋モ候哉ト御意ニ候。羽田右馬助ト申我等家中、猪苗代家老石部下總ト申者ニ筋御座候而、別而念比ニ候。此度右馬助召連

參候由申上候ヘバ、則右馬助御前ニ召出サレ、猪苗代ニ其身好身ノモノノ由被ニ聞召一候間、狀ヲツカヒ可レ申由仰付ラレ御前ニテ狀ヲ書申候。片倉小十郎、七宮伯老(者)、我等狀ヲモ差添可申由御意候間、イヅレモ狀ヲ書申候。此狀ドモ猪苗代ヘ三十里候間、從ニ此地一可レ被レ遣候。返事ハ大森ヘ可レ被ニ指越一候間、早々可レ被ニ罷歸一由御意候。今日ハ人馬草伏日モツマリ申候間、明日罷歸度由申上候ヘバ、二本松境無ニ御心許一被ニ思召一候間、一剋モイソギ可ニ罷歸一候。今夜之宿ハ總木民部少ニ被ニ仰付一。早先ニ遣ハサレ候間早々可ニ罷歸一由御意ニ候間、檜原ヲ日歸ニ仕罷歸候。七宮伯者ハ久敷會津牢人ニテ御相伴ヲ仕ル衆ニ候。會津衆イヅレモ被レ存候間狀ヲ被ニ差添一候。四五日過候テ嶺式部少、七宮伯者、大森ヘ被ニ差越一候。猪苗代ヨリノ返狀ドモ御覽(覽歟)被レ成候ヘバ合點ニ候。御大慶被レ成候ソノ口ヨリイヨ〳〵可ニ申合一候。爲ニ兩人衆一被レ遣由御意ニ候人モ不レ存處ニ宿ヲ申付指置。本猪苗代ヨリ罷出候三藏軒ト申出家ヲタヨリニ土湯通ヲ猪苗代ヘ越申候テ、政宗公ヘ御一味アルベキノ由大慶申候。ノヅミノ儀モ候ハヾ具ニ可レ承候。政宗判形ヲト、ノヘ可レ進候由申遣候ヘバ、彈正被ニ申越一候ハ、我等御奉公ニテ會津御手ニ入候ハヾ、北方半分知行可レ被レ下(下歟)ト事。

一我等以後ニ御奉公被レ申衆候共、於ニ會津一如ニ御仕置一之座上ニ被ニ差置一可レ被レ下候。御普代衆ニハ搆無レ之事。

一御弓矢如ニ思召之一無レ之、猪苗代ヲ引除候ハヾ、伊達之内三百貫之堪忍分可レ被レ下事。

右三ケ條之外望モ無レ之由被ニ申越一候ニ付、書付ヲ以檜原ヘ申上候ヘバ、政宗公御覽(覽歟)被レ成、書付之通少モ御相違アルマジク候。彈正書出ハ御手前ニ被レ置候由印判ヲ被レ遊ニ相除一候時分之知行ハ早々刈田、芝田ニテ三百貫タル所、御書付被レ成御判ニ被ニ差添一被ニ差越一候。式部伯者ハ御書付我等ニワタシ檜原ヘ被ニ罷歸一候。三藏軒ニ御判ヲ爲持、猪苗代ヘツカハシ候處ニ、二三日過罷歸、御判形相渡申候。乍レ去子息盛胤是非會津ヘ御奉公可レ仕由被レ申間、是ヲ如何樣ニモ催促申候テ、手切可レ仕由被ニ申越一候。一兩日過又三藏軒ヲ越、早々事切被レ申候樣ニト申候ヘバ、盛胤合點不レ被レ申。家中二ツニワカリ六ヅカシク成候由申候テ、手切不ニ罷成一候付テ、會津御弓矢不ニ罷成一、檜原ニ新地ヲ御ツキ、後藤孫兵衞ヲ被ニ差置一候テ御入馬ナサレ候。

一同年七月初ニ米澤ヘ我等使ヲ上申候テ、猪苗代之義相違仕迷惑ニ存候。會津ニ御敵ハ無ニ御座一候間、大内備前ヲ御退治被レ成可レ然候。御尤ニ思召候ハヾ、大内家中ニ一兩人モ御奉公仕候樣ニ可ニ申合一由申上候處ニ、會津ヘ御敵ハナク御入馬候間、四本松ヘ御出馬ト被ニ思召一候。御奉公ノ者候ヘバ、猶以可レ然候間、早々コシラヘ可レ申由御意ニ候間、

我等家中本四本松ヨリ罷出候者、大内藏人、石井源四郎ヲ申付、カリ松田ノ城主青木修理所ヘ申遣候ヘバ、合點申候間、知行ノゾミニ御判形申請越申候。備前田村境ノ城主ヨリハ久敷人質取置申サレ候。今度ハ彌四本松中ノ城主ト人質トリ被レ申候ニ付、青木修理モ新八郎ト申十六ニ成候弟ニ、此比ノ青木掃部、其比ハ五ツニ成子ヲ指添、小濱ヘ人質被ニ相渡一申候。修理存候ハ、米澤ヘ御奉公申候バ、彼人質共相捨可レ申儀難儀ニ候間證人替可レ申ト存、備前家老ノ子中澤九郎四郎、大内新八郎、大河内九郎吉三人ヘ狀ヲ越。唯今追鳥時分ニテ候間罷越候ヘト申ニ付、何モ若者共ニテ以後ノ分別モナク、八月五日之晩苅松田ヘ罷越、六日之朝追鳥二十四五取料理仕、夜半時分迄大酒仕候。修理イヅレモ御酒過候間、過モナキ樣ニ刀脇指ヲ被レ渡候ヘトテ無理ニ取長持ヘ入置候。三人共ニ酒ニ醉伏候テ夜ヲ明候。修理ハ下戸、其上底意候間、酒ニモ不レ醉、クツキヤウノ者十人計具足ヲキセ、三人伏申候處ヘ押懸起候テ、備前殿ニウラミ候間、米澤ヘ御奉公申候。如ニ御存知之一弟新八郎子共二人小濱ヘ人質ニ置申候間、證人替ニ申度候間、命ノ儀ハ氣遣有間敷由申理候。三人ノ者共、刀脇指ハ被レ取、何共可レ仕樣無レ之候。ホダシヲ被レ討カリ松田ニ居申候。其日小濱ニ向火ノ手ヲ上事切仕候而我等所ヘ注進申候間、則米澤ヘ飛脚ヲ以申上候。御出馬迄遲由御意被レ成。小築川ティハン、白石若狭、原田左馬助、濱田伊豆被レ遣候條、我モ四人ノ衆同心ニテ、カリ松田近所舘野ニ在陣申サセ、我等ハ立子山ニ在陣仕候。十二日、政宗公福島ヘ御出馬被レ成、青木修理ニ我等使ヲ添福島ヘ被レ參御目見エ仕候處ニ、今度ノ御奉公御大慶ノ由御意被レ成御腰物被レ下候。四本松ヲ繪圖ニ仕指上可レ申由ニ候間、繪書ヲ被レ遣候間、大形仕差上ゲ申候ヘバ御覽被レ成、カリ松田近所ヨリ御働可レ被レ成候由被ニ思召一候處ニ田村ヨリ遠候。此度ハ清顯公ヨリ御同陣可レ被レ成候由被ニ仰合一候間、小手森ヘ御働可レ被レ成候由御意候テ川俣ヘ御馬ヲ被レ移、清顯公トワライ平ト申所ニテ御對面被レ成候。廿三日ニハ大雨ニテ相延、廿四日ニ小手森ヘ御働候處ニ、會津仙道二本松ヲ助勢、小手森近所迄助來。小手森ヘハ大内自身籠城中堅固ニ見エ候。近々ト御働候ヘドモ内ヨリ一人モ不レ出。城中多人數ニ見エ候間、此方ヨリ可レ被ニ取懸一樣モナク被ニ打上一候所ニ、後陣ヘ城中ヨリ仕懸候間、惣勢被ニ打返一合戰御座候。二本松衆先手ニテ會津勢モ助合候。田村ハ東ヨリ被ニ押寄一候處ニ、大山隔合戰ニ會不レ申候。然處ニ政宗公御旗本御不斷鐵炮五百挺程被ニ召連一、原ノ山添ヨリ押切候樣ニ横合ニ御懸候間、城中ヨリ出候人數敗北候條、一ヤライヘ押入頭五十餘打取候。虎口ヘ不レ入、南ヘ逃候者追懸候ヘドモ、二本松衆合戰候處ニテ、長追不レ可レ然候由ニテ被ニ打上一候。大内其夜ハ小濱ヘ歸被レ申候。味方モ五里程引上、御野陣被レ成候。夜懸モ無レ之。廿五日ニ御働候ヘドモ城中ヨリ一人モ不レ出。會津衆モナカクキト申處ニ備ヲ立、何事モナク被ニ打上一、御野陣少御寄被レ成候。左候ヘドモ田村衆ト成合候事不レ成候。廿六日又御働候ヘドモ内ヨリ出不レ申候。小十郎鐵炮ヲ御懸可レ然由申上候ニ付、七八百挺程内ノヤライヘ御懸被レ成候ヘドモ、城中堅固ニ候間被ニ打上一、又御野陣少御寄候迄ニ候。我等申上候ハ、明日ハ南ノ竹屋敷ヘ陣ノ通路ヲ切可レ申候間、惣躰ヲ被ニ相詰一可レ然由申上候ヘバ、左候ハバ助勢打下サマタゲベク候。城中ヨリモ可レ出候間、兩口ノ合戰如何可レ在由御意ニ候。又申上候者、竹屋敷ヘ陣ヲウツシ候ハバ、田村衆ト成合申候間、城中ヨリ打出申候敵ヲバ田村衆ト我等ニ可レ被レ任候。助勢ヲバ惣人數ヲ以御合戰候ハバ、兩口ニ成候ヒ御氣遣在間敷候。地形難所候間、惣勢モ合戰容易ハ被レ存間敷候。一昨日モ城中ヘ被ニ押込一候ニ、二本松衆其氣遣カ引上被レ申由申候ヘバ、原田休雪被レ申候ハ、御戰大事ニ候間、日數ヲ以後者左樣ニ可レ然由被レ申候。半分我等ニ同意、半分休雪ニ同意候テ其日落居不レ申被ニ打上一候。

一廿七日、昨日ハマチ〳〵ニテ落居不レ申候ヘヒ、我等存分悪ハ有レ之間敷ト存、御意ヲモ不レ請、未明竹屋敷ヘ陣ヲ移申候間、伊達上野介我等ニ引續陣ヲ移被レ申候ニ付、惣陣ヲ可ニ相詰一由被ニ仰付一、惣人數ハ備ヲ立、夫兵者野陣ヲ懸候處ニ内ヨリ一人罷出、我等陣所ヘ小旗ヲ振招候間、人ヲ越タヅネ候ヘドモ、石川勘解由ト申者ニテ候。我等家中遠藤下野ニ會申度ト申候間、下野ニ爲レ會申候ヘバ、勘解由申候ハ、此城ニ小野主水、荒井半内ヲ始備前近奉公仕候者共數多籠申候。通路ヲ被レ切落城程有間敷候間、城ヲワタシ小濱ヘ罷除度候。此段タノミ候由申候ニ付、御前ヘ使ヲ以テ申上候ヘバ、御弓矢ノハカ參候樣ニト思召候間可レ被ニ相出一候。乍レ去小濱ヘハ被レ遣間敷候。伊達ノ内ヘ可ニ罷除一由御意候間、石川勘解由ヲヨビ出シ御意之通申候ヘバ、伊達ヘ罷除候事ハ命乞ニ候間、備前切腹モ程有間敷候間、腹ノ供ヲ仕度候間、小濱ヘ被レ遣被レ下候樣ニト申ニ付、又其通申上候ヘバ、是非小濱ヘ被レ遣間敷由御意ニ候間、遠藤下野門二重ノ内迄罷越申理候。勘解由本丸ヘ參御意之通申理候處ニ、御前ヨリ我等ニ御使被レ下、城内之者共、コワキ事ヲ不レ被レ成候間、申度マ、ニ申候。御攻可レ被レ成候。本丸迄ハ落不レ申候共、城中ノ者共伊達ヘ引除可レ申候。早々惣手ヘ被ニ仰付一候由御意ニ候間、不レ及是非一城ヘ取付候條、下野モ漸内ヨリ罷出候。我等手ヨリ火付、方々ヘ吹付候處ニ、何方ヨリモ火ヲ付押込候間、内ノ者共役所ヲ離、未刻ヨリ御責、申ノ刻ニ落城申候。ナデ切ト被ニ仰付一男女牛馬迄切捨、日暮候テ被ニ引上一候。其夜ハ新城木コリ山ノ敵城共ニ自燒仕引除候。廿八日未明ニ木コリ山ヘ可ニ相渡一候由御觸御座

候。各陣場取ニ被レ參候間、我等モ家中四五騎先ヘ越候處ニ、馬上一騎築飯之方ヨリ參候テ招候間、我等者乘向タヅネ候ヘバ、服部源内ト申者、我等本扶持仕候。四本松ヘ本居仕候者築飯モ引除候間、早々追懸可レ申由申ニ付而、押懸候ヘ尼、早引途カラ城ヘ乘入、其由申上候ヘバ、則築飯ヘ御馬ヲ被レ移、御休息被レ成候。

一築飯ニ御在馬ノ内、青木修理抱置候三人ノ者儀小濱ヘ内通ニ付、大内モ人質返シ候事無念ニ被レ存候ヘ尼、家老ノ者共ノ子ヲ相捨候事モ不レ成候間、小瀨川ト申所ヘ雙方罷出、御横目申請證人替仕候。

一二本松境ヘハ今ニ御手切モ無二御座一候。實元分別ニハ、會津仙道ヨリ四本松ヘ助候諸勢、田村ハ敵ニテ二本松領中打通申候。義繼ヘ會津以下ノ衆疑心被レ申候樣ニト被レ存境ヲシヅメ、如二跡々一二本松ヨリモ入魂ノ躰候。其存分政宗公ヘハ被二申上一候ヘドモ、若輩故爲レ聞不レ被レ申候。此境事切候ハヾ彌以强可レ成候間、申上事切無用之由、我等ニ兩度迄誓紙ヲ爲レ致、二本松境無事ニ被レ仕候。

一清顯公ヨリ政宗公ヘ被二仰遣一候。小濱ハ多人數ニ候。其上方々ヨリ引除候者共、小濱ヘ集候間御働被レ成候共、思召ノ儘ニ在間敷間、田村ヘ御廻リ、備前抱ノ小城共ヲ御取被レ成可レ然由御理ニ付而、九月廿二日ニ築飯ヲ御立、田村之抱ノ地黑カコト申城ヘ御馬被レ移、廿三日ハ御休息被レ成候。小濱ニ替衆候而人數引籠可レ申由、小十郎ヲ以申上ニ付テ、白石若狹、櫻田右兵衞、片倉小十郎、我等四人ハ築飯ニ被二相殘一候。

一廿四日ヲウハノ内ト申城ヘ御働候處ニ、彼地二本松衆助入候。少ノ内ヨリ人數ヲ出シ合戰候ヘドモ、强モ不二罷成一候。物別仕、黑カコヘ被二打上一候。

一築飯ニ被二殘置一候四人ノ衆モ、小瀨川ト申處ヘ働候處ニ、政宗公御働遲候處ニ、小十郎漸二百計ノ手前ノ者ニテ小濱近所迄參候。小濱ノ人數ニ被二押立一、小瀨川迄五里計迄懸リ候。四手ノ衆川ヲ越合戰御座候。小濱衆五六百騎參候ヘ尼、政宗公御働ヲ氣遣候哉、早々引上申候。味方ハ無勢ニ候間、押添申事モ不二罷成一、双方ヘ頭十計ヅツ取申候。

一廿五日、岩津野ヘ御出馬被レ成地形ヲ御覽被レ成。近陣カ、御責候カ、彼城ヲ御取候ヘ尼、兎角敵二本松ヘ通路不自由ニ罷成候間、明日御陣ヲ可レ被二相移一由御評定。先黑カコヘ御入馬被レ成候。

一小濱ニテ助勢共、岩津野ヲ被レ取候者、引除候事成間敷由相談被レ申。會津衆備前ヘ被レ申候ハ、今日政宗公岩津野ヲ召廻シ御覽候ハ、彼城ヲ御取可レ在由被二思召一候ト見エ申候。彼城ヲ被レ取申候ハヾ、何モ引除候事成間敷候間、今夜引除可レ然候。會津ニテ松本圖書跡明申候間、彼地ヲ被レ下、會津ノ宿老ニ被レ成候樣ニ可二申上一候間、被二罷除一尤之由異見

被レ申候。中目式部大輔、平田尾張ヲ以頻ニ催促被レ申候間、大内備前モ通路ヲ大事ニ被レ存、抱之城ノ小濱迄無レ殘其夜二本松ヘ引除候間、四本松ノ分ハ御手ニ入申候。

一廿六日、政宗公小濱之城ヘ御馬被レ移候處ニ、二本松義繼ヨリ實元所ヘ代々伊達ヲ賴入、身上相立候ヘ尼、會津、佐竹、岩城ヨリ田村ヘ近年御弓矢ニ候。我等モ清顯公ヘ御恨候テ、會津佐竹ヘ一味仕候。乍レ去銘々御首尾ヲ存、輝宗公相馬ヘ御弓矢之時分、兩度御陣ヘ參御奉公仕候間、身上無二別儀一被二相立一被レ下候樣ニト被二仰遣一候付、實元ヨリ右之通輝宗公ヘ被二申上一候。政宗公被レ仰候ハ、相馬御弓矢ニ御一味モ御覺エ候。乍レ去今度大内ト一味ニテ小手森ニテモ先手被レ致、ヲウハノ内ヘモ勢ヲ籠候テ及二合戰一候。在方大内同前ノ敵ニ候間、可レ被レ仕二御勝負一由被二仰招一候。雖レ然種々御佗言ニ付、左候ハヾ南ハ杉田川切、北ハユイ川切ニ被二明渡一、中五ケ村ニテ可レ被二相立一候。其上子息ヲ人質ニ米澤ヘ可レ被レ遣由被二仰渡一候。義繼重テ被レ仰候ハ、南成共北成トモ一方被二召上一被レ下候樣ニト御佗言候ヘドモ不二罷成一候ニ付、十月六日ニ輝宗公御陣所宮森ヘ義繼不レ圖御陣參候。

一六日之晚、輝宗公、政宗公之御陣屋ヘ御出、御臺所ヘ家老衆被二召寄一。義繼御佗言ノ樣子御相談被レ成候。我等若輩ニ御座候ヘ尼、此使我等親仕候ニ付、義繼ヘノ御使可レ仕由、輝宗公被二仰付一候。ケ樣ノ大事ノ御使如何ノ由色々申上候ヘ共、頻ニ御意ニ候間、不レ及二是非一任二御意一候。義繼我等ヲ以如二跡々一、南成共北成トモ一方被二指添一被レ下候樣ニト被レ仰候ヘ尼、不二罷成一候ニ付、重テ家中共ヲ本ノ知行高ニテ被二召仕一可レ被レ下候。唯今迄奉公仕候者ヲ乞食爲レ被レ仕候事、不便之由被二仰上一候ヘドモ、ソレモ不二罷成一候間、此元ヘ伺公申候上ハ、切腹ヲ仕候ト覺悟仕候。何分ニモ御意次第之由被二仰上一相濟候。義繼身上相濟忝候間、御目見エ仕度ト被レ仰候間、其通申上候處ニ、尤御會可レ被レ成候由御意ニテ、義繼我等陣場ヘ七日ノ八ツ時分御出。彼是時刻移蠟燭立候而會御申被レ成、宮森ヘ御歸候。八日早天ニ從二義繼一我等所ヘ御使預、宮森ヘ可レ參候。輝宗公御カセギヲ以相濟候。御禮ヲモ申上度候。又見舞モ申度所存數多候間、相濟罷歸、子共ヲ米澤ヘ爲レ登候支度モ申度由被レ仰候間、輝宗公御陣所ヘ參候。伊達上野其外家老數多宮森ヘ被レ參、二本松迄落居、目出度由輝宗公ヘ被二申上一候。義繼我等ヘ被レ仰候ハ、輝宗公ヘ參忝義申度由ニ候間、其通申上候處ニ、早々御出候樣ニト御意ニ候付、義繼輝宗公御陣所ヘ御出候。供ノ衆ニ高林内膳、鹿子田和泉、大槻中務三人御座敷ヘ被二召出一候。和泉參候時、義繼ヘ耳付ニ何ヲカ申候テ、座敷ニナヲリ候。輝宗公御下ニ上野モ我等モ居申候。何モ御雜談モナク御立候。御門送ニ御立候。内ニテ御禮被レ成

候。其左右ニハ御内衆居組候(ユ歟)エヘ、捕申事モ不レ成候哉。表ノ庭迄御門迄ニ御出候ニ、兩方竹カラ垣ニテ、御脇ヲ可レ通モ無レ之ツマリ候所ニテ、御禮被レ成候。義繼手ヲ地ニ突、今度色々御馳走過分ニ候處ニ、我等ヲ生害可レ被レ成由承候由ニテ、輝宗公ノ御胸ノ召物ヲ左ノ手ニテトラヘ、右ニテ脇指御拔候。兼テ申合候哉、義繼供ノ衆近居候者共、七八人御後ニ廻リ、上野モ我等モ御先ヘハ不レ通、御後ニ居申候間ヲ押隔引立候間可レ仕樣モ無レ之、門ヲ立候ヘト呼候ヘ共、立會不レ申候間、御跡ヲシタヒ參候。小濱ヨリ出候衆ハ、武具ニ早打仕候。宮森ヨリ出候衆ハ武具モ不ニ著合一、多分スハダニテアキレタル躰ニテ取卷申、高田ト申所迄十里餘參候。政宗公ハ御鷹野ヘ御出被レ成被ニ聞召一御歸候。二本松衆半澤源内月館持候。遊佐孫九郎弓ヲ持候。其外拔刀ニテ輝宗公ヲ取籠參候。然所ニ取卷參候味方ノ内ヨリ鐵炮一ツ打候ニ付、誰下知トモナク惣勢懸リ、二本松衆五拾人餘一人モ不レ殘打殺候。輝宗公モ御生害被レ成、政宗公モ其夜ハ高田ヘ御出馬被レ成候。家老衆先小濱ヘ御引返、吉日ヲ以御責可レ然由被ニ仰上一ニ付、九日未明ニ小濱ヘ御歸被レ成。輝宗公御死骸其夜小濱ヘ御供仕、九日ニ長井資福寺ヘ奉レ送候。御葬禮ノ砌、遠藤山城内馬場七右衞門追腹仕候。須田伯耆モ百里隔候在所ニテ追腹仕候。八日晩、義繼死骸方々切放候ヲ求出シ、藤ヲ以ツラネ小濱町外ニ張付ニ御カケ候。義繼抱ノ地本宮、玉ノ井、澁川、八日ノ晩、二本松ヘ引除、米澤ヘ人質可レ被レ成由被レ仰候。十二ニ御成候國王殿ト申子息ヲ譜代衆守立、義繼イトコ新城彈正ト申、兼テ覺ノ者主ニ成籠城仕候。一十月十五日、二本松ヘ御働候ヘ兵内ヨリモ不レ出候。即被ニ打上一川ヲ越、高田ヘ惣人數引上、上野陣ヲ相懸候。明日ノ御評儀可レ承ト存、我等モ高田ヘ參候。拙者陣場ハイチフ田□□申候テ、二本松ヨリ北ニテ高田ヨリ各別ノ所ニ候。其ハ八丁目、我等抱ニ付被ニ指置一候。我等人數北ヘ上候付城ヨリ罷出合戰仕候。双方多打死。高田ヨリモ助合候付、敵ヲ遠ヤライ迄押入物別仕候。夜半時分ヨリ大風吹、明方ヨリ大雪降、十六日、十七日、十八日晝夜トモニ降候故、馬足不レ叶、御働モ不レ成、廿一日ニ小濱ヘ御引込。年内ハ御軍被ニ相止一由ニテ、境々ノ衆不レ殘被ニ相返一候。

一會津抱ノ高玉阿子島ヨリ深山ヅタヒニ二本松ヘ通路仕候付、城成トモ被レ成度被ニ思召一候ヘドモ、義廣、義重、常隆御出馬ノ御氣遣ニテ不レ被レ成候上、高山ニテ通路ニ人數モ候ヘドモ不レ通候。人數無レ之ニ付テハ□見切通候間、米以下依レ不レ絶、翌年七月迄相抱候。

一霜月十日比、佐竹義重公、會津義廣公、岩城常隆公、石川昭光公、白川義近公被ニ仰合一、須加川ヘ御出馬被レ成、安積表伊達御奉公ノ城々御責被レ成、中村ト申城被ニ責落一候。右之通小濱ヘ申來ルニ付、政宗公岩津野ヘ御出馬被レ成、高倉ヘハ富塚近江、桑折攝津守、伊藤肥前ニ御旗本鐵炮三百挺添被ニ籠置一候。本宮城ヘハ瀨上中務、中島伊勢、濱田伊豆、櫻田右兵衞被ニ籠置一候。玉ノ井ノ城ヘハ白石若狹被ニ籠置一候。我等ハ二本松敵城ニ候。八丁目抱ノ爲澁川ト申城ニ被ニ指置一候處ニ、小濱在陣衆何モ無人數ニ候間、早々可レ參候由御狀被レ下候條、澁川ニ人數過半殘候テ、四本松ヘ廻リ小濱ハ參候ヘバ、早御出馬ニテ、小濱ニモ御人數不レ被ニ差置一候間、我等人數ヲノコシ申ベキ由被ニ仰置一候ニ付、青木備前内馬場日向、馬上卅騎程殘、岩津野ヘ參、御目見エ仕候ヘバ、前澤兵部モ身ヲ持替、會津ヘ奉公仕候間、明日ハ高倉カ本宮ヘ可レ被レ爲レ働候間、可ニ罷通一由御意候條、糠澤ト申處ニ其夜ハ在陣申候。彼兵部ハ本二本松衆ニ候間、義繼生害ノ砌ヨリ伊達ヘ參候。又佐竹殿御出陣ニ付佐竹ヘ參候。同十六日、前田澤南ノ原ニ敵野陣ヲ懸候。定テ高倉ヘ働ニ可レ在之由申來候付、政宗公モ岩津野ヨリ本宮ヘ御移被レ成候。其比ハ唯今ノ町場ハタニテ一人モ人居ナク、少川流候所、遠ヤライニテ内町計人居候。高倉ヘノ可レ爲レ働由申ニ付、本宮ノ人數ハ觀音堂ヘ打上、見合次第ニ高倉ヘ助合ベク候。大田ノ原ニ備ヲ立候。我等モ高倉ヘ可ニ助合一ト高倉海道山ノ下ニ備ヲ立候。敵五十騎餘ニテ三筋ニ押通候間、高倉ニ籠候衆、本宮ハ御不人數ニ候間、人數ヲ是ヨリ出シ抱トメ見申度ト申候。成間敷ト被レ申候衆モ候處ニ、富塚近江、伊藤肥前、縱被ニ押込一候トモ本宮ヘ通候敵ノ人數留リ可レ申候者不レ吉由被レ申、人數ヲ出シ被レ申候間、敵ヲ押チヾメ候處ニ、岩城衆入替押籠候間、小口ヘ被ニ追入一ニ三十人被ニ打取一候。敵勢多候故、前田澤ヘ押候人數ハ觀音堂ヨリ出候衆ト戰、荒井ヲ押候人數ハ我等ト合戰仕候。下部山内記我等備ノ向ニ少高山之候ヘ、乘上見候ヘバ、白石若狹、濱田伊豆、高野壹岐三人ノ指物見エ候テ、馬上六七十騎、足輕百五十計ニテ本宮之方ヨリ高倉ノ方ヘ參候。其跡ニ大人數參候。敵トハ不レ存候ヘドモ、敵ト味方トノサカイノ樣ニ見エ、其間一町餘隔申間不審ニ存候ヘバ、其間ニテ鐵炮一ツウチ申候。扨ハ敵ニ候ト存、乘通山ノ上ヨリ敵是迄參候。小旗ヲサセト呼候間、イヅレモ小旗ヲサシ相待候處ヘ、若狹、壹岐、伊豆、我等マトイヲ逆通御旗本ヘ被レ參候。觀音堂ヨリ出入人數大田ノ原ヘ備候處ニ、敵大軍故コタヘ候事不レ成。觀音堂ヲ被ニ追下一、御旗本迄逆懸リ候。茂庭、左月始百餘人打死仕候。左月驗ハ不レ被レ取。伊達元安、同美濃守、同上野、同彦九郎、原田左馬助、片倉小十郎防戰候間大敗軍ハ無レ之候。我等備ハ味方一人モ不レ崩。左ハ大門ニテ七町餘敵ノ後ニ成候。下部山内記我等ニ馬ヲ乘懸、馬上ヨリ我等小旗ヲ拔、觀音堂ノ衆崩被ニ押切一候間、早々除候ヘト申候テ小旗ヲ中間ニ渡候。我等十八歳ニテ何ノ見當モ無レ之候ヘ共、罷除候テモ可レ被レ討候。爰ニテ討ジニト存候テ備ヲ不レ崩

處ニ候。敵勢、若狭、壹岐、伊豆ヲ追立、山ノ下迄參候間、我等人數ヲ懸候間敵相除候處ニ、伊庭遠江七十三ニ成大功之者眞先ニ乘入、敵二人ニ物付仕、一人家中ニ頭ヲトラセ、山ノ南以下五町計橋爪迄追付候處ニ、敵橋ニテ返シ又味方ヤマヘ被ニ追上一候。羽田右馬助敵味方ノ境ヲ乘分、馬ヲ立廻シ〳〵靜ニ上サセ候處ニ、鑓持壹人進出、右馬助ヲツバゾシ前ヘ走懸候ヲ、右馬助一太刀ニ切落、右馬助モ家中一人被ニ討取一引除候。鐵炮大將萱場源兵衛、牛坂左近、敵ノ眞中ヘ乘入、馬上二騎物付仕候ヘ𪜈、具足ノ上ニテ不レ通、敵除口ニ成又橋本迄追下候。北新助馬ヲタテ候處ヘ歩行ノ者走リ出、新助馬ヲツキ候間、新助モ引除候故味方除口ニ成候處ニ、伊庭遠江後殿ヲ致、取テ返シ〳〵味方ニ遠ザカリ候。老後ニテ目見エ不レ申候トテ申ヲ、其日ハ著不レ申候。敵乘懸アタマヲ二太刀被レ切。不レ叶候テ引除候間、味方又本所ヘ被ニ押付一候。然處ニ觀音堂モ物別仕候間、此間ノ敵モ引上候。我等モ不ニ押添一、人數ヲ打廻シ物別仕候。觀音堂ハ誰々如何樣ニ仕候モ不レ存候。遠江ハ罷歸相果申候。不思議ノ仕合ニテ一芝モ不レ被レ取、觀音堂同前ニ物別仕候。合戰ノ樣子細細ニ不レ書候。粗書記候。其後觀音堂ヘ敵備ヲ上、高倉海道川切ニ備ヲ直シ候間、一戰可レ有レ之カト存候處ニ、政宗公御備五六町程隔リ候故カ、無ニ何事一被ニ打上一候。此方ノ人數モ少ニ候故不ニ押添一候。彼下部山内記ハ本輝宗公御近御奉公申候。相馬御弓矢ノ砌ハ鐵炮大將被ニ仰付一覺ヲ仕候。其比御勘當ニテ我等ヲ賴備ニ居申候。其日モ味方後候時ハ、馬ヲ乘廻シ味方ヲ助、寂前ニ敵ノ中ヘ乘入、兩度物付ヲ仕無ニ比類一カセギ仕候。

一十七日晩ハ、政宗公モ岩津野ヘ被ニ引上一候。夜半比山路淡路御ツカヒトシテ御自筆ノ御書被レ下候。今日敵ノ後ニテ合戰仕、敗北不レ仕候事被ニ聞召一、傳ヘタルコモナク不思議ノ樣子不レ及ニ是非一候。一身ノ働ニテ、大勢ノモノ𪜈相助候。定テ家中手負死人數多可レ有レ之由、明日ハ本宮ヘ近陣ノ由キコシメサレ候間、大儀ナガラ本宮ヘ入申サルベク候。誰モ餘人コレナク候間被ニ仰付一候。伊達上野ヲモ相添ラル、ノ由御文言ニ候。淡路申サレ候ハ、今日身方ニハナレ申候衆二人敵ニ紛居候處ニ、明日ハ本宮ヲ近陣被レ成、二本松籠城ノ衆ヲ可レ被ニ引除一由承候。日クレ候テ、敵陣ヲ迯去參候而申上候付仰付ラレ候。本宮ハ可レ爲ニ籠城一候間、其支度可レ申由被レ申候ヘドモ、俄事ニテ心懸モ不ニ罷成一。十八日未明ニ本宮ヘ入候處ニ働不レ參候。物見セ遣候カト承候ヘバ、夜ノ内ヨリ付置申候由被レ申候。火手見エ候間陣移カト存候ヘバ、物見早馬ニテ參候。佐竹、會津、岩城衆被ニ引除一候。結句前田澤モ引除候由申候間、前田澤ヘ人ヲツカハシ見セ候ヘバ、一人モ不レ殘引上候ニ付、政宗公本ミヤヘ御移ナサレ、御仕置被ニ仰付一候。御前ニ數多居候處ニテ、濱田伊豆、昨日ノ合戰ニ中村八郎右衛門無ニ比類一ハタラキ仕候。彼者故味方五十モ六十モタスカリ候由被レ申。其時八郎右衛門何モ御意無レ之ニ刀ヲ拔、敵二十騎切落候由申悉打指候ヲ御覽被レ成、御加增可レ被レ成候由御意ニテ、鹽ノ松ニテ知行被レ下候。若又此上ニモ働難レ計由御意ニテ、岩津野ニ兩日被レ成ニ御座一候ヘドモ、何事ナク候間小濱ヘ御歸馬被レ成、御越年候。

一天正十四年、澁川ニ我等居候處ヘ、元日ニ二本松ヨリ晝時分乘懸候樣ニ働候ガ、先ヘ馬上一騎、歩者十人計參陣、場ノ末ニテ水汲候者𪜈ヲ追廻候所ヘ、内ヨリ出合戰候。二本松ヘノ海道ニ小山候テ柴立ニテ道一筋ヲ追候テ參候處ニ、柴立ノ後ニ馬上百騎計、足輕千餘ニテ備候衆ニ被ニ押返一、道ハ勿論脇ヘモ被ニ追散一候。鹿子田右衛門ハ遊佐左藤右衛門兼テヨリ聞及候者ニ候間、仕樣ヲ見可レ申ト存、高キ所ヘ乘上見候ヘバ、左藤右衛門生所ニテ案内ハ存候間、各被ニ追立一候。筋ヨリ西ノ方ヘ引除敵追懸參候ヲ、二人打取一人ニ手ヲ負セ、敵ヲ追返、又一人物付仕、鹿子田ガ招候處ヘ追付候。右衛門モコラヘカネ相除、谷地ヘ追込候。志賀大炊左衛門モ遲ク懸著、横合ニ懸入五人物付仕候。彼是敵三十人計打取候。敵負色ニ成候處所(奇歟)ヘ、八町目ヨリ馳來候味方、海道ヲ二本柳ヘ押切候樣ニ谷地ヲ越候。是ヲ見二本松衆崩候間、追付ニ仕候處ニ、鹿子田右衛門飯土居ノ細道ニテ馬ヲ立直シ、迯散候者共ヲ押返物別致サセ候。早日昏候間味方モ引上候。頭二百六十三取、二日ニ小濱ヘ上申候。佐藤右衛門左樣鹿子田罷歸、及レ聞程ノ者ニテ候ト、物語ノ由ニウケタマハリ候。

一同年二月、二本松ノ三ノ輪玄蕃、氏家新兵衛、遊佐丹波、同下總、堀江越中所ヨリ政宗公ヘ三之輪屋敷御人數御入候。地形モ能候間御勢可レ被レ遣候。二本松ヲ爲レ取可レ申由申上、人質ヲ指上申候條、御人數ヲ夜中ニ被レ遣候處ニ、右四人ノ屋敷ハ城下ニテ候間、三之輪屋敷ヘ引除候。旁大勢取籠候間、鑓ヲ取廻シ樣モ無レ之候。クリガサクト申所ハ堅固持候。玄蕃屋敷ハ本丸ヨリクリガ作トノ間ニテ候。從ニ越中一明方ニ玄蕃屋敷ヘ取懸候間、コラヘ兼本江計ニテ不ニ罷成一、屏ヲ押破引除候間、難所ヘ行懸、男女數多蹈殺申候。

一政宗公少々御機合無レ然候ニ付、二本松ヘノ御合戰相延、四月始ニ御働候。近陣被レ成候事、去年ノゴトク佐竹、會津、岩城ヨリ御出馬候ハヾ、城ヲ卷ホグシ候事如何ト被ニ思召一。北南東ヨリ五日御働被レ成候ヘドモ、内ヨリ一人モ不レ出候。ヤライカ、リナド二三度被レ成候迄ニテ候間、指而御働不レ被レ成候。小濱ヘ御入馬候。然處ニ相馬義胤ヨリ實元ヲ賴候故、煩ニテ候ヘドモ小濱ヘ參御無事取扱申候。二本松籠城相除候樣ニトノ事計ニテ、同七月十六日本丸計自燒ニ仕、會津ヘ引除候。地下人ハ思々ニ相除候。我等ニ城請取可レ申由被ニ

仰付ハ、其日ニ罷越、本丸ニ假屋ヲ仕候。政宗公七月廿六日御出、被レ成二御覽一候テ、日ガヘリニ被レ成候。

一鹽ノ松ハ白石若狭拜領被レ申、御加增ニ下サレ候處モ數多御座候。二本松ハ我等ニ被レ下、大森ハ片倉小十郎拜領被レ申。八月始、米澤ヘ御馬ヲ被レ移候。安積表ハ御無事ノ分ニテ、往來ノ者モ送ヲ以罷通候躰ニ候。

一同霜月、淸顯公御煩死被レ成候。政宗公モ福嶋迄御出被レ成、田村ヘ御使者ヲ以被二仰屆一、則御歸城候。

一天正十四年、二本松、鹽ノ松御弓矢落居ノ上、八月、米澤ヘ御納馬被レ成候處ニ、大崎義隆家中二ツニ分候テ、政宗公ヘ申寄候。根本ハ其比大崎義隆ニ奉公ノ小姓、新田刑部少輔ト申者之事之外出頭仕候。然處ニ如何樣ノ表裏モ候哉。本ノ樣ニモ無レ之候。サリナガラ被二相隔一候儀ハ無レ之候。其後伊場惣八郎ト申者近召出サレ候ニ付、刑部少輔恐怖ヲ持候。親類多者ニテ其一類恐怖仕候。然間惣八郎存候ハ、我等一人モノニテ候間、賴所無レ之由存候而、岩出山城主氏家彈正ト申モノヲ力ニ仕度由存、彈正所ヘ存分之通申理ニ付、彈正合點引立ベキ由誓約仕候。サルニ依テ刑部少輔親類ノ者モ存候ハ、氏家取持ヲ心迷惑可レ仕候條、大崎伊達ハ境論ニテ御中無レ然候條、政宗公ヘ申寄御加勢ヲ申請、氏家一黨惣八郎打果シ、義隆ニモ腹ヲ切セ可レ申所存ニ候間、其由政宗公ヘ申上ニ付御合點被レ成、何時成共申上ゲ次第ニ御人數ヲ可レ被レ遣由被二仰合一候。然モ其比迄義隆ニ刑部少ハ奉公仕、名生城ニマカリ有。然ル處ニ氏家彈正、義隆ヘ御異見申候ハ、刑部少故一類ノ者迄逆意ヲ企、政宗公ヘ申寄候間、刑部少ニ切腹仰付ラレ候歟、籠舍被レ成可レ然由申上候。義隆被レ仰候ハ、申所尤ニ被二思食一候ヘモ、仇ヨリ召仕ハレ候モノニ候間、其身ノ在所新田ヘ可レ被レ爲レ送ノ由仰ラレ候。各然ルベカラザル由申候ヘモ、頻リニ御意候間不レ及二是非一候。義隆、刑部少ニ仰ラレ候ハ、其方一類モ逆意ヲ企候間、其身迄モ口惜ク被二思召一候條、内々切腹可レ被二仰付一候ヘドモ、仇ヨリ召仕ハレ候間相介ラレ候。早早新田ヘ可二罷越一由仰付ラレ候。刑部少申上候ハ、御意忝候ヘドモ、傍輩ドモ殘ナク某ヲニクミ申候間、御本丸ヲ罷出候ハヾ、背二御意一候者ノ由申候テ、則討レ可レ申候間、憚多申事ニ候ヘドモ、唯今迄被二召遣一候御芳恩ニ中途迄召連ラレ被レ下候ハヾ、忝奉レ存候由申上候ニ付テ義隆尤ニ思召、左樣ニ候ハヾ伏見マデ召連可レ被二相放一候間、御供仕候ヘト被レ仰候間、御馬二匹御庭ヘ呼セラレ、一匹ハ義隆、一匹ハ刑部少御乘セ召連ラレ候。刑部少ガ家中ノ者、究竟ノモノ共二三十人御座候。刑部少ハ指置、義隆御馬ノ口ヲ取、御跡先ニ付、御供之衆無用之由申候ヘバ、早事ヲ仕出左右ニ見エ候間、不レ及レ力伏見迄御越、早從レ是新田ヘ參候ヘト仰ラレ候ヘバ、刑部少ハ一人モ可レ參ト存候處ニ、家中ノモノドモ是非新田迄被二召連一可レ被レ下由申候。義隆別義在間敷由被レ仰候ヘモ、是非御供可レ申由申候テ、異儀被レ申候ハバ、御供ノ衆モ候ハヾ義隆ヲ討奉ルベキ氣色ニ候間、是非ニ及バス新田迄御越候處ニ、名生ヘモ返シ申サズ、新田ニ留置候。刑部少一黨ノモノ共、根塚ノ城主黑見紀伊守、谷地守ノ城主森主膳、米澤備前、米泉權右衞門、宮崎民部少、高淸水城主彈正、百々城主左京亮、中目兵庫、飯川大隅、黑澤治部少、是ハ義隆舅ニテ候。此者モ右ハ逆心ヲ企、政宗公賴入、御威勢ヲ以氏家一黨伊場惣八郎打果、義隆ニモ腹ヲキラセ可レ申所存ニテ候處ニ、存之外義隆ヲ生捕申、新田ニ指置申候間、何モ心替、伊達ヲ相捨、義隆ヲ守立、氏家伊場野ヲ退治可レ仕存分出來候テ、彼面々義隆ヘ申上候ハ、刑部少一類餘多申合、義隆ヲ取立申ニヲイテハ、累代ノ主、君ト云、誰カ疎ニ可レ存候。氏家彈正一人御退治被レ成候ヘバ、大崎中ハ可レ爲レ如二思召一之由申上候。義隆御所存ニハ彼者ドモ逆意ヲクハダテ、伊達ヲ賴入由聞召之時分ハ、氏家一人御奉公ヲ存寄、御腹ノ御供可レ仕(マヽ)由申上候。彈正ヲ御退治可レ被レ成儀ハ無レ之由思召候ヘモ、新田ニ押留訴訟申候間、不レ及レ力尤ノ由被レ仰候。

一氏家彈正所存ニハ、扨々移レバカハル世中ニテ、刑部少一黨伊達ヲ賴入、義隆ヘ逆意ヲ存立砌ハ、私一人御奉公ヲ存、名生ノ御城可レ爲二籠城一候間、岩出山ヲ引移、御切腹之御供可レ仕由存詰候處ニ、案ノ外義隆我等ヲ御退治可レ被レ成御企不レ及二是非一候。此上ハ我等伊達ヲ賴入義隆退治申、命ヲマヌカレ度存候テ、彈正家中片倉河内守、眞山式部少ト申モノヲ申付、米澤ヘ爲二相登一片倉小十郎ヲ以政宗公ヘ申上候子細ハ、新田刑部少身類ノ者共義隆ヘ逆心仕、米澤ヲ賴入ベキ由申上候處ニ、不慮ニ刑部少輔、義隆ヲ生捕、伊達御奉公ヲ返約仕、義隆ヲ取立可レ申所存ニ付、某可レ及二滅亡一躰ニ候條、政宗公御助勢ヲ被レ下候ハヾ、大崎ヲ容易取上可レ申由申上候ニ付、小十郎其由披露被レ申候處ニ、政宗公、年來義隆ヘ御恨ト云、刑部少一黨御奉公違返口惜被二思召一、氏家彈正ヲ引立ベキ由被二仰出一候。彈正使河内式部ニ、小十郎御意ノ通ヲ申キカセラレ候。兩人喜急岩出山ヘ罷下、彈正ニ御諚之通爲二申聞一候ヘバ、不二尋常一喜入被レ申候。

一名生ノ城ハ義隆新田ヘ御越以來、明所ニ成候ヲ、義隆ノ御臺ト、御子正三郎殿御袋ニ御東ト申御方二人ヲバ人質ニ名生ノ城ニ押置、御守ニハ彈正親三河守、伊場惣八郎ヲ指添差置申候。

一彈正所存ニ、不慮ノ儀ヲ以普代ノ主君ヲ相背、伊達殿ヘ御奉公仕候。天道モ恐敷存候。流石ニ主君ノ御子勝三郎殿ヲ某引立、政宗公ヘ參傍輩ニ奉レ成事モ天命モ口惜シク、佛神三寶ニモ可レ奉レ放ト感テ、中新田ノ御留守居南條下總所迄正三郎殿ヲ奉レ送候。二人ノ御方ハ義隆ニモ正三郎殿ニモ

仕被レ離候テ、明暮御歎キニ候。御自害モ流石不二罷成一、御ナミダノミニテ候。

一天正十六年正月十六日大崎ヘ被二仰付一候御人數、伊達上野介、泉田安藝守兩大將ニ被二仰付一、栗野助太郎、長井月鑑、高城周防守、大松澤左衞門、宮田因幡、飯田三郎、濱田伊豆、軍奉行小山田筑前、爲二御横目一小成田惣右衞門、山岸修理、其外諸軍勢ヲ遠藤出羽守城松山ヘ被レ遣候。大崎ニ伊達御奉公ハ氏家彈正、湯山修理亮、一栗兵部少、一廻伊豆、宮野豐後、三々廻之、富澤日向、何モ岩出山近邊ノ衆ニ候。其外ハ義隆公ニ候。從二松山一ハ手越候間、此人數可二打加一地形ニモ無レ之候。於二松山一上野介、伊豆、安藝守、其外イヅレモ寄合評定ニハ、今度大崎御弓矢黑川月舟御奉公被レ申候ハヾ、幸四竈尾張モ被二申寄一候條、岩出山ヘモ間近候。可レ然儀ニ候ヘドモ、月舟逆意被レ仕、桑折ノ城ヘ入、伊達勢押通候ハヾ、川北ノ室山ニコモリ候衆ヘイヒ合セ可レ防由被レ存ト相見エ候間、ハタラキノ調儀何ト候ハント評定ニ、遠藤出羽守申候ハ、新沼ノ城主上野甲斐私ノ妹聟ニ候間、御當家ヘ代々御忠節ノモノニ候間、室山ニ押ヲ被二差置一、中新田ヘ打通ラレ候ハヾ別儀アルマジキ由申サレ候。上野被レ申候ハ、中新田ヘ二十里餘ノ通、敵ノ城ヲ後ニ兩地指置押通候事機遣ノ由申サレ候ヘバ、泉田安藝守所存ハ、上野久敷我等ト申悪候。其上今度大崎ノ弓矢ノ企我等申上、御人數被二相向一候。月舟ハ上野介ノ舅ニ候。彼是今度ノ弓矢上野情ニ入間敷由被レ存。出羽守被レ申所尤ニ存候。氏家岩出山ニ在陣仕、伊達勢ノ旗先ヲモ見不レ申候ハヾ力ヲ落、又義隆ヘ御奉公被レ申モ難レ計候間、室山ニハ押ヲ被二差置一被二打通一可レ然由被レ申候間、不レ及二是非一中新田ヘノ働ニ相サダマリ候。

一黑川月舟逆意ノ底意ハ、月舟伯父式部大夫ヲ、輝宗公御代ニ御奉公ニ被レ上候飯坂ノ城主右近大夫息女ニ誓約仕、名代ヲ可二相渡一由被二申合一候ヘドモ、息女十計ノ時分、年三十計ノ人ニ候間、今ニ祝言無レ之候。右近大夫存分ニハ、年モコトノ外チガヒ候。式部太夫年入候間、ソノ身ノ隱居モハヤク可レ在レ之候。政宗公御目カケニモ上ゲ候ハヾ、彼腹ニ御子モ候ハヾ名代ニ相立、家中ノタメ能可レ在レ之由思案被レ申レ候。遠返申サレ候ニ付、式部大夫迷惑ニ存、月舟所ヘ不レ被レ參ヲ後ヘ引切被レ申候。此恨、又月舟ハ大崎義隆御爲ニ繼父ニ候。義隆御舍弟義安ヲ月舟ノ名代續ニト被レ申、伊達元安ノ聟ニ被レ申候テ、月舟手前ニ置申サレ候間、義隆滅亡候ヘバ、已來ハ其身ノ身上ヲ大事ニ存ラレ、逆心ヲクハダテラレ候由相見エ申候。

一氏家彈正ハ伊達ノ人數可レ被レ遣由御意候ヘ共、今ニ村押ノ旗先モ不レ見、通路不自由、何方ノ注進モ無レ之。今ハ〳〵ト相待、正月モ立候間、朝暮機遣ニ存ラレ候。然處ニ二月二日、松山ノ軍勢打出川ヲ越、先手ノ衆段々ニ室山ノ前ヲ打通、新沼ニカヽリ中新田ヘ相働候。下新田ト申城ハ義隆奉公ニテ、城主葛岡監物其外加勢ノ侍大將ニハ里見紀伊守、谷地森主膳、弟八木澤(米脇)備前、米泉權右衞門、宮崎民部少、黑澤治部少、此モノ共コモリ候テ、伊達ノ人數中新田ヘ押返候ハヾ一人モ通マジキ由廣言申候ヘドモ、流石多勢ニテ打通候間可レ出樣モ無レ之候間、押ヲモ不レ置打通候。跡ノ室山ノ城ヘハ侍大將古川彈正、石川越前守、葛岡太郎右衞門、百々左京籠置候。川南ニハ郡々城主黑川月舟籠、城主飯川大隅ト云者也。兩城道ヲ押ハサミ候故、伊達上野、濱田伊豆、舘助三郎、宮内周防四百騎餘ニテ室山ノ南ノ廣畑ノ候ニ被二相扣一、先手ノ人數中新田ノ近所ヘ押懸候處ニ、内ヨリ南條下總守町摳輪ヨリ四五町出候處ヲ、先手ノ人數一戰ヲ仕、内ヘ追込付入ニ仕、二三ノ櫃輪町搆マデ放火仕候ヘドモ、下總本丸ヘ引コモリ堅固ニ持候。敵ノ城ドモ餘多打通候條、跡ヲ氣ヅカイニ存候而、小山田筑前下知仕、惣手ヲ引上段々ニソナヘヲ相立候。氏家ハ俄之働ニテ、中新田マデトハ不レ存、取物モ不二取敢一罷出候ヘドモ、伊達ノ人數ヘモ不二押加一引上候。伊達勢短日其日深雪ニテ、道一筋ヲ急引上事不レ成候テ、七ツサガリニ成候。下新田衆打出候ヘドモ、伊達勢物トモ不レ存追入々々通候。上野伊豆ノ人數ヘ可二打添一之由存候處ニ、跡々人數疾引上候間、室山ヨリ罷出、二重ノ用水堀々橋ヲ引候ユヘ通候事モ不レ成、新沼ヘ引返シ候跡ニテ、下新田衆ト合戰候處ニ、切所ノ橋ヲ引ノ由承、諸軍勢足戸アシク候ヘモ(マヽ)、小山田筑前、返合戰候故、大崩ハ不レ仕候。筑前敵ヲ追散歩者一人脇ヘ逃候、ヲ物付可レ仕ト存候而其者ヲ追懸、十四五間脇ヘ乘候處ニ、深田ノ上雪積如二平地一見エ候間、馬ヲフケヘノリ入、馬サカサマニ成候故、筑前二三間打ヌカレ馬ハナレ候。手綱ヲ引アゲント仕候處ヘ、敵カヘシ筑前ヲウタント仕候テ、綱ヲ放切合候。多勢ノ事ニ候間、前後ヘ廻リ片足切ヲトサレ、犬居ニドウト倒レ候ヘモ、太刀ヲ不レ捨切合候。老武者軍ハ久シク息ヲキリ、打出ス太刀モヨハク成候間、四竈ガ若黨ハシリヨリ首ヲトラント仕候テ、太刀ヲ捨引寄脇指ヲヌキ、タヾ中ヲ付留ニシテ兩人同枕ニ臥候テ、アトヨリ參候モノ首ヲ取候。敵川ヨリ南ニ相ヒカヘ候ヘドモ軍不レ破、前ハ川ヲバ不レ越候處ニ味方負色ニ成候ヲ見合、川ヲ越下新田衆ヘ加候故、日ハ暮カヽリ、小山田筑前討死ユヘ味方敗軍仕、餘多ウタレ候切所也。橋ヲ被レ引、新沼ヘ、引カヘシ軍勢致二籠城一候。

一小山田筑前打死、朝不思議成ル奇瑞アリ。宿ヨリ馬ニノリ十間計出候處ニ、乘タル馬、時ノ太鼓ハ早遲々々ト物ヲ云ケレバ、メシ仕候者興ヲサマシ、扨々ト申候。筑前聞テ、今日ノ軍ハ勝タルゾ。目出度ト申候。討死以後其馬ヲ敵方ヘ取見候。知リタルモノ有テ、此馬ハ一年、義隆爲二祈禱一野々嶽ノ

觀音へ神馬ニ引セラレ候馬ノ由申候。義隆キコシメシ其馬ヲ引ヨセ御覽候ヘバ、マコトニニ神馬ニ被レ引候馬ノ由御覽被レ覺候。何方ヨリ廻リ筑前乘テ此軍ニ討死仕事、神力ノ威光アラタノ由イヅレモ被レ申候。義隆ヨリ筑前サシ物ヲ寂上ノ義顯ヘ被レ遣候。義顯彼筑前ハカネテ及レ聞名譽ノ覺ノモノノ由被レ仰。クロ地ニ白馬櫛ノ指物ヲ出羽ノ羽黑山ヘ納メラレ候。冥加ノ者ノ由申候。

一伊達上野介先々人數ヲ引付度被レ存候ヘモ、日ハクレ候。川ヲ越北ヘソナヘ候間、桑折室山ヨリ出候ハヾ可二除兼一由存ラレ、月舟ハ上野舅ニ候間、上野所ヨリ使者ヲ以申サレ候ハ、爰許引ノキ度存候間、無二異儀一御除サセ預候ヘト申サレ候處ニ、月舟挨拶ニハ、貴殿一人可レ被二引除一候。其外ハ成マジキ由仰ラレ候。重而上野申サレ候ハ、濱田伊豆ヲ始一兩輩同備候ヲ相捨、拙者一人爭可二罷除一候。トテモ我等ヲ可レ被二相通一バ、彼旁モ被二相通一可レ預候。左樣ニ成マジキニヲキテハ打死ニ相究ノ由被二申越一候バ、千ノ森相摸ト申者、月舟伯父ニテ候ガ申候ハ、上野殿ヲ始トシテ打果弓矢ノ實否ヲ相付可レ然候。大崎ハ洞一品ニ候。政宗公大身ニテ候間、果シテ月舟ノ身上相立ベキニモ無レ之候。可レ仕事ヲ扣ヘ滅亡詮ナキ所ニ候由シキリニ異見申候ヘドモ、月舟流石聟ヲ打果事イタハシク候。左樣ニ候ハヾ其許ニ相備ラレ候衆、イヅレモ可レ被二相除一由申サレ候間、イヅレモ上野同心ニ松山ヘ被二引除一候故、中新田衆中切候上橋ヲ被レ引候故、思ノ外新沼ヘ被レ致二籠城一候。

一新沼ニ籠候衆五千ニ及ビ候間、新沼小池ニテ食物モナク籠城被レ致躰ニ候。政宗公内々御人數ヲモツカハサレ引出サレ度思召レ候ヘドモ、山道ハ御氣遣被レ成左樣ニモ無レ之候。新沼衆被レ申候ハ、室山ヲ押通向敵ヲ切拂、松山ヘ可レ被二引除一由申サル、處ニ、澤谷月鑑申サレ候ハ、桑折室山兩地除口ハサミ候トモ、地形能候ハヾクルシカラズ候。大川ヲ越候砌双方ヨリ仕カケ候ハヾ、手モトラズ犬死仕ルベク候間、先樣子見合然ベキヨシ申サル、ニ付相止候。

一百々鈴木伊豆守、古川ノ北江左馬丞中途ヘ罷出、新沼ヘ使ヲ越、大谷加澤呼出候而申候ハ、泉田安藝守ト深谷月鑑兩人人質ニ被二相渡一候ハヾ、諸軍勢ハ爲レ除申ベキ由申候。大谷賀澤引コモリ、其由申候處ニ、泉田安藝守家中溜村源左右衛門ト申モノ申候ハ、中々多勢ヘ切入テ打死ハ覺悟ノマヘニ候、諸勢ヲ爲レ除候テ安藝守一人、末ニハ縛首ヲキラレ可レ申候間、死後ノ耻辱ニ罷成候條、安藝守ハ合點申サレ間敷由申候。月鑑申サレ候ハ、我等共兩人證人ニ渡、諸軍勢相扶申事、政宗公迄御奉公ニ罷成候間、是非證人ニ渡シ可レ申候。安藝守殿ハナニト思召候ト申サレ候。又源左右衛門申候ハ、貴殿御心中疾ニ推量申候由ニテ口論仕候處ニ、安藝守申サレケルハ、源左衛門申事無用ニ候。我等人ニモカマイ申サズ、

一人ニテモ人質ニ相渡、諸勢ヲ相扶可レ申由申サレ候テ、其通鈴木伊賀守、北江左馬允所ヘ申コトハリ候。右ヨリ月鑑人質ニ相渡スベキ由申サレ候間、兩人共ニ二月廿三日新沼ヲ出テ、蟻ガ袋ト云所ヘ被レ參レ候間、諸勢松山ヘ引除候。濱田伊豆、小成田惣右衛門、山岸修理、米澤ヘ參ラレ、大崎ノ樣子申上ラレ候。御意ニハ、今度ハ餘深働仕越度ヲ取候。重テハ氏家ニ仰合サレ、桑折、室山二ケ所ノ城ヲ取、彈正折加候樣ニナサルベキ御意ニ候。

一寂上ヨリ義顯、野邊澤能登守ト申衆ヲ蟻ガ袋ヘ被レ遣候而、能登守月鑑ニ會候テ何ト申合候哉。月鑑ハ深澤ヘ歸、安藝守ハ小野田ヘ同心申、小野田ノ城主玄蕃、九郎左衛門兩人ヘワタシ申サレ候。其夜能登守、泉田宿ヘ罷越申サレ候ハ、貴殿ヲ引取申候事ハ相馬、佐竹、岩城、會津申合、伊達ヘ弓矢ヲ取可レ申由相談候テ、相馬ヨリ茶筌又左衛門ト申者使ニ參ラレ候。貴殿好身衆ヘ被二申合一、謀叛ヲ可レ被レ申由申候。安藝守被レ申候ハ、我等ハ主君ノ奉公ニ一命ヲ捨、新沼ヘ籠候軍勢ヲ相扶候。御弓矢ノ儀ハ不レ存候。早々首ヲ被レ召候樣ニ賴入由被レ申候。御申分無二比類一由、能登守感被レ申候。安藝守ヨリ齋藤孫右衛門ト申者ヲ忍使ニ政宗公ヘ指上、右ノ段々具ニ注進被レ申候。

一義顯公、政宗公伯父ニテ候ヘドモ、輝宗公御代ニモ度々御弓矢ニ候。然共近年ハ別而御念比ニ候。義顯公大事ノ人ニテ、洞ニテ大臣兄弟兩人共ニ切腹被二仰付一候。政宗公二本松、鹽ノ松御弓矢强、佐竹、會津、岩城、石川、白川迄御敵ニ候間、此時右ノ大名衆仰合サレ、伊達ヘ弓矢ヲ取、長井ヲ御取可レ被レ成由被二思召一候處ニ、結句大崎ニテ伊達衆負、泉田安藝守ヲ寂上ヘ可レ被二相渡一ニ候間、此砌米澤ヘノ事切ヲ被二思召一、寂上境ニ鮎貝藤太郎ト申者被二仰合一、天正十五年三月十三日鮎貝手切仕候。政宗公被二聞召一、時刻ヲ移候ハヾ成間敷候間、卽御退治可レ被レ成由被二仰出一候。家老衆被二申上一候ハ、寂上ヨリ加勢可レ有レ之候。其上又モ寂上ヘ申寄候衆可レ在レ之條、樣子御覽被レ合御出馬可レ然由申サレ候ヘドモ、左樣ニ候ハヾ米澤ヲ御出候事成マジク候間、是非鮎貝ヲ御退治可レ被レ成由御意候而御出馬候處ニ、寂上ヨリ一騎一人モ御助無レ之。鮎貝寂上ヘ加勢乞候ヘドモ不レ被二相助一上、政宗公御出馬候由被レ承。則寂上ヘ引除被レ申候間、長井無二子細一候。

一深谷月鑑ハ相馬長門小舅ニ候。於二下新田一モ月鑑手前ノ者共、玉無鐵炮ヲ打候由政宗公被二聞召一、深谷ハ大崎境目ニ候。相馬ヘモ緣邊逆意ノ儀尤之由被二思召一、秋保攝津守ニ被二預置一、切腹被二仰付一候。

一氏家彈正親三河、子共ニモ違、大崎義隆ヘ奉公仕、名生ノ城ニ居候。城ライダキ義隆ヘ奉公仕候。政宗、彈正ニモ御疑心ノ間、度々起證文ヲ上無二異儀一由申上候。被二聞召届一候故、

御横目ニ小成田惣右衞門ヲ申請候處ニ、彈正病死被レ仕候。岩出山ノ城主同前ニ小成田被二申付一候處ニ、關白秀吉公小田原ヘ御發向、大崎、葛西ヲ木村伊勢守拜領被レ仕候間、小成田モ被二罷歸一候。

黑川月舟逆心故、大崎ノ御弓矢被二思召一候樣ニ無レ之ニ付、内々月舟ヲ御退治被レ成、大崎ヘ御働可レ被レ成ト思召候ヘドモ、佐竹、會津、岩城、石川、白川打出、本宮迄働候間、大崎御弓矢ニ取組レ候ハヾ、亦彼大名衆御出馬タルベキ由被二思召一被二指置一候。其翌年仙道ノ御弓矢被レ得二勝利一候テ、會津迄被レ爲レ屬二御手一、關東ノ御弓矢ニ被二思召懸一候間、大崎ノ事ハ御言ニモ不レ被レ出候。然ル處ニ葛西、大崎、木村拜領被レ申候間、月舟、伊達上野所ヘ懸入御訴訟申上ラレ候儀、月舟逆心故諸軍勢打死仕候而、是非月舟首ヲ可レ被二召上一候由被二仰出一候。秋保ノ境ノ玄蕃ニ被二相渡一候。上野米澤ヘ參ラレ、大崎ニテ月舟恩賞ヲ以、濱田、館、宮内我等迄身命相助候。我等親子ニ候間旁我等知行一宇被二召上一、月舟命被二相助一候樣ニト頻ニ被二申上一ニ付、上野介首尾ニ被二相談一、玄蕃手前ヨリ上野請取、利府ヘ被レ歸候。其後月舟ニモ堪忍分被レ下、仙臺ニテ御屋敷ヲ被レ下、御前ヘモ折々ニ被二罷出一候。八森相摸ハ桑折城ニテ月舟ヘ强異見申候由被二聞召一候。其上政宗公ノ御指小旗ノ紋ヲ其身ノ小旗ノ紋ニ仕候故、深口惜被二思召一、小國ヘ被レ遣、上郡山民部少ニ被二相渡一、相摸妻子共ニ死罪ニ被レ行候。

一天正十五年、宸上、大崎ハ御弓矢ニ候ヘ𪜈、安積表ハ先御無事分ニテ候。苗代田、大田、荒井三ケ所ハ私知行ニ候。敵地近候ヘ𪜈、御無事ニ候間、何モ百姓ドモヲ返シ在付候。苗代田ハ阿子島、高玉ノ敵城ニ近候間、古城ヘ百姓共ヲ集指置候處ニ、大内備前我等所ヘ被レ申候ハヾ、不慮ノ儀ヲ以政宗公ノ御意ヲソムキ如レ此ノ體ニ罷成候。小濱ヲ罷除候時分、會津宿老松本圖書助跡絶候間、此知行ヲ被レ下候樣ニ申、會津ノ宿老ニ可レ仕候由、會津宿老共申候間罷除候處ニ、扶持方ヲサヘ不レ被レ下及二餓死躰一候間、政宗公御下ヘ伺公申度候。少々御知行ヲモ被レ下被二召仕一候樣ニ賴ミ申由申サル、。乍レ去唯今ケ樣ニ申上候テモ御耳ニモ入間敷候間、我等兄弟ニ候片平助右衞門御奉公仕候樣ニ可レ申候間、我等ヲモ御赦免被レ成候樣ニト被レ申候ニ付、片倉小十郎ヲ以右ノ通申上候ニ、拙子申上候ハ、大内備前被二召出一可レ然存候。其子細ハ、淸顯公御遠行以來、田村主ナシニテ心々ノ樣ニ及レ承候。備前本居仕度存、弓矢ノ物主ニモ罷成候ヘバ如何ニ存候。其上片平ノ地ハ高玉、阿子島ヨリハ南ニテ御座候間、片平助右衞門於二御奉公一ニハ右ノ兩地持兼、會津ヘ引除可レ申候。左候ハヾ高倉、福原郡山ハ御奉公之儀ニ候間、御弓矢被レ成候共御勝手一段御座候間、備前ニ御知行ヲ被レ下被二召出一可レ然由申上ニ付而、大内口惜被二思召一候ヘ共、

去々年輝宗公御死去ノ砌、佐竹、會津、岩城相談ヲ以、本宮ヘ御働候。此意趣御無念ニ被二思召一候間、御再亂ヲ可レ被レ成由被二思召一候間、片平於二御奉公一ニハ、備前事モ御赦免可レ被レ成由、具ニ可レ爲二申聞一由、御意ニ候間、右使仕候者、以大内備前ヘ追而品々可レ被二申越一由申遣候。此儀白石若狹ニ爲レ知不レ申候ハヾ、以來恨ヲ請候儀、如何ニ存候間、若狹ヘ物ガタリ申候處ニ、若狹申候ハ、一段可レ然候。鹽ノ松百姓共大内譜代ニ候間、萬事ニ機遣申候。御下ヘ被レ參候ヘバ、大慶之由被レ申候間、我等モ左樣ニ存候。米澤ヘ申上候由申候。然處ニ備前ヨリ被二申越一候ハ、彼一儀洩候事迷惑候。於二會津一無二其隱一申廻候。此分ニ候ハヾ、切腹仕候儀モ難レ計由被二申越一候。拙者アイサツ申候ハ、別而他言ハ仕ラズ候。白石若狹唯今ハ小濱ニ居被レ申候間、其方御奉公ノ品々彼方ヘ不レ爲レ聞候テハ、取成不レ被レ申候間物語申候。若狹其口ヘモ存知被レ申候哉ト存候由申越候。其後若狹我等被レ申候ハ、大内備前我等ヲ賴罷出度由物語候間、一段可レ然候。誰ヲ以モ被二罷出一候ヘバ、御爲能候由挨拶申候。若狹分別ニハ、備前ハ覺ノモノニ候。田村近居數年、佐竹、會津無二御加勢一、自分弓矢ヲ取候間、度々合戰ニモ勝候事、政宗公御存候間、若鹽ノ松ヲ被二通下一候儀、ハカライガタク候間、若狹指南ヲ以御奉公被レ申候カ、左ナク候ハヾ、於二會津一切腹被レ申候樣ニト被レ存、告申サレ候ト見ヘ申候。其故其年中ハ大内罷出候事相延候。其年ノ暮大内機遣仕、會津ヲ御暇申請、片平ヘ被二罷越一候。

一天正十六年二月十二日、片平、阿子島、高玉三ケ所ノ人數ヲ以、大内備前苗代田ヘ未明ニ押懸、古城ニ居候百姓共百人計相果候。本内主水ト申者、物主ニ指置候ヲ切腹致サセ、放火申サレ候間、大田、荒井ノ者ドモ亦玉ノ井ヘ引籠候。同二月末、大内我等所ヘ申サレ候ハ、去年中合候ケンキャウ申候而、切腹ニ及可レ申躰ニ候間、會津ヘノ申分ニ御領地ヘ事切仕候。此上モ免許候テ、米澤ヘ御奉公被レ成クレ候ヘト、度々申サレ候ヘドモ、拙者挨拶申候ハ、イヅ方ヘモ事切不レ被レ申候。我等知行所ヘ事切申サレ候本内主水切腹仕候間、我等申次ハ罷成マジク候。誰ゾタノミ申サレ然ベキ由申候ヘバ、右ヨリノ使本内主水親類ノ者仕候。彼好身共何モ玉ノ井ニサシ置境目ニ候。彼モノ共我等ニ訴訟申候ハ、玉ノ井ノ百姓共、二本松右京普代ニ候間、草ヲ入申ニモ告可レ申ト機遣申候。其上片平助右衞門御奉公被レ申候ヘバ、一廉事ニモ阿子島、高玉持兼可レ申候間、大内兄弟御馳走然ルベキ由申ニ付、重テ米澤ヘ小十郎ヲ以申上候處ニ、苗代田打散候事口惜思召レ候ヘドモ、片平助右衞門迄御奉公仕ルベキ由申候間、可レ被二召出一候。若助右衞門御奉公不レ仕候ハヾ、大内計ハ被二召出一マジキ由御意ニ候條、其通申遣候處ニ、助右衞門御奉公ニ落居候間、近所ノ村四ケ所望書立ヲ越被レ申

候間申上候。備前ニハ保原ヲ被レ下、助右衛門ニハ望候所御印判下サレ候。助右衛門被レ申候ハ、瀨上丹後御勘當ニ候。我等聟ニ仕、名代渡可レ申候由約束仕候條、御赦免被レ成候樣ニト被レ申候。其通申上候ヘバ、中野常陸親類迄モ、口惜被二思召一候間、召出サレ間敷由御意ニ候。助右衛門申サレ候ハ、左候ハヾ御奉公仕間敷候。御印判イタヾキ申モ上置可レ申由被レ申ニ付、廿日モ事延、漸々丹後事御前相濟申候間、片倉小十郎モ備前助右衛門罷出候ヲ、二本松ヘ罷越待可レ申由、我等ト申合サレ候。

一天正十六年三月十二三日比、我等抱ノ地、玉ノ井、高玉ヨリ山ギハニ付テ西原ト申候、四五里玉ノ井ヨリヘダタリ候所ヘ、ハイクマヲ越候處ニ、玉ノ井ノ者モ無調儀ニ遠追候間、又草ヲ入罷出候ヲ見申候テ、押切ヲ置討取タクミヲ仕、三月廿三日ニ、玉ノ井近所ニ高玉ニ山路御座候、矢澤ト申處ヘ、草ヲ可レ仕由相談候。其砌迄ハ大内片平御奉公ニハ究候ヘモ、味方ヘノ事切ハ申サレズ候時ニ候間、片平阿子島ノ人數高玉ヘ廿二日ノ晚相談候。兼テ敵地ニ申合、草入候ハヾ告可レ申由候ニ付而指置候者、廿二日晚、本宮ヘ參リ候而、今夜玉ノ井ヘ草入候由告申ニ付テ、我等モマカリ出本宮玉ノ井人數ヲ以、廿三日朝車サカシヲ申候處ニ、草モ不レ參候ヨシ、イツハリニ候哉ト申引除候處ニ、晝ハイニ二三十人玉ノ井近邊迄マイリ候間出合候。二三十人ノ者ドモ引上候間、タイト渡ト申所ニテ追付合戰仕候。前日遠ハ出申候ニナライ、矢澤ノ小森ノカゲニ人數二百ホド隱レ、押切ニアテガイ申、合戰初申候所ヨリ引懸可レ申由存候哉、敵ソロ〳〵ト除口ニ成候。玉ノ井ノ者共敵ノ足トアシク存候而強懸候間、敵崩候間足並ヲ出シ除候。押切ノモノ共待兼候而、早出候間、不レ切候ヘモ味方崩、合戰ノ初ニハ川柳被二押付一候間、二三人被レ打候處ニ、味方川ニテ相返、高玉太郎左衛門（帝愛）兩陣間ヲ乘候處ニ、志賀三郎ト申モノ、我等歩小姓、兼テ鐵炮ヲ能ウチ申候ガ、川柳ニ鐵炮ヲ打カケ相待候處ニ、太郎左衛門小川ヲ隔、横ニ乘返候處ヲ二ツ玉ニテ打候間、一ノ玉ハ馬ノ肩ノモミ合ニ當、一ツノ玉ハ太郎左衛門臑ニアタリ候。馬倒候間、其ニ味方キヲヒカ、リ候間、敵方引除候。太田主膳ト申モノ大功ノ者、後殿ヲ仕候間敵モクヅレ不レ申候ガ、小坂迄乘上候處ヲ三郎上矢ニ打候間、鞍ノ後輪ヲ打欠、犬子所ヘ打出候。主膳ウツムキニ成、其身ノ小旗ヲ拔、弟采女ニサ、セ、我等除候ハヾ必大崩可レ申候間、我等ニ成カハリ後殿仕、物別サセ候ヘト申付、引除候而頓而越度申。此草調儀ハ高玉太郎左衛門、太田主膳物主ニテ仕候間、兩人除候間、則崩追討ニ首百五拾三取申候。大勢打申ベク候ヘモ、山合ニテ地形アシク、チリ〳〵ニ迯申候條少打申候。其夜宿ヘ不レ歸者モ候由後承候。右ノ頭ノ鼻ヲ欠、米澤ヘ上申候。

一同年三月廿三日、玉ノ井ノ合戰過歸候處ニ、大内備前、片平助右衛門被二罷出一候ヲ、相待ベキ由申サレ候。片倉小十郎二本松ニ逗留申サレ候處ニ、カチ内彈正申大内備前甥、小十郎所ヘマイリ候而、備前今夜本宮ヘ參ラレ候。明日ハ助右衛門事切可レ申由申ニ付、小十郎同心本宮ヘ參ラレ候。明日ハ六日ノ朝會申候所ニ備前申サレ候ハ、助右衛門モ御奉公可レ仕由、堅申合候處ニ、少ノ儀出來、兄弟間ニ罷成、我等ニ腹ヲキラスベキ由申ニ付而、漸罷除候而參候由申候。惣別助右衛門ハ御奉公仕間敷覺悟ニテ候ヲ、備前身上ノ爲バカリヲ以、御奉公トハ被レ申候哉。大内參ラレ候上ハ、助右衛門モ御奉公仕ラレ候カ、又片平ノ地ヲ會津ヨリ守替ラレ候カ、唯ニハ在間ジク候。兄弟ノ分別チガイニ候由、小十郎ト兩人ノ噂ヲ申候。大内被二罷出一候ニ、無人數成共、一働申サズ候而ハ如何ニ候間、阿子島ヘ働申候ヘモ、内ヨリ一人モ不二罷出一候。此方ヨリモ可レ仕樣無レ之引上、翌日又働申候處ニ、鹽ノ松ノ内ニ居候石川彈正相馬ヘ注進仕、白石知行ノ内ヘ事切、仕火ノ手見ヘ候間、白石ハカヘリ申サレ候。我等小十郎バカリ働キ候ヘドモ、何事ナク打上候。小十郎ハ八日ニ大森ヘカヘリ申サレ候。備前米澤ヘマイリ、御目見エ申度由申サレ候條、我等家中遠藤駿河ト申者指添、米澤ヘ爲二相登一候。

一四月十五日ニ石川彈正、西ト申所白石抱ノ内草ヲ入、其身モ罷出シコミニ居候。早朝ニ内ヨリ一兩人罷出候モノヲ打候。城中ヨリ出合候處ニ、彈正助合城ヘ追入取付責候。鐵炮シキリニキコヘ候間、白石若狹助合候而、彈正見合引除候處ヘ懸付合戰候テ、若狹勝、頭二十計討取申候。我等モ二本松ニテ鐵炮ヲ承、早打仕候ヘドモ、遠路故ヲソク候而、罷歸候處ヘカケ付候。若狹ヨロコビ候テ、宮森ヘヨセ申サレ、馳走申サレ候テマカリ歸候。此石川彈正ト申者、本鹽ノ松ノ主、久吉ト申候大名ノ家中ニテ候。大内ト傍輩ニ候。久吉汰沙悪家中共相談仕押出候。備前親ソノ比伊達ヲ賴入候。石川彈正親田村ヲ賴入候。其以後伊達御洞弓矢ノ砌、備前モ田村ヲ賴入、御近所ニ居被レ申候間、別テ御奉公仕候處ニ、片平助右衛門家中ト田村右馬頭家中ト、岩城ヘ御弓矢ノ時分。於二野軍一喧嘩仕候。右馬頭家中ヲ御成敗被レ成候ヤウニト被二申上一候ヘモ、御合點ナキニ付、御恨ニ被レ存、翌年ヨリ會津佐竹ヲ賴入、御弓矢ニ罷成候。石川彈正ハ不二相替一田村ヘ御奉公仕候。左候ヘドモ政宗公鹽ノ松ヲ御取ナサレ候間、石川彈正知行皆鹽ノ松ノ内ニ候。田村サヘ御名代相渡サレ候間、彈正モ知行ニ付、政宗公ヘ御奉公仕候樣ニト、清顯公御意ニテ被二相付一候者ニテ候。ソノ外ニモ寺坂山城、大内能登、彼是四五人ヘ本久吉家中田村ヘ御奉行仕リ候モノヲ被二相付一候。其モノ共ハ若狹□主ニ相付ラレ、彈正一人直ニ被二召遣一候。本領一（一々本歟）ヘ一ヘノ如クニ被二返下一候。

一天正十四年霜月、清顯公御遠行以來、三春ノ城ニ御北樣被

レ成ニ御座一候。萬事ノ差引田村月齋、同梅雪、同右衞門大夫、橋本刑部少、此四人ニ候。其比ハ政宗公御夫婦間無レ然候。内々御北樣御ウラミニ思召サレ候。月齋、刑部少ハ縱御夫婦間無レ然候共、政宗公ヲ不ニ賴入一候テハ、田村之抱成マジキ由分別ニ候。梅雪、右衞門大夫ハ御北樣、相馬ヲ賴ミイリ、政宗公ヘ違候モクルシカラザル由、分別申サレ候上ハ、伊達ヲタノミ入候樣ニテ、底意ハ相馬ヘ被ニ申寄一候上ハ、ヲシナベテ伊達御奉公ノ樣ニテ、月齋方、梅雪方、申樣ニテ候。然處ロニ大越紀伊守ト申モノ、田村一家ニテ、義亂ニハイトコニ候。田村二番ノ大名ニ候。此者相馬ヘ申合、内々カラクリ仕候。其外ニモ田村中ニ、相馬ノ牢人城ヲ持候ホドノモノ四五人モ御座候。一番ノ大名梅雪ガ子、田村右馬頭ト申候テ小野ノ城主ニ候。是モ相馬ヘ被ニ申合一候。アル時月齋、刑部少、若狹ニ物ガタリ申サレ候ハ、大越紀伊守相馬ヘ申合、逆心歷然ニ候間、大越ヲ抱由申サレ候。其通米澤ヘ申上ラレ候處ニ、政宗公ヨリ我等所ヘ御狀ヲ下サレ、御用候間使ヲ一人爲レ登申ベキ由被ニ仰下一候間、使上申候處ニ、大越紀伊守ヲ相カカヘ度由月齋、刑部少申上ラレ候。無用之由御意ナサレ候ヘドモ、若不圖相抱候ハヾ、田村ノ急事ニ可レ成候。田村ハ二頭ヲ引立御持可レ被レ成ト思召候ニ、月齋ツノリ候事モイカヾ。紀伊守ハ其方ヲ以御奉公ダテヲ申上候間、油斷不レ申候樣ニ爲レ知申候間、シカルベキ由仰下サレ候。家ヲ我等家中内ケ

崎右馬頭ト申、紀伊守ニ念比ニ候。紀伊守ヨリ使ニ大越備前ト申モノ、右馬頭所ヘイク度モマイリ候條、大越備前ヲ可レ被ニ指越一由、紀伊守所ヘ申遣候。卽備前マイリ候間、田村ノ樣子相タヅネ無ニ腹臟一物ガタリ申候テ、政宗公被ニ仰越一候通、可ニ申理一由存候テ、備前ニ會申タヅネ候ヘドモ、一圓カクシ候テ申サズ候條、大事ノ儀直ニイカヾト存候。右馬頭ニ其樣子物ガタリニ致サセ候。備前マカリ歸候テヨリ、紀伊守三春ヘ出仕ヲ止、城ニ引籠不ニ罷出一候間、田村四人ノ老衆ヨリツカイヲ立、イカ樣ノ儀ヲ以不ニ罷出一候、存分候ハバ申ベキ由被ニ申理一候處ニ、始ハ何角ト申候ガ、頻リニ子細ヲタヅネラレ候間、成實ヨリ三春ヘ出仕不レ被レ申候ハヾ、可レ被ニ相抱一候間、出仕無用之由シラセ候間、不ニ罷出一由被レ申候ニ付テ、我等所ヘ四人衆ヨリ右ノ品々被ニ申越一候間、我等アイサツニハ、田村ノ御内何角六ケ敷候間、如何樣ニモ相靜ラレ候ヤウニト存候。爭左樣ノ儀可レ申候哉ト返答申候。四人衆ヨリ紀伊守ヘ我等返答ノ通申越レ候處ニ、必内ガ崎右馬頭ヲ以、爲レ知被レ申由申ニ付、カサネテ我等所ヘ其通被ニ申越一候條、我等アイサツ申候ハ、右馬頭ニタヅネ申候ヘバ、紀伊守久シク懇切ニ御座候。世上ニテ紀伊守逆心被レ成候カ、被ニ相抱一候儀モ成ガタク候由、我等異見ニ申候。成實ヨリ申サレ候トハ申サズ候。大越備前承違ニテ可レ有レ之由申候ト返答申候ヘバ、左候ハヾ右馬頭ト備前ト對決致サセ然ルベキ由承候條、備前被ニ相出一候ハヾ、右馬頭モ指越可レ申由申候條、三月始ニ鬼生田ト申所ヘ、大越備前罷出候由申越候間、田村ヨリ撿使御座候歟ト相タヅネ候ヘバ、撿使ハ不レ參候ヨシ申ニ付テ、撿使無レ之候ハヾ、右馬頭出シ申間敷由申候間、大越備前モ罷歸候。ソノノチ田村ヘ拙者ツカイヲ越申、此間右馬頭出申スベク候ヘドモ、撿使ヲ差ソヘラレズ候間、右馬ノカミ出シ申サズ候。カサネテ備前ニ撿使ヲ差ソヘラレ、相出サレ然ルベキ由申ニ付テ、田村衆モ滿足申サレ、撿使兩人備前ニ差ソヘ鬼生田ヘマカリ出候間、右馬ノ頭モ相出シ申候。備前ハ貴所ヲ以、成實御理ニハ、三春ヘ出仕申間敷由シラセ候ヨシ申サレ候。右馬頭ハ御存分チガイ候ハヾ、御出仕御無用ノ由申候ニ、御出仕ナクバ逆心御クハダテト相見エ申候。タヾ今ニモ御存分違ヒ申サズ候ハバ、御出仕可レ有レ之候。三春ニテ御相違ハ有レ之間敷由申候テ、埒モ不レ付マカリ歸候。カヤウニ御洞六ケ敷候故、チノチノ打寄、伊達ヲタノミ入ベク候哉。イカヤウニ可レ申ト相談候處ニ、常盤伊賀ト申モノ、御相談ニ及バズ候。清顯公御死去ノ砌、御名代ハ政宗公ヘワタシ申サレ候間、御思案モ無レ之候。乍レ去各御分別次第ノ由申候條、誰モ別テ可ニ申出一樣無レ之、何モ尤ノ由申サレ落去申候。サレドモ上ハ伊達ヘ付、内ハ相馬ヘ引候衆過半候。子細ハ田村ニ牢人衆ノ表立候衆、多分相馬衆ニ候。梅雪、右衞門大夫内々ハ相馬ヘ被ニ申

合一候間、相馬牢人衆ト被ニ申組一候。牢人傍輩ノ由申候テ、仙道、佐竹、會津ノ牢人モ梅雪、右衞門大夫ヘ念比ニ候。其樣子（宗脫歟）石川彈正本傍輩ニテ存前ニ候。當座淸顯公御意ヲ以、政。公ヘ御奉公申候ヘドモ、末々ハ身上大事ニ存其上御□□此末クサリテ文字不レ見不レ寫候。

伊達日記中

一四月五日之晩、大内備前不圖懸入候ニ付而、會津衆安積ヘニ被ニ罷出一、須賀川ヘ申合働候由、其聞候ニ付、片倉小十郎大森居申サレ候間、左右ヲ申候處ニ、則二本松ヘ被ニ罷越一、信夫ノ侍衆早々可ニ罷越一由、被ニ申觸一候ヘドモ、俄故カ一人モ不レ被レ參候。小十郎ト我等計本宮ヘ罷越候。高倉ヘ人數ヲ籠度由申候ヘモ、差置申ベキ者無レ之候間、我等八町目ノ家中モニ十騎餘、鐵炮五十挺差越候。四月十七日ニ高倉近江本宮ヘ參ラレ候。本二本松譜代ニテ、會津安積之事具ニ存候者ニテ候間、明日ノ働何方ヘ可レ有レ之由タヅネ候ヘモ、近江申サレ候ハ、會津須賀川衆計ニテ候條、千騎ニハ過申間敷候。會津ニモ境ノ衆ハ窕申マジク候。須賀川モ田村境ノ衆ハ參マジク候間、多人數ニハ有間敷候。大形本宮迄ハ働申間敷候。高倉ノ働ニ可レ有レ之由申サレ候。左候ハヾ此方ヘ

人數ノ手扱ニヨリ、觀音堂ヘ打上高倉ヘ助入申スベケレバ、見合次第ニ候。若又本宮之働ニ候ハヾ、此方ノ人數引籠候テ不レ出候者、定觀音堂ヘハ敵ノ備可ニ相立一候。下ヘ人數下候ハヾ尤ノ事ニ候。左ナク候ハヾ、少々内ヨリ人數ヲ出シ敵ヘ仕懸、敵ヲ町口迄引付、合戰ヲ始メ可レ申候。左候ハヾ羽田右馬助人數ヲ以先手ヲ仕、跡ヲ小十郎人數ニテ仕、我等人數ハ合戰ニ不レ搆、西ノ脇ヲ觀音堂ヘ押切候樣ニ人數ヲ可レ出候間、定而敵ノ足戸惡可レ有レ之候。左候ハヾ高倉ヨリ敵ノ跡ヲ付切申サルベク候。大勝ハ明日ニ可レ有レ之候。高倉ノ城高ク候間、何方ヘ働モ見エベク候。又高倉ヘ人數越候ハヾ、城ノ西ニ飛火ヲアゲ申サルベク候。本宮ヘノ働ニ候ハヾ、東ニ上可レ被レ申由申合候テ、高倉、近江ハ相返シ申候。十八日ニ高倉ノ城西ニ飛火上ゲ申候間、扨ハ高倉ヘノ働ト見エ候由、觀音堂ノ下迄人數ヲ打出候處ニ、又東ニ飛火上ゲ候。サテハ本宮ヘ働ニ候哉ト人數ヲ可ニ引返一ト申候ヘ𪜈、キヲイガ廻リ候間、此儘合戰可レ仕由申候間、備ヲ相立候。我等小十郎觀音堂ヘ打上見候ヘドモ、段々ニ人數押來候。鹿子田右衞門一騎先ヘ拔ケ候テ、足輕四五十人召連參リ候。石川彌平ニ申付候バ、鹿子田ヲ引拂可レ申候。スル〳〵ト參候ハバ、我等ハ下ヘ可ニ引下一候間、其乘參候ハヾ、本合戰可レ仕由申候テ、羽田右馬助人數ヲ足輕三十人餘指添候而越候處、鐵炮打合ソロ〳〵ト彌平、敵味方ノ境ヲ乘廻シ〳〵引上候間、右衞門初ハ一騎ニ候ヘドモ、後ハ十騎計、足輕百餘ニ成候テ、小十郎モ我等モ下ヘオロシ候ヘドモ、敵、彌平、右馬助者𪜈ヲ追立、觀音堂迄參候而人數ヲ敵カケ候。敵クヅレ候。右馬助小姓文九郎ト申、十六ニ罷成候者、馬上付候處ニ、取テ返シ候文九郎ヲ切候。歩ノ者二三人返シ首ヲ取候所ヲ、右馬助乘入、歩ノ者二人切候故、敵引除候。文九郎首ハ不レ被レ取、其内一人打取候。ヒトリ橋ヨリ此方ヘ越候人數ハ、備ヲホゴシ崩候テ橋ヲ逃越、又ソナヘヲ立ナヲシ候故、又被ニ押返一候處ヲ、田澤勘五郎ト申政宗公御小姓ニ候ガ、御勘當ニテワレラヲ賴ミ居候。馬ヲ立廻〳〵相除候。横ニ馬ヲ引マハシ候處ヲ、鑓持一人走リ懸リ、馬ノフト腹ヲ突候ト同事ニ、鐵炮肩ノモミ合ニ當被ニ打返一候。勘五郎下立具足ヲヌギ、家中共ニ相返、ソノ身ハ手鑓ヲ持、馬上ヲ一騎ツキヲトシ、則勘五郎ヲ頸カキ、我等ニ見セ申候。又本ノ觀音堂ヘ被ニ追付一候處、牛坂左近、右馬助、彌平三騎返合敵ヲ追返シ、ヒトリ橋迄追付、頸四十三取候。味方ハ三人被レ打物別申候。十七日ノ相談ノゴトクニ申候者殘リナク討可レ申處ニ、トビ違ヘ候而大勝不レ申候事、于レ今クヤシク存候。ソノノチ、トビノ事タヅネ候ヘバ、今日働ノ由シラセ可ニ申合一、西ヘ飛火アゲ申由申候。其ハ昨日知候事ニ候。不レ入事ト申候ヘドモ不レ返事ニ候。會津衆ハ一働申候而、片平助右衞門老母ヲ人質ニトリ、不ニ罷歸一候由後ニ承候。大形人質取申ベキ計ニ會津ヨリ被ニ

罷出一、働被レ申カト存候。マケハヅシ申サレ候而、若松ヘ引籠申サレ候。小十郎ハ廿一日迄本宮ニ居申サレ候ヘ𪜈、會津衆引コモリ候由申來候間、廿二日米澤ヘ被ニ罷歸一候。一田村衆相馬ヘ被ニ申合一候衆モ、尤伊達ヘ御奉公ノ衆モ、石川彈正逆心仕候間、政宗公御出馬可レ被レ成由被レ存候ヘドモ、一切其沙汰無レ之付、月齋、橋本刑部少、白石若狹ヲ以、米澤ヘ被ニ申上一候ハ、彈正逆心仕候間、則御出馬被レ成、御退候カト存候處ニ、左樣ニモ無レ之候。田村ハ過半相馬ヘ被ニ申合一候ヘドモ、政宗公御出馬ヲ機遣仕、事切不レ被レ申。彈正ハ義ヲ引出可レ申タメヲ以、事切仕候間、御出馬被レ成下サレ候樣ニト申上ラレ候。石川彈正逆心候間、則御出馬可レ被レ成候ヘドモ、寂上ノ御弓矢ニ候。イヅ方ニモ境目ニハ大名候ヘドモ、長井ハ寂上サカイニ小身モノ計サシヲカレ候間、米澤ヲ明御出馬被レ成候事御氣遣ニ候。其上彈正抱ノ地一ケ所モ取セラレズ候テ、一働二働ノ分ニテ御入馬ナサレ候事ハ、イカヾ思召レ候ニ付而、御延引ナサレ候由御意候。重而月齋、刑部少被ニ申上一候者、左樣ノ御底意ヲ世上ニテハ不レ存。一切御馬窕申サズ候由、田村侍𪜈存候者、無レ殘相馬ヘ可レ被ニ相付一候。何方ノ御弓矢モ左樣ニ御手ギハノ御座候儀ハ無レ之候間、久敷御在馬成間敷候。一働ナサレ御入馬候樣ニ申度候。御出馬ナク田村ノ者ドモ手切仕候ハヾ、我等切腹ウタガヒナキ由、シキリニ御訴訟申サレ候ニ付テ、左候ハヾ御出馬候テ、一調儀可レ被レ成由御意ニテ、御陣觸被ニ仰付一、大森ヘ四月十四日御出馬被レ成、五日御逗留ニテ、廿日鹽ノ松ノ内築飯ヘ被ニ相移一候。石川彈正抱ノ地築山、其身居候城小手森、彼地ハ鹽ノ松御手入候砌、御加增ニ下サレ候城ニ候。タフメキト申城ハ、相馬ノ境ニテ親攝津守居候。小手森ハ築飯近所ニ候間、小手森ヘ御働ナサレ候處、義胤ハ政宗公御出馬之由聞召、一日前ニ築山ヘ御出候。小手森ヘハ石川自身籠候。築山ハ相馬衆ニテ抱申候。政宗公小手森ノ地形ヲ御覽可レ被レ成由被ニ思召一、北ヨリ南ヘ御通被レ成候ヲ、内ヨリ鐵炮ニテ打候ヘドモ、被ニ召連一候衆ハ、鐵炮一ツモ御ウタセナク御通被レ成候。其日ハ被ニ打上一候。我等ハ、南筋氣遣候間、二本松ヘ其夜罷歸候。翌日天氣アシク候ヘドモ、築飯ヘマイリ候ヘバ、御働相止候間罷カヘリ候。日々參候ヘ𪜈天氣アシク御働無レ之、廿五日ニ大森ヘ御引コモリナサレ候。月齋、刑部少オドロキ申サレ候テ、白石若狹我等ヲタノミ申上ラレ候ハ、四五日モ御働可レ被レ成ト存候處ニ、天氣故トハ申ナガラ、一日御働御引コモリナサレ候。寂上境深御機遣ト見エ候由、田村ノモノ共存候ハヾ、伊達ヲタノミ入候モノ𪜈、心ガハリ可レ仕候間、責テ大森ニ御在馬被レ成、田村ヘモ長井ヘモ不慮ノ儀候ハヾ、御早打可レ被レ成由ニテ、大森ニ御在馬之由、諸人存候樣ニ仕度由被ニ申上一候ヘバ、兩人申サレ分尤ニ存、若狹同心申大森ヘ參、原田休雪、守屋守伯、

伊藤肥前、片倉小十郎四人衆へ月齋、刑部少申サレ候通申候處ニ、肥前申サレ候ハ、御訴訟ハ尤ニ候ヘドモ、如ニ御存知一長井ニハ大名一人モ無レ之候。境今モ少身衆計コメヲカレ、御出馬被レ成候。御早打ト申テモ、寂上境ヘハ大森ヨリ二百里ニ及候間不ニ御用一候。當地御在馬如何ニ存候由申サレ候。若狭被レ申候ハ、田村ノ様子ヲ大形ニ存ラレ候哉。月齋、刑部少御奉公被ニ存詰一候計ヲ以、先不レ被レ靜候分ニ候。大森ヲ御引籠ナサレ候ハヾ、兩人モタノミナク被ニ存分違一申義計ガタク候由申サレ候。肥前又申サレ候ハ、田村ヲ被ニ相抱一度被ニ思召一候テモ、長井ニ急事到來申テハ無ニ所詮一候。左候ハヾ以來田村ノ御抱モ不ニ罷成一候間、先本ニ急事ノ無レ之様ニ申度由被レ申候。小十郎申サレ候ハ、是ニテ問答入ザル事御耳ニ立、御意次第ニ被レ申然ルベキ由ニテ、披露ニオヨビ候處ニ、御意ニハ、尤兩人申處無レ據被ニ思召一候。此度ハ天氣故御不手涯ニ候間、大森ヘ御引籠被レ成、尤當地ニ御在馬被レ成、何方ヘモ御早打可レ被レ成候間心ヤスク存ラルベキ由仰出サレ候。罷歸若狭ヲ以月齋、刑部ニ申聞セ候。滿足申サレ候。

一大森ニ御在馬之内、高倉近邊ヲ御覽可レ被レ成由御意ニテ、五月十一日、日歸ニ前田澤迄御出、城之内迄御覽被レ成候。我等ハ御馬ヲ不レ存、本宮ニテ追付御供仕候。

一田村ニテ内々色々申分共候。月齋、刑部少被レ申候ハ、大森ニ政宗公御在馬被レ成、築山ニ義胤御座候。兎角羽方ノ衆ヲ入申事、イカヾニ候間、伊達衆、相馬衆トモニ如何様ノ御用候共入申間敷由、梅雪、右衛門大輔其外表立候衆ヘ相談申サレ候所ニ、イヅレモ尤ノ由申サレ候而片倉小十郎所ヘ兩人ヨリ内談申サレ候ニ付、御飛脚ニテモ不レ被レ遣候。

一相馬義胤築山ニ御座候間、其内彌田村衆被ニ申合一、御北様ヘ御内談ト相見エ候。五月十一日從ニ義胤一御使之由申候テ、相馬家老ニ候新館山城、中村助右衛門ト申者二春ヘマイリ、其夜町ニトマリ申候。イヅレモ下々ニ申唱候ハ、伊達衆ヲモ相馬衆ヲモ、二春ヘ入間敷由被ニ申定一、兩人衆參ラレ候バ、明日義胤御見廻候様ニ、御出城ヲ御取被レ成候由申候。十二日早天ニ山城助右衛門、城ヘ罷上候。刑部少ハ切腹ト存詰、未明ニ參、三人共ニ奥方ヘ參酒ヲヒカヘ居申候。刑部少ノモノ𪜈五人三人宛、鐵炮弓鑓武具持候而城ヘ入候。月齋、梅雪、右衛門太輔ハ不レ被レ參候。助右衛門、山城者モ五十人計城ヘ參候ヘ𪜈、道具ハ不レ持候。義胤御出候由申ニ付、内ヘ入候者𪜈、役所付候様ニ居候。梅雪其時城ヘ上申サレ候。奥方ヨリ刑部被ニ罷出一候。義胤者城ノ下迄召懸候。宵ヨリ大越ノ人數城ノ東ノ林ノ内深キ谷ヘ、七八百程鐵炮弓鑓ヲ持引付置候。然ル所ニ刑部少輔、梅雪ノ手ヲ取、兼テ伊達衆ヲモ相馬衆ヲモ、入間敷由被ニ仰合一、義胤ヲ入御申可レ有レ之哉ト申候ヘバ、梅雪イヤ〳〵入申間敷由申サレ候。兼而梅

雪モ御見廻候様ニテ、城ヲ爲レ取可レ申由被レ爲ニ申合一候ヘドモ、刑部少大功ノ者ニ候間、入可レ申由申候ハヾ、卽可レ被レ打ト被レ存、入間敷トハ申サレ候ト見エ申候。刑部少其言ニ付、具足ヲ著申候ニ付、何モ城ヘ入由、者ドモ武具ヲ著モフシ候。義胤城半分程被ニ召上一候處ニ、鐵炮弓ヲ打懸防候間、御供衆三十騎計袴懸ニテ、被ニ召連一候ヘ𪜈不ニ罷成一、義胤御馬ノ平頸ニ鐵炮アタリ、其ヨリ召廻シ、東ノ小口ヘ御出候ヘ𪜈、彼口モ其通殊ニ地形悪候故不レ成候。御跡ニ馬上三百騎餘武具ニテ鐵炮モ多被ニ召連一候ヘ𪜈、遲候而不ニ用立一、築山ヘモ無ニ御歸一、直ニ相馬ヘ被ニ引除一候。大越伊賀守罷出被ニ御立寄一候ヘト申候ヘ𪜈、直ニ御歸候。新館、中村ハ城ニテ可レ討カト存候テ、ケ様ニ御色立可レ有義ニナク候。御出御無用之由可レ申トテ足早ニ出候ヲ、鑓ヲ付懸候ヘ𪜈、刑部少無用之由申候テ押出、城ハ堅固ニ持候。田村ヨリ若狭所ヘ其段申來候間、早馬ヲ以大森ヘ申上ラレ候條、夜ノ四ツ過ニ相キコエ、則御早打被レ成、若狭居城宮森ヘ、翌日五ツ時分被ニ召著一、伊達信夫之人數參ニ築山一兩日御働被レ成候。田村ニ人數入候儀、難レ計由御意ニテ、我等ハ十二日白石ヘ早打仕、ソノマヽ被ニ指置一候間、兩日御供不レ申候。十六日ニ小手森ヘ御働候間、可レ參由被ニ仰下一候條、小手森ヘ參候處ニ、城ヲ召廻御覽被レ成、御責可レ被レ成由被ニ仰付一。我等ハ築山ヨリ助ノ押ヘニ被ニ差置一候。其外ノ御人數御旗本衆迄被ニ相放一、御責被レ成候而落城仕、放火ナサレ候。今度ハ取散ニ仰付ラレ、宮森ヘ被ニ打返一、翌日田村ノ内大藏ト申城、田村右衛門弟彦七郎ト申衆居申サレ候。心替申候衆數多候ヘ𪜈、手切不レ被レ申候。此彦七郎ハ築山ヘモ節々參、今度義胤二春ヘ御越候御供モ仕候而、彦七郎城ヲ御責ナサレ候。小口懸ヲ被レ成、町ヘ引コモリ候カラ家モ十計燒セラレ候ヘドモ、内ヨリ一騎一人不ニ罷出一、脇ヨリ助ノ衆モ無レ之候處ニ、卜雲ト申田村ヨリ出家參ラレ候。彼出家ヲ以、月齋我等賴入御侘言申サレ、罷出ラルベキニ落居申候ヘドモ、日暮候テ宮森ヘ被ニ打返一候。惣人數ハニシト申所ニ野陣仕候。ツギノ日ハ石澤ニ相馬衆コモリ候。御働可レ被レ成由、被ニ打出一候處ニ、彦七郎罷出ラレ候事オソク候間、大藏ノ道ツルイニ惣手備ヲ立不ニ罷出一候者、御責可レ被レ成由仰付ラレ候處ニ、彦七郎罷出御目見エ申サレ、石澤ヘノ御先手被レ致候。石澤ハ田村ノ内ニテ小地ニ候ヘ𪜈、城能相馬衆相抱候而、人數モ多見エ候間、近陣可レ被レ成由ニテ、其夜ハ西ト申城、若狭抱ノ地ヘ御在馬可レ被レ成由被ニ仰付一候處、可レ然家無レ之ニ付、俄ニ東ノ山ニ御野陣被レ成候。然ル處ニ大雪仕、何モ迷惑申候處ニ築山ニ、火ノ手見エ候間、物見ヲ遣候所、築山引除候而、一人モ不レ居由申上候。石澤モ可レ除候間、イソギ人數ツカハサレ候處ニ、軍勢參ラズ候。先ニ引ノキ候彈正親居候トウメキモ引除候。彈正抱ノ地ノコリナク落居、田村ノ内二ケ所相濟、

宮森へ被二打返一御在馬ナサレ候。
一月齋、刑部少ハ申ニ不レ及、梅雪、右衞門大輔其外相馬へ申合候衆モ、表立候衆ノ分宮森へ參、石川彈正御退治被レ成、田村迄カタマリ目出度由、被二申上一候。其内常盤伊賀守各相談ノ砌、伊達へ可二賴入一由、申出候付、何モ其ニ落居ノ由被二聞召一、御大慶ニ被二思召一候由御意ニテ、金ノシ張ノ御腰物被レ下候。
一田村月齋、梅雪、右衞門大輔、橋本、宮森へ被レ參、小十郎、伊藤肥前、原田休雪ヲ以申上ラレ候ハ、大越紀伊守事、始ヨリ田村へ出仕不レ仕、今度謀逆モ止候。彼二人引コモリ居申候。彼城ヲ被二取消一候樣ニ仕度由申上ラレ候。御意ニハ、急而大越仕樣共具ニ被二聞召一、口惜被二思召一候。乍レ去一働ニテ落城仕義、計ガタク被二思召一候。左候ヘバ佐竹義重、安藝表ヘ近日御出馬之由被二聞召一候間、若彼城ニ御手間ヲ被レ取、其内義重出馬候ハヾ、彼城卷ホゴサレ候事如何ニ候間、御ハタラキ被レ成マジキ由御搖挨ニ候。又々申上候ハ、佐竹殿ハ御出馬必候ハヾ、御近陣持ハ御無用ニ候。一働ハ被レ成被レ下候樣ニト被レ申ニ付、御代官ヲ以御責可レ被レ成由ニテ、我等ヲ被レ爲レ呼候間、本宮ヨリ宮森ヘ參候ヘバ、田村衆大越可レ被レ働御訴訟申上ラレ候。近日義重安藝表ヘ出馬之由被二聞召一候間、其身ヲ御代官トシテ大越ヘ御働可レ被レ成候間、可二罷越一候由被二仰付一候。安積筋ヘハ義重御出馬之儀未レ承候。何方ヨリ申上ラレ候哉ト申上候ヘドモ、御前ノ衆被二相拂一、須賀川須田美濃所ヨリ申上候由御意ニ候。拙者申候ハ、存之外ニ候。美濃ハ無二佐竹ヘ御奉公之由承候。扨ハ此方ヘ被二申寄一候哉ト申上候ヘバ、兩度人ヲ遣候。初ノ筋ハ悪候間機ヅカヒ候。重而モ御意ニ候ハヾ、此筋ヲ以可レ被二仰下一由申上候而、佐竹義重ノ出馬ノ儀モ申上候而、其砌石川大和ヨリ八大ト申山伏ヲ飛脚ニ被二差越一候。其山伏ニ御タヅネナサレ候モ右ノ通申候。和州ヨリハ其沙汰無レ之由御意候。則罷歸兩日支度申、舟引ヘ罷越、大越ノ働候請持ノ町搆引籠、二三ノ樞計持候間、此方ヨリモ可レ仕樣無レ之引上候。政宗公モ御隱候而、御出ナサレ候。然ル處ニ小野鹿伐ノ人數東ヨリ働候。北ノ伊達衆引上候付而、鹿伐衆ヘ出合、合戰候而、頻ニ鐵炮ノ音仕候間、惣人數ヲ打返、内々人數ヲ押切候間、方々ヘ追散、頸三十計取引上候。翌日政宗公、宮森ヘ御歸、御人數モ被二相返一候。
一天正十六年六月十日比、佐竹義重公、會津義廣公被二仰合一、岩城常隆公ノ人數五百騎御加勢、彼是安積ヘ御出馬候。政宗公被二聞合一、高倉ガ本宮ヘ可レ被レ爲レ働由、被二思召一、十二日宮森ヲ御立、二本松ノ杉田ヘ御馬ヲ被レ移候。本宮ヘ御働候而、杉田ヨリ助ノ御人數指曳可レ被二仰付一由ニテ、御在馬候ヘ𪜈、一圓御人數少ニ候。子細ハ寂上、大崎、相馬御敵ニ候間、其境ハ助懸之衆迄、御人數一人モ不レ被レ爲レ呼候。

佐竹ノ人數四千騎可レ有レ之カト申唱候。初日ニ悪戸ヘ御働、其後郡山ヘ御働候而、本宮ヘ御働ハコレナキヨシ被二思召一、惣御人數ハタカクラニ被二差置一、政宗公窪田、山王山ヘ兩日被二召上一、御覽被レ成候。シカル處ニ佐竹アイヅノ野陣、郡山近所ヘ被二相寄一、近々ト働候。右ヨリ郡山警固被レ爲、鐵炮二百挺、馬上卅騎被二相籠一候。奉行大町宮内少輔、中村主馬、鹽森六郎左衞門、小島右衞門被レ遣候。太齋金七ハ物頭ニハ無レ之候ヘドモ、申請入候。其時分ハ山ヘノ通路モ能候間、郡山太郎左衞門參ラレ、郡山ハ可レ爲二近陣一カト見エ候。乍レ去今ニ被二取詰一候儀ハコレナク候。左樣ノ儀候ハヾ、追而可二申上一由申サレ罷歸ラレ候。翌日ハタラキ候而、西ノ臺ニ土山ヲ二ツ築、小旗ヲ立、町ヲ見下、鐵炮打候。此方ヨリモ近陣ト見エ候ト何モ見申、郡山ヨリモ左樣ニ申上ラレ候ニ付、十四日ニ山王山ヘ御出御覽被レ成、安積山ニテ御相談ニテ、御評定ノ衆ハ桑折点了、小梁川ティハン、白石若狹、我等、濱田伊豆、原田左馬助、富塚近江、遠藤文七郎、片倉小十郎、伊藤肥前、原田休雪、以上十一人、点了、ティハン、本ハ似合ニ候。子共名代相渡御相伴、又御弓矢ノ御相談衆ニ候。伊豆左馬助、近江文七郎ハ御宿老ニテ候。文七郎親山城ハ輝宗公御代ニ出身仕候。御父子御弓矢ノ時分、御洞取ミダシ候ヲ、山城分別ヲ以取納候。然ル處ニ輝宗公不慮ノ御他界ノ砌、山城ハ煩ニテ御供仕ラズ候。御葬禮ノ一日前追腹仕候。文七郎ハ其子ニテ十七歳ニ罷成候。政宗公被レ仰候ハ、郡山ハ近陣ト相見エ候。落城ウタガイナク候條、御對陣可レ被レ成由被二思召一候。如何樣ニ被レ存候哉ト御意候。点了申上ラレ候ハ、御尤ニ候ヘ𪜈敵ハ多勢、味方ハ六百騎ニハ御過申サズ候トテ、御對陣可レ被レ成候。若御陣所ヘ合戰ヲ仕懸候ハヾ、勝利ヲ可レ被レ失候由申上候ニ付、多分点了被レ申分尤ノ由申サレ候間、其日ハ落居申サズ候。
十五日ニ政宗公山王山ヘ御出御覽被レ成候。又御相談候テ、御意ニハ山王山ヘ召上ラレ候間、敵御小旗ヲ見知可レ申候條、郡山落城仕候ハヾ、御家ノ疵ニ成候。御弓矢ノ勝負ヲ以御滅亡ハ、世上ノ習ニ候間、是非共御對戰可レ被レ成由被二仰出一候。ティハン被二申上一候ハ、相馬義胤、田村ヲ御取可レ有由思召、多分田村衆引付ラレ候。御本丸ノ御北樣モ被二仰分一候ヘ𪜈、橋本刑部一人切腹ヲ存詰、御本丸ヘ參、義胤ヲ入不レ申候故、御取樣候ヘ𪜈、各申組候衆ハ手切ヲモ不レ仕、今ニ城ヲ持、御後ニ被二差置一御對陣、無二御物躰一候。乍レ去可レ被レ得二大利一御見當モ候バ、不レ及二是非一由被レ申候。御意ニハ、窪田、福原、高倉引續味方ニ候。縱田村ノ内ニテ悪事出候ヘ𪜈大川ヲ隔、其上窪田、福原、高倉、郡山城主共人質ヲ取候。對戰極候者城ヲ持替、手前ノ以二人數一可レ抱候。本宮、二本松ハ成實抱候間、無二機遣一候。縱陣破候𪜈、本宮迄卅里ノ道ニ候間、引除候𪜈急事有間敷

候。是非共御對戰ト被二思召一由御意候。御尤ト存衆モ候。又如何ト申衆モ候ヘ𪜈、名ニ疵付候ヨリ、滅亡不レ及二是非一由被二仰出一候間、是非不レ被レ申候。左馬助被二申上一者、左候者、御陣場何方ニ候ハン。伊豆被レ申樣ニ、澤沼ヲ後ニ當面ノ原ニ御陣被レ成然ルベキ由ニ候。肥前申サレ候ハ、大軍小勢弓矢作法ハ、小人數ニテ場好ニ御陣然ルベカラズ候。惡所ヲ當若合戰ニ利ヲ御ウシナヒ候ハヾ、除口ノ能地形ヲ御見當然ルベク候。大軍取廻被レ働候ハヾ、御合戰被レ成ニテ可レ在レ之候間、窪田ヲ前ニアテ、福原ノ前ニ御陣被レ成候ハヾ、御合戰モ被レ成能可レ有レ之由被レ申候。小十郎モ肥前被レ申候御陣場、可レ然由申サレ候。伊達被レ申候ハ、山王山ヘ上ハタラキ候ハヾ、御無人數ヲ被二見切一可レ申由。肥前守又申サレ候ハ、御人數ヲ被二見切一候ハクルシカラズ候。合戰被レ成能地形然ルベク候。福原前ハ縱合戰ニ越度御取候共、福原ヘ御引籠候ヘバ、近々由被レ申ニ付、福原前ニ落居仕候。肥前申サレ候ハ、今度御對陣ナサレ候ハヾ、郡山ノ御助ニ候間、御合戰ハ返々御無用之由被レ申候。政宗公被レ仰候ハ、肥前申處尤ニ候。敵ハ大軍、味方ハ小勢ニ候間合戰ハ、不レ入儀ニ候。乍レ去郡山筋ニ對陣ヲ張、彼地落城候テハ無二面目一儀ニ候間、郡山ノ手詰ニヨリ、有無ノ合戰ヲ彼レ成、郡山衆ヲ窪田ヘ可二引取一由、仰ラレ候ニ付而、何モ御意尤ニ候。末ニハ有無ノ御合戰可レ被レ成候。若御合戰無レ之儀、目出度コトニ可レ有レ之由被レ申候。彼肥前ハ名譽ノ者ニテ、惣圍扇休雪、肥前ニ被二仰付一候者ニ候。窪田ノ城ハ飯坂右近、大嶺式部、福原ノ城ヘハ瀨上中務、高倉ノ城ヘハ大條尾張被レ遣候。本丸ヲ可二請取一由被二仰付一候。明日御對陣ト被二仰出一候。其晩本宮ニ御在馬、十六日未明ニ被レ打出、福原前ヘ御備ヲ立ラレ、ソレ〴〵ニ陣場割ヲ被二仰付一候。我等ニ御直ニ御意被レ成候ハ、働候者山王山續ニ可レ有レ之候。窪田ノ方ハ植田ニテ水懸リ候間、一戰候ヘ𪜈成間敷候。其北ノ方原ツヾキニテ場能候間、彼口ヨリ可二仕懸一候條、其所陣所ニ可レ仕候由、御山、意ニ候間、罷越見申候ヘバ、如二御意一之原ツヾキニテ、一戰場此筋可レ有レ之由存候間、人數ヲ繰出シ陣場割仕候處、郡窪田ノ間ヘ働候敵ノ人數引返、山王山ヨリ段々ニ押備ヲ立、一戰ヲ持懸候ヘ𪜈、御無人數ニテ、合戰大事之由何モ申サレ候間、我等備ヨリ一人モ不レ出候故、合戰無レ之被二引上一候。陣場ノ前ニ用水堀御座候ヲ當ニ取、其日ハ陣屋ヲモ不レ懸、二重ニ五尺アマリニ芝築地ヲ付、明日働可レ有レ之カト相待候處ニ、十七日ニモ働無レ之候間、又二重ノ築地ヲ八尺計ニツキ、陣場ノ廻ヲ堀二重ニ堀懸日暮候。十八日ニ普請打立候處ニ、働御座候間致二支度一罷出、二重ノ築地ノ内ニソナヘヲ相立候。水田ノ前ハ田村孫七部殿、同月齋、片倉小十郎陣場ニ候。味方モ武立、我等ノ陣場、田村衆、小十郎陣場之後ヘ惣備ヲ被二打出一候。敵一戰ヲ持候テ、會津ノ者ニ尾能因

幡ト申者、人數二三百人召連、山ノ根用水堀ヲ埋サセ路ヲ扱候間、我等家中ニ鐵炮能打候モノ八人申付打可レ申候。若敵參候ハヾ不レ構引除候ヘト申付候ニ、二三度參打候ヘバ因幡腕ヘ當リ引上候。其後ハ普請モ仕ラズ、惣ノ鐵炮ニテツルベヲ爲レ打被二引上一候。保土原江南、濱尾善齋、其砌ハ會津ヘ奉公候間、先手ヲ申サレ候衆ニ候。須賀川破候砌ヨリ政宗公ヘ御奉公被レ申候ガ、物語ニテ承候ハ、十七日ニモ可レ有二御働一候ヘドモ、三日ノ御働ニ人數モ草臥候間、一日御休息候テ、十八日有無ノ御合戰ト思召候處ニ、合戰場ト思召候地形ニ築地ヲ築、堀ヲリ、城ノゴトクニ相構候間、先路次ヲツクリ候ヘト、尾能因幡ニ被二仰付一候。須賀川衆ニ先手ヲ仕ルベキ由仰ラレ候。須田美濃、矢部下野、保土原江南、矢田野伊豆、濱尾善齋、何レモ申サレ候ハ、敵ノ陣場普請モ無レ之候者、御先手ヲ申衆候テモ一仕候ガ、二重三重ノ普請ト見エ候處ヘ、何トモ仕懸申ベキ樣無レ之由申上ラレ候。重而義重仰ラレ候ハ、縱者普請候共、敵小勢ニ見エ候間、御合戰ニ不レ被レ得二大利一義ハアル間敷候。是非御手先ヲ仕ルベキ由御意ニ候。重而須賀川衆申サレ候ハ、縱須賀川衆打死仕候テモ、御合戰ニ大利ヲ得ラレ候樣ニ、能ニノミヲ仰付ラレ候ハヾ、御先手可レ仕由申上ラレ候。義重公會津衆ヲ被二仰付一ベク候由、御挨拶ニ候。須賀川衆ハ岩城衆ヲ仰付ラレ然ルベク候。左ナク候ハヾ御先手仕間敷由申サレ候。義重被二仰付一候ハ、岩城衆ハ此度首尾計ヲ以、加勢ニ被二差越一、衆ヲノゾミ申候ハ難題ニ申上候。是非共先手可レ仕由仰ラレ候ヘ𪜈、何ト御意候トモ迷惑之由申サレ候。然ル處ニ川井甲斐守、東中務ヘ近寄被レ申候。今日ノ御合戰被二相止一然ルベク候。成實陣場堀ノ如ク普請ヲ致候。南ハ窪田水カヽリ候而ヒタ白ニ候間、旁御合戰被レ成苦敷候。其上合戰始候ハヾ、窪田、郡山ヨリモ可二罷出一候。押ヘハ被二指置一候ヘドモ、兩所ヨリ罷出跡ニテ合戰候ハヾ、御先手ノ戰仕苦ニ可レ有レ之候間、被二相延一、近々御取詰可レ然ル由被レ申ニ付、尤之由被レ存、義重ヘ其通申上ラレ候ニ付、御合戰ハ相止、惣ノ鐵炮ヲ集、ツルベヲ爲二御打一被二引上一候由物ガタリ申サレ候。十九日、廿日ハ何事モ無レ之郡山ヘモ自由ニ通路ヲ仕候。廿一日ニ敵足輕ニ奉行計被二付置一、郡山ト窪田ノ間、少堀ヲ堀、鐵炮ヲ差置、郡山ノ搆鐵炮ヲ打懸候間、通路ヲ仕苦成候。廿三日、敵惣手ヲ郡山、窪田ノ間ヘ打下、取出ノ城ヲ普請被レ成候。政宗公モ窪田ヘ御出馬候ヘ𪜈、無二御人數一間其防モ被レ成候。伊達上野足輕ヲ少出シ端合戰候。太和田佐渡御旗本衆ニ候ヘ𪜈、罷越合戰ニ會、鑓疵太刀疵ヲ請高名仕候。御法度背候間、曲事ニモ可レ被二仰付一カト存候處、無二比類一仕候條御免被レ成候而、其日首ヲ御覽被レ成候。敵取出ヘ人數ヲ籠置候間、通路不自由ニ成候。又廿六日ニ敵惣人數ヲ打出、廿七日ニ取出被レ成候。東ノ方ニ又取出ノ普請ヲ被レ成、

定番ニ片平助右衞門ヲ被ニ差置一候。其上會津四人ノ宿老衆、日替ノ番手ニ居被レ申候。我等申上候ハ、御陣取ノ時分御合戰御無用之由、何レモ申上ラレ候ヘ共、郡山通路ヘ取出ノ城ヲ二ツ築候ヘバ、早通路不レ成候間、御合戰然ルベク候。縱少ノ内ハ候共、御對陣ノ驗之由申候ヘバ、休雪、肥前抔申サレ候ハ、若候故左樣ノ義申サレ候。此御人數ニテ何トテ御合戰可レ被レ成候哉。返々合戰ト存間敷由申サレ候間、不レ及ニ是非一候。サリナガラ見合申度存候ヘ共、無ニ仕合一罷過候。

一窪田ニモ外ヤライ被レ成然ルベキ由ニテ、窪田ノ川ヲ外ニ被レ成、堀ヲホリ、土手上垣ヲ御ユワセ候。其ヤライ番可レ被ニ仰付一由ニテ、人數持申サレ候衆、鬮取ニ被ニ仰付一候。濱田伊豆、富塚近江、原田左馬助、遠藤文七郎、片倉小十郎、白石若狹、我等三人ハ御前ヘ不ニ罷出一、後付ニ鬮ヲ御トラセ候。白石若狹ト小十郎一組、文七郎ト近江一組、左馬助ト伊豆一組、孫七郎殿ト我等一組ニ候。然ル處ニ小十郎被ニ申上一、鬮取ノ義ニ候ヘドモ、成實ト御組合可レ被レ下由被ニ申上一組ヲ替候間、我等ハ小十郎ト同番ニ罷成、若狹ト孫七郎殿同番ニ成候。惣御陣中ニテ小十郎相手ヲキラヒ、成實ト組合候間、此番ニハ合戰可レ仕ト小十郎存候哉ト唱候。七月二日近江文七郎番無事ニ候。三日ニ孫七郎殿若狹番ニテ無事故、四日小十郎我等番ニテ、早天ニ窪田ヘ罷越請取候。

於ニ陣中一今日ハ小十郎成實番ニ候間、必合戰可レ有レ之由ニテ、イヅレモ早々ヨリ支度仕ラル、由ニ候。然ル處ニ小十郎我等役所ヘ參ラレ候。我等申候ハ、御對陣始ハ郡山手詰ニ候ハヾ、御合戰可レ被レ成由落居候。早通路不自由ニ成候間、合戰可レ仕候。無レ左候テハ御對陣ノシルシ無レ之由申候。小十郎申サレ候ハ、尤ニ候ヘドモ敵大軍ニ候間、合戰大事ニ候。通路ハ不自由ニ候ヘドモ、郡山ノ手詰程ノ儀ハ無レ之候。以來手詰ニ成候ハヾ、是非御合戰然ルベキ由申サレ候。我等家中遠藤駿河ト申者申候ハ、敵取出之番平田左京小旗ニ候。會津ヘ細々使ニ罷越、懇切ノ由申候ヘバ、小十郎左候ハヾ矢文ヲ越可レ申候。左京亮所ヘ矢文敵地ヨリ參候由申上候。疑心可レ申候間悪道ニハ無レ之由被レ申候間、小十郎文言ニテ先年爲ニ使者一若松ヘ伺公仕候砌、別而御意被レ下不レ淺候。何角打過候處ニ、御弓矢ニ罷成、不レ得ニ御意一候。今日相近ニ罷有候ヘドモ、御世上柄故不レ懸ニ御目一、御床敷存候。窪田ヤライノ番ニハ小十郎、成實參ラレ候。御手ノ御番ト見エ申御太儀ニ存候。御和睦被レ成遂ニ貴面一度存候由書申、矢ニ候。結付、一人越招候間、射申候ヘバ、其矢ヲ取内ヘ入、又扣射返申候。返事ニハ如レ仰ノ相達シ候ヘドモ、不レ懸ニ御目一御殘多由如何ニモ諫早々書申サレ候。小十郎推量ノ如ク機遣候哉ト存候。其返事政宗公ヘ可レ懸ニ御目一由申サレ、其身ハ役所ヘ持歸申サレ候。然處ニ永沼ノ城主新國上總、馬上五六騎、步之者百計ニテ郡山南ヨリ東ヘ通、北ノ取出ト窪田ノヤライ間ヲ通候。我等アヅカリノ所ニテ候間、能合戰ノ中立ト存、上總ヲ取出ノ内ヘ追入候。小十郎モ同前ニ人數ヲ越申サレ候。兩取出ヨリ打出合戰始候。敵勢無レ殘助合、政宗公御人數被ニ召連一、朝五ツ時分ヨリ八ツ時迄合戰ニ候。敵ノ首二百餘打取、味方モ六七十人被レ打候。敵ノ取出ヘ二度迄追入候ヘドモ、味方ハ一芝モ不レ被レ取打上候。政宗公ヨリ御使ヲ被レ下、定テ家中ニ手負死人候テ草臥候ハン間、番替ニ左馬助遣ハサレ候間、小十郎我等ニハ可ニ罷歸一由御意候條、兩人衆ヘヤライ番渡シ罷歸候。家老ノ面々、田村月齋、我等モ御前ヘ被ニ召寄一、今日合戰被レ得ニ大利一候間、以後ノ覺ノタメ、明日會津佐竹陣所ヘ御働可レ被レ成由御相談ニ候。原田休雪被ニ申上一候ハ、惣別御對陣御無人數ニテハ御大事ニテ候間、不レ入義ニ候ヘドモ、頻ニ御對陣ト被ニ思召一候條、何レモ尤ノ由申上ラレ候。御合戰ハ御ツ、シミ可レ然由申上ラレ候ヘドモ、今日不慮ニ合戰得ニ大利一、唯今迄殘ル所ナク候。若明日御働被レ成、敵ハ大軍ニ候間、手分ケヲ仕、三口四口ヨリ合戰ヲ持懸候ハヾ、御人數少ニテ如何可レ有レ之由申サレ候。月齋モ休雪申サレ分尤ニ存候。今日ノ御合戰被レ得ニ大利一候間、御働被レ成候ニモ增申候御覺ニ候。若御急事モ候ヘバ、跡々ノ事モ消エ申候間、御働ハ御無用ニ存候由申サレ候。多分月齋、休雪申上ラレ候通尤ノ由申上ラレ候。御働キナサレ樣ニテ御合戰無樣ニ覺バカリニ、御働可レ然由申上ラレ候衆モ候ヘドモ、兎角御大事强候間被レ相止一候。其後我等所ヘ御自筆ノ御狀被レ下、今日ノ合戰手柄比類ナク候。大軍ノ勢ヲ取手ノ内ヘ追入、定家中數多手負死人モ可レ有レ之候。明日ノハタラキ憶病異見ニ被レ任被ニ相止一候事、無念ニ思召候由被ニ仰下一候。岩城常隆公ハ義重伯父、義廣ハ御從弟ニ候。政宗公モ御從弟ニ候。天正十三年霜月、本宮ヘノ御働ニハ、常隆公モ義重公ト御同陣被レ成候ヘドモ、御骨肉ノ間ニ御座候間、トカク御笑止ニ思召候。今度ハ無ニ御出馬一御無事ヲ御取扱被レ成度由ニテ、石川大和殿ヘ被ニ仰合一、義重公ハ妹聟、政宗公、常隆公、義廣公ハ姪ニテモ双方難レ分御間ニ候ヘドモ、其砌ハ會津佐竹ヘ御一黨ニテ、郡山表ニ御同陣ニ候。自岩城佐竹御陣所ヘハ白戸攝津守、伊達御陣所ヘハ志賀カンテウ（マヽ）齋被ニ差越一、御無事ノ御取扱ニ御座候。始ハカンテウ攝津守モ双方ヨリ人ヲ出シザイヲ以テマネギ、ヲクリヲ以罷通候。其後ハ義重公、政宗公ヘ申上ラレ、先弓鐵炮打候事被ニ相止一候。取手城ノ番、窪田ヤライ番モ如ニ跡々一仕候ヘバ、鐵炮ハ打不レ申。左候ハヾ、八月初ニ御無事相濟、自今以後跡々ノゴトク御入魂可レ然由、常隆公御異見ニテ、双方ヨリ御代官ヲ以、御對面被レ成候後、大和殿、政宗公御陣所ヘ御越御會被レ成候。佐竹御家中小野崎彦次郎我等所ヘ使ヲ預リ、政宗公ヘ御禮申度由ニ候條、得ニ御

意ニ候ヘバ、可レ被レ會由御意ニテ候間、我等陣所ヘ參ラレ候ヲ、同心申御目見エ濟申候。其上八月十六日、御陣拂仰出サレ、双方トモニ御陣ヲ被ニ相除一候。政宗公ハ田村ノ御仕置ノタメ宮森ヘ御入馬被レ成候。

一寂上トハ御弓矢ニ候ヘドモ、被ニ相捨一御對陣被レ成候處ニ、寂上ヨリ伊達ヘノ弓矢成間敷ト被ニ思召一候哉。政宗公御老母ハ義顯公御姉ニテ候。御東ノ上ト申候。義顯公ヨリ御内證モ候哉。御東ノ上、寂上境中山ト申所ヘ御出、政宗公ト御和談ノ御取扱相濟候。依レ之大崎、新沼ニオイテ爲ニ諸勢之人質一相渡、最上ヘ被ニ引越一候。泉田安藝守ヲ寂上ヨリ被ニ相返一、郡山御對陣ノ所ヘ參ラレ、政宗公則御前ヘ被ニ召出一、御奉公仕苦勞申サル、由御意候而、御腰物大小、御小袖十、御馬一匹下サレ、安藝守事之外過分之由申候。

一八月十九日、田村月齋、梅雪、右衞門太夫、橋本刑部少、宮森ヘ參ラレ被ニ申上一候ハ、今度義胤三春ヲ御取有度由被ニ思召一候ハ、本丸ニ御北樣御座候故被ニ仰合一候。兎角御北樣ヲ御隱居爲レ成ニ御申一、政宗公御若君御出候迄、誰ゾ御番代ヲ被ニ仰付一可レ然由申上ラレ候。政宗公モ内々左樣ニ思召サレ候處ニ申上ラレ候間、卽御合点被レ成、田村孫七郎殿ハ清顯公御舍弟善九郎殿ト申之御子ニ候間、是ヲ番代ト被ニ思召一候。如何可レ有之由御意ニ候。右四人ノ衆、尤御番代ヲ伊達ヨリ遣ハサレ候ハ不レ存。田村親類ニ孫七郎ノ外ハ無レ之候間、尤然ルベキ由申サレ候。左候ハバ御北樣御隱居所ハ、何方然ルベク候哉ト御タヅネ候ヘドモ、右四人申サレ候ハ、平屋敷持ハ如何候。タヾ今田村右衞門大輔居申候船引ノ城ヲ明サセ、指置御申可レ然由申サレ候ニ付而、則右衞門ニ仰付ラレ候ヘバ、尤早々明可レ申由申サレ候而、四人衆ハ被ニ罷歸一候。誰モ御使ヲ以隱居、尤孫七郎御番代之義モ被ニ仰付一然ルベキ由申合候付而、白石若狹、片倉小十郎、守屋守伯三人ヲ三春ヘ被レ遣候。右四人ノ老衆ヲ以、御北樣ヘモ尤孫七郎殿ヘモ被ニ仰渡一候。右四人ノ老衆又參ラレ候而、迚モ孫七郎殿ヘ御一字ヲ下サレ候樣ニト申サレ候ニ付、宗ノ字ヲ被レ遣宗顯ト申候。

一御北樣モ舟引ヘ被ニ相移一、孫七郎殿モ三春ノ城ヘ御ウツリ候條、米澤御歸城可レ被レ成由、被ニ思召一候處ニ、月齋、刑部少、小十郎ヘ申サレ候ハ、今度義胤三春ヲ御取有ベキ由被ニ思召一候ハ、宰人衆ヘ申合サレ候故、晋代衆モ多分被ニ申合一候。此前會津ニテモ宰人拂ヲ被レ成候而、御洞シマリ申候。田村ノ宰人ハ大形相馬晋代衆ニ候間、宰人拂ヲ仰付ラレ候ハバ、彌田村ハ安泰ニ可レ有レ之由、申サレ候ニ付而、原田休雪、片倉小十郎御使トシテ月齋、梅雪、右衞門大輔、刑部少ヘ其通被ニ仰屆一候。此宰人衆ハ梅雪、右衞門大夫ヘ申合、相馬ヘ御奉公可レ申由申、組々ヲ政宗公努々御存知ナク、被ニ仰屆一候故、梅雪、右衞門大夫跡ヨリ被レ申。組々宰人譜代トモニ三十八人同心候而、小野ノ地ヘ被ニ引除一候。其外御譜代衆ニ申合候衆數多候ヘドモ、不レ被ニ相除一候。政宗公モ、ケ樣之儀ハ存候者、連々御仕置可レ被レ成物ヲト被ニ思召一候ヘドモ、無ニ是非一候。月齋、刑部少分別ニ宰人ヲ御拂候ハヾ、梅雪右衞門モ引除可レ申候。左候ハヾ田村衆心易、孫七郎殿ヲ取立、兩人仕立可レ申ト存、小十郎ヘ申サレ候ト存候。就レ其御歸城モ不レ被レ成、政宗公爲ニ御仕置一三春ヘ御馬ヲ被レ移、三十日アマリ御在馬被レ成候。然ル所ニ大越紀伊守、右衞門大輔、梅雪父子、相馬ハ相捨、岩城ヘ被ニ申寄一候。常隆公御入魂之儀ニ候間、若松紀伊守ト申衆三春ヘ遣ハサレ、今度梅雪、右衞門大輔、田村ヲ引除候。我等迄口惜思召候。乍レ去兩人ハ清顯親類ノモノニ候間、萬事ヲ御免候ハヾ、本本ノゴトク御奉公仕候樣ニ可レ申候由御理ニ候。則時ニ御耳ニ被レ立不レ申候由ニテ、伊達元安宿ヘ家老衆打寄、常隆公ヨリノ御コトハリヲ承リ、各挨拶ニハ、政宗タメヲ思召サレ、常隆公ヨリノ御意忝何レモ存候。乍レ去、今度宰人衆相馬ヘ申合儀歴然ニ候。内々切腹可レ被ニ申付一儀ニ候ヘドモ、數年、田村ノ弓矢ニ清顯公ヘ奉公ヲ仕候者ドモニ候間、命ヲ助被ニ相拂一候處、宰人衆インギウ申、梅雪、右衞門大輔、小野ヘ引除被レ申候事、政宗公深口ォシク存ラレ候間、申聞セ候事、唯今ハ機ヅカヒニ候條、永御訴訟可レ仕由、挨拶申サレ候。紀伊守ハ相返申サレ候。政宗公田村ノ御仕置仰付ラレ、門澤クリテ兩地ハ小野、大越ノサカヒニ候間、田村ノ衆少々警固相籠然ルベキ由仰付ラレ、十月始ニ米澤ヘ御歸城被レ成候。

一奥州ノ作法ニテ御無事御扱候衆ヘ、從ニ双方一御禮仰ラレ候ニ付、片倉小十郎ヲ岩城ヘ爲ニ御禮一被ニ指越一候。被ニ罷歸一候砌、我等大森ヘ罷越、小十郎ニ岩城ノ樣子相尋候ヘドモ、小十郎申サレ候ハ、小野、大越背ニ本意一、岩城ヲ賴入候故、上下共ノ心中、田村ヘ賴ヲカケ候ト見エ候間、來年ハ必岩城ハ敵ニ可レ成由申サレ候。我等申候ハ、御手延ニ被レ成、岩城ヨリ手切候ハバ、田村ノ内春中相馬ヘ申合候衆數多候。其モノ共末々身上ヲ大事ニ存。又岩城ヘ御奉公申候ハバ、田村ノ御抱成ガタク候。去年大内備前御奉公ノ砌、片平助右衞門御奉公可レ仕由申サレ候ヘドモ、如何樣ノ儀ニ候哉相違申候。唯今ハ助右衞門モ可レ爲ニ後悔一候間、助右衞門ヲ召出サレ、此方ヨリ御再亂候ハバ、縱岩城敵ニ成候トモ、御弓矢被レ成能可レ有レ之由申候ヘドモ、小十郎挨拶ハ無レ之候。我等ハ二本松ヘ日歸ニ仕候。

一極月始、小十郎ヨリ狀ヲ越申サレ候而、我等申候通申上候ヘバ、御尤ニ被ニ思召一候間、片平助右衞門被ニ召出一、御再亂可レ被レ成由御意ニ候間、助右衞門所ヘ申コトハリ然ルベキ由申サレ候條返答ニ候。大内備前御下ニ居被レ申候間、備前所ヨリ使ヲ越申サレ候樣ニ仰付ラレ可レ然、備前ニ使越候ハ

バ我等所へ寄可レ申由可レ被レ申候。我等モ狀ヲ指添可レ申由申越候ニ付、極月廿日比、備前使罷越候間、我等狀ヲ指添片平方へ指越候。助右衞門御奉公可レ仕由返答被レ申。乍レ去其比ハ雪深候間、先手切ハ無用之由、政宗公御出馬被レ成候時分手切可レ然由、御意被レ成被ニ相延一候。

一天正十七年正月之末、政宗公御落馬被レ成、御足ヲ被ニ打折一候。御養生候而御足ハ付候ヘドモ、御痛ニテ御出馬抔可レ被レ成躰ニ無レ之候故、助右衞門事切彌相延候。

一片平助右衞門二月廿日比、飛脚ヲ越被レ申候而、少用候間、會申度由申サレ候間、其通小十郎所迄申宣候處ニ、被レ得ニ御意一候ヘバ、尤早々參會可レ申由、御意候由被ニ申越一候間、片平ヘ飛脚ヲ越候而、參會可レ申由申候ニ付、即安積堀ノ内ト申所ヘ被ニ罷出一候。拙者モ罷出候ヘバ、助右衞門申サレ候ハ、去年大内備前御奉公被ニ申付一、會津ヨリ御疑心被レ成、人質ヲ被ニ召上一候上ニモ、我等少モ御油斷不レ被レ成躰ニ候。ケ樣ニテハ以來身命大事ニ存候間、政宗公ヘ御奉公可レ仕由申上ラレ候。然ル處ニ、深雪ノ時分ハ御出馬不レ成由ニテ、事切相延候上、落馬ニテ彌相延申候ニ付、會津衆中須賀川岩城ノ老衆ヨリモ狀ヲ預候。事切仕ラズ候故、相返申事モ不ニ罷成一候。若如何樣ノ表裏モ候而、會津ヘ御奉公仕候由申仁モ候ヘバ、迷惑ニ存候條、連々米澤ヘ申上候樣ニト被レ申候。其ノ上我等ニ會申候ハバ、心中モ違候ト申唱、會津ノ通

用モ有間敷ト存、懸ニ御目一度由申越候由申サレ候。其通小十郎所ヘ申越候ヘバ、則御披露申サレ候。助右衞門奇特ノ義申上候。御大慶ニ被ニ思召一候。御出馬御過故ニ御延引候ハバ、事切申候而モ如何ト思召被ニ相延一候。無ニ氣遣一御左右次第ニ手切可レ申由御意ニ候。其通助右衞門所ヘ申遣候。

一政宗公御足ノ御痛、大形御平愈ナサレ候ニ付、片平助右衞門ニ事切仕候樣ニ可ニ申遣一由、御意ニ候間其通申越候處ニ、三月十六日ニ事切仕候由申越候條、則米澤ヘ申上候。助右衞門手切之儀、岩城ヘ聞エ、常隆公被レ仰候ハ、於ニ郡山表一御對陣ノ見切、佐竹、會津自今以後、御入魂候樣ニト被ニ仰合一候處ニ、政宗公無レ程御再亂、前代未聞之由仰ラレ、即田村ノ内ヘ御事切被レ成候。

一片平助右衞門事切ニ付、常隆公三月廿四日、小野ノ地ヘ御出馬被レ成候。小野御越ノ間ニ鹿伐ト申候城ハ、田村奉公ノ地ニ候。常隆公近陣被レ成候。小野、大越近候間、田村ヨリ手越ニ候間、助モ不レ成地形候。六七日相抱候ヘ共不ニ罷成一、御侘言申サレ、城ヲ明、田村ヘ引除申サレ候。常隆公ハ小野ニ御出馬被レ成候。其樣子政宗公被ニ聞召一、田村ヘ郡治部大夫、飯坂右近大夫、瀨上中務被ニ指越一候。左候ヘドモ御足ノ痛無レ擦候故、御出馬無レ之候。

一常隆公小野ニ御在馬之内、大越紀伊守末々從ニ岩城一小野、大越ノ御抱成ガタク存ラレ、政宗公ヘ御奉公申サズ候テハ、身

ノ大事ニ存、三春ニ本田孫兵衞ト申モノ御座候。ソノ子本田孫市ハ大越紀伊守ニ近奉公仕候。其筋ヲ以、月齋、田村宮内大夫父子ヘ申サレ候ハ、不慮ノ儀ヲ以、田村ヲ相ソムキ候。乍レ去代々親類ノ事ニ候間、御免ナサレ候樣ニ政宗公ヘ御訴訟被レ成、可レ預由被レ申候。就レ其宮内大輔ヨリ白石若狹ヘ狀越被レ申候。若狹我等ニ逢申度候。中途ヘ出合可レ預由被ニ申越一候。宮内狀ヲモ我等ヘ越被レ申候間、白石ヘ可レ罷候。日限ハ成實次第追而可ニ申越一由、返答申候間、罷出可レ然由被ニ申越一候付、四月九日、白石ヘ兩人共罷出候。宮内モ被レ參被レ申候ハ、右ノ品々、紀伊守ヨリ孫兵衞ヲ以被レ申候ハ、政宗公可レ被ニ召出一候者、岩城衆車龍子山ニ二頭、大越警固ニ被ニ差置一候間、町ニ在陣候。從ニ門澤一ハ大山續ニ候。本丸ヘ直ニ御人數引込、未明ニ町ヘ押置、二頭ノ衆打果御奉公可レ仕間、如ニ本々一知行被レ下候樣ニト被レ申候ヘ共、我等親子共ノ首ヲネライ、相馬ヘ御奉公被レ申間、合點ハ不レ仕候ヘ共、不レ立ニ御耳一事如何存、旁ヘ申由被レ申候。若狹被レ申ハ、ケ樣ノ義申々目出度候。首ヲネラヒ申サレ候衆、被レ賴被レ申候事譽ニ候。早々米澤ヘ仰上ラレ然ルベキ由申サレ候。宮内少ハ大越取違之段ニ被レ申、迷惑之由ニ候ヘドモ、若狹我等頻ニ申ニ付、左候ハバ御兩人ヨリ、右ノ品々米澤ヘ可レ被ニ仰上一由申サレ候間、青木不休ト申、久敷田村ニ御扶持被レ成、其後米澤ヘ罷越候者ヲ使ニ申付、白石ヨリ上申候處ニ、政宗公初ヨリ、大越、相馬ヘ申組、田村引付候モ、一人ノ樣ニ被ニ聞召一候間、口惜被ニ思召一候。乍レ去宮内大輔ヘ申組、岩城衆ヘ打果御奉公仕ルベキ由被ニ申上一候ハバ、如レ本知行之通可レ被レ下由、御印判相調罷歸。則不休ヲ田村ヘ指越、御印判宮内大夫ヘ相渡、孫兵衞ニ其御印判ヲ爲レ持、門澤ヘ罷越、大越ヘ人越候ヘバ岩城衆番ヲ付孫市出候事不ニ罷成一候。從ニ常隆公一大越ヘ仰付ラレ候ハ、田村ヘ草調儀可レ被レ成候間、御人被レ遣由ニテ北江刑部少參ラレ、大越ノ城ヘ直ニ取入、紀伊守ニ可ニ相尋一義候間、小野ヘ參ベキ由御意候由申サレ候而、數引立召連小野ヘ參ラレ候。則紀伊守ヲ岩城ヘ遣ハサレ候。彼一儀ゲンキヤウ申候儀、宮内大輔ノ狀、紀伊守懷中申サレ、此中ニテ落被レ申候。女房衆見付、舍弟大越甲斐守ヘ爲レ見被レ申候。手替ノ狀ニ候間、此狀可レ預由申候テ返シ不レ申、其狀ヲ常隆公ヘ上ゲ申候。其節ニ大越ヲ甲斐守ニ被レ下。彼甲斐守ハ紀伊守小舅ニテ親類被官ニ候ヘドモ、筋目ヲ違、身上ヲ存、常隆公ヘ忠節仕候。

一片平助右衞門事切ニ付、米澤ヨリ大森ヘハ十里ニ候ヘドモ、御足痛故日懸ニ不ニ罷成一、山中故御乘物モ不自由ニ候間、四月廿二日ニ板屋迄御出、廿三日ニ大森ヘ御著被レ成候。廿七日、助右衞門、我等同心申、大森ヘ參御目見申サレ候。御人數參候ヲ御待、五月三日本宮ヘ御出馬、四日阿子島ヘ御働被レ成、城ヲ召廻御覽被レ成候。先外城ヲ可レ被レ爲取由

ニテ、町搆三ノ樞輪迄被レ爲レ取、御人數被二引上一候處ニ、アコガ島治部我等所ヘタノミ被レ申候ハ、外城ヲ被レ取申候間、城ヲ明渡可レ申、命ヲ被二相助一候樣ニト申間、ソノ通リ申上、御前相澄、我等家中遠藤駿河ト申者、人質ニ指越、惣人數ヲ被二引上一、我等人數計除口ノ路次ニ近相備、御横目拾人計横合ノ爲方々被二付置一引除、猪苗代ヘ被二罷越一候。荒井木工之丞ト申者、高玉太郎左衞門妹聟ニテ、高玉ニマカリ有候ヘドモ、阿子島ヘノ御働競ニテ、通路自由候故、阿子島ヘ罷越候。阿子島治部少、太郎左衞門、木工之丞モ二本松譜代ニ候。彌平ハ二本松嶺ヨリ我等扶持仕候。本傍輩故、荒井ヲ送リ申候ヘバ、木工之丞、彌平ニ申候ハ、我等命二ツ持候而、今日一ツ治部少ニクレ候ヘドモ、弱存分ニデ御侘言申罷歸候。明日高玉御責可レ被レ成候間、太郎左衞門ニ命クレ可レ申候。我等ノ手ナミ明日見セ可レ申ト申候。去迚武士ノ申樣ト譽申候。其夜ハ東ノ原ニ御野陣被レ成、翌日五日、高玉ヘ御働候。我等ハ先懸仕候ヘドモ、我等ヨリ先ニ高玉ヘ被二召懸一、南北ヲ御覽被レ成、我等ニ御意ナサレ候ハ、片平御奉公仕、阿子島昨日被レ爲レ取候。北ニハ敵此城迄ニ候間御責被レ成、御隙可レ被レ爲レ明御意ニ候間、我等ハ此ノ方ヘ打廻シ備ヲ相立、惣勢ハ南東ニ歸候。西ノ方山續ニ候間、態御明被レ成候。高玉太郎左衞門玉ノ井合戰ノ見切、志賀三郎ニ鐵炮ニテ腦ヲ被レ討、其ヨリ陣場ニ候故、二三ノ樞輪ニテハ馬ニテ乘懸、弱所ヘ言葉ヲ懸下知仕候。二三ノ樞輪ハ破、本丸計ニ成引込、女房子共二人迄害シ、其身ハ表ヘ出、門ヲヒラキ見、長鑓ニテ二三度付出候ヘドモ、早伊達勢本丸ヘ取入候間、家ノ内ヘ入付、出庭ニテ被レ討候。荒井木工之丞ハ我等ノ責口三ノ樞輪ニ居候ガ、付出候所ヘ、羽田右馬助鑓ヲ合、木工之丞ハ高キ處ニ候間、右馬助ホウアテニ鼻ヲツキ欠、耳ノ脇ヘツキ出シ候ヘドモ、身ニハアタラズ候。右馬助ハ木工之丞左之脇ヲ突候ヘドモ、鎧通ラズ候テ、鑓ヲ中程ヨリツキ折候。大勢責入候間、木工之丞引込、門ヲ指二三ノ樞輪役所ヲハナレズ打死仕候。宵ノ言ノ程ノ由イヅレモ申候。西ノ方ハ明候ヘドモ、一人モ欠落不レ仕打死申候。朝日出時分ヨリ取付、八ツサガリニ落城仕、ナデ切ニ仰付ラレ候。太郎左衞門三歳ノ女子ヲ乳人モライ候テ抱出候ヲ、則御中間衆亂妨者ノ樣ニウバイ切殺候。彼乳人切ラレ候ガ鬧敷候哉。少切候ヲ乳人コロビ、彼娘ヲ下ニ敷臥、人數引上候テ夜ニ入、乳人起上リ候。薄手ニ候間、彼三歳女子ヲ抱、十五里程參候。高倉近江マタ姪ニ候故、近江處ヘマイリ扶ケクレ候ヘト申候。近江モ機遣申サレ、小十郎所ヘ其通申サレ候ヘバ、一度被レ爲レ切候者ニ候間扶ケ可レ申候。御穿鑿候ハヾ御前ノ義我等ニマカセ候ヘト申付ラレ、相扶候後ハ、蒲生源左衞門家中ノ女房ニ成候由承候。其夜本宮ヘ御入馬ニ候。六日ニ大森ヘ御歸城候。然ル所ニ常隆、義胤被二仰合一、常隆小野ヘ御出馬候。義胤ハ田村ノ内岩井澤ヘ御出馬ニ候。田村警固トシテ大條尾張、瀨上中務、桑折攝津守被二差置一候。然者相馬ノ抱新地駒カ嶺ヲ可レ被レ爲レ取被二思召一、ニハカニ刈田、柴田、伊貢名所（各懸）ノ御人數十七日ニ可レ參由仰付ラレ、田村ヘ先ニ被レ遣候。攝津守、尾張、中務ハ相馬ヘ被二召連一、小十郎、若狹、梁三人ヲ被二入替一候。五月十六日ニ大森ヲ御立、其日金山ヘ御著被レ成、一日人數被二相待一、十八日ニ駒ケ嶺地形ヲ御覽候テ、外曲輪責破候。本丸ハ嶺高急ニ落城難レ成候間、御人數ヲ被二打上一候處、城主人ヲ出シ、金山ノ城主中島伊勢ヲ賴、命御助候者、城ヲ渡シ相除申度由申候。政宗公ハ御責ホロボサルベキ由御意候ヘバ、各被二相除一可レ然由申上候ニ付、伊勢城ノ内ヘ入、人質ニ渡引除城落居申候。其日ハ駒ケ嶺近所ニ御野陣被レ成、翌日新地ヘ御働候。駒ケ嶺ハ新地ヨリ相馬ノ方ニ御座候ヘ助不レ被レ成候。猶以不二罷成一、伊達元庵ヲ賴入、城ヲ明渡可レ申候間、命ヲ被二相助一候樣ニト申上候ニ付而、被レ任二其儀一候處ニ、人質モ請取不レ申候內、城中ヨリ火事出候間、惣勢御下知モナク相懸リ迷取散切殺無躰ニ相破候ニ付、城主者失二面目一廻國聖ニ罷成候。翌日礒山表ヘ四理中之舟ヲ御廻シ、礒山ニ四理美濃御假屋ヲ被レ申、御膳ヲ上終日御慰。其夜金山ヘ御歸、一日御迄留被レ成、駒ケ嶺ハ黑木備前ニ下サレ、新地ハ四理美濃守ニ下サレ、肥前跡丸森ハ高野壹岐守ニ下サレ、廿二日大森ヘ御歸候。

常隆、義胤田村ヘ御出馬ニ付、若狹、小十郎、我等、田村ヘマイリ候ヘ𪜈、別而御働ニカハル事モ無レ之候間、三人𪜈ニ三春在陣候而働御座候。表ヘハ助候ヘドモ城ヘ小口ガカリ成共無レ之候。小十郎ト我等相談申候ハヾ、猪苗代彈正久シク御奉公可レ申由申上ラレ候ヘドモ、父子中ワカリ、又二本松、鹽ノ松、安積筋ノ御弓矢ハカ參リ、猪苗代ハ大山ヘダタリ候ニ付、先被二相延一候。阿子島、高玉落居申候間、猪苗代ノ通路能成候。政宗公宇田ヨリ御歸候間、右ノ三藏軒ヲ召連、大森ヘ參御意ヲ請。猪苗代ヘ指越可レ申ト存候。爰許機遣之儀無レ之候間、同心可レ申候哉ト申候。小十郎同心被レ申、大森ヘ被二罷歸一候。我等ハ其日ハ二本松ヘ罷歸候而、翌日三藏軒召連大森ヘ參、右ノ通申上候處ニ、內々自レ是可レ被二仰付一由被二思召一候砌、三藏軒召連參ラレ候。是ニテ狀ヲトヽノヘ可レ遣由御意ニテ、小十郎我等狀ヲ認、右ノ御印判之通相違有間敷候條、早々會津ヘ手切可レ被レ仕由申越、我等ハ廿八日ニ二本松ヘ罷歸候。三藏軒ハ猪苗代可レ參直ニ罷歸、彈正事切可レ被レ申由申上候。

一常隆公三月ヨリ小野ニ御在馬被レ成、佐竹、會津ヘ度々被二仰合一、五月廿七日ニ佐竹義重公、會津義廣公、須賀川ヘ御出馬被レ成、常隆公ヘ被二仰合一、田村ヘ御働可レ爲由被二聞召一、伊達、信夫、刈田、柴田ノ御人數新地ヨリ直ニ田村ヘ遣ハサレ候。六月一日、小十郎二本松罷通ニ我等所ヘ使ヲ越、猪苗代手切

申由、三藏軒大森へ參申上候。政宗公モ佐竹殿ガ出馬、猪苗代御奉公、彼是二本松カ本宮へ御出馬可レ被レ成候間、其節猪苗代へ可レ被レ參候。我等ニ其段可ニ申傳一由御意候間、我等爰元ヘ廻リ候人數ハ、猪苗代ヘ直ニ越申由申サレ候。朔日ノ七ツ時分ニ候間、其ヨリ人數ヲ申付、其夜ハ荒井ト申所迄罷越候ヘ共、一圓人數不ニ參合一候間、翌日阿子島迄罷越候。小十郎ハ二日、我等ハ三日ニ猪苗代ヘ參著申候。猪苗代替候由須賀川ヘ聞ヘ候。三日ニ義廣公若松ヘ御入馬ニ候。四日ノ働ノ由申付、小十郎ヘ使ヲ越候ヘモ、昨日モ左樣ニ申候。僞ニ候。今日モ可レ爲ニ其通一由被レ申候ヘドモ、地形不知案内ニ候間、見可レ申ヨシ存候而摺上ヘ罷越候ヘバ、跡ヨリ小十郎モ參ラレ候。境ノモノ共二三百人摺上近所ヘ參、カラ家抔ヲヤキ申候。我等小十郎ヲ見申候。ソノ者ドモハ引上申候間二ツ橋引申候樣子、大寺邊ノ地形見申候テ罷歸候。政宗公三日ニ阿子島ヘ御出馬ノ由ニテ、布施備後御使ニ遣ハサレ候。小十郎、備後ヲ同心申、我等所ヘ參ラレ候間、御口上之通ウケタマハリ候ヘバ、猪苗代事切ニ付、小十郎計被ニ指越一御氣遣ニ候間、其口ヘ御馬ヲ可レ被レ移被ニ思召一候。義重、常隆、田村ヘ御働候ヘモ、御人數被レ遣候條無ニ氣遣一候條、彌其元ヘ御越可レ被レ成由、御口上モ御狀モ御同意ニ候。小十郎被レ申候ハ、爰元替儀無レ之候間、御馬ヲ被レ移候儀御無用ニ存候。如何被レ存候哉ト被レ申候間、我等申候ハ、阿子島御在馬モ手先過ニ候。義重若本宮ヘ御計モ成ガタク候間、本宮ニ御在馬可レ然候。猶以此方ヘ御移馬不レ入儀候由申候ニ付、兩人共同前右之通申上候。移馬可レ然儀候者、阿子島迄ハ三十里候間、早々可ニ申上一候由、備後ニ申含相返候。政宗公思召候ハ、誠ニ兩人共ニ御馬被レ移候事、無用之由可ニ申上一候間、是非御越可レ被レ成ト被ニ思召一候。中途ヘ御使ヲ被ニ相出一、小十郎成實早々猪苗代ヘ被ニ相移一可レ然由申上候ヨシ、備後ニ被ニ仰付一、備後參候而早々被ニ相移一可レ然由、兩人共ニ被ニ申上一候由被レ申候。御意ニハ今朝ヨリ兩人ノモノ共、早々移候樣ニト可レ申ト被ニ思召一候。如レ其ニ候、兩人ノ返狀モ御覽モ不レ被レ成、早御移可レ被レ成由仰出サレ候。守屋守伯今日ハ夫兵散申候間、明日未明ニ御移被レ成可レ然由被ニ申上一候ハバ、各具足可レ著候。今夜一夜物進給間敷事ハ堪忍可レ仕由御意候間、兎角可レ申樣モナク、何モ御前ヲ罷立支度ヲ仕ラレ候。猪苗代ヘ其夜ノ五ツ時分、御馬移候由申來候。御無用之由申上候間何ト存候處ニ、小十郎ヨリ今夜御越必々候。御迎ニ出候由爲レ知被レ申候ニ付我等モ罷出候。須川ト申所ニテ懸ニ御目一、夜半時分ニ御著被レ成候。猪苗代十三ノ子ヲ三日ニ人質阿子島ヘ上申候ヲ、四日ニ被ニ召連一、彈正ニ其夜被ニ返下一候。彈正被レ申候ハ、子共兩人御座候。一人ハ我等ヲ背、會津ヘ引除御奉公仕候。此者被ニ返下一迚モ手前ニ著置申候事、外聞内儀共ニ迷惑ニ存候間、小十郎殿

ヘ相ワタシ可レ申候條、大森ヘ被ニ差越一可レ預候。其外ニ子共候ハヾ上申度候ヘモ、上可レ申者無レ之候間、不レ及ニ是非一候由申上候。

一五日ノ朝、御談合可レ被レ成由ニテ、家老衆イヅレモ召出サレ候。然ル處ニ會津ヨリ働御座候由申候。昨日モイツハリヲ申候由申候處ニ、人數見候由申來候間、兩ノ屏ギハヘ罷出見申候ヘバ、備數多見エ候。政宗公摺上ノ方見エ候ヤグラニ御座候而、致ニ伺公一働ト見エ申候。御人數被ニ相出一候哉ト申候ヘバ、先手ハ猪苗代彈正、二番ハ小十郎、三番ハ我等、四番ハ白石若狭、五番ハ御旗本、六番ハ濱田伊豆、左手右手ハ大内備前、片平助右衛門被ニ仰付一候。小十郎モ我等ト同前ニ御前ヲ罷立歸宅仕候ヘバ、内々老モ疾ニ支度仕相待居候而、則具足ヲ著申候而打出候ヘバ、會津衆二ツ橋北ノ山ニ段々ニ相備、北ノ原ノ方ニハ在家無レ之候間、水海ノ方ヘ働、御近所ノ在家十間計燒拂候。猪苗代ヨリ出候人數ヲ見候テ、バンダイ山ノ方ヘ人數ヲ引上候而、猪苗代ヨリ出候人數ヘ向押懸、摺上ヲ越候而參合戰初候。小十郎衆ハ合戰仕、我等人數ト若狭人數ハ、双方ノ後ヘ相詰候。然ル處ニ小十郎、彈正人數足戸悪崩左右ニ候間、若狭我等人數、會津衆ノ眞中ヘカヽリ候ニ付、會津マグレ摺上迄追付候處ニ、政宗公旗本ノ御人數ヲ以押通、摺上ノ上迄敵モ引除ナガラ合戰仕候ヘドモ、摺上ヲ追ヲロシ候而ヨリ崩申候ヲ追討ニ被レ成候。北方ヲサシ各迄候。無ニ據存候者ハ一ツ橋ハ引、中々人間ノ可レ通川ニ無レ之候ヘドモ、川ヘ迄入水ニヲボレ死申候。川ヲ越申候者モ候哉。向ノ岸渡申候。我等ハカナ川ノ方ヘ參、罷歸ニ川ノ樣子ハ見申候。

一御前ヘ參候首、會津一家金上遠江ハ、我等家中齋藤太郎右衛門討申候。其外佐瀨平八郎ヲ始千五百八十餘リニ候。其夜ハ猪苗代ヘ被ニ引上一候而、翌日金川ヘ御ハタラキ被レ成候。會津衆堅固ニ持候間、明日近陣ヲ可レ被レ成由御意被レ成候。大寺前ノ原ニ御野陣被レ成候。去六月朔日ニ從ニ大森一原田左馬助ヲ長井ヘ被ニ差越一、寂上境下長井人數ハ指置、ホウヂヤウト上長井ノ人數召連、大鹽ヘ働可レ申候。猪苗代北方ヘ御働可レ被レ成候間、成合申候樣ニト仰付ラレ候。摺上御合戰ニ會津衆マケ候由承、大鹽ノ城モ引除、金川、三ツ橋、鹽川三ケ所計相抱、北方ノ持地下人（侍歟）共ニ無レ殘引除、若松ヘ引コモリ候間、左馬助ハ六日ノ晩ニ御働ノ所ヘ參ラレ候。

一七日、金川近陣可レ被レ成由思召、六日ニ被ニ引上一候間、仕寄ノ道具支度仕ルベキ由被ニ仰付一候處ニ、其夜金川、三橋、鹽川三ケ所共ニ若松ヘ引除候間、則政宗公三ツ橋ヘ御馬被レ移、御逗留被レ成候。

一佐竹義重公、須賀川ヘ五月廿七日ニ御出馬被レ成、常隆公被ニ仰合一田村ヘ御働候。政宗公三橋ニ御在馬中、義重公田村

ノ内大平、常隆ハ門澤ヲ御責取候。彼地警固ニ伊達衆ニハ中嶋右衞門、大町三河、宮内因幡被ニ差置一候處ニ、因幡、三河ハ漸々引除被レ申候。右衞門ハ二ノ丸役所ヲ不レ離打死申サレ候。岩城衆三人ヲ打相果被レ申候。兼テヨリ名譽ノモノニ候。田村ノ御働被ニ聞召一、濱田伊豆、富塚近江、遠藤文七郎、其外伊達、信夫、刈田、柴田衆田村ヘツカハサレ候。猪苗代アマリ御無人數ニ候間、濱田伊豆ヲバヨビカヘサレ候。摺上合戰ニモ會申サレ候。

一三橋御在馬中、會津ノ富田美作、平田不林、同周防御奉公可レ仕候條、只今相抱候知行、其上備付之與力之身上被ニ相立一可レ被レ下候由申サレ候。内々政宗公モ大分ノ訴訟ト被ニ思召一候ヘドモ、須賀川ニ義重公御在馬、小野ニ常隆御在馬ニテ、田村ヘ日々御働候間、若松ヲ一刻モ早ク被レ爲レ取度思召御合點ニ候。彼ノ衆申サレ候ハ、若松ヘ御ハタラキ被レ成ベク候ハヾ、火ヲ付御備ヘ加リ申ベキ由申合候。餘御無人數ニ候間、名取ノ人數ヲモ可レ被レ爲レ呼由仰付ラレ候處ニ、六月十日ノ晚、義廣公若松御抱不レ成候ヤ、白川ヘ御除被レ成候。義廣公ハ本田川ノ名代ニ相定候處ニ、會津御名代ニ其後相濟候。白川御除候事、長沼ノ城主新國上總モ其比迄義廣公ヘ御奉公候間、御心易被ニ引除一候。十一日、政宗公若松ヘ御打入被レ成候ヘドモ、田村ヘ佐竹殿、岩城殿御働候間、白石若狹、我等可レ參由被ニ仰付一候。若松ヨリ直ニ田村ヘ罷越候。

其以來モ節々御働ニ付、若松ヨリ原田左馬介、平田周防被レ遣候。方々ノ城ヘ伊達衆モコモリ候ヘドモ、浮人數四五百騎候間、深御働ニ候ハヾ一戰可レ仕由、内談申候ヘドモ、左樣ニモ無レ之候處ニ、常隆公下枝ヘ御働被ニ引上一候所ヘ、下枝ノ者押添、方々ノ山路ヲ押切々々打出候處ニ、岩城シンガリ衆敗軍仕、田村右衞門大夫初頸五十餘打取候。下枝ハ三春ヨリ遠候間、警固ノ衆迄ニテ助勢不レ參候故、少打申候。

一義重大平ヲ御取候以來、別而御手ギハモ無レ之故カ、七月廿日比、佐竹ヘ御歸馬候。常隆公モ御歸陣候間、田村ヘツカハサレ候御人數、多分罷カヘリ、伊達信夫ノ御人數バカリ在陣申サレ候。

一義重、常隆御歸陣ニ付、政宗公ハ會津郡中ノ肝煎大百姓召アツメラレ、跡々物成御尋被レ成、御奉公仕候モノヒニイヅレモ御加增下サレ候。原田左馬助ハ會津御事切ノ時分ヨリ御手ニ入候ハヾ、津川ヲ下サルベキ由御約束ニ候。津川ノ狐モドシト申城、金上遠江家中指置申候。金上、摺上ニテ打死申サレ候間、城主越後、政宗公ヘ御奉公仕候。本城ハ堅固ニカヘ候故、左馬助ニ津川不レ被レ下候。乍レ去各御加增義敷可レ存候由御意ニテ、百人計先被レ下候。

一會津山ノ内ニイナイホウ、横田、川口、屋ナトリ、此所ハ山中故御手ニ不レ入。然處八月末ニ原田左馬助爲ニ御代官一、會津新參衆長井ノ御人數ヲ以、屋ナトリノ城責落ナデ切ニ仕候間、津川ヘ除候者モ御座候。又御佗言申、出レ城申候處モ候間落居申候。津川ハ大切所ニテ、御働モ卽時ニ不レ成。左馬助得ニ其意一候ヘバ、春中ノ事ニ可レ被レ成由御意候。

一會津御知行割ノ砌、彈正我等ヲ以申上ラレ候ハヾ、御奉公之砌、三ヶ條望候候由、北方半分下サレ候樣ニト申上候間、其通被ニ仰付一候樣ニト申上ラレ候。政宗公御意ニハ、北方ノ内ニ何程、彈正知行申所ハ何ト申候哉ト御意候。彈正申上候ハヾ、我等知行北方ニハ御座ナク候。半分被レ下候樣ニト申上候。其御訴訟之由申上ラレ候。御意ニハ、北方分ト候テ、半ノ字ハ無レ之由御挨拶ニ候。彈正申候ハヾ、耻入候ヘドモ、譜代ノ主人ニ逆意仕候モ身上ノ爲ニ候。右ヨリノ知行所ニ候ハヾ、猪苗代ヲモ書添可レ申處ニ、加增ノ御意迷惑之由被レ申候。彈正家中薄源兵衞ト申者申分ニハ、我等其書付ヲ書申候。半ノ字無レ之候ハヾ切腹可レ仕由堅申候ニ付、右ノ書付被ニ相出一候處ニ、北方分ト御座候ヲ彈正見申サレ驚入、主人ニ違候天罪取候。此上ハ御訴訟申義無レ之由申候テ、猪苗代ヘ被ニ罷歸一、政宗公猪苗代御奉公ニ無レ之候ハヾ、會津御手ニ入間敷由御意被レ成、猪苗代近所北方之内五百貫計御加增被レ成、家中石部下總、猪苗代阿波守ニ五十貫計ヅツ御加增被レ下。右ヨリ使仕候三藏軒ニモ拾貫之所被レ下候。

一長沼ノ城主新國上總盛氏御取立ヲ以、長沼ノ城代ニ被ニ差置一候ヘドモ、政宗公御ホコサキニハ抱候事成間敷由存、御佗言申上、知行不ニ相替一、御前相濟、若松ヘ伺公仕、御目見エ申サレ候。

一須賀川ハ佐竹岩城ヲ被ニ相守一、警固ニ佐竹ヨリモ、殿、ツキノオレ殿、其外南口衆被ニ差越一候。岩城ヨリ植田但馬、高貫中務被ニ差置一候。岩瀨一家西方衆、政宗公ヘ御敵申事成間敷由被レ存、保土江南、濱尾善齋、矢部下野初六七人、須賀川ヘ御出馬之砌御奉公仕ルベキ由申サレ候。政宗公十月片平ヘ御出馬被レ成、田村孫七郎殿御同陣ニテ、十月廿五日矢田野ヘ御働、近所ニ候間、横田ヘモ押廻御働候。松山ト申横田ノ城見ヲロシ候山ニオイテ御目談ニ候。江南、善齋モ被ニ罷出一候。田村衆、月齋、刑部少輔モ被ニ罷出一候。明日ノ御働如何樣ニ可レ被レ成ト御意ニ候。江南申サレ候ハヾ、矢田野、横田ヘ御手間被レ取候事不レ入事ニ候。先須賀川ヘ御働可レ然候。彼地落居申候ハヾ、其外ヘ小地ヒ御手間ハ入間敷由申サレ候。須賀川ハ何程ノ人數ニテ候ハン由御タヅネ候。江南、善齋申上ラレ候ハヾ、申合サレ候衆岩城ヨリ二頭、佐竹ヨリ二頭、ソノ外不レ存衆マイラレ候。左候ハヾ強不ニ取合一、六百騎ニハ過間敷由被レ申候。須賀川ヘハ何方ヨリ御責可レ被レ成候哉ト仰ラレ候。田村月齋申サレ候ハヾ、場好ハ南ニテ候。去ナガラ城ノ見切見エ申サズ候。西ハ原續ニテ地形高ク候。押詰候ヘバ川御座候ヘドモ、地形陸ニ候間、須賀川見ヲロシ候樣ニ、西ヨリ御働然ルベキ由申サレ

候。イヅレモ月齋申サレ候樣、功者ノ由褒美申候。其夜ハ政宗公高館ニ御在陣候。

一廿六日未明ニ須賀川ヘ御働候。兼而ノ御備ヲ被ニ引替一、須賀川新參衆御先懸、會津新參衆、御譜代ノ衆打交備ノ御書付被ニ相出一、西ノ原ニ備ヲ相立候。政宗公家老衆十騎計被ニ召連一、八幡崎ノ道筋、アマヨバハリノ道筋方々ヲ御覽被レ成、然處ニ城中ノ衆、兩口ヘ足輕三百人出シ、川バタ迄鐵炮ヲ打懸、馬上モ十四騎程打出候。今日ノ御働何ト可レ被レ成由御タヅネ候處ニ、今日ハ地形計御覽被レ成、近陣ヲウツサレ然ベキ由申サレ候衆モ候。又今日ヨリ西ノ原ヘ御陣ヲウツサレ可レ然ト申サル、衆モ候。政宗公仰ラレ候ハ、内ニ人數候哉出走候間、一戰ヲ被レ成御覽アリ度候。若川ヲ越候ハヾ、强ク押込搆ノ一重モ可レ取候間、トカク御人數ヲ可ニ指越一由御意候テ、八幡崎ノ先手ハ新國上總、二ノ目白石若狭、三番ハ田保但馬、アマヨバハリ口ハ先手大内備前、片平助右衛門、二番ハ我等、三番ハ片倉小十郎仰付ラレ候。川端ヘ押懸先手衆人數ヲ懸申サレ候處ニ、内ヨリモ切テ出、兩口ニテ合戰候處ニ、備前助右衛門人數足戸悪マクレカヽリ候間、我等人數ヲ入替小口ヘ押込、又被ニ押出一所ヘ我等乘懸言ヲ懸押込、卽火ヲ付候間、其口ヨリ人數ヲ追入、北町迄押込候。八幡崎ノ合戰ハツキニ小口ヘ不レ被ニ押籠一候。脇ヨリ押切候ハヾ可ニ追入一存候ヘモ、我等人數チレ候間、左樣ニハ不レ被レ成、本丸ノ西ニ候長陸寺ヘ火付候、火本丸ヘウツリ方々燒候ヘモ、八幡崎衆ハツキニ不ニ押込一、破候迄一戰チバ仕ダシ候而、引除候共不レ見候。相果候。イヅ方ノ落城ニモカヤウニ合戰仕候事ハアル間敷候。大手拵ニ候。朝五ツ時分ヨリ合戰ハジマリ日暮引上ラレ候。和田ト申城、須田美濃抱ニ候。御人數困候故、明日未明ヨリ可レ被レ責由仰付ラレ候處ニ、其夜引除候。政宗公北ノ野山ニ御陣被レ成候所ヘ、白川義通御奉公ニ候間御參、石川大和殿モ御骨肉ト云、則御出、仙道中落居申候。矢田野伊豆、横田治部少輔御ワビゴト仕、本ノ身上三ケ一下サレ被ニ召出一候。小荒田隱岐モ我等チタノミ御訴訟申サレ、小荒田ノ地一郷下サレ召出サレ候。

一仙道中無レ殘被レ屬ニ御手一候間、御和談候而、來年ハ佐竹ヘ御弓ヲ可レ被レ成由御思案ナサレ、片倉小十郎ニ仰付ラレ、志賀カンテウヘ狀ヲ越可レ申由御意ニテ、岩城ノ儀ハカヤウニ可ニ打隔一御申ニ無レ之、御味方御一黨ノ御首尾迄ニ御不和ニ候。御和談我等式モ念願之由被ニ申越一候付、岩城中上下共ニ大慶申サレ候。小十郎ヘ逢申度由、カンテウ返答申サルルニ付、奥山ト申處ヘ小十郎罷出ラレ、カンテウヘ參會申サレ、御無事ニ相濟候故、田村ノ内小野、大越ハ岩城ヘ御奉公ニ候ヘモ、田村ヘ被ニ相付一候。

一須賀川ノ地ハ石川大和ヘ下サレ候。西方ノ御奉公衆ハ與力ニ被ニ相付一候。三十日餘、須賀川ニ御在馬被レ成候。白川、那須、境、關ナドト申所ニ新地ヲ御キヅキ候。番手ヲ御訴訟ニ付、我等人數ヲ越可レ申由被ニ仰付一候間、若松御入馬ノ砌、白川ヘ人數ヲ指越、我等ハ二本松ヘ罷歸候。我等ノ番替ハ白石若狭ニ被ニ仰付一候故、若狭ハ白川ニ越年申サレ候。

一若狭ヘ御入馬候而十七年ノ御越年ニ候間、御譜代衆、新參衆何レモ參ラレ候。御祝儀被ニ申上一、別而美々敷正月ニテ候。十四日、御嘉例ノ御謠初候。御亂舞ノ上、每年大狂言ヲ被レ成、御自酌ニテ御奉公人ヘ御酒ヲ下サレ候。新國上總六十ニ成、顏ニ白粉塗、鼓ヲ御前ニテ擊申候。盛氏御恩ヲ相請年パイニ不ニ似合一由取沙汰仕候。

一天正十八年、太閤樣小田原ヘ御陣ノ由申來候ニ付、遠藤不入齋被ニ差登一候處ニ、家康公、淺野彈正殿、加賀筑前殿イヅレモ御念比衆ヨリ不入齋被ニ相返一、政宗早々御登可レ然由御異見ニ候。會津御手ニ入候以來、越後ト御弓矢ニ罷成候間、越後ヲ御登ノ事如何可レ有レ之由、上野ヲ直ニ御登被レ成度ト思召、會津新參衆表立候侍ノ分無レ殘御供仰付ラレ、御普代衆彼是百騎被ニ召連一候。會津御留主居ニハ我等家中不レ殘召連可ニ罷有一由仰付ラレ候。二本松用心ノ爲、柴田但馬、石母田左衛門、大條尾張被ニ差置一、津川、境、横田ノ城ヘハ會津新參ノ不レ背衆、長井ノ人數被ニ相加一、菅野備中城主ニ御付候間、南ノ山近所大内ト申所ヘ御出候ヘモ、關東ノ城城、小田原奉公ニテ御通可レ被レ成躰無レ之付、會津ヘ御移被レ成、米澤ヨリ北國通ヲ越後、信濃ニ御懸、小田原御參著被レ成候所、ソコクラト申山中ニ御宿ヲ仰付ラレ候。カヤウノ山中ヘ被ニ押籠一候儀、下々氣遣仕候處ニ、一兩日過候テ、施藥院、稻葉是上坊、淺野彈正殿外兩人、已上五人ノ御使ニテ御尋ニハ、唯今迄御禮不ニ申上一候事口惜被ニ思召一候。其上從ニ會津一ハ金上遠江爲ニ代官一、兩年以前ニ御禮申上候處ニ、其會津ヲ打取、城ヲ移罷有由慮外ニ被ニ思召一候。申上品品モ候ハヾ可ニ申上一候。無レ左候ハヾ急度可レ被ニ仰付一候由御諚ニ候。政宗公被レ仰候ハ、御意候處御尤至極ニ候。大内備前ト申者、先祖ノ家中ニ候處ニ、家中ニ不慮ノ亂候砌、逆心仕候而會津ヘ奉公仕候。洞取院ノ彼者ヲ退治仕候處ニ會津義廣、佐竹義重、岩城常隆、助抱候ヘモ、大内ヲ不思議ニ退治仕候處ニ、不慮ノ仕合ヲ以、私親相果申候時分、二本松ヲ退治候砌佐竹、會津、岩城、我等所ヘ取懸及ニ合戰一候間、會津トノ取合ニ罷成、不慮ニ會津迄打取申候。其時分寂上、大崎、相馬敵ニ御座候間、罷登御禮可ニ申上一隙モ無レ之候故、如在ノ躰ニ候。此儀世上カクレ有間敷候。重而御尋ニハ、左樣ニ方々敵ニ仕候事、其身ヨリノ可レ爲ニ仕樣一候。何モ骨肉ノ樣ニ被ニ聞召一候。其品々具ニ可ニ申上一候由、追而御諚候。政宗公被ニ仰上一候ハ、

一寂上敵ニ罷成候ハ、我等近習鮎貝藤太郎ト申モノヲ引付、義顯手切申サレ候刻ハタラキ候付、藤太郎退出寂上ヘ罷越、

于レ今罷有候由及レ承候。

一相馬ハ我等親代ニハ弓矢ニ候ヘ共、無事ニ罷成懇切ニ候處ニ、田村ノ淸顯ト申者我等舅ニ候。相果、彼地主無ニ御座一候。田村近所ニ石川彈正ト申者、拙者家中ニテ候。相馬義胤ヲ賴逆意仕候。退治仕ル所ニ、義胤、彈正抱ノ地ヘ被ニ罷越一、助抱申サレ候故、退治不ニ罷成一、大森ト申所ヘ引込候。其内ニ田村ノ家中ドモヲ引付、田村ノ本丸取申サレ候處ニ、我等奉公ノ者御座候テ、取樣ニ直ニ相馬ヘ引除申サレ候條、則大森ヨリ罷出、石川彈正ヲ退治仕候。彈正于レ今相馬ニ罷有候由承候。

一大崎ノ義ハ境論仕、弓矢ニ罷成候。佐竹、會津、岩城、不和ニ罷成候事ハ、先達申上候通ニ候由被ニ仰上一候。太閤樣、政宗ヲバ方々ヨリニクミ候由御意被レ成、會津取候慮外ニ被ニ思召一候間、可レ被ニ召上一候。本領御別儀有間敷候間、御禮可レ仕由被ニ仰出一候。

一小田原御陣所ニ石垣御普請被レ成候半ニ、芝居ニテ太閤樣曲錄ニ御腰ヲカケラレ、家〻利家ヲ始、大名衆餘多御座候。御禮被レ成御歸可レ有ト思召候處ニ、政宗ト二聲御意候而、小田原ノ城ノ見エ候方ヘ御向、御杖ヲ以テ地ヲ御指、是ヘ〳〵ト御意、其間遠候。御參候處ニ脇指御サシ候ヲ御ワスレ被レ成、中程ニテ御拔、下ニ和久宗是居申サレ候。御念比ニテ候間、宗是ヘナゲサセラレ御前ヘ御參候。一間計近ヘ御呼被レ成、御杖ヲ以城ノ樣子何方〳〵ト御指候而、敎御申被レ成候。政宗公モ思召之通仰上ラレ候ヲ、大名衆イヅレモ聞召、田舍者ニ候ヘドモ、脇指ノナゲ樣、物ノ申ブリ、御前ニテヲヂフレヌ躰、及レ聞候程ノ者ノ由御譽候由、宗是物語ヲ後承候。

一會津御留守ノ內、二三夜程サハギ候ヨシニ候。我等ハ不レ存候處ニ、寶尺ト申山伏、我等所ヘシラセ申候ハ、若松中以ノ外サハギ、夜ニ入候ヘドモ、方々ヘ荷物ヲ落、晝ノ商モ能樣ナル物ハ出シ申サズ候由申候。如何樣ノ義ヲ以サハギ候トタヅネ候ヘバ、會津ニ替衆候テ、越後ノ人數ヲ引越候由申候而、サハギ候由申候。左樣ノ義ハ何者其方ニハ申候トタヅネ候ヘバ、世上カクレナキ由申候。一人ヲ指不レ申候ハヾ、是非死罪ニ可ニ申付一由申候處ニ、我等ハ米澤ヨリ御供仕參候間、笑止ニ存シラセ申由申候。彌左樣ニ候ハヾ人ヲ可レ申由申候ヘバ、馬場頭ニ居候七郎右衞門ト申モノ、物ガタリヲ承候由申ニ付、七郎右衞門ニ承、ソレヨリ手次ヲ十八人引、十九人目ニ伊藤七郎屋敷ノ女房ヘ引付候。伊藤七郎ハ小田原御供ニ參留守ニ候。門ノ脇ニ牛之助ト申中間御座候。用心ノ爲廣間ヨリ鑓ヲ取參候ヲ、彼女房見申候而、扨ハ何事モ候哉ト存候テ、希求ニ參候魚賣ニ物語リ申由申候。其ヨリ申傳ヘ若松中ノ騷ニ成候間、彼女房成敗仕候。

一本會津奉公ノ者夏井藤左衞門ト申者、横田警固被ニ差置一候處ニ、越後ヘ申合、横田ヲ爲レ取可レ申企ニ候由、平田勘左衞門ト申モノ我等ニ爲レ聞申候。政宗公御下向ニ候者、被知行下サレ候樣ニ賴申由ニ候。奇特ノ忠節ニ候。尤之由挨拶仕候。又夏井藤左衞門弟ニ彌八郎ト申者、右ノ品々ニ爲ニ申聞一候。早勘左衞門各申候テ承候ヘ共、若兄ニ忠難レ計ト存、尤之由申合候。勘左衞門モ藤左衞門從弟ニテ候。何レモ好身共ニ候間、逆心ウタガイナク存候間、川島豐前アヅカリノ鐵炮衆申付、桑島監物ト兩人指越、藤左衞門ニハ腹ヲキラセ申候。彌八郎ニハ其身ヨリ先ニ平田勘左衞門爲レ知候テ、代官ヲ越候條、知行ノ義ハ成間敷由、右兩人ヲ以申付候。須ノ夏井彌左衞門事ニ候。

一須賀川落城ノ後、矢田野伊豆被ニ召出一候時分、大里ト申城ハ被ニ召上一、小島右衞門可レ被ニ差置一由御意候而、破却モ不レ被レ成、矢田野ヲバ破却被レ成、伊豆ハ若松ニ相詰、小田原ヘモ御供申候。底倉ニ御座被レ成、度々キビシク御タヅネ候間、御切腹モ可レ被レ成カト機遣仕候處ニ、矢田野伊豆欠落仕候。定而矢田野ヘ罷下逆意可レ仕ト被ニ思召一、我等所ヘ早飛脚被レ下、近所ノ人數申付打果申ベキ由仰付ラレ候處ニ、矢田野ノモノモ大里ヘ移相抱候。伊豆ハ於ニ小田原一佐竹義重御陣所ニ居候間、弟善六郎大里ヲ相抱候。石川大和殿ヘ申遣則近陣被レ成候。伊達、信夫、刈田、柴田、人數ヲ遣シ候ヘドモ、落城不レ申候。

一政宗公會津ヘ御下著前ノ夜、御飛脚ヲ以小荒田隱岐成敗可レ仕由仰下サレ候。此モノハ須賀川落城以後、我等ヲ賴御免ヲカフバリ候者ニテ候間、矢田野ガ會津ヲ被ニ明渡一候者、欠落可レ仕ト被ニ思召一候ト見エ申候。ソレニ付隱岐ニ申候ハ、明日御著候間、御迎ニ罷出可レ然ト申候ヘドモ、馬ヲ持不レ申由申サレ候間、我等馬ヲ借シ中途ヘ引出、勅使川原木工丞申付、足輕二三人指添、中途ニテ爲レ討申候。

一政宗公御下向ノ砌、木村伊勢守御小指南ニ候淺野彈正殿親類淺野六右衞門ト申モノ差添ラレ會津ヲ請取可レ申由仰付ラレ候。色々御馳走被レ成、政宗公米澤ヘ御移候。其時分迄大里落居不レ申付、片倉小十郎、我等長井ノ人數迄大里ヘ被レ遣候。各相談仕手責ニ可レ申由申合、方々ヨリ取付責候ヘドモ、水クルハ計取、其外ハ一ケ所モ不レ破候。其後ハ打ツヾキ雨降候間、城中水ニモ事ヲ欠不レ申、水曲輪ヲ取候間、石川大和殿衆ヲ不レ汲樣ニ番ニ付候處ニ、有時風雨ニテ人モ不ニ見分一時分、內ヨリ七八十人ハダカニ成、弓鑓計ニテ打出、番ノ者ヲ追散五人討候。大和殿ヘ陣所ヨリ不レ助以前引籠候。惣別城中ヨリ夜々方々ヘ突テ出、一人二人宛被ニ仰付一候。前代未聞ニ候。加樣ニ事延候內、小田原落城候而、上方ノ人數下候間、大里マキ候テモ、自分ノ城ハ如何ト何モ申サレ退散仕候。政宗公ハ米澤ヘ御移候ニ付、御出馬不レ被レ成候。

小田原落居ノ上、太閤樣、會津ヘ御下向ノ由申來候ニ付テ、

政宗公米澤ヨリ御迎ニ御出、宇津宮ニテ御目見エ被レ成候處ニ、御圍ヲ被レ成御茶ヲ被レ進、片倉小十郎ヲ御相伴ニ仰付ラル。冥加之至ニ候。南部ヘ御人數被レ遣候間、早々政宗モ可二罷下一由御意候ニ付而、御先ニ御下、長井ヘ御入馬被レ成候。

伊達日記下

一大閤樣會津ヘ御下、會津仙道蒲生飛驒殿ヘ被レ下候。木村伊勢守、葛西大崎拜領申サレ候而、二本松ヲ御通候。我等鷄所望ノ由ニ候間、一居持申候ヲ居サセ、湯井門迄追懸會申候ヘバ、葛西大崎拜領仕罷下候。鷹所望ノ由ニ候間、二居ニテ返可レ申由申サレツル。此鷄大事ノ鷹ニ候間、大鷹ニテ御返シ候ヘト狂言申候而罷歸候。

一淺野彈正殿、石田治部少殿、登米ヘ御著候間、政宗モ登米ヘ御出、御在陣候處ニ、上方衆御人數南部ヘ下候間、政宗モ九ノ閤迄御下向。上方衆九ノ閤責落シ御ノボリ候。政宗公モ御八丁目迄彈正殿御同道ナサレ、米澤ヘ御歸城ナリ。

一木村伊勢守、大崎、葛西十二郡拜領ニ付、上方大名衆ノ家中ドモ、伊勢守大名ニ被レ成候間、知行ヲ取ベキ由存、暇ヲ乞、亦逃隱、伊勢守ヘ奉公仕候。伊勢守ハ登米ニ在城、子息彌市右衞門ハ古川ニ在城ニテ候。大崎、葛西ノ本大名ドモヲ押除、小者五人十人召ツレ候者ヲ城主ニ仕ラレ候故、其モノ共家中無レ之マ、中間小者アラシユノヤウナル者ヲ侍ニツクリ立、本侍百姓ノ所ヘ押コミ〳〵八木ヲ取、百姓ノ下女下人ヲウバイ、歴々ノヨメムスメヲ我女房ニウバイ取、沙汰ノカギリノ仕樣ニ依テ侍大將トモニ末ノ事ハ不レ存、當座無念ヲオコシ柏木山ニテ寂前ニ一揆起シテ、其近邊ニ居候上方人討コロシ候由承、氣仙東山ニテモ起候由其キコヘ候。伊勢守、彌市右衞門、佐沼ヘ談合ノタメ出合申サレ候處ニ、登米ニテ一揆起古川ニテモ起リ候間、大崎、葛西無レ殘ヲコリ候。父子モニ佐沼ニ籠城申サレ候。一揆ノモノ共佐沼ヲ取卷近陣仕候。父子ノ者供仕ラレ候上方衆ハノコラズ古川登米ニテ被二打申一候。上方衆ノコリナク打果申候間、足輕ノヤウナル者ハ裸ニ成コモヲ身ニマトイ逃ノボリ候。御登ノ大名衆其樣子キコシメサレ足早ニ御上リ候。彈正殿ハ白川ニテ被二聞召一、二本松ヘ御歸御在馬ナサレ候。

一彈正殿ヨリ淺野六右衞門ヲ米澤ヘ御使ニツカハサレ、大崎、葛西一揆ヲコリ候間、政宗早々御下御退治然ルベク候。蒲生氏郷ヘモ其通申遣候由御コトハリニ付、四五日御支度被レ成、淺野六右衞門御同心ニテ利府ヘ御出、氏郷御出ヲ御待被レ成候。氏郷ヨリモ近日罷下候由度々御飛脚ニ候。氏郷御下之由被二聞召一、黑川ヘ被二相移一候處ニ、氏郷ハ松森ニ御在馬被レ成、黑川ヘ御相談ノタメニ御出候而、御働ノ樣子被二仰合一、松森ヘ御歸、一日御休息、翌日大崎ヘ被二打出一候。

一松森ニ御在陣之内、政宗公御家中須田伯耆ト申者、松森ヘ參テ、蒲生四郎兵衞ヲ賴ミ申上候ハ、政宗一揆ニ御同心ニテ氏郷ヲ討果可レ申由被レ存候條、御油斷被レ成間敷由申上候而、則御在陣ニ罷在候ニ付、氏郷大崎敵地ノ内一ケ所取、其地ヘ引コモリ度思召サレ、政宗御相談ニテ、名生ト申小城ヲ御責取、則御引籠普請ヲナサレ御座候。政宗猶其由ハ御存知ナク、宮澤ノ城ヘ御働ナサレ、氏郷ヘ御飛脚ヲツカハサレ候處ニ、内ヘモイレズ押返候。宮澤ニ近陣ナサレ候ヘバ、佐沼ニ伊勢守父子コモリ候ヲ、一揆ノ者共取マキ候故、飯米モアル間敷候間、早々引出サレ度思召サレ、宮澤ヘハ無事ニテ御入、城主ヲ召出サレ、佐沼ヘ御ハタラキ被レ成候由ウケタマハリ、佐沼トリ卷候一揆ノ者共引除候ニ付、伊勢守ハ父子被二引出一候處ニ、名生ヘマイリ、氏郷ニ逢可レ申由申サレ候。名生ヘ參ラレ候處ニ、政宗一揆ニ御同心ノ由承、氏郷同前ニ名生被レ居候。

一伊勢守被二引出一候砌、高清水ハ鳳月此方ヘ右ヨリ被二申寄一候間、引除御下ヘ參ラレ、明地ニ成候間、高清水ニ御在馬被レ成候ヘドモ、方々一揆之城々ノ中ニテ、寒氣之砌御働モ不二罷成一、トカク御手前御アヤマリナキ旨、彈正殿ヘ可レ被二仰合一由被二思召一、高清水ヘ御出候處ニ、古川百々ヨリ一揆共マカリ出候ヘモ、此方ヨリ一人モ不レ被レ出候間、一戰モ無レ之御通候。其夜ハ松山遠藤出羽守御宿申、翌日黑川ヘ御出、ソレヨリフク島ヘ御移。彈正殿ヘ原田左馬助、濱田伊豆爲二御使一被二指遣一、私誤ナキ旨被レ分二聞召一、氏郷ヘモ被二仰遣一可レ預由ニ候。其身ドモ御咄ニ可レ申候ハ、政宗、飛驒殿ヘ意趣可レ有之儀ニ無レ之候。縱飛驒殿ヲ生害サセ申トモ、天下ヲ敵ニ致何トテ可二罷成一候哉。各樣御分別ハ濱田伯耆申候儀ヲ御承引、迷惑仕候由可レ申ト被二仰付一候。御意之旨申上候ヘバ、氏郷御疑心不二相晴一、名生ニ引コモリ御座候而、政宗公飯坂ヘ御越候而御在馬候。彈正殿ヨリ氏郷ヘノ飛脚黑川ヨリ人數ヲ以ヲクリヲ立罷歸候。

一彈正殿仰ラレ候ハ、氏郷不二引出一候而、仰分モ成マジク候條、早々引出御申可レ然由被レ仰候。氏郷ヨリ人質無レ之候ハヾ、罷出間敷由御理ニ付テ、伊達彦九郎ヲ人質ニ被二仰付一候。我等ニ罷越候而、一戰仕引出可レ申由仰付ラレ候。拙子事二本松引除、家中モニ方々ニ罷在候間、成間敷由申上候處ニ、國分、黑川ノ人數ヲ召連可レ參由、伊達上野其外中奥ノ人數ヲ被二仰付一候由御意ニ候。黑川ヘ罷下、極月廿日比一戰ヲ仕候。彈正殿ヨリ淺野六右衞門被二指添一遣ハサレ候。六右衞門、彦九郎同心ニ名生ヘ參ラレ候處ニ、氏郷、伊達上野ガ成實ヲ不レ被二差添一候ハバ、罷出マジキ由仰付ラレ、黑川ヘ打通、其段飯坂ヘ申上候ヘバ、拙者可二罷越一由御意候條、極月

廿九日ニ働仕、四竈ニ在陣申。文祿元年正月朔日ニ名生ヘ彦九郎、六右衞門、我等三人參、氏郷ヘ懸ニ御目一御供、黑川ニ一宿被レ成、岩沼ニ御留、一日宮ニ御逗留候而、二本松ヘ御通候。大森ニテ氏郷私宿ヘ御出、早々可ニ罷歸一由御理ニ候。二本松迄御供可レ仕由申候ヘ共、頻被レ仰候間、飯坂ヘマカリ歸候。一日過候テ、政宗二本松ヘ御出候。彈正殿事ノ外御喜、カヤウノ儀ヲ人ノ申唱ニヨツテ御氣遣ヲナサレ、笑止ニ存候由仰ラレ、御馳走被レ成候。春中大崎ヘ御働可レ被レ成由彈正殿ヘ被ニ仰合一、暮程ニ御歸九日ニ飯坂ヨリ米澤ヘ御歸城ニ候。

一須田伯耆ト申者ハ大浪大膳家中ニ候。御洞御弓矢ノ砌、大膳逆心仕候所、親伯耆、後ハ道苦ト申者、背ニ大膳一、直ニ御奉公ニ罷成候。大膳家中故、百番切ノ奉公竝ニテ御年頭ニ一度御前ヘ罷出、御弓矢ノ時分モ指南備ニ罷在躰ノモノニ候。然處ニ輝宗公御生害ノ砌、米澤ヨリ百里程ヘダテ、信夫ノ内策切場ト申所ニ在所仕候ガ、追腹ヲ仕候由申上候。政宗公モ御首尾ノ御覺ハ無レ之、不審ニ思召サレ候ヘドモ、追腹仕候由申候間、死骸ノ夏狩ヘ被ニ思寄一、輝宗御同前ニ葬禮仰付ラレ候。世上ニハ道苦追腹、何ノ御首尾ニ候ト申唱候。遠藤山城子共内、馬場右衞門子共ニハ乍レ少御加增下サレ候ヘドモ、彼伯耆ニハ左樣ノ儀モ無レ之候。カネテ親御供仕候ニ、少々御心付モ無レ之由申廻リ候由承候。伯耆二番目ノ子小十郎ト申者、拙子ニ奉公仕候ニ付細々出入仕候。惣別機持不レ定者ニ候。ケ樣ノ御忠節ヲ申候ハバ、政宗切腹ヲモ被レ成、我等ハ天下ヨリ御知行ヲモ下サルベクト存、少モ無レ之事申出候ト存候。

一上方御念比衆ヨリ先々御上落(洛歟)可レ然由御異見ニ候。彈正殿ヘモ其通何モ被ニ仰越一候ニ付、御登可レ然ヨシ彈正殿モ御異見ニ候條、御供衆二十騎計被ニ仰付一、米澤御留守居ニハ我等仰付ラレ、澤田豐前被ニ指添一、正月廿一日米澤ヲ御立、深雪故、大森ヘ二日ニ御出、二本松ニテ彈正殿ヘ會御申、御上洛ニ候。

一於ニ京都一妙覺寺ニ御宿ヲ仰付ラレ、大閤樣ヘ御目見ヘ相濟、色々御拜領ニ而早々罷下、大崎、葛西ノ一揆退可レ申由被ニ仰出一候ニ付、六月末ニ御下著被レ成、御人數被ニ仰付一。七月半過ニ米澤ヲ御立、白石ニ五六日御逗留ニテ、御川獵被レ成、黑川ヘ御移、七月廿四日大崎ヘ御働ニ候。小野田ノ城主石川長門御奉公申サレ、四竈城主黑川近所ニ候間城ヲ除、小野田ニ居申サレ候モ御奉公申サレ候。宮崎ヘ御トモ申サレ候。宮崎ヨリ罷出候人數ヲ御先手衆追入則城ヘ取付候處ニ、岸高城能候間責損、鐵炮ヲ以、濱田伊豆ヲ初數多被ニ打殺一候。ソレヨリ近陣被レ成、竹束ヲ付仕寄ヲ被ニ仰付一候處ニ、城主ヨリ石川長門、四竈尾張ヲ以我等ヲ賴、出城申度由御侘言申サレ候。政宗公ハ是非責定候ベキ由御意被レ成候。拙子申上候ハ、佐沼ハ伊勢守籠城申サレ候儀カクレナク候間、彼地ヲ御責可レ然候。宮崎ヲバ御引出御尤之由申上候。內內御同心ニ被ニ思召一候處ニ、其夜城中ニ火事出來、城ヲ持ホゴシ落城仕候。落人ドモカラメ取參候。何レモ御成敗被レ成候。佐沼ヘ御取ウヅミ被レ成候。

一佐沼近所ノ者共ノアツマリ、町搆西舘相抱候一揆ノ城共、大崎、葛西、中ニ多候間、御人數損候モ如何思召サレ、惣搆ヲ御覽候而、仕寄ヲ所々ニ仰付ラレ、竹束ヲ付取寄屏際ニ付候。政宗公御陣所ハ西樞輪ノ西ノ山ニ候間、沼候而地形惡候。沼ト川トノ間ハ茂庭石見役所ニ候。其東ハ片倉小十郎役所ニテ候。二日仕寄ヲ仕ラレ候處、四日ノ明方西曲輪ヲ持兼引コモリ候付而、町搆モ破、本丸計ニ罷成、其日一日責候ヘドモ落城仕ラズ候。其夜ノ明方落城仕候。城主ハ夜ノ內ニ欠落、葛西ノ內西郡ト申所ニテ討レ候。家中侍百姓共二三千餘被ニ打果一候。城中死骸多候而、土ノ色モ不レ見、死骸ノ上許アロキ候躰ニ候。政宗翌日登米ヘ被ニ相移一、何方ノ城ヲモ可レ被レ爲レ取思召候處ニ、葛西本侍衆、政宗御弓矢ノ强事覺候間、何モ御佗言申サレ、其後ハ御働モ無レ之候。

一關白樣御下向ノ由被ニ聞召一御迎ニ御上候砌、大崎、葛西一揆ノ侍共、命ノ儀ハ御赦免被レ成候樣ニ可レ申候間、在所ニ居事イカヾニ候。澤谷ヘ罷出可レ然由被ニ仰付一、澤谷ヘ何モ被ニ召寄一、二本松迄御迎ニ御上リ候。

一關白樣ヘ二本松ニテ御目見ヘ候所ニ、兩使ヲ以大崎、葛西ノ一揆ノ樣子御タヅネ候。政宗仰ラレ候ハ、城々多相抱、地下人迄モ譜代ノ者ニ候間、御退治御六ケ敷候條、命バカリハ被ニ相助一候樣ニ御訴訟可レ申由申候間、澤谷ト申所ヘ引寄而差置候間、御意次第討果可レ申由仰上ラレ候。一段仕樣然ルベク候。早々死罪可レ仕由御意ニ候間、御先ヘ御使被ニ差越一、泉田安藝守ニ黑川之人數ヲ指添ラレ、一揆ノ物頭二十人餘被ニ討殺一、首モニ御ノボセ候。鹽漬ニ被レ成京都ヘ被レ爲レ上候。

一關白樣ハ寂上ヘ御下向、家康公ハ岩出山ニ御逗留ナサレ候。佐沼、岩出山ヲ御再興候而政宗公ヘ相渡サレ候。關白樣ヘ相付一候御人數淺野彈正殿モ南部迄。御下、奥中平均ニ被ニ仰被ニ付一御登候。政宗公モ直ニ岩出山ヘ御移候。長井、伊達、信夫、田村、鹽ノ松、刈田迄、蒲生飛驒殿御拜領候。關白樣、家康公御登被レ成候。政宗公御國替ニ付、伊達、信夫、田村、鹽ノ松ノ侍衆妻子被レ下引移申サレ候。

一岩出山、政宗公在城ニ被ニ相立一候。御上洛ノ時分ヨリ來年ハ高麗陣ト申ナラハシ候。政宗公ハ遠國ト云國替、彌一揆ノ跡ヲ下サレ候由、太閤樣御諚ニテ人數五百ト仰付ラレ候ヘドモ、其躰ニテハ不レ被レ爲レ成。馬上三十騎、鐵炮百、弓五十張、鑓百、ノボリ三十本仰付ラレ候。彼是千餘ノ御人數ニ候。奥摸樣ト上方ハチガイ候條、具足ハ下サルベク候條、其

外ノ支度バカリ仕ルベキ由仰出サレ候ニ付テ、イヅレモ拜領申候知行所ヘマカリ越越年仕候。

一高麗入ノ御支度、萬御道具ハ京都ヘ仰上ラレ候。岩出山御留守居ハ屋代勘解由兵衛ニ、御領内中其身被ニ任置一度由仰付ラレ、天正十九年正月九日、岩出山御立被レ成黑川ニ御著。七森ノ鹿御狩被レ成、年内ヨリ名取、國分、宮城、黑川、澤谷、松山ノセコ仰付ラレ候。大崎中ハ一揆御退治故、地下人不ニ有付一候間被ニ差置一候。十一日御鹿狩三百余被ニ狩取一、御供衆岩出山御留守居衆ニ下サレ候。彼山ハ秀衡子退治之砌、賴朝公御狩ノ由申ツタヘ候。惣山ノ鹿御立場ヘ參、地形山ノマハリ見事ノ所ニテ候。十二日圓森ヘ御著。二月十三日京都聚樂御屋敷ヘ御著ナサレ候。左候ヘバ築紫西國四國大名衆、一番ニ小西攝津守、二番加藤主計、其外段々ニ渡海被レ成候。聚樂御留守居ハ關白樣秀次公被ニ相付一候。大名衆ハ加藤肥前、中村式部少、田中兵部少、渡瀨小次郎、山内對馬、池田三左衞門、ソノ外小大名衆アマタツケチカレ候。

一二月半時分、岐阜中納言殿、淺野左京大夫、羽柴藤五郎、木村常陸、加藤遠江、ソノ外坂東ノ大名衆、段々ニ御陣立候。一番加藤筑前、二番家康、三番政宗、四番佐竹右京亮、押道ハ聚樂御屋敷ヨリモドリ橋ヲ大宮通ヘ御返候。政宗家中出立ハノボリ三十本、紺地ニ金ノ丸、ノボリ指ノ衣裳具足、下ニムリヤウノジユバン、具足ハ黑絲、前後ニ金ノ星、鐵炮弓鑓ノ衆下著。具足同前、銀ノシ付刀脇指、小尻ヲカキホウナリニ朱ザヤ太刀ノ如クキツハニサシ申候。金ノトガリ笠長三尺計、廻リ一尺八寸程、馬上ハ三十騎、共ニ黑母衣金半月ノタシ、豹虎又孔雀ノ尾、熊ノ皮、色々ノ馬ヨロイヲ懸、金ノシ付ノ太刀刀ニ候。其内遠藤文七郎、原田左馬助ハハキソヘニ木太刀ヲ一間半ニコシラヘ帶候。小尻サガリ候間金物ヲ中程ニ仕、肩ヘ絲ニテツリ候。見物ノ人イヅレモノ御通ニハ聲モタテ申サズ候ガ、政宗御通ニハカハリ候出立ユヘ、上下ヲメキ物音モキコヘヌ躰ニ候。京中ニテ褒美申候。其晩ハアイト申所ヘ御著陣被レ成、ソレヨリ何モ大名衆具足ハ取納、常ノ衣裳ニテ名護屋御著被レ成、家康公、筑前殿モ御城ノ北入海ヲ隔御立陣ニ候。政宗モ其北方御陣所ニ候。其西ハ結城殿御陣所ニ候。

一六月末ノ比、事ノ外暑時分、家康公御陣所ノ下ニ清水候。筑前殿衆其水ヲ汲申サレ候。多出不レ申水ニ候故、家康公衆防ノ處、是非汲可レ申由申カラカイ候。其聲ヲ承筑前殿陣所ヨリ二人三人宛走寄、尤家康御陣場下ニ候間、人出合二十人三十人成、後ハ二三千宛出合候。筑前殿衆ニ大名ト見エ候衆ハ一人モ無レ之候。家康公御下ヨリハ本多、中務ヲ、初大名衆十人程出合、喧嘩ヲサヘ候躰ニ候。双方矢ヲハゲ鑓ノサヤヲハヅシ申候。若事出候ハヾ天下ノ大事ニ可レ成程ノ喧嘩ニ候。政宗ハ何モ御念比ニ候ヘ共、別而家康公ヘ御入魂候間、事出候ハヾ家康ヘ御助可レ被レ成躰ニ候。被ニ仰出一ハ無レ之候ヘ共、下々以其覺悟ニ候。家康公鐵炮大將服部半藏、渡邊半藏ハ鐵炮三百挺程召連、喧嘩ニハ不レ攝、筑前殿ノ陣ノ後ヘ相詰、事出候ハヾ本陣ヘ可ニ取懸一ノ躰ニ候。政宗公年寄衆二三人被レ遣、双方ノ衆ヲ押ヘ候迄ニテ、連々双方遠ザカリ無ニ何事一罷歸候。不思儀ニ急事出申サレ候由、名古屋中ノ取沙汰ニ候。家康筑前御陣所遠候由、秀吉公御意被レ成、御城近所ヘ御陣所ヲ相移サレ候。政宗ハ渡海可レ被ニ仰付一由被ニ思召一候處、其御沙汰モナク御越年ニ候。

一盆ニ加賀筑前殿御家中前田孫左衞門ト申人ヨリ政宗公御陣所ヘヲドリヲ被ニ差越一候。其返事可レ被レ成由ニテ何モ稽古仕候。廿日ノ晩可レ被レ爲ニ相返一由ニテ、イヅレモ出立候處ニ、日暮家康公御陣前ニテ安部傳八郎ト申者、柏原新五郎ト申衆ヲ討欠落仕候。家康公ヨリ陣所々々ヘ御穿鑿候樣ニト被ニ仰越一候ニ付、方々ヘ續松ニテタヅネマハリ候間、チドリモ相止、其後ハ御返シ無レ之候。

一翌年ノ正月、淺野彈正殿御子左京大夫殿ヘ渡海被ニ仰付一候。政宗モ渡海仰付ラレ候。三月十五日、舟ニメシ候ヘモ日和コレナク、二十二日迄名古屋ノ間ニ舟カヽリ、政宗公ハ陸ニ御宿ナサレ、御下衆ハ舟ノ内ニテ日ヲオクリ申候。廿二日、追手舟政宗御舟ハ壹岐ノ風本ト申所迄御著舟ニ候。二月原田左馬助、富塚近江渡海申サレ候。是モ日ヨリ無レ之風本ニ居申サレ候。淺野彈正殿御父子ノ船、伊達上野、石川大和、片倉小十郎、白石若狹舟風本迄參。中途ニ舟相懸リ、翌日日和ヨク彈正殿御舟ヲハジメ何レモ對馬助府中迄御出候。政宗公ハ彈正殿御舟通候由被ニ聞召一、御舟ヲ被レ出候ヘモ風惡ク又風本ヘ御モドリ、四五日御逗留候而、漸對馬御著候ヘドモ日和無レ然十四五日御逗留候。中途ニカヽリ候船共、彈正殿始申、フザンカイヘ先ニ御著候。伊達衆モ政宗御供不レ被レ申候衆ハイヅレモ御先ヘ參ラレ候。疾ニ高麗ヘ御渡リ候由存、急候ヘバ跡ニ御座ナサレ候。迷惑ノ由被レ申候。四五日彈正殿御ヤスミ候而ウルサンヘ御働候。彼地ハ日本衆取候而相ステ、高麗ノ都ヘトチリ候故、又カウライ人相抱候ヘドモ、可レ持ヤウコレナク、人數サキヲ見申候テ引捨、山々ヘ引コモリ候。

一陣道具取ニ夫兵四五十人マイリ候處ニ、高山ヨリ高麗人跡ノ不レ續ヲ見切、追散五六人討候。ソノ後モ薪トリ候モノヲ追散候間、政宗人ヲ被ニ差越一地形御見セ候處ニ、人ノ一二百程居候而、山ヨリモ不レ見、深澤ヘ、其夜中ニ人數二百程差遣ハサレ隱置、夫兵計道具取ノ樣ニ被ニ差越一候處、又高麗人共其者共ヲ追下候ヲ、澤ノ者共出合押切、御陣屋ヨリモ助合候故、八十三人討取候。右類共ヲ彈正殿ヘ御越候ヘバ、今ニ不レ始御手ガラ感入候。名古屋ヘ申上候由御理候。

一筑紫、中國、四國ノ大名衆、唐海道、平安道、コフ海道、チラ魂候間、事出候ハヾ家康ヘ御助可レ被レ成躰ニ候。被ニ仰出一ハ無レ之候ヘ共、下々以其覺悟ニ候。家康公鐵炮大將服部半藏、渡邊半藏ハ鐵炮三百挺程召連、喧嘩ニハ不レ攝、筑前殿ノ陣ノ後ヘ相詰、事出候ハヾ本陣ヘ可ニ取懸一ノ躰ニ候。政宗公年寄衆二三人被レ遣、双方ノ衆ヲ押ヘ候迄ニテ、連々双方遠ザカリ無ニ何事一罷歸候。不思儀ニ急事出申サレ候由、名古屋中ノ取沙汰ニ候。家康筑前御陣所遠候由、秀吉公御意被レ成、御城近所ヘ御陣所ヲ相移サレ候。政宗ハ渡海可レ被ニ仰付一由被ニ思召一候處、其御沙汰モナク御越年ニ候。

一盆ニ加賀筑前殿御家中前田孫左衞門ト申人ヨリ政宗公御陣所ヘヲドリヲ被ニ差越一候。其返事可レ被レ成由ニテ何モ稽古仕候。廿日ノ晩可レ被レ爲ニ相返一由ニテ、イヅレモ出立候處ニ、日暮家康公御陣前ニテ安部傳八郎ト申者、柏原新五郎ト申衆ヲ討欠落仕候。家康公ヨリ陣所々々ヘ御穿鑿候樣ニト被ニ仰越一候ニ付、方々ヘ續松ニテタヅネマハリ候間、チドリモ相止、其後ハ御返シ無レ之候。

一翌年ノ正月、淺野彈正殿御子左京大夫殿ヘ渡海被ニ仰付一候。政宗モ渡海仰付ラレ候。三月十五日、舟ニメシ候ヘモ日和コレナク、二十二日迄名古屋ノ間ニ舟カヽリ、政宗公ハ陸ニ御宿ナサレ、御下衆ハ舟ノ内ニテ日ヲオクリ申候。廿二日、追手舟政宗御舟ハ壹岐ノ風本ト申所迄御著舟ニ候。二月原田左馬助、富塚近江渡海申サレ候。是モ日ヨリ無レ之風

ンカイ切シタガヘ、去年ハ高麗人手ト身ト計ニテ逃候間、飯米ヲ取、四月迄在陣申候ヘ共、日本ヨリ飯米不ニ相續一候故、其通名古屋ヘ申上ラレ候處ニ、可ニ引除一由御諚候。縱バ去年赤國ノモクソ判官城ヲ責候處ニ、判官功ノモノニテ石火矢ヲ打半弓ヲ射、砂ヲ煎リカケ湯ヲワカシカケ、芝ニ火ヲ付ナゲ懸候故、ケブリニムセ、寄手衆死人多引除シ所ニ、内ヨリ出合日本衆多ウタレ候。此旨秀吉公キコシメサレ、都ヨリ引除候人數、浮田中納言殿、加藤主計、黑田筑前、戸田民部少、蜂須賀河(阿)波守、安藝ノ毛利殿、小早川、吉川、淺野彈正、政宗、岐阜ノ少將殿、衆ヲ以赤國判官ガ城ヲ取可レ申候。人ノ損不レ申樣ニ長陣仕、討タイラゲ可レ申由仰付ラレ候間、七月廿日比、赤國ヘ何モ御越候。彼城南ハ大川ニテ岸高、三方ハ七間程ノ石垣ニ候。吉川ハ河ノ南向ニ陣取候。竹束ヲ付仕寄被レ成候。城内ヨリ日暮候ヘバ、タイ松ヲ三間計ニ一ヅツトモシ候。加藤主計龜ノ甲ヲ作、人ヲノセ石垣ノ根ヘ押寄、其内ヨリ鶴ノハシヲ以ヲ石垣ヲコヂ候ヘ共、大石ニテ不レ成處ニ、城内ヨリ燒草ヲカケ、彼龜ノ甲ヲヤキ破リ候。カサネテ牛ノ皮ヲハギ、毛ヲ下ヘナシ、龜之甲ニ張付、又押寄候處ニ、右ノ如ク燒草ヲカケ候。内ニ居候者ドモ、有兼出候而、一二人ツルノハシニテ石ヲコネ返シ候故、石垣クヅレ、兩人石ニ被ニ打殺一二人生候。寄手コレヲ見取付責候間破候テ、城中ノモノ可レ働ヤウナク、大川ヘトビ入候所ヲ、吉川人數ノ分出候間、アリクベキ樣モナク川下ニ瀨渡候所ヘ、寄手衆立切候故、水ニヲボレ死候者モアリ、多分瀨ヘナガレカヽリ候ヲ切殺候。高麗人ハ刀脇指ヲ不レ持候間、可レ働樣モ無レ之三千餘ウタレ、七月廿九日落城仕候。本丸ニ土ヲ深堀、下ヘワラヲ、其上エ柴ヲ敷、氷ヲ一重置、又ワラ柴ヲ敷、幾重モナク氷ヲ置候處御座候。藏ノ内事ノ外寒申、熱時分ニテ何レモ給申候。

一秀吉公八月末名古屋ヨリ御歸馬候。筑紫四國西國、衆ハ在陣ニテ、坂東勢ハ九月十日ニ歸朝申サレ候。フザンカイ近所ニ城ヲ三ツ取、普請可レ仕由仰出サレ、イヅレモ其普請被レ成候。高麗ハ弓矢ノ不レ成事無レ之候ヘドモ、日本ノ御人數少、飯米不レ續候付、御弓矢成兼候。地下人ヲ仕付候テ飯米ノ出候樣ニト被ニ仰付一候間、フザンカイノ高麗人ハ有付候間、其者ヲ以テ色々被レ申候ヘドモ、日本衆ヲヲソレ申テ何事ヲモ實儀ニ不レ存、只山ヘ逃候計ニ候。海道一筋ハ切領候ヘモ、五里六里ヘダタリ候ワキニテ耕作仕、日本衆マイリ候ヘバ、山ヘ逃跡明候間、御弓矢不レ成候。

一伏見御城文祿二年ヨリ御普請ナサレ候。名古屋ニ御在陣ノ内、秀次公聚樂御城ニ御留守ニテ候。秀吉公直ニ伏見御城ヘ御歸陣被レ成候。先天下ハ秀次ヘ御渡シ分ニテ候。東海道駿河訖ノ大名衆被ニ相付一候迄ニテ、御仕置抔ハ秀次公御搆不レ被レ成候。

一會津蒲生飛驒殿御遠行候而、家老蒲生四郎兵衞、藤三郎殿ヲトリ立申候所、飛驒殿小姓頭ニ被ニ召遣一候和田利八右衞門ト四郎兵衞、公事ヲ仕及ニ披露一候付、秀吉公御意ニテ和田利八右衞門切腹仕候。蒲生四郎兵衞ハ島津兵庫頭ヘ預ヲカレ候。藤三郎殿ハ家康公御聟ニ候。御若年ニテ御洞六ケ敷候間、先々御國被ニ召上一由被ニ仰出一、宇都宮ヘ十八萬石ニテ、御國替候。飛驒殿ハ奥州ノヲサヘト思シメサレ、會津仙道訖百十五萬石下シヲカレ候。其跡長尾景勝ヘ下サレ候。蒲生殿ハ淺野彈正殿與力ニ候。景勝ハ石田治部少與力ニ候。仕置ノタメ兩人衆會津ヘ御出候。政宗モ大崎、葛西一揆取亂候ヲ被レ下、カウライ迄渡候條、罷下仕置可レ仕由被ニ仰出一、彈正殿御同心ニテ御下候。彈正殿ト治部少輔下リ候。兼而御中悪候。

一秀吉公御在陣ノ内、若君樣御誕生ナサレ候。秀次ヘ聚樂御渡候ヲ内々秀吉公御後悔ニモヲボシメシ候哉。治部少見屆御中ヲ表裏候由見ヘ候。秀次公山ヘ綱ヲ御張、唐犬ヲ集メ鹿ヲ御クハセ候而、五日十日御山ニ御座候。御謀叛ノ御談合ノ由被ニ思召一候間、終ニ高野山於ニ誓願寺一御切腹ナサレ候。兼而右大臣御女、寂上義顯ノ御娘ヲ始三十六人ノ御目懸衆ヲ害シ申、義顯御娘ハ奥州一揆ノ砌、秀次寂上御在陣ノ時上ゲ申サレ候。大名ニ不ニ似合一由天下ノアザケリニ候。今度如レ此ノ仕合候故、義顯モ聚樂御屋敷ニ押籠御座候。彈正殿子息左京太夫(大)ハ秀次相聟ニ候付而、大原ヘ御引コモリ候。右ノ品會津ヘ申來ニ付、彈正殿夜ヲ日ニ御登リ候。秀次ヘ被ニ相付一候衆ノ内、田中兵部、山内對馬、中村式部ハ御謀叛ニモカマイ申サレズ候哉恙ナク候。其外切腹ノ衆多候。政宗公モ彈正殿ヘ追付御上リ候處、秀次ヘ御同心候由ニテ御上候ハバ、可レ爲ニ切腹一由御念比ノ衆ヨリ申來候付、藥院別而御懇切候間御異見御請候ヘバ、早々大坂ヘ御參、我等所ヘ御越候ヘノ由仰ラレ候ニ付、藥院ヘ御出候。此表裏ハ秀次公ノ御出頭人粟ノ木工、本政宗公家中ニテ御舍弟ノモリニ相付ラレ候。其比ハ藤八郎ト申候。少誤リ候テ可レ及ニ死罪一候ヲ、存分北國ヘ欠落仕候。北國ニテ可レ被レ討樣子見合、北國ノ城主上郡山民部家中ヲ人質ニ取越後ヘ除、上洛仕、秀次公ヘ御奉公仕候。政宗公モ秀次公ヘ御參候。木工御勘當ニ候ヘバ如何之由、秀次公御内證候而御懇志ニ成候。彼仁秀次御生害ノ後、木村常陸、熊谷大膳、粟野木工切腹仕候。吉田修理ハ欠落行方ツヰニ知不レ申候。政宗ヘ藥院、玄意法印、寺西筑後守、岩井丹波、四人ヲ以御タヅネニハ、今度關白謀叛ノ所、一味仕、鹿狩ノ砌山ヘ參談合ノヨシ被ニ聞召一候由御意候。政宗御目被レ下候間、節々罷出候ヘドモ、左樣ノ儀無レ之候由被ニ仰分一候處、重而奥州ヘ下向ノ時分、秀次ヨリ餞ヲウケ候由被ニ聞召一候。是ハ何トテ不ニ申上一候由御諚ニ候。政宗行當迷惑仕申候。奥州下向ノ時御イトマ乞ニ罷出候ヘバ、鞍十口、

帷子二十、粟ノ木工ヲ以下サレ候由、其時四人衆路次ニテ御談合候而、天道ツキ、此一儀不レ被二申上一候由落涙仕申由被レ達二上聞一ニ候ヘバ、子共兵五郎ヲ若君様ヘ御披官始ニアゲマウサレ候間、兵五郎ニ國ヲ可二相渡一候。政宗ハ遠島ヘモ可レ被レ遣候。在所ニ居申候家老共登セ可レ申候。其段仰付ラルベク候。誓紙ヲ仕候迄屋敷ニ居可レ申由被二仰出一候。四人ノ御使者衆薬院ノ内ヘモ御入ナク、庭ヨリ御前相濟候。心安可レ被レ存由先仰ラレ候後、御詫之通被二仰渡一候付、衆樂御歸御閉門ニテ御座候。御國本ヘ家老衆可二罷登一由被二仰遣一候。然者衆樂ノ町人、政宗家中ヲ屋敷ヘ引籠、京中ヲ燒拂切死可レ申由申唱、以ノ外騒候由御念比衆被二聞召一、双方ノ門ヲヒラキ屋敷ノ内ノ見エ候様ニ被レ成、惣別内衆出入相止ラレ然ルベキ由御異見ニ付而、表裏ノ御門ヲヒラキ御座候。然ル處ニ伏見ニテ、江戸中納言殿御屋敷之前ニ高札ヲ立候。其札ヲ御留守居衆大坂ヘ上申サレ候ヘバ、秀吉公御普請場ヘ被レ爲レ成候砌、普請奉行布施屋小兵衛、杉山主計、竹内左太右衛門三人ヲ、政宗、義顯シテ奉レ討。西三十三ケ國義顯、東三十三ケ國ハ政宗可二相抱一由申合候由ノ文言ニ候。秀吉公御覽被レ成、政宗ヲ人々ニクミ申ト見エ候。關白一味ノ由申上候モ、ケ様ノ者ヒニ可レ有レ之由被二御意成一、此札立候者申出シ候ハヾ金子可レ出由札ヲ立候ヘノ由、義顯、政宗ヨリ金子四十枚出シ、京ニ二十枚、伏見ニ廿枚相懸候上、

知行ハ望次第ニ兩人ヨリ被二下置一候由、御奉行衆ヘ名付ニテ室町ト伏見ノ京町ニ札ヲ立候ヘドモ終ニシレ不レ申候。政宗ハ御免ナサレ候。義顯モ娘ノアヤマリ迄被二相許一召出サレ候。施藥院、玄意、寺西、岩井四人衆ヲ以、右ノ段被二仰付一御目見相濟候。

一慶長元年、太閤様伏見ノ向島ト申處ニ、御城御搆候御普請過半出來候處ニ、閏七月十二日夜半時分、大地震ニテ、御城ノ天守、御殿共ニ破損シ、御城ノ内ニテ男女五十人餘被二打殺一候。向島ハ宇治川立廻地形下所ニテ候故、猶以普請衆餘多越度申候。秀吉公此城御立候共然有間敷被二思召一、同廿二日ニ小幡山ヲ御覽被レ成、御城ニ可レ被レ成由被二仰出一候。大名衆御馬廻リ小身衆迄組々ヲ被レ成、極月晦日ヲ切ニ御移徙可レ被レ成由ニテ、夜ヲ日ニツイデ御普請イソギ申サレ候。地震程ヲソロシキ事ハ無レ之由御意ニテ、御殿ノ柱二本ハ石次ヘ、三本目ハ地ヘ五尺計ホリ入、上道具モ方々ヲカスガヘニテシメ、兼テノ御作事トカハリ、地震ノ御用心第一ニ候。

一御普請場ヘ日々被レ爲レ成候。十月始寒時分、惣ノ大名衆ヘ風ヲフセギ候ヘノ由ニテ、長持ニ紙絹ヲ御入、町場ヲ御廻リ候テ移ニ下サレ候。政宗ハ物ズキヲ仕候ヘドモ紺地ノ金襴、袖ハ染物ニスリハクノ入候ヲ御付、スソハ青地ノ段子色々ヲトリ合候呉服ヲ下サレ候。其砌政宗大坂御上下ノ御座船ヲ御進上被レ成、御感ノ由ニ候而、光忠ノ御腰物ヲ被レ下候。其明ル日御普請場ヘ政宗彼刀ヲ御差御目見候處、昨日政宗ニ刀ヲヌスマレ候間、取カヘシ候ヘト御詫被レ成、御小姓衆四五人取カヘリ候ヲ、政宗打ハライ半町程逃候ヘバ、盗賊人ニ候ヘヒ、御免ナサレ候間參候ヘト御意被レ成候。或時御所柿ヲ御入被レ成諸大名ヘ被レ下候。政宗町場ヘ被レ爲レ成、政宗ハ大物ズキニテ候間、大キ成ガノゾミニ候ハン由御意ニテ、折ノ中ヲ御取カヘシ候テ、是ヨリ大キナルハナキトテ被レ下候。諸人ニスグレタル御意共度々候ヲ、何レモ御覽候而、政宗ハ遠國人ニテ一兩年ノ御奉公ニ候。如レ此御前ヨキヿ冥加ノ仁ニテ候ト御取沙汰候ナリ。

一秀吉公御違例ニ候處、次第ニ重候故諸大名衆ヲメサレ、御病氣ツヨク候間、御他界モ候ハヾ、秀頼公ニタイシ逆意存マジキ由誓紙仕ルベキ由被二仰出一候ニ付、熊野牛王ニ血判イヅレモ被レ成候ヲ、大峯ニヲサメ可レ申由御意ニテ、正護院殿山伏多被二召連一御登山ニ候。天下ノ仕置家康公、浮田中納言、安藝毛利殿、加賀筑前殿、長尾景勝ヘ被二仰置一候。然ル處ニ秀吉公御存命ノ時分、景勝ハ國替仰付ラレ、程ナク秀吉公御煩ニ付上洛仕候間、御暇下サレ候ヘヒ、御違例ノ内ハ在京ニテ、御他界以後會津ヘ下向ニ候。秀吉公新八幡ト祝可レ申由御遺言ニ候ヘドモ、勅許ナキニヨツテ豐國ノ明神ト祝申候。東山ニ宮被二相立一候。

一家康公、政宗公御入魂ノ故カ、政宗娘ヲ上總殿ヘ御取合被レ成度由思召、宗薫ヲ以御内證ニ候。四人ノ大名衆被二聞召一、秀吉公御他界ノ砌、五人ノ大名衆申合仕置可レ仕由被二仰置一候處、各無二相談一緣初之儀覺悟ノ外由仰ラレ、宗薫ヲ死罪ニ可二申付一由ニ候。家康公、政宗公、左候ハヾ御相手ニ可二罷成一由仰ラレ候故、其後ハ無二其沙汰一候。石田治部少輔亂逆ヲ存立、家康ト四人衆間ヲ申ヘダテ候由ニ候。家康ハ向島ニ御座ナサレ候處ニ押懸候ナドト、伏見、大坂唱事候。其末治部少輔一人悪逆ニ極、切腹ニヲヨビ候處、佐竹義宣伏見ヨリ治部少輔ヘ御出、治部少輔ヲ義宣一ツ乘物ニ御ノセ御歸、御屋敷ニカクシヲカレ候。大坂ニテハ治部少輔欠落ノ由ニテ唱候事相止候。然而義宣大津迄治部少輔ヲ召連、棹山ヘ被レ爲レ送由申候。其年ヨリ二年過、景勝ヘ上洛可レ有由家康被二仰遣一候所、秀吉公ヘ五年ノ御暇申上候間、罷登ル間敷由仰ラレ候。就レ其浮田殿、毛利殿、筑前殿ヘ御タヅネ候而重而上洛候ヘノ由仰遣サレ候ヘドモ、景勝御上洛アル間敷由仰ラレ候。左候ハヾ景勝ヲ御退治有ベキ由ニテ、伏見御留守居トシテ鳥井彦右衛門ニ人數三千計指添被二籠置一候。江戸ヘ御下向ニ候。治部少輔竿山ヨリ方々ヘ申合、景勝モ御同心ニテ亂逆企申候。

一義顯、政宗、南部、信濃以下奥ノ大名衆、景勝退治ノタメ國國ヘ御下候。家康小山迄御出馬ノ所、上方ニテ謀叛起、伏見

ノ城又京極若狭殿御座候大津ノ城ニモ、被ニ籠置一由申來候付而、家康江戸ヘ御引返候。

一政宗公ハ岩出山迄ハ御下被レ爲レ成、北目ニ御在陣候テ、七月廿四日白石ノ城ヘ御働候。廿糟備後城主ニ候間、若松ヘ引取ラレ、備後甥北條式部居候朝城外ヲ打廻リ、御働引上ラレ候。八ツ時分又城廻リヲ御覽被レ成、別而改普請仕所モ無レ之候間、町ヲ御取セ可レ被レ成由仰出サレ、町樞輪ヘ惣人數取付押込火ヲ懸候間、敵ハ本城ヘ逃込、其夜二三ノ樞輪迄相破、本丸計ニ成、翌日石川大和守ヲ賴、城中ノ者命被ニ相助一候ハヾ明渡シ可レ申由ニテ、廿五日七ツ時分出城候。伊達ヘハ被ニ相返一間敷由ニテ、表立候衆ハイヅレモ御旗本ニ罷有候。雜兵ハ夜ニ紛伊達ヘ逃歸申候。築川ヘ御取懸可レ被レ成思召レ候處ニ、家康小山ヨリ御歸之由申來候付、關東口ヨリ御取詰不レ被レ成シテハ、政宗一人ニテ働成ガタク被ニ思召一、白石ヘ御人數被ニ相籠一、江戸御一左右被ニ聞召一候迄、先北目ヘ御引籠被レ成候也。

右伊達成實記三册。依レ無ニ類本一不レ能ニ校合一。

新校羣書類從　卷第三百九十一

合戰部廿三

柴田退治記

（播州三木住　大村由巳撰）

抑羽柴筑前守秀吉者。天正十年十月十五日相ニ勤將軍御葬禮一以來。帝都坤角山崎上拵ニ一城一。直ニ下五畿内一。相ニ鎭生民一。然而迎ニ取前秋田城介平朝臣信忠御若君一。奉レ安ニ置安土一。欲レ令ニ守護一之處。織田三七信孝相ニ談柴田。瀧川ニ云。於レ相ニ渡若君於秀吉一者。彼一人相ニ計天下一。恣可レ振ニ權威一事眼前也。寧非レ招ニ秦超高之怨。唐國忠之殃一哉。言而一味同心ニ介ニ抱之一。於レ是秀吉一端重ニ將軍御子弟之禮一。且又思ニ誓紙之恐一雖レ呈ニ條々之懇札一。信孝心不ニ許容一。剩内々企ニ敵對之計策一者也。此時柴田修理亮勝家。令下同名伊賀守勝豐謀レ之爲中和平之扱上。前田又左衞門利家。不破彦三。金森五郎八差ニ上京都一。其故者越國自ニ初冬一至ニ殘春一雪深而難レ運レ粮。唯今於ニ起ニ干戈一者。人馬之疲百姓之勞。寔國之虚也思レ之儀也。秀吉識ニ量之一止レ扱。臘月之初至ニ長濱一出張。彼地秀吉久相居之要害也。依レ之知ニ按内一思ニ惟敵痛所一搆ニ付城一。成下可レ繆ニ破内輪一行上。勝豐雖レ賴ニ越州援兵一。頃日之雪超ニ過例年一。寒威能透レ綿。風力將レ氷レ酒。往者蟄臥來者凍殺。曾絶ニ人馬之通一。於レ是勝豐釋レ近謀レ遠者成レ勞而無レ功。慮レ致ニ降參一。然勝豐本素他名。勝家所レ爲ニ養子一也。唯今與ニ秀吉一一味「之」事頗似レ失ニ本意一。乍レ去佐久間玄蕃助盛政於ニ彼分國一執ニ權柄一尤甚。依レ之勝豐内々含レ恨。秀吉知ニ其由來一無レ疑引ニ著之一。即取ニ向濃州一。相從之面々者。惟住五郎左衞門尉長秀。筒井順慶。長岡越中守忠興。池田紀伊守之助。蜂屋伯耆守賴隆。其外引ニ率諸國之軍兵一。都合三萬餘騎。凌ニ大風一分ニ深雪一。至ニ岐阜一押寄。國中之凶徒或加ニ追罰一或任ニ降參一。不レ經レ日而成ニ一國一城一。信孝慘レ之偏嘆ニ慕和與之儀一。而信忠御若君添ニ信孝老母息女一爲ニ人質一出レ之。秀吉見レ之思レ古猶有下奉ニ憐愍一之志上。解レ圍十二月廿九日去至ニ山崎城一。即於ニ彼地一有ニ越季一。自ニ元日一趣ニ播州姫路一。二日三日間諸國之大名小名連レ袂繼レ踵。車馬門前爲レ市。朝向ニ禮者一盡ニ親愛一。夕對ニ近習一說ニ政道一。天下之工夫晝夜不レ遑。然而若君御幼少之間伯父織田三介信雄爲ニ御名代一。先奉レ移ニ安土一。閏正月初旬秀吉亦至ニ安土一。國々之諸侍調ニ禮儀一專ニ尊仰一。恰如ニ將軍御在世之時一。誠君臣

檢校保己一集

之禮諸人之所レ感也。安土十余日逗留。其後又打歸山崎一諸國成二陣觸一。集二軍兵一寄來長濱一。重取二堅固之人質一。其比勝豐病氣不平「而」起臥不レ叶。旦夕在レ床。此故自身不レ能二出張一。與力者大金藤八。山路將監。遣二越前境目片岡天神山一拵二出城一。對二修理亮勝家一無二究色立之淵底一。惟住五郎左衛門尉相與爲二越前(え)押一。從レ其入二勢州一成下可レ打二果瀧川左近大夫一益一行上。當手軍兵分三三筋一。羽柴美濃守秀長。筒井順慶。伊藤掃部助。稻葉伊豫守一鐵。氏家左京亮等。土岐多羅越也。三好孫七郎秀次。中村孫平次一氏。江劦中郡衆大君畑越也。秀吉自身者引二七八箇國人數一安樂越也。彼三筋之路何節所而前軍皆取二越度一地也。近李又瀧川究二普請一。所々搆二置要害一者也。誠哉猛勢無二節所一。其城々置二手當一至二桑名長島一押寄。近邊無二殘所一放火居二一夜陣一。翌日早々引取彼地一。差當有下成二途中妨一敵屯數箇所上。殊更峯城龜山多勢楯籠。丈夫相拵之地也。仍先取二捲瀧川儀大夫所レ籠之峯城一。追手佐治新介相二踐龜山一。秀吉自身寄レ馬見二敵之働一。以二短兵一引二拂亂杭逆茂木一打二破山下一。卽其地結二返柵一重二竹手把一。以二材木一樊レ之止二敵之通路一。時々剋々成二仕寄一。或以二鐵炮火矢投松明一燒二破屋宅一或以二鋤鍬玄翁鶴觜一突二崩磊築地一。又巖上聳櫓樓門寄二龜甲一。入二金掘數百人一掘レ之。則寔如二大木之倒レ風。籠城士卒悲嘆事頗似二轍跡之魚吻一淤二泥之水一。故佐治新介脫レ甲致二退城「之」降參一。然間助命。卽被レ送二著長島一。相二叶技勿レ久「之」先言一者乎。龜山奉レ迎二入信雄一。峯城關地藏府城斯三箇所分二人數一。重々取捲少無二越度一樣ト置。秀吉柴田修理亮取二出江州表一由。聞レ之改二陣安土一見二敵之備一。然處翌日早旦懸二寄天神山城一。近邊之村落悉放火。又引二退柳瀨一。秀吉聞レ之早速馳二向江北一。先手之備定二段々一。一番羽柴左衛門督秀政。二番柴田加賀守勝人數。三番木村隼人佐。木下將監。堀尾茂助吉晴。四番前野勝右衛門尉長康。加藤佐久內光泰。淺野彌兵衛長政。一柳市助直末。五番生駒甚助政勝。小寺官兵衛尉孝高。明石與四郎則實。木下勘解由左衛門尉。大鹽金右衛門尉。山內猪右衛門尉一豐。黑田甚吉。六番三好孫七郎。中村孫平次。七番羽柴美濃守。八番筒井順慶。伊藤掃部助。九番蜂須賀小六家政。赤松次郎則房。十番神子田半左衛門尉正治。赤松彌三郎。十一番長岡越中守忠興。高山右近。十二番御次丸秀勝。仙石權兵衛尉。十三番中川瀨兵衛尉清秀。此次秀吉馬廻也。先手鐵炮衆以上八首。右手昵近之歷々也。左手小姓衆究竟之勇者也。捻手先軍敵合不レ過二十町十五町一。立二置人數一。雖レ待二武篇一。敵備微弱而不レ可レ有二差行一。成二不審一。秀吉馬六七騎許打二紛卒兵一。敵陣近々打寄。敵之屯森林。嶮岨。岡谷悉見二究人馬之足場一。打二歸本(之)陣床一。暫成二工夫一。唯今無下可レ切二入敵地一行上。又敵不レ見下可レ衝二懸此地一趣上之間。所詮此表搆二要害一。置二番勢一成。可下差二廿捻人數一覺悟上。先天神山非二防レ敵勝地一之間七八町引退。同本山成レ搆置二伊賀守人數。拵二左稱山一。入二羽柴左衛門督一。篠嶽尾崎中川瀨兵衛尉。其尾續五六町引隔高山右近陣取也。田上山羽柴美濃守長居陣也。篠嶽頂上又秀長入二置人數一成二要害一。蜂須賀。生駒。神子田。赤松。小寺。明石。一柳等爲二諸口援兵一。木本取陣。又海津口。敦賀口。惟住五郎左衛門尉備二置人數一防レ之。長岡越中守者馳二歸丹後一寄二國中之船一。從二海上一成下可レ鉤二留越北之人數一行上。然者可レ見二究敵(之)摸樣一之間。此表別無二所用一之條。筒井順慶其外諸士少々令二歸國一。秀吉亦至二長濱一引。屢雖レ在二帷幄中一。賦二心於萬方一夜半寢夙興。其謹不レ淺。將又伊賀守勝豐依レ不レ堪二病氣一上洛。雖レ盡二扁蒼術一無二其驗一。已及レ易レ簀。嘆而云。我一世中再踏二越州之地一復レ寃可レ遂二本懷一之處不幸而如レ此。秀吉平二越前一於レ達二我望一者。可爲二草陰之吊慰一遺言也。秀吉押レ泪雖レ惜二離別一。無常之習而終死去矣。贈二金銀一供二養洛中洛外之僧一。葬禮法會不レ可二勝計一也。於レ是勝豐入二置人數同木山一有二調略之風說一。依レ之木村隼人佑入替。大金藤八。木下半右衛門。山路將監外搆出レ之專二用心一。山路將監謀反連々露顯之條。捨二妻子一白晝走二入敵陣一者也。就レ中織田三七信孝與二秀吉一不レ好。又對三介信雄一有二閟レ墻之恨一無二防侮之心一。故重成二謀叛一。柴田。瀧川一統議定レ覆二天下一旨上。秀吉聞レ之。四月十七日從二長濱一至二濃州大垣城一。信孝者濃州勢州之人數端々成二一手一。方々燒廻之條。秀吉是非攻二入岐阜一可レ散二鬱憤一之處。其比霖雨不レ止。鄉土川洪水而曾無二兵馬之渡一。去間大垣五六日滯留。其中勢州峯城。信雄御人數。其外蒲生飛驒守氏鄉。長谷川藤五郎秀一。多賀。山崎。池田等攻詰有二落去之吉左右一。武篇勝利之瑞相也。然柴田勝家者信孝御謀叛得レ力。可レ取二天下一事勿論也。舊冬勝家一味之時不レ奉レ成レ救無念。今此刻急度可レ及二一戰一。幸唯今秀吉趣二濃州一之條。其透先此表可二打破一。彼謀叛人山路將監爲二按內者一。敵行陣取之樣子悉尋探。天正十一年卯月廿日。佐久間玄蕃助爲二大將一通二余吳之海馬手一。篠嶽置二手當一爲押二寄中川瀨兵衛尉清秀陣取所之尾崎一。柴田父子同一木一山左稱山爲レ襲近々立二寄人數一者也。清秀此先及二度々一武篇不レ取二越度一。勇力知二世間一之侍也。度々之晴帥萬一於レ得二鈍兵之名一。思二定生涯之不覺一運有レ天進勿レ退。懸二詞於諸卒一。一千余騎離二壘衝出。玄蕃助兵見レ之不レ餘不レ漏乙取籠數剋攻戰。清秀我不レ劣兵五六十騎弓手馬手相並。散々切合割入追立。一旦雖レ得二勝利一。敵以二多勢一不レ顧二手負死人一。如二風發一如二河決一亂入終清秀打死。其時玄蕃助乘レ勝取二太刀場一。前者鯨波響レ地。後者狼煙曙レ天。麾レ風旌旗添レ光。暉レ日甲冑双レ影。其威光有レ誰爭レ之乎。此時速於二引取一者一化先可レ爲二勝手一處。以二因レ勢破レ之諺一其儘所二居陣一也。始二秀長陣所一先手之陣取各堅固之備也。雖二

陣敗殘黨不レ全。士衆一而軍心結。是寔良將統レ軍故也。然而江北之帥相果事已剋。從レ其以二羽檄一件有二注進一。秀吉聞レ之。清秀被レ討之條哀憐尤深(之)。乍レ去此間柴田欲レ及二一戰一引二籠節所一藏レ行之條無レ力送二數日一。今也乘レ勝出張。不レ成レ屯以前切懸可二打果一事在二掌中一。天下雌雄此節也。飛龍添レ鞭走。軍卒之面々逸馬並レ蹄續而前。垂井。關原。藤川。早路逸足而過二伊吹山麓一。乘馬殺二歩兵一。切息死者多。已夕日西傾。則可レ倩二魯陽戈手一者也。小谷宿而及二夜陰一。申剋立二大垣一戌剋木本著陣。三十六町路十三里。二時半時懸著事古今希有働也。依レ之相隨無レ運レ糧。人馬察二飢疲一終レ道村々里々以二飛脚一觸レ遣也。秀吉今夜之曙可レ及二一戰一之條。家一間米一升宛炊成レ餉木本可二持來一。不レ忘二其恩賞一。可二相計一由方々告送之間。或二里三里。或五里六里運レ之。特長濱者秀吉舊居之地也。依レ之折足鑑容二五合一陣之輩亦贈レ之。野人懷レ惠之故也。於二木本一諸卒悉直レ疲。秀吉智計利如レ此。誠所レ不レ及二凡慮一也。勝家昨日合戰二勝利一。以二其競一彌無レ緩相拵。余吳山之峯續西北越前。越中。能登。加賀。四箇國之人數六萬騎余立并究二攻伐之行一。天明廿一日今日之合戰秀吉一世之天運在レ茲。輕二身命一可レ上二名於萬代一。敵陣五六萬騎眞中秀吉近習秀長相加。三筋作レ鑓衝懸。然味方者一向無人也。其故筒井長岡者在國也。毛利輝元一旦雖レ令二和談一非レ可レ許レ心。依レ之宮部善淨坊者因幡置レ之。仙石權兵衛爲レ押二四國一淡路返レ之。池田紀伊守爲二根來難賀手當一者也。殊不レ揃二當陣諸手一。近習士卒亦相後者多。遠路懸走間。長旗。差物。馬面。馬鎧悉引拂非二常餘情一之條。秀吉雖二馳一向一未二信用一之處。彼一瓢之馬驗怪見レ之。敵陣俄恐怖。雖レ然勝家者從二將軍御幼年一晨夕盡二武勇一獻レ馘多矣。功被二天下一名顯二世上一。殊賞罰嚴重也。古人曰。香餌之下必有二懸魚一。重賞之下必有二死夫一。是以何輙得二敗亡一乎。從二卯上剋一至二未下剋一及二五度七度一合戰所レ驚目也。後双方相疲下二敷太刀場一休息未レ決二勝負一所。秀吉見合近習之若侍二三百騎楚立。柴田幕下一文字切懸。向兵一千余騎。切合衝合。秀吉馬左右而生捕分捕碎レ手族。終日之帥相疲切レ息。不レ論二敵味方死人一吸二血續一息者多レ之。昔晉侯合戰時介子推切レ股吸二血續一息。於二本朝一者無レ樣次第也。此等之輩號二一番鑓一者也。既北崩諸卒追著殺レ之者五六千也。殘捻人數者追二入木目峠東西茂木中一者也。勝家者近習百餘騎馳二坂北莊居城一也。秀吉同二十二日至二越前府中一。前田又左衞門尉。德山五兵衞尉。不破河内守等所レ踐城致二降參一。一々雖レ可二攻一殺一先爲レ可レ打二果勝家一赦二免之一。同二十三日渡二名聞大河一押二寄北莊城。彼城郭勝家累季相拵爲二定番一入置兵三千余人一處也。於二柳瀨表一討二殘輩一追々於二懸入一者可レ得レ力間。不レ移二時剋一可二攻亡一捻一搆即時乘破。隔二城壁十間十五間一取卷成二夜詰一。

城中見レ之諸卒分二此彼一防レ之。然從二城内一懇望。秀吉昵近古老之英雄評議而云。助二勝家之命一可レ被二相隨一旨雖レ爲レ諫。池邊放二毒蛇一庭前如レ養レ虎言成二千急萬速之攻一。勝家不レ及レ力入二天守一。呼二數年來所レ賴股肱臣八十余人一。勝家運命明日相究。今夜及レ曙成二酒宴遊興一可レ惜二餘波一。勝家取レ盃。一族一家次第々々酌流。亂合入違中飲思指。珍肴珍菓如レ山前置。後者始二上臘姫公一至二局々女房達老婆尼公一不レ憚二上中下一。若妓女取レ酌。一曲之歌。五段舞。繆返々々既レ醉。表誓雖レ成二樂之聲一裡終悲之意不レ休。漁陽鼙動レ地來。驚破霓裳羽衣曲。四面楚歌聲。見レ之聞レ之貴妃千般恨。虞子數行淚何異レ之。夜及二深更一之間止レ酒諸士退散。勝家夫婦入二深閨一。夜半私語歲比相馴無二思所一。唯願下双二毗鉏枕一算二萬春之盟一。重二翡翠衾一加中千秋喜上。成二風前灯日影霜一。不レ待二明日之晩一而可二消一果一也。小谷御方勝家雖レ爲二妻女一。將軍御一類而所緣レ多。殊更秀吉者至二相公后孫一憐愍無レ不二相親一者。明朝敵陣按内落給有二何妨一乎。同二其儀一給慥打下語可二送届一由上。小谷御方不二聞敢一泣。詢一樹陰一河流依二他生緣一。況我多季契乎。冥途黄泉誓末從。雖レ爲二女人一意不レ可レ劣二男子一。諸共自害同相對蓮臺一事所レ希也。其後成二晉語一閑然而少眞眠程。半天聞二杜鵑音信一。

小谷御方

さらぬだに打ぬる程も夏のよの夢路をさそふ時鳥かな　郭公

勝家

夏のよの夢路はかなき跡の名を雲ゐにあげよ山ほとゝぎす

如レ此讀替心(之)程可二想像一。秀吉從二寅一點一相二揃諸卒一攻二入城中一。於二乙丸一夜中之合戰。伏レ屍者被レ疵者如レ混レ沙流レ血漂レ楯。秀吉所レ惜英雄今此時不レ所レ用乎。天下弓箭今日所二相究一也。成レ諫勇懸終攻二詰甲丸一。丸中以二大石一積二土磊一其牆數仭也。比二晉平公所レ造九層臺一。天守上九重一。石柱。鋏屏重々搆。精兵三百余人楯籠。禦レ之城内無二閑地一。五歩一樓十歩一閣。廊下斜連天守高聳。以二多勢一欲レ攀レ之。以二弓鋏炮一打レ之。以二長道具一貫レ之。懸二共具足一被レ疵者多。故秀吉下知而雜兵除レ之。選二出六具差固勇士數百人一。手鑓打物許攻二入天守内一。勝家年來之武勇今於レ是乎相盡處也。於二異國一者吳越分レ兵。於二本朝一者。義經高館合戰不レ屑。内甲公已切レ息之間。引レ梯取二上天守九重目一。詞戰云。勝家唯今切腹之條。敵中有レ心侍鎭二前後一見物。可レ相二傳名於九夷八蠻一由高聲名乘。近二中村文荷齋一夜前小谷御方有二一首之詠歌一。某亦返歌如レ此相語。文荷押二落涙一取二出筆硯一書レ之。奥添二一首一。

文荷「齋」

思どちうちつれつゝも行道のしるべやしでの山ほとゝぎす

勝家武心感レ之濕二鎧袖一。其外兵皆濡二小手鎖一而已。其時對二

小谷御方一。依二無レ墓盟一懸二夫手一事。痛哉歎哉。是又不二前世業因一乎。打死自害者猶武家習也。生者必滅會者定離。有レ誰免レ之乎。始二小谷御方一十二人妾。三千余人之女房達期二唯今之最後一念佛稱名聲裡亦泪欄干。譬綠鬢江顏楊柳如レ隨レ風。桃花似レ含レ露。「如」何邪見人取レ劒害レ之哉。勝家思切取引寄引伏一々差殺。見二勝家腹之切樣一。差二立弓手脇一引二著右手背骨一返刀自二心丁一迄二臍下一長搔二出五臟六腑一。呼二文荷一請レ打レ首。文荷廻レ後首下打落其太刀切レ腹死。其外股肱(之)臣八十余人。或差違或自害。天正十一年四月二十四日申剋楯二籠彼城一。柴田一類悉相果者也。見レ之聞レ之。有レ情諸侍不レ及レ云。至二野人山賤一皆噎二感涙一而已。二十五日秀吉賀州有二出馬一叛者ハ討レ之。降者近レ之。山川澗岳難所之地如二草葉隨レ風一篇歸服。故越中境目金澤城(式)滯留。北陸新屬之國々改捉事二政道一。其刻越後守護長尾喜平次景勝。秀吉成レ降。屬二幕下一之條取二人質一。五月十七日至二安土一「者也」。又勝家嫡男柴田權六。佐久間玄蕃助者最前驅二越前府中山林一生捕來。爲二後證一引二廻隣國方々城一。權六於二江州佐和山一誅レ之。玄蕃助今度矛盾張本人而罪多故。車渡二洛中一。於二六條河原一誅レ之。柴田權六首同懸二獄門一者也。又織田三介信雄率二人數一攻二入岐阜一。三七信孝亦將軍御息男而智勇越レ人。於二自害一豈可レ辭乎。彼山而沐レ髮清レ身燒レ香。以二將軍所レ被レ下太刀一首刎死。以二逆心一相亡事殆不二天命一乎。秀吉者爲レ休二息諸士一。移二江州坂本城一暫相停。今度柳瀨表秀吉所二切崩一之一番鑓者悉近習之輩也。其面々者。福島市松正則。脇坂甚内安治。加藤孫六嘉明。加藤虎助清正。平野權平長泰。片桐助作眞盛。後改二「久基」(且元)一。糟屋助右衞門尉。櫻井左吉秀長近習也。石河兵助一光者一番懸入突二内甲一討死。依レ之召二出舍弟長松一宗一爲二家督一者也。右九人熊設(愈歟)レ席下レ盃遣二領知一。添以二黃金羅帛一兼有二感狀一。其文言曰。

今度三七殿依二御謀叛一。濃州大垣(柿)令二陣替一之剋。柴田修理亮至二柳瀨表一取出之條爲レ可レ及二一戰一。秀吉一騎馳向之所。心懸以レ不レ淺故早速懸著。於二眼前一合二一番鑓一無二比類一働之條。爲二褒美一或五千石。或三千石。充行(訖)。彌向後於レ抽二軍旅之忠勤一者。於二勳功一可二相計一者也。仍如レ件。

天正十一年七月一日　　秀吉判

軍書曰。賞レ功不レ踰レ時是也。然而瀧川左近大夫懸望任レ身渡二長島城一間成二許容一。斯時於二東國一者德川家(康)一。北條氏政。於二北國一者長尾景勝。於二西國一者毛利輝元。皆輻湊秀吉二可レ謂二天下歸二掌握一。漢高祖取二天下一有三三傑一。勝レ戰者韓信也。運レ粮者蕭何也。運レ籌者張良也。源頼朝治二日本一有三三賢一。義經盡二戰功一。梶原景時專二世務一。北條時政行二政道一。是皆良臣所レ成レ諫也。今也秀吉一心運レ籌貯レ粮專レ戰。誠前代未聞之大將也。此數年成レ勞積レ功諸侍多レ之。仍隨二其忠之淺深一充二行國郡一者也。國々諸城或破二却之一或疎二鑿之一。先輩過半易地別遣二領知一。又其儘分領加增之仁在レ之。各居城之次第。先織田三介信雄者爲二伊賀。伊勢。尾張三箇國之屋形一崇二仰之一。勢州長島居城也。織田上野介信良者穴津在城也。松崎津川玄蕃助在城也。星崎岡田長門守。美濃國守護池田紀伊守之助。岐阜池田勝九郎。曾根(惣)稻葉伊豫守。金山森勝藏長一。江州日野蒲生飛驛守氏(瀨)卿。勢田淺野彌兵衞尉長政。坂本(後號遠江守)杉原七郎左衞門「尉」家次。比田長谷川藤五郎秀一。高島加藤(佐久內光泰)。佐和山(任)羽柴左衞門督秀政。越前一國。加賀半國守護惟住五郎左衞門尉長秀。敦賀蜂屋伯耆守賴隆。能登一國。加賀半國守護前田又左衞門尉利家。越中守護左々內藏助成政。若狹佐柿木村隼人佑。高濱堀尾茂助吉晴。丹後守護長岡越中守忠興。宮津(之)居城。丹波守護羽柴御次丸秀勝。龜山居城也。播摩(磨)但馬守護羽柴美濃守秀長。姬路居城也。東郡三木城前野將右衞門尉長康。西郡龍野城蜂須賀小六正勝。廣瀨城神子田半左衞門尉正治。但馬竹田桑山修理進。木崎木下助兵衞尉。出石青木勘兵衞。因幡守護宮部善淨坊繼潤。鳥取居城也。鬼城荒木平大夫。鹿野龜井新十郎玆知。伯耆國端南條勘兵衞尉。淡跡洲本仙石權兵衞尉。岩屋間島兵衞尉。備前美作守護宇喜田直家者先年播州別所謀叛之剋背二西國一秀吉一味。國之危亶雖レ及二度々一。以二無二覺悟一「成」入魂一。依レ之直家遠行之後召二出嫡男一賞二聟君一。分二名字一號二羽柴八郎秀家一。分國之外所々賜二領知一者也。於二四國一者十河安富等秀吉幕下也。土佐國長曾我部元親雖レ致二懇望一不レ成二許容一。取二彼國一可レ充二行當忠之侍一由定レ之。秀吉者於二攝津國大坂一定二城郭一。彼地五畿內中央而東大和。西攝津。南和泉。北山城。四方廣大而中歸然山岳也。廻レ麓大河淀川之末。大和川流合其水即入レ海。大船(小船)日々著岸亶不レ知二幾千萬艘一。平安城十餘里。南方平陸而天王寺。住吉。堺津(建)三里余。皆立二續町店屋辻小路一爲二大坂之山下一也。以二五畿內一爲二外搆一。以二彼地之城主爲二警固一者也。故大和筒井順慶。和泉中村孫平次。攝州三好孫七郎秀次。茨木中川藤兵衞尉秀政。山城槇島一柳市助直末。洛中洛外所二成敗一者半夢齋玄以也。從二若年一知惠深而無二私曲一。秀吉依レ知レ之定二奉行一者也。若又法度之外不二決斷一理非有レ之。則秀吉糺明者也。唯今所レ成大坂普請者先天守土臺也。其高莫大而四方八角如二白壁羣屏一。良匠以二繩墨一雖レ運二斧斤一不レ過レ焉。三十餘箇國之人數近國遠鄉打散。陸地舟路(路)大石小石集來者似二群蟻入レ垤。寔古今奇絕之大功也。皆人警二耳目一而已。諸國城持衆大名小名悉在二大坂一也。人々搆二築地一連レ簷双二門戶一事奇麗盡二莊嚴一者也。此先爭レ權妬(ム)レ威輩如レ意令二退治一。爲二秀吉一人之天下一事快哉々々「々」。是併所レ致二武勇智計一也。寔國家太平此時也。

仍忝今上皇帝叡感不レ斜。爲レ之無二不レ早朝日一。始テ攝家清華ヲ諸卿百官幷三管領四職。其外所々國司各來往而無下不二隨逐一之人上。風雅之興。茶湯之會。日々樂遊不レ遑ヲ二枚擧一。彌於下專二政道一撫二育人民上者非二千秋長久之濫觴一乎。至祝萬幸。

于レ時天正十一年十一月吉辰　　大田由巳謹誌之

右柴田退治記。以二屋代弘賢藏本一按合了。

イ右柴田退治記、內閣文庫所藏古寫本を以て校勘す。（昭和五年七月）

富樫記

加州富樫ノ元祖鎭守府將軍兼武藏守藤原利仁ハ、武勇ノ人ニテ、世皆北斗星ノ化身ト云傳フ。其子齋宮頭叙用、其子加賀守吉信、其子加賀守忠賴ト相續、其末葉齋藤、林、富樫介トテ三家ニ分レ、加賀、越前ヲ領ス。其庶流進藤、赤塚、竹田、加藤ナド皆北國ニ武威ヲ振フ。然レ𪜈今末代ニ至リ、絕タル家多シテ、富樫計ハ繁昌ス。加賀ノ守護職ヲ司ル。忠賴ノ子息加賀介吉信ト號ス。其子富樫介家助、其子同介家國、其子信家、其子富樫入道家通、法名佛西、此人木曾殿ノ御時、越前燧城ニテ戰功アリ。其子次郎家經ニ賴朝卿ヨリ加賀國ヲ賜リ、其子家直承久ノ亂ニ大忠アリ。其子泰家弘安ノ亂ニ北國ノ嗣將タリ。其子泰村、其子昌家兩代𪜈ニ、建武ノ亂ヨリ四拾余年、武家隨一ノ味方ニシテ、終ニ一度モ宮方ニ皈服セズ、代々公方ノ御感書ヲ蒙ル。明德年中山名ガ亂ニ昌家討死セシメ畢ヌ。室町將軍家御代々、富樫ノ家彌繁昌ニ相續ス。然シテ近代ニ至リ寬正ノ比ノ富樫介ヲ泰高ト號。此人中年ヨリ病身ニテ在京叶ハズ、隱居シテ中務大輔泰成家督ヲ繼ギ、文明、長祿比、在京シテ公方ノ近習ニ有ケルガ、早世有テ其子政親若輩ナレバ、家督相續ノ政道如何ト申ス人多カリケル。然ル處ニ泰高病氣本復シテ再任アルベキ由、永享四年ノ比、京都ノ官領細川右京大夫勝元朝臣ヲ憑ミ申サレ、既ニ上意モ宜シカリシヲ、富樫家ノ老臣モ畠山尾張守持國ヲ賴申、政親ヲ引立、守護ヲ望ミ訴訟申ケレバ、則又政親ニ被二仰付一ケリ。因レ玆祖父泰高ト嫡孫政親ト、常ニ不快ニ過ケルナリ。然ル處ニ洛陽山科本願寺蓮如上人北國ニ下向シ宗門ヲ弘ム。加賀國諸侍諸民、悉此法ヲ尊崇シ、皆以檀徒トナル。又同門ノ高田宗モ當國ニ在テ宗旨ヲ弘ム。此宗門憤ヲ發シテ本願、高田ノ二宗諍論ニ及ブ。既ニ訴論ヲ重テ國主ノ決斷ヲ請フ。政親聞テ訴訟決斷ヲ遂シメ、高田宗ノ勝利トス。一向宗門徒等憤ヲ發シ、富樫殿ハ則是法敵也トテ一揆ヲ發シ、諸民一同ニ蜂起セシム。政親則退治セントテ謀ヲ廻ス處ニ、公方義尙公江州ヱ御出陳アリ。佐々木六角四郎高賴爲二御追伐一鈎ノ里ニ御陳ヲ召ル。政親多勢ヲ催シテ江州ヱ參陳シ戰忠アリ。公方御感不レ斜。此次而ニ加州一向宗ノ土民一揆退治ノ御敎書申賜リ、分國ヘ下向シ、近國ノ勢ヲ催サル。越前國堀江ヲ始テ上意ニ隨ヒ、政親ニ合力ス。政親ハ加賀國高尾ノ城ニ籠ル。長享二年六月上旬、一揆等高尾ニ押寄セ日夜攻レ之。同九日高尾落城シ政親自害ス。同晚景越前口ヨリ註進ノ趣アリ。堀勢一千餘人、南江五百騎、杉若藤左衞門三千餘人、都合五千餘、志比ノ笠松ヲ大將トシ、昨八日ノ朝國堺立花ヨリ亂入。近邊ノ在々所々ヲ放火ス。柵ヲ振要害ヲ搆テ、已ニ陳取セントスル處ヲ、押ノ大將安藤九郎定治、金森玄英、入道了然、其勢五千人ヲ五手ニ分テ先勢一千餘人、願正入道大將ニテ、大聖寺山ヲサカヒ鯨波ヲ揚ケレバ、越前勢モ堀

江二千餘人ヲ將ヒ軍立ス。駈引不自由ノ地ナレバ、馬ニハ、不レ乘。歩立ニ成テ叫テ懸ル。兩方互ニ矢軍シテ、相引ニ堀ト引處ヲ、二陳ノ安藤ガ勢二千餘人入替テ責ケレバ、一人モ不ニ返合ニ逃ケルヲ、玄英入道ガ勢笠取山ヨリ落シ掛テ、横合ニ散々ニ打ケレバ、越前勢數千討レテ、殘勢立花マデ引退ク。若シ夜討ヤ入ランズランド二重柵ヲ振、用心緊ク搆候トゾ告タリケル。然レ・モ其後政親切腹ノ事聞ヘケレバ、越前勢モ引皈シヌ。偖富樫泰高ハ亨祿四年迄存生ニテアリケルガ、加賀半國治メ居ケルニ、亨祿四年山科本願寺家下間筑前、同弟民部二人加州ヘ下向シ一揆ヲ起ス。合戰數度ニ及ビ、泰高并黒瀬、福田、松永、隅田、今、湯淺等ヲ追出シ、加賀一國ヲ退治ス。其時泰高父子越前ヘ窄人シテ朝倉ヲ頼ミ、天文三年人數ヲ催シ又加州ヘ責入ト云ヘモ、散々打負越前ヘ皈ル。同廿二年泰高死去ス。其子富樫介ハ、越前金津城主溝江大炊助長逸ヲ頼テ居ケル。天正二年二月十九日、長逸爲ニ一揆一自害。此時富樫モ腹切テ死ス。辭世ノ歌アリ。

木草ニモアラザル竹ノ世ヲサリテ後ハ石トモ誰カナスベキ

或説曰、政親妻ハ尾州熱田大宮司友平息女巴女ヲ、或公家ノ養子ニシテ政親ニ嫁ス。長亨ノ亂ニ彼妻尾州ヘ皈ル。大宮司則其息女ヲ勢州高田宗一身田專修寺ニ嫁ス。是故政親彼宗旨信仰ノ遺志ヲ繼者歟。夫ヨリ六年ノ永正三年八月六日、一身田ヨリ勢州、尾州、三州ノ諸末寺檀徒ヲ語ラヒ桑子ノ妙源寺ヲ大將ニテ越前ヘ發向ス。北國諸檀徒一同シテ越州九頭龍河邊三於テ合戰ス。此時本願寺方大將備後公昭賢討死ス。夫ヨリ加州ヘ打入ケルガ、又勢州方悉討負本國ヱ引皈ル。夫ヨリ卅二年メ天文四年五月十一日、泰高又爲二一揆一自害ス。號二泰雲寺一。抑富樫家、崇德院天治二年三月八日、加州ノ守護トナリ下向ノ後、長亨二年迄繁昌也。

竊以。夫人臣之法。儀。以二五常一爲レ最。以二六藝一爲レ殿。左者奉レ君以レ忠。撫レ民以レ德。用レ之爲二良賢一。背レ之爲二逆臣一。故取二先哲之要一。爲二後人之誡一者矣。

爰ニ近江源氏ノ末葉佐々木大膳大夫高頼公儀ヲ蔑ニシ自專ヲ宗トシ、剩ヘ叛逆ノ賊徒ヲ語ヒ、野心ノ姦士ヲイザナヒ謀叛ノ大巧ヲ企テ、漢ノ王莽ガ國位ヲ掠メ、唐ノ祿山ガ洛城ヲ傾ル先跡ニ准ヘント欲ス。依レ之去ル長亨元年甲戌秋八月上旬ノ比、忝クモ高頼追討ノ宣旨ヲ下サレ、將軍家勅ヲ蒙リ、江州南ノ郡ニ發向ス。御供ノ人々誰々ゾ。武衛、細川、畠山、土岐、山名、赤松黨、大内、上杉、小笠原、武田、京極、富樫介、其外諸國ノ受領衛府諸司一騎モ不レ殘打立リ。又北陸ノ餘勢、西國ノ義軍、底ヲ拂テ出陳ス。都合其勢十萬餘騎ニ及ブ。中ニモ富樫次郎政親、容儀骨柄諸藝人ニ勝レ、剛弓精兵大力究竟ノ荒馬乘、誠ニ千兵ハ得易一將ハ求難キ者也。然ル間上意ニ相叶フ叓、肩ヲ竝ル傍輩ナシ。去程ニ當陣ノ師奉行、武田、富樫兩人ニ仰付ラレ、富樫ノ家ニ於テ前代未聞ノ面目ト聞ユ。角其

儘眤近申サレ可レ然叓ヲ、運盡人滅心悪叓ヲ思立習也。時々上意ヲ歎キ被レ申條々ノ子細、某ガ分國加州土民等建立シ專ラ修佛ノ一法勤修ヲ勵ニ依テ、土貢ノ地利一塵モ運上セズ。黨ヲ結ビ郡ヲ分チ、各一揆ノ與ヲ立、緩怠ヲ爲之至、言語ニ不レ及ノ由讒訴申上ラレ、哀レ〳〵越中、越前兩國ヘ御教書ヲ被レ下、合力ノ下知ヲ仰付ラレ急度加州ヘ罷下リ退治ヲ加ヘ、意望ヲ可レ達之由頻ニ上聞ニ被レ達之間、越ノ兩國ヘ被レ仰付合力之儀。然ル間暫ク御暇ヲ申請。同年十二月下旬ノ比北越ノ深雪ヲ踏分ケ長途ヲ令ニ下國一之間、窮屈雪中ニ放駒朝尋ニ跡雲外一越聞レ鴈夜射レ聲之誠躰相侶タリ。管仲用下得二老馬一之智上皈ニ本國一云々。角暫ク在府ニ不レ及之儀、軈而石河郡ノ内高尾ノ城ニ楯籠リ、隣國ノ合力ヲ相待、一揆退治之計畧ヲ帷幄ノ中ニ運シ、凱歌ヲ千里ノ外ニ奏セント欲スル者也。凡ソ高尾ノ城ノ有樣、後ハ嶮岨ヲ削リ、山ハ白根ニ連リ、白雪夏ヲ不レ知。麋鹿通路斷畢。前ハ深田渺茫、末湖水人馬足ヲ置所ナシ。弓手ハ石岸高聳ヘ往復ノ路ナシ。妻手ハ流水遠ク漲リ去來ノ船ヲ絶、加之外郭堀ヲ穿チ、築地ヲ築、迫々矢倉ヲ颺、所々ニ垣楯ヲ搔ケ、亂株、逆門木、筒木、矢石重々ニ搆ヘツヽ、勝ニ田單之卽墨之城壘一。超ニ勾踐之會稽之絶巓一。天ノ運タリト雖モ、地ノ利ニ不レ如者也。寔ニイミジキ城郭ナリ矣。將所ニ楯籠一軍兵ハ誰々ゾ。富樫ノ一門ハ不レ及レ申。國中ノ官軍一騎モ不レ殘馳加ル。其外大和甲賀ノ健弓精兵、究竟手聞五百餘人同意、摠而與力輩一萬餘人、矢倉々々ニ膝ヲ礙テ置居リ、搆々ニ袖ヲ連ネ群集ス。矢倉ノ下ニハ鞍置馬十重廿重ニ引立。非ニ鬼魅一少綠可レ破レ輙不レ見。去程ニ國中ノ一揆付ニ山河參川守一歎申子細、先年屋形樣山内ヨリ御出頭ノ後、亂戟打連リ民間無レ安。或住宅被ニ放火一山野ニ伏時モ有、或ハ在所ヲ被ニ追出一城郭ヲ搆ル時モ有。然ル間、東作之葉ヲ不レ事。西收之利乏、依レ之稼穡ノ土貢ニ怠リ公方ノ諸役ヲ不レ務叓、是私之如在ニ非ズ。併依ニ公道紛一也。此趣聞召被レ分寛宥ノ儀アラバ、自今以後緩怠ノ邪儀ヲ抛チ、奉公懇志ヲ可レ抽之由再三歎申ス。此趣參河守屋形ニ申上諫申サレ、民ハ是國ノ基也。治國之基ヲ有レ退枝葉ノ我等安穩ニ不レ可レ有。義ヲ執リ國ヲ治メ弃レ欲撫レ民。是安泰之政道。靜謐之先兆也。去バ義勝レ欲則其國自治、欲勝レ義則其國必危。言政直道ニ皈レバ諸民讓レ畔、蒼生壞、擲テバ世不レ叓ニ姦邪一賢人心ヲ被レ割、朝ニ涉被レ截レ脛。誠ニ殺レ人刀從レ口出切レ之。害レ吾種自レ身出蒔レ之云金言在耳。能々御思惟アルベシ。殊更御幼稚ノ御時、山内ニ蟄居メサレシテ、爲ニ一揆一引出シ申、度々戰功イタシ、國ノ守ト奉レ仰叓、是一揆之恩ニアラズヤ。斯ル莫大ノ恩ヲ思召忘レ、猥小人ノ浮言ヲ信ジ、庶民ノ愁鬱ヲ不レ用御成敗アラン叓不レ可レ然。恩ヲ得テ恩ヲ不レ顧ハ、野鹿ノ草ヲ踏ミ、巢ノ鳥ノ枝ヲ枯スニ不レ異。萬叓ノ先非ヲ抛捨、上一和ギ給ハバ下睦ジカラント申事、掌ヲ返スヨリ可レ速。如レ此遂ニ蓋シ相應セバ、積善ノ

餘慶滿ニ家門ニ、榮花永ク子孫ニ傳フ基タルベシ。若又方圓不レ合善利ヲ貧リ、後害ヲ不レ觀(顧)類ヒタルベシ。朱雲折檻辛昆裾ヲ引。種々教訓申サル、トイヘ𪜈終ニ御承引ナシ。是政親運命ノ盡ル所也。此訴訟不レ叶ノ間、一揆ノ衆時々評定。此儘優々寛々メ、肉ヲ以テ飢虎ニ與ルガ如シ。一々運氣ヲ刎ラル、叉、時日ヲ廻スベカラズ。去來如レ形城郭ヲ構ヘ、一旦ノ害ヲ遁レント欲シ、沼崎和泉入道慶覺、河合藤左衞門尉宣久大將トシテ、久安ト云在所ニ塀ヲ付ケ、獅子垣宜ク結廻シ要害ヲ構フ。去程ニ一揆ノ若者𪜈、替々爲ニ警固ニ不レ捐(ステ)晝夜一。去ル臘月ヨリ當年五月迄、前鉾相柱(サヘ)兩陣ノ間纔二十餘町也。角テ日次ヲ送ル處ニ、越ノ兩國御奉書ヲ頂戴スルノ上、急ギ打立富樫ヲ合力スベキノ由、其ノ聞隱(ヘレ)ナシ。去程ニ國中諸勢談合ス。傳ヘ聞(ク)、吳子胥ハ眼ヲ拔テ吳ノ東門ニ懸(ケ)、終ニ越ノ蜂起ヲ看ル。彼ル先跡ヲ聽ナガラ爰元遲ク、張ニ防三方一(ヨ)セバ叉可レ爲ニ敗北之基一。急ギ腹心ノ病トシテ高尾ノ城ヲ責落シナバ、合力ノ諸勢自退散スベシトテ打立ケリ。先河北ノ軍旅越中口ニ指向ヒ、俱利伽羅笠野松根(ノ)城ニ陣ヲ取リ、又江沼(エヌ)郡ノ諸勢ハ越前口ニ指遣シ敷地福田ニ陣ヲ取(ル)。同廿六日ニ國中ノ諸勢打立所々ニ陣ヲ取ル。先政親祖父泰高當國ノ守護職ヲ奉(ル)レ仰(ギ)間、家ノ子郎等ヲ引卒シ、其外諸勢都合二千余騎、野市ノ大乘寺ニ陣ヲ取ル。鳥越、吉藤、礒部、木越、彼四頭ノ衆寄合々々僉議ス。先月氏國ニハ釋尊御出世アリ。菩提樹ノ下ニ於テ三七日思惟ノ間、提婆五百ノ眷屬ヲ引卒シ押寄セ、瞿曇ヲ害シ奉ント欲ス。弓箭刀杖却テ己ガ身ヲ害ス。悉ク自滅ス。又震旦ニハ惠性天皇軍兵ヲ以テ佛法ヲ滅亡セシム。淸涼山ノ衆徒遂ニ合戰ノ防(グ)レ之(ヲ)。又吾朝ニハ聖德(太)大子、守屋ノ逆臣ヲ誅戮シ、佛法ニ就テ調達魔障ヲ禦グ叉勝(アガ)テ不レ可レ計(ツ)。彼專ラ念佛ノ一法ヲ修シ、末世相應ノ要法ヲ依(テ)レ爲(ス)、愚鈍道俗男女等現世ノ善因ヲ結ビ、當來ノ苦報(報)ヲ免ント欲ス。是非公務ヲ費スニ非ズ。私ノ志ヲ抽ル也。然ルヲ大罪ト號シ罪科アルベキノ條、佛法大敵ヲ計リ王法ノ怨敵也。退治ヲ不レ可レ不(ンバアルヘ)レ加。一味同心ノ儀ヲ以テ忝クモ鬚髮ヲ剃除シ、頭ニハ金剛堅固ノ甲ヲ戴キ、解脫之幢(ハタボコ)相ノ法衣ヲ脫置キ、衆怨悉退ノ鎧ヲ著シ、惡魔降伏之刀鉾(ク)ヲ横ヘ、魔障退散ノ弓箭ヲ負テ、同宿若黨引卒シ、都合其勢四萬余人、伏見、山崎、淺野大衆免所々ニ取(ル)陣(ヲ)。劔、白山兩山ノ衆徒、彼僉議國中一大事不レ可レ過レ之。萬一國破レ家亡ビバ、兩社安穩ニ不レ可レ有。イザヤ合力セント欲シ、其勢二千余騎諏方口ヘ打立リ。洲崎和泉入道慶覺、同十郎左衞門尉正末一萬余人ヲ相具シ、外張ヘ打出、上久安ニ陣ヲ取ル。笠間兵衞尉家次ハ簀衆七千余人ヲ引具シ、野市馬市ニ陣ヲ取(ル)。安吉源左衞門尉家長、倡河原衆八千余人額口ニ陣ヲ取ル。山本圓正入道同輩十人一萬余人ニ與シ、山科ノ山王林ニ陣ヲ取。高橋新左衞門尉六箇ノ軍兵五千余人ヲ以テ、押野ノ山王林ニ陣ヲ取ル。山八人衆、四山山内ノ諸勢、山々峯々透間モ無(ク)

212208

陣ヲ取ル。其外能美郡軍勢五萬余人、野市ノ諏訪ノ森ニ陣ヲ取ル。思々ノ幕紋、思々ノ籤印天ニ飜ル有樣、旌旗雲ヲ靡シ、劔戟ヲ爲レ林(ト)、山々野狼屎(ノロシ)ノ煙(リ)春ノ霞ノ如シ。搆々ノ篝火夜ノ星ニ不レ異。兩陣ノ際足輕ヲ懸ケ、言戰矢師日次ヲ送(ル)ニ無レ隙。孔明ガ八陣ノ圖、七雄戰國之軍旅不レ可レ過レ之。斯處ニ六月五日申刻ノ終リニ、城中ヨリ武者一騎出來リ、黑糸ノ腹卷ニ肩白ニ威シテ、下金物重ク打責、胸板星白ノ甲ニ鍬形ヲ打居、頸ニ著成(シ)、金作リノ腰刀、兵庫鎖ノ太刀ヲ帶ビ、桐生ノ矢筈高ニ負成シ、漆籠藤ノ弓ヲ持、紅ノ母衣ヲ懸ケ、白葦毛馬金覆輪ノ鞍ヲ置テ乘、舍人男楯計脇ニ挾ミ、木戸ヲ開キ、堀ノ板橋靜々ト步出。敵陣近懸寄セ、鎧踏(鎧懸)張リ、通ト立上リ、大音聲ニテ名乘ル。是ハ本郷修理進春親、唯今懸出ル意趣ハ、汝等王土ニ住ミナガラ佛法計ヲ荷擔シ、曾テ無ニ納法之旣得一、剩ヘ欲(ス)レ奉レ傾ニ國主一、言語道斷ノ所行也。風ニ聞ク、昔年蕨ヲ採(ル)賢人、勅命ヲ背ニ依(テ)終ニ飢死ス。彼ハ先規澆季ヲ殘ス。抑富樫ノ先祖ヲ尋叉忝ヤ北斗七星化現利仁將軍廿一世ノ裔苗物淸入道以來携(ヘ)弓箭之藝(ヲ)、代々不覺ノ名ヲ不(テ)レ取。殊更彼政親文武二道ノ達者。武勇三畧ノ賢者也。依レ之(テ)上意ニ相叶ヒ無雙ノ名ヲ得タリ。彼ハ奉レ向ニ貴人一弓ヲ控(ヒキ)矢ヲ放叉、冥ノ照覽其憚不レ少(カク)。爲レ下逆レ上申事豈人心臣(衍歟)ノ禮タラン。急ギ甲ヲ脫キ荆ヲ負ヒ、面縛降參ノ可レ申。不レ然一々運氣ヲ刎叉(ル)、不日ニ可レ梟(シトス)其頸一(ヲ)冒ル。暫有テ久安ノ搆ヨリ武者一騎出來リ、青黃綴ノ腹卷、同毛ノ甲ノ緒ヲシメ、三尺八寸アル鬼物作ノ太刀、熊ノ皮尻鞘引籠足緒長ク結ンデサゲ、大中黑ノ征矢頭高ニ負成シ節卷ノ弓ヲ持、烏黑ノ馬大ク逞ク、鑄係地ノ鞍、小総ノ鞦ヲ掛ユラリト乘リ、大幕(編)ンデ抛上、ジット打、足早ニ步出、大音ノ皺枯ヲ以高ラカニ名乘ル。是ハ河合藤左衞門尉宣久也。國中面々ノ代リニ罷出御返叉申也。將ニ諸勢ヲ打立、强敵對非(ズ)レ可レ申(キニス)。自身ノ命ヲ全フシ、後日ノ訴訟ヲ爲レ仰(シ)抑治(ル)レ國砥(ノ)如シ。失則民ヲ不(スルニ)レ招自皈伏ス。去バ賢人國ヲ隔テ來リ、士超(テ)レ境去。政無道ニ屬スル時ンバ常ニ荆鞭ヲ切(リ)、頻ニ諫皷ヲ打、剩ヘ權威ニ募リ、耕夫ノ牛ヲ借(リ)、飢人ノ食ヲ奪フ躰、誠ニ吹(テ)レ毛過大ノ疵ヲ覓ル故也。是百姓ノ歎所也。次ニ佛法修行ノ叉、貧究下根ノ我等、難行ノ勤修ニ不レ堪之間、半粒ヲ捧(ダ)覺路ノ資糧ニ宛、一燈ヲ挑(ヲ)テハ爲ニ昏衢ノ炬燭一。是掠ニ公物一沒後冥福ヲ資助スルニ非ズ。然レ𪜈稱ニ重科一欲(スル)レ令(ト)ニ停止一叉、現當二世ノ怨敵也。是愁嘆ノ專一也。次ニ倩此濫觴ヲ案ズルニ、是政親ノ意巧ニ非ズ。併依(ル)ニ佞人之讒言(ク)ニ也。去バ叢蘭欲(ス)レ茂秋風敗(シトヲ)レ之、王者欲(スレバ)レ明讒臣暗(マス)レ之。讒人ハ國ヲ敗リ妬婦ハ家ヲ破リ理リ也。願(ハ)令(セ)レ達ニ民間之愁訴一。如(キ)レ然輩被(レバ)ニ誅戮一、急度交名ヲ註シ可ニ捧申一。然者御屋形樣國主ト奉(リ)レ仰(キ)、參州ヲ郡代ニ用ヒ可レ申。如レ此羣訴御承引アラバ、羣衆各喜悅ノ眉ヲ可(シ)レ啓(ク)。不レ然者緩怠ナガラ山城ヘ責上リ、御生涯可レ爲ニ今日之間一。乍レ恐此趣所レ仰ニ上察一也。斯ル處

ニ城中ヨリ是ヲ御覽ジ、春親討ツル哉兵尼ト云了ラズ。常甲五十騎計掛出。又久安ノ陳ヨリ歩卒百人計出合、散々矢師ス。夕日漸ク紅輪ヲ傾キ欲レ沉二海間一。師可レ爲二明日一兩方ヘ相引ニ颯ト引ク。斯テ明ル六日ノ早天ニ、諸陣ノ面々大將ノ御陣、大乘寺ヘ打寄セ思々ニ評議ス。爰ニ洲崎入道進出テ申ス。此城ノ躰ヲ見ルニ力責ニ不レ可レ成。攻物ナラバ人馬ノ死骸山ヲ築キ、兵革緋血河ヲ流スベシ。所詮諸勢四方ヨリ語ヒ寄セ、粮道ヲ打留メ可レ爲二兵粮詰一。殊更明日明後日悪日、其上天一天上タリ。山城ヲ不レ可レ攻ト申ス。又河合進出申ハ、洲崎殿ノ御異見一途タリト雖尼、私ガ愚慮ハ、諸勢各取姥山々ニ取昇リ、日次ヲ經ナラバ、城衆不レ忍定テ里ヘ可二打出一。引出ス其時勝負ヲ可レ決ト申ス。斯ル處ニ木越光德寺進出被レ申、面々ノ異見如何雖レ爲二無二餘儀一子細一。爰一元遲ク張リ鄰國ヨリ可二亂入一亡國ノ基タルベシ。次ニ吉日良辰ヲ擇ヌ一代ノ教文ナシ。善悪不二邪正一如ト立ラレ、亦指二方所一本來無二東西一。何處有二南北一トキク時、何ゾ指レ天可レ指レ地、運ヲ天道ニ任セ命ヲ佛法ニ抛ン。常ニ攻々テ即日可二責落一歟、案ノ内ニ存ル也。餘人ハ不レ存、於二法師一翌日早天ニ打立、骸ヲ城ノ麓ニ晒シ、名ヲ世ノ末ニ殘ベシト、心底ノ趣無レ所レ憚被レ申ケレバ、諸勢一同ニ尤ト同ズ。斯ル處ニ從二越中口一註進申ス次第ハ、越中四郡ノ郡代奉書ヲ頂戴スト雖モ、賀與レ越ハ如レ唇如レ齒。唇ナクンバ齒寒カラン。今度ノ合力如何可レ有ト僉議ス

ト雖モ、上裁頻ナル間不レ及レ力。去來打立東方ノ郡諸勢濱放生津ニ陣ヲ取、中郡之衆吉江日澤ニ陣ヲ取。利波郡ノ軍兵蓮治ニ打寄セタリ。爰ニ當國ノ牢人阿曾孫八、小杉新八郎被レ申。我等爲二本人一之間、一番合戰仕ルベシ。都合其勢二千余人、俱利伽羅口ヨリ亂入ル。去程ニ河北ノ軍旅、莫田ノ先濟寺ヲ大將トシテ、不二敢取一遂二合戰一。入レ衆戰負ケ引退處ニ、追懸追懸究竟ノ兵矢庭ニ三十余輩討捕ル。其首進申上シ猶々是競ヒツ、通宵諸陣可二打立一用意也。山城篝火映レ天連レ星、寄手篝火地ニ滿日ニ續ク。爰ニ慶覺入道河合ニ向ヒ私語。潛ニ城衆ノ僉議ヲ傳ヘ聞ク。若キ衆異見ニハ、一陣破レテ殘黨不レ全。明日ノ師額口ニ懸リ弱手ニ懸リ磊程、諸陣不レ可レ留レ手云。又老衆ノ異見ニ、獅子ト云獸ハ畜生ノ王トシテ大象ヲ捕エ、全二其威一、捕ヘ二小虫一全二其威一。額口ノ弱手不レ可レ侮。敵目近招寄詰二寄堀之際一者ヲバ、件ノ車橋ヲ堀ヘ擲渡々々、四方ヨリ一同ニ切出シ追二散八方一、其競ヲ以テ推寄セ、在々所々一々ニ燒拂ヒ、切レ頸ヲ不レ可レ廻レ踵ト云。若衆此評議ヲ不レ用。可レ懸二額口一議定云有二内通一。イザヤ額口ニ加リ勝負ヲ可レ決ト云。河合尤ト同意シ、久安ノ陣ニ見ユル勢計殘置、潛ニ忍ビ夜陰ニ紛額口一手ニ成。城衆是ヲバ夢ニモ不レ知。去程ニ七日ノ早天ニ及ビ、諸勢各揚二合圖之野狼尿一。末若闇ニ打立、四方ヨリ詰寄、同時鯨波ヲ揚ゲ、大山モ是ガ爲ニ崩レ、湖水モ彼ガ爲ニ傾キ、忽疑レ落レ輪際、城中楯ノ鼻ヲ敲キ、調レ聲合レ時、宛如レ擊二皷於雷門一。如レ案坊ノ方ヨリ究竟ノ骨切二千餘人、楯三百帖計突并ベ打出ル。政親宣ク、今日ノ合戰可レ爲二國之分一、濫不レ可レ懸。楯ヲ一面ニ突並、勝レタル手聞五人十人宛雙箭ニ可レ射。一筋モ空矢不レ可レ射。敵楯鼻閃テ有洗間、射向ノ袖當レ額一同ニ可二截懸一。一人敵著二総角一程八幡モ有レ照覽一。政親懸レ手可二討弃一下知セラル。左承リ候額口近詰寄セ、凱歌ヲ颯ト揚ゲ、散々ニ射合セ矢種互ニ盡ル。爰ニ石黒孫左衛尉(門脱歟)中二日比荒言一。此本ニ去來面々欲レ決二勝負一。各楯ヲ投懸ケ投懸ケ切懸ル。城衆ニハ齋藤彦八郎、安江彌太郎、此面々ヲ先トメ面モ不レ振截懸リ、互ニ入亂レ、此ヲ先途ト攻戰フ。一揆之衆城衆ヲ尾引少取外處、逐ニ懸リ深入ス。弓手ハ洲崎、妻手ハ河合、打二圍敵之後一追二取一籠寂中一、火水ニ成テ責戰フ。短兵已ニ交リ、或ハ組テ落ル者アリ。或ハ指違テ死スル者モアリ。立戻リ腹十文字ニ掻切、思々心々ニ勝負ヲ決ス。前徒逆レ鉾血漂レ楯。遂ニ追掛ラレ返シテ篠角ヲ倒リ鍔ヲ破ル。鉾ヨリ火焔ヲ出シ、日々ニ叫ブ其聲ハ、上ハ非相非々相天、下ハ奈利八萬ノ底、堅牢地神玉焱ヲ驚ス。爰ニ城衆本鄕修理進春親敵多打取リ、我身ニ痛手ヲ負、小墓アリテ靠リ伏ス所ヲ、兵數多落合欲レ捕レ首ヲ無手ト起直リ、太刀ノ甲金ヲ追取ノベ、敵ノ裔波羅利々々々々薙伏セ、敵二三人討捕リ、腹十文字ニ掻切失ニケリ。三時計ノ合戰ノ趣、吳越ノ戰、漢楚ノ師モ是ニハ爭カ增ルベキ。終ニ城衆打負、散々ニ成リ打出ル。其時二千余人ト見ヘシガ、僅三百余人ニ被二打成一這々城中ヘ引退ク。將ニ戰場ノ形勢ハ手負死人算ヲ散シ、麻ヲ亂スガ如ク也。寄手競懸ケレバ若キ衆迄御前ニ參リ、大瓶尼立並無二上下一推並テ被レ遊。政近ノ女中ハ常ニ人目ヲ裹ムト雖尼、今ヲ限リノ遊宴、簾中ヨリ立出給フ。御齡未壯ニ坐テ柳五衣ニ紅ノ袴ヲ被レ召。嬋娟タル兩鬢ハ秋ノ蟬ノ翼、宛轉タル雙娥ハ遠山ノ色、桃顏綻レ露、揚妃却テ柳髮ノ風ニ亂ル、ヲ妬ミ、李氏ガ起レ猜粧ヒ、心詞モ及バレズ。其外近習外樣ノ女房達、皆御座敷ヘ被レ參歌ヒ舞ヒ、盃ヲ指ツ指ツ、酌ヲ取ツ取レツ、夜ト共ノ亂舞。酒宴半之叟ナルニ、女房ノ中ヨリ伽陵頻ノ聲ヲ揚ゲ、燈暗メバ數行虞氏ガ淚。夜深四面楚歌ノ聲ト云詩ニ二返被レ歌。又末座ノ女房達、霜草欲レ枯虫思苦、風枝定鳥難レ栖ト歌ヒ澄サル。列座ノ人々皆感淚ヲ催シ、不レ寢明夏夜千年永ク思心ノ内墓ナシ。瓦ニ睦言未レ歇。閨遠メ嵐夢易レ覺。春榮連理花ノ匂裏袂程モナク、時移リ景去、遠山寺ノ鐘ノ音別レヲ誘フ響キ露ノ契モ不レ結。小篠ノ一節ノ明告ル鳥ノ聲恨メシク、小夜漸ク欲レ曙處ニ、山河參河守進出、女中樣其外足弱落シ可レ申。御心安ク被二思召一御腹被レ召ベシト申ス。尤有二其謂一。去バ北ノ口ヲ被レ固礒部、木越ノ兩ヲ憑ミ、書狀ヲ遣シ、使節ニ書狀ヲ給ヒ、則時ニ礒部、木越ノ兩陣ニ届ク。木越右筆九代ノ信濃入道其狀有レ仕。甲ヲ脫テ高紉ニ掛ケ、推跪キ高ク讀上ケリ。遠尋二往昔一近思二當近一。世

途間以二士臣之直道一國ヲ治ルノ政、黎民ノ稼穡ヲ以、世ノ營ト云。士臣黎民ト云、互ニ奉レ守二國土一故也。然ル處ニ不慮ノ勸誘ニ依テ大逆ヲ引起シ、互ニ結二怨讎一(讎ヲ)ヲ、併爲二前因ノ所也。始不レ可レ駭。去バ雖下飛二羽檄一催中鄰邦之士卒上。編二輙竿一招ニ近國之突騎一。遲參時ヲ移シ日ヲ經ルノ所ニ、於二昨日七日一群騎競ヒ來リ合戰ス。其戰強盛ニメ羽翼悉ク失レ利。晒二戸原上之露一。然間天責坂二一人一自刎不レ可レ隔レ時。沒後ノ羞恥恐クハ萬口ニ落ン。去バ幼稚ヲ越ニ雖レ欲レ移、無レ使レ解レ圍無レ由レ尋レ緣。古ノ西施從レ越獻レ吳。今ノ幼女ハ自レ賀移レ越。彼ハ爲二國謀一此ハ爲二怨敵一。無二比類一之條沉辱之至矣。然リト雖ドモ慙愧ヲ不レ顧。奉レ憑二兩所之意度一。慥ニ其屆アリナバ二世之恩儀何戔如レ之。心趣粗如レ件。恐々謹言。季夏初八日、政親判、礒部、木越同宿中ヘト讀上ケリ。兩處書狀ノ趣無二相違一領掌被レ申。尤返牒ヲ在レ仕。信濃入道雖ドモ爲二短才不敏一。不レ及レ辭二一筆句下畢一。御使給二報書一。急立坂捧二政親ノ御前一。槻橋三位房其狀在二讀上一。小具足ニ御前ニ參リ畧讀上ケリ。秦嶺雲横、藍關雪擁、無二往復之便一處。青鳥飛來投二一芳札一。高顧之至珍重々々。抑以二武畧一討二國土之舒士一。以二仁政一撫二邊鄙之蒼生一。是爲二治國撫民之基一也。去世屬二靜謐一國坂ニ安泰之砌一。有二何意趣一時々企二讒訴一。盡二上察一引二起鄰國一。庶民退治之謀。是何過怠是何遺恨。且云二諸家之風聞一。且云二自門之滅亡一。旁以無二所謂一之條難レ轉二筆舌一。次某等慤乍レ表二法器之躰一。捧二劒戟一之叟是不二本意一。雖レ然依レ難レ默二止群議一。其引卒之萬一奏。就レ中御幼稚他郡之由示賜。不一日可レ任二其届一。努々不レ可レ有二虎誕之儀一。一諾豈有二變異一。心緒雖レ爲二多端一。合二省畧一候畢。誠恐誠惶敬白。林鐘上旬八日、木越、礒部雨判。富樫御奉行中御報ト書ル。便チ御返戔ヲ請取リ急ギ立坂政親被二聞召一。報書之趣不レ斜悅ビ、去バ急ギ女中ヲ御出シ可レ有ト奉二出立一給處ニ、女中被レ仰。昔東婦節女替二夫命一。漢法妻夫ニ後レ身ヲ玉泉ニ投ズ。武士ノ妻トシテ斯ル叟一度可レ逢兼テヨリ自ラ先拂レ露。守リ刀ヲ拔持、既ニ及二御自害一。政親御刀ニ取付キ、御靜リ候ヘ。身ハ一代名ハ末代。御死骸ヲ高尾山ニ曝シ、賤キ奴原ニ見スル叟口惜キ次第也。姫ドモ有御二倡都一。御志アリナバ、墨染ニ纏ヒ片邊ニ籠居シ、菩提ヲ祈リ給ヒ、悉ク八苦充滿ノ國ヲ離レ、同生九品無爲ノ樂不レ可レ有レ疑。樣々ニ教訓被レ申、御刀ヲ奪取ル。不レ及レ力淚伏沈ミ御座ス。將ニ政親幼少ノ古ヨリ御身ヲ不レ離手馴給フ御琵琶ノ撥ト尺八取出給ヒ、不レ數物ドモ無跡ノ形見ト御覽有ベシトテ女中ニ被レ參、夫尺八ト申ハ、王昭君胡國ニ趣キ都ヲ戀泣悲ム其聲ヲ學ビテ作レリ。去バ古人ノ詩ニ、吹起無常心一曲。三千里外絶二知音一。昔シ秦昭君ノ嘆、今御身ノ別淚ヲ助ク。常常通フ御目處ニ置給ヒ、御覽ジ御心ヲ可レ慰。又琵琶ト申ハ妙音大士謂雲雷音佛所。奏二伎樂一奉二供養一。去四絃彈ノ中爲ニ宮商彈一。第一第二之絃ハ索々トメ秋風拂レ松疎韻落。第三

第四ノ弦(絃)ハ冷々トメ夜ノ鶴ノ子ヲ懷ヒ籠中ニ鳴ク。風香調之間、花含二馥郁之匂一。流泉彈ノ曲、月添二清明之光一。依レ之鬼神モ納受ヲ垂レ、人倫憤怒ヲ和グ。去バ源氏宇治ノ卷優婆塞之宮女御、晨明ノ月ノ出遣ザルニ御搔ニテ招レ之、夫該月ヲ招出、是別行人ヲ招ク。招ドモ々々無二甲斐一。互ニ打詫手ニ手ヲ取組、玉袖行水關アヘズ。落花放レ枝再咲ク習ナシ。殘月西ニ傾テ又無レ皈二中空一。互ニ御心ノ内推量ラレ哀ナリ。左アルベキ叟ナラズ。名殘ノ袖ヲ引切、女中自二御淚之際一一首ノ歌角計リ。

秋風ノ露ノ草葉ヲ吹分テ同ク消ヌ身ヲ如何セン

政親不二取敢一角計リ。

神掛テ末ノ世チギル梓弓引留ムベキ袖ニアラネバ

被レ遊押テ御輿ニ奉レ乘。翠黛紅顏錦繡ノ粧、婆塞家鄕ヲ出ルヲ泣尋御別ノ有樣、王昭君ガ胡國ニ赴キ悲ムモ角ヤト思遣レ、香ノ煙面影身ヲ焦ス武帝ノ御思ヒ、雲雨ノ音信レ心ヲ碎ク陽臺ノ御歎迄思出シ給覽ト哀也。將ニ御供ノ女房達一百餘人。或ハ親ニ別レ、子ニ別レ、或ハ主ニ離レ夫ニ離レ、位悲(泣歟)ツ、遙々坂ヲ下ル有樣ハ哀レト申モ中々愚也。翠帳紅閨ノ契一炊ノ夢、月ヲ翫ビ花ヲ賞スルノ榮、片時ノ樂也。此政親坂中ニ立徘徊ヒ遙ニ見送リ給フ御躰、松浦佐夜姫ガ唐船ヲ慕フ風情也。去程ニ礒部、木越御迎ニ城ノ麓迄參ラル處ニ、御輿ヨリ出給ヘバ、馬ヨリ平ト下リ、畏被レ奉二請取一。先陣礒部、後陣木越御供ニ有テ被二成敗一。女中樣ノ御通リ也。立並戔緩怠、甲ヲ脫ギ笠ヲ脫ギ畏リ可二通申一也。萬一御供ノ女房達ニ奉レ向、狼藉ヲ致ス族アラバ、矢庭ニ討捨ベシト被二下知一。無二相違一若松ノ御坊ヘ奉レ移、明日軈テ木越ニ奉レ移、數十日ノ間、朝三暮四ノ營、種々盡シ被レ申、其後加賀ト越中ノ境俱利伽羅ノ宿迄木越自身奉レ送、越中ノ御迎ニ被レ奉レ渡。木越届情第一ト聞。將ニ女中樣於二田舍一相留可レ被レ申。親御方ヘ渡シ給ハザル間、軈テ都ヘ上リ給フ。旅行之間御歎キ思遣レテ哀也。逐レ客何人付見眼。大行千里送二征鞍一。回レ首呼虞舜蒼梧雲正愁。

物思ヒ淚ヤ染ル三越路ノ雪ノ白根モクレナイノ山

ト被レ遊、旅泊ノ徒然ヲ慰ミ給フ。或時ハ山ヲ傳ヒ幽谷ノ岩間ニ館、路ニハ砂ヲ足ノ血ニ染メ、終日物ヤ思覽。又或時ハ野宿旅邸ノ枕ニ馴レ、夢路ニ不二結取一、通宵淚トモニ明シ、不レ急旅ノ思ヒ日數漸ク重リ、有乳中山ヲ越過ギ近江路ニ著ク。湖水漫々トメ風飜二白浪一(花)苍千片。山岳峨々トメ雁點二青天一、字一行ト打詠ツ、枕ヲ礒ノ蓬屋ニ借リ、九技燈盡唯期レ曉。帆ヲ浪ノ沖津ニ揚レバ、一葉ノ舟飛不レ待レ秋。無レ程卽日比叡ノ山ノ麓坂本之宿ニ著ク。高車寶馬ノ御迎モナク、但驢馬ノ衰ヘタルニ駕シ、二枝之蹄泣々故鄕ノ都ニ入ル。古ヘノ買臣ハ錦ノ袖ヲ會稽山ニ飜ス。今ハ自ラ淚ノ袂ヲ洛陽ノ城ニ晒ス。故里其儘アルニ任セ貪ク被二思召一ニ指二九重之程一、人目繁キ憂世ノ嵯峨ノ奥、往生院ノ邊可レ厭レ世思召立ツ、知ル邊ニ落淚シ尋入給ヒケリ。日影ニ脆キ露ノ身、終ニハ柴ノ庵ニ

宿リ、暫ク御栖家ト思定給ヒツ、長ト等キ御髪唯一筋ニ思切給ヒ、嬋娟タル秋ノ蟬ノ初髻、窈々タル峨眉ノ黛匂ヒノ跡消ヘ、可レ妬無レ花可レ猜無レ月。羅綾ノ衣ノ上ニ蘭麝香ノ薫ヲ引替ヘ、香ノ袈裟末摘花ノ馥ニ紛レ計リ。去バ嵐劇レ春朝登レ峰摘ニ懺悔花一露滋レ纔夕、べニハ下レ澗汲ニ阿伽水一。日夜朝暮御勤怠ル叉ナシ。古ヘノ韋提希婦人ハ釋尊ノ金文ヲ受ケ、西方不退ノ快樂ヲ極メ、八歳ノ龍女ハ文殊ノ化導ニ依テ、南方無垢ノ成道ヲ唱フ。今ノ自ハ政親ノ別ヲ以テ爲ニ善知識一、終ニ妙覺果滿ノ位ヲ可レ誇叉疑ナク、行ヒ澄坐シケリ。去バ諸佛薩埵ハ順逆ノ化導ヲ垂ル時、有レ罪邪ヨリ正ニ入リ、無レ緣惡ヨリ導キ給フ。善アルハ希ナル叉ヒ也。爰ニ槻橋近江守ハ木越ノ依レ爲ニ所緣一、遣ニ數通之狀一、呼取申サルレ ヒ遂ニ不レ被レ出。寂結句返叉言ハナク歌計リ、

思切レ道バカリナリモノ、フノ命ヨリ猶名コソ惜ケレ

讀終テ不レ被レ出。政親ノ御供被レ申。誠ニ是虎ノ一毛、名ノ萬代ノ儀ヲ重ンズナリ。次ニ八屋藤左衞門入道覺妙ハ富樫ノ家ニ於テ、萬死ニ入テ一生ヲ不レ顧。代々大忠ノ仁タリト雖ヒ、傍輩ノ讒言ニ依テ勘氣ヲ蒙リ、遁世ノ越前ノ宅ニ令ニ倚住一罷有叉既ニ及ニ十箇年一。然ル所ニ當國ノ亂逆出來ノ由ヲ傳聞、思案セラル、躰、眞諦ノ器タリト雖ヒ、意塵囂ノ岐ニ馳セ、遁世ト擬メ今度政親ノ御供不レ仕、先代々忠節ノ疵タルベシ。心ハ爲レ恩使、命ハ依レ義輕シト思切リ、當國ニ下リ黑衣ノ身トナリナガラ、及ニ七日之晩一城中ヘ走入、奏者ニ尋ルニ不レ及、政親ノ御前ニ參リ、庭中ニテ御折檻被ニ申上一。爲ニ善知識一法躰ノ儀ヲ表スト雖ヒ、主從ノ儀未レ盡候間、今度御供ト申シ參リ候由申ス。政親志ノ程爲ニ怡悅一。然リト雖ヒ幸出家ノ質タリ。急立皈リ、政親ノ菩提ヲ可レ訪ト宣。覺妙重テ申ス。眞俗不二、迷悟同一ト承候時ハ、劒刃ノ一句死底ノ活路、唯此時節ニアリ。前後遲速差別不レ可レ有。死メ天嶮山ニ可レ待ト申シ、則欲レ切レ腹。政親刀ニ取付、其儀左右ノ可レ爲レ望ト宣フ。覺妙御諚ニ隨ヒ刀ヲ捨テ畏リ伺候ス。去バ引手物セントテ、桔縄目ノ腹卷ニ、同毛三枚甲、紫鍔ノ太刀四尺計ナルヲ取添、政親ノ御盃被レ下。八屋面目ヲ施シ、御盃ヲ戴キ申、生前ノ思出死後ノ詔、是不レ過ト喜悅ノ眉ヲ啓キ、老武者タリト雖ヒ、最後ノ高名揭焉ト聞。是賢人二君ニ不レ仕ト云本文ニ相叶者也。斯ル處ニ寄手ノ軍兵、昨日ノ師ニ疾間人馬ヲ息ヲ繼ギ、軍ハ明日タルベシト僉議ス。諸勢八方ヨリ詰ニ寄城麓一夜ノ明ルヲ待ツ。爰ニ慶覺入道唯一騎諸陣ニ掛遶リ被ニ下知一、計畧ヲ運シ城中ノ勢ヲ可ニ喚取一。一人不レ可ニ生涯一。左アル程ニ城中彌增ニ可レ弱。明日ノ師ノ案内也ト觸廻ル。去程ニ甲ヲ脫降參スル者モアリ。知音ヲ尋ネ落人ト成ルモアリ。曉方坊中悉ク落失セ、九月早天ニ及ンデ、政親ノ御前ニ纔三百餘人伺候ス。去程ニ九日ノ卯ノ尅ニ諸勢打立、一同ニ凱歌ヲ揚ル。(口歟)日々ニ叫ビ八方ヨリ攻上ル。其勢ハ大千世界ヲ震動ス。殆ンド修羅ノ軍衆ニ越ユ。爰ニ山川參河守、其日ノ裝束ハ、菊閉ノ大荒目ノ洗革ノ腹卷ニ、高角打タル甲ノ緒ヲ縮メ、六尺三寸ノ太刀水車ニ舞シ、郎等二人鋒ヲ竝ベ、山内衆ニ截懸ル。去程ニ四山山内ノ衆、參河守ニ奉レ向申次第、平生御成敗廉直ノ間、山内ノ軍兵最中追取籠申ス。城中ノ躰ヲ見ルニ、唯今可レ有ニ御生涯一、全レ命自然ノ代ヲ御待アルベシ。打圍欲ニ落申一。參河守宣フハ、志ノ程嬉シト雖ドモ、穢シ富樫ノ御紋、猿アレバ都鄙ニ無レ隱。唯今引退程ナラバ、弓箭ノ家ノ疵タルベシト、推通リ切腹シ給フ處ニ、兵數多落合刀ヲ奪取リ、山内ノ祇陀寺ニ少圍奉レ牢。(祇)(疑)軈テ夜ニ紛レ越前ニ奉レ越ツ、、猛虎ノ怒ヲ忍ビ、鰐魚ノ口ヲ遁レ、燕丹ノ本國ニ皈ルニ相但タリ。暫ク有テ國中ヨリ早馬ヲ立申。毒草ハ根ヲ截リ葉ヲ枯スト云。參河守ヲ奉レ遁、虎ノ子ヲ飼テ千里ノ野邊放ツ叉ヲ可レ爲。急ギ生涯可レ申ト云ト雖ヒ、落給後ナレバ、賊過テ弓ヲ張ル心地也。爰ニ本折越前守一人當千ノ兵雖レ被ニ憑切一、穢キ空言セラレ降人ニ成テ被レ出。龍ノ髯ヲ撫デ虎ノ尾ヲ踏叉ヲ爲心地ト云人アリ。亦或ハ萬猛ノ虎深山ニ在則百獸爲レ之惱裂。擒テ入ニ陷牢中一則バ寥々トメ向レ人云リ。猛者武ノ敵ノ手ニ渡ル。有慮ノ意理也ト云人アリ。將ニ大將ノ御陣ヘ和泉被レ參處ニ、大將ノ郎等數多落合、主從三人被レ討。古ヘノ韓信爲ニ公儀一降走受レ戮、今ノ越州ハ重ニ私命一敵ト成テ被レ辜叉、非ニ營失一忠勤之道一、埋ニ譽名於泥土一者也。將ニ政親ノ得手具足、藤右馬尉ガ打タル白柄ノ長刀、柄モ六尺身モ六尺有リ。茅葉ノ如ク曾利推立弓手ノ方ニ擣。峯枯立ノ樫ノ棒、長切ニ八尺一八角ニ削リ、六十四ノ鐵ノ鏃、必爾々々ト打、妻手ノ脇ニ被レ立。將ニ藤嶋友重ガ鍛ヒ澄シ打九尺三寸ノ大太刀、中程ヨリ鍔本迄手繩ヲ以テ吉利々々ト卷キ推立被レ置。將ニ政親、御年積テ卅四、長ノ高サ六尺八寸、如ニ丈六仁王之荒作一也。紫下濃ノ御著長、四人持アルヲ取テ引掛ケ、淘テ上帶下ト縮メ、同毛ノ四方白ノ甲ニ大鍬形打チ猪頸ニ著成シ、件ノ長刀ヲ追取伸ベ、面々ハ搦手ヲ禦グベシ。大手ハ政親一人ニ任スベシ。三尺劒光ノ氷手有ト打振テ猛勢ノ中ヘ破リ入リ火ヲ散シ攻戰フ。拂ニ八方一薙ニ四方一、獅子ノ高臥龍ノ一曲、長刀ノ祕術ヲ不レ殘責戰フ。究竟ノ兵矢庭ニ八十余人切リ伏セ、殘黨不レ悚、嵐ニ木ノ葉ノ散ル如ク、群々撥ト被レ逐ニ頹城麓一。將長刀弓手ノ肩ニ抛懸、由良利々々々ト本陣ニ登給フ威勢、海底ノ修羅王ガ飛レ石降ニ氷雨一、帝釋天ニ攻上ル威モ角ヤト覺フ。將ハ床机ニ腰ヲ掛ケ暫ク息ヲ繼グ處ニ、弓手ノ方ヨリ一萬人計リ喚キ叫ビ責颺ル。今度ハ棒手ヲ見セント宣ヒ、件ンノ棒ヲ追取リ、三方ヲ指固メ一方ニ追向ヒ、面モ不レ振打テ懸ル。芝雉石突木葉返水車、德山ガ手段、穢山ガ祕密ノ手、一手モ不レ殘散々ニ打廻ル。一足モ不レ引、百余人被ニ打伏一、殘ル軍兵少モ不レ溜被ニ追崩一、譬大山ノ崩ル、如ク、大石ト大石ト供打ニ埋ニ澗間一。將ニ本陣ニ引返リ四方ヲ急度御覽ズレバ、

妻手ノ側ヨリ多勢一同ニ競懸リ、件ンノ棒彼ニ颯ト擲捐、太刀追取リ、悪シ奴原手次ノ程ヲ見セント多勢ノ中ヘ切入リ、手ヲ碎キ責戰フ。提切、袈裟掛、拂截、退待一太刀切、象戲倒撥切、礒打浪飜切、亂紋、菱縒、蜘手角繩、四角八方追立々々切廻ル。手ノ下ニ被レ討者數不レ知。又共具足ニ被レ貫、無慙將騂城山ヨリ戰場ノ有樣ヲ見ルニ、手負死人埋ニ溪間一。弓箭劒戟敷ニ簀子一。將ニ搦手ノ合戰ノ次第ハ、寄手軍兵數萬人、銘々ニ戴ニ帖楯一、入替々々責上ル。城方ニハ槻橋一黨ヲ先トシテ三百人、我先々々ト防戰フ。寄手大勢被レ討ヲモ不レ云。手負ヲモ不レ顧。防ギ手ハ案内者、此彼ノ迫々ニ寄合セ追立々々責戰フ。或時ハ山城ニ被ニ追上一、亦或時ハ城ノ麓ニ被ニ逐崩一、敵御方ニ入亂レ互ニ責戰フ勢、百千ノ雷電同時ニ如ニ鳴懸一、多勢ニ無勢不レ叶習大畧被レ討。殘黨ノ兵不レ留レ足被ニ追立一、本城ヘ颯ト引退ク。將ニ合戰場ニ趣キ、手負死人ノ緋血染レ山粧、龍田初瀨之紅葉ノ朝霜ノ葉ヲ染、夕日晒レ色不レ異。將政親宣ハ强不レ可レ作レ罪。憐ニ來世之報一。去來面々腹ヲ切レト宣フ。去バ承候ト疊五六十帖擲出シ、廣庭ニ敷並々々居、既ニ欲レ切レ腹。政親宣フ濫リニ不レ切レ腹、盃ニ腹切刀ヲ取添、可レ爲ニ思指一ト宣フ。承候トテ大瓶ヲ打立、早酒宴ヲ始ム。亂舞半ノ夏ナルニ、爰ニ宮永八郎三郎、扇子追取通ニ立、一拍子ヲ踏ミ一聲ヲ揚グ。歡花欲レ盡春三月。命葉易レ零秋一時ト、二三返歌ヒ一舞マフ。見聞ク人々濕ニ鎧之袖一、將ニ畏リ申。乍ニ緩怠一中有ノ旅路露拂可レ仕ト、土器ヲ取擧三度酌ミ腹十文字ニ搔切リ、乍レ恐勝見與四郎殿ヘ可ニ持參一。盃ニ刀ヲ副ヘ勝見ニ指ス。珍敷戴ニ御盃一、三度酌ミ腹切リ、福益ノ彌三郎ニ指ス。其後那緣、吉田、小河、白崎、進藤、黑川、與津屋五郎、谷屋入道德光、西林房、金子、上田入道、八屋藤左衞門入道、立入加賀入道、長田三郎左衞門、宮永左京進、澤奈井彦八郎、安江和泉守、神戸七郎、御園筑前守、同五郎、槻橋豐前守、同三郎左衞門尉、同近江守、同式部丞、同彌六、同彌次郎、同三位坊、山河亦次郎、本郷興春坊、如レ此次第々々ノ思指ニ、切腹面々已上卅人ト聞ヘケリ。其外殘給人、大將政親、本郷駿河守ガ童千代松丸計也。將駿河守被レ申、前代未聞ノ見物哉。早浮世ニ無ニ思置一歟。急ギ御腹召ルベシ。某殿可レ仕ト被レ申。政親宣フ。老衆立レ蹤歟無レ謂次第也。若カ役ニ政親可レ殿。互ニ爲ニ相論一。終ニ駿河守負被レ申。去バ某シ先達仕覽。推融腹十文字ニ切、一首ノ歌計リ。

陰弱キ弓張リ月ノ程モナク我ヲ誘テ入ヤ彼ノ國

ト讀、生年五十六ニテ失ヌ。其後政親急ギ追付ント被レ仰。千代松丸、九寸五分ノ鎧徹シ中程、以ニ檀紙一吉利々々ト卷キ、甲斐々々敷介錯申ス。將政親刀ヲ追取、推融弓手ノ脇ニ推立、妻手ニ吉利々々ト引廻シ、取返ス刀ニテ水走ニ突立、臍下ヘ活ト推下シ、緋ノ血ヲ以一首辭世、角ト聽ル。

五蘊本空ナリケレバ何者カ借リテ來ラン借リテ返サン

被レ遊。刀ノ鋒口ニ含ミ俯辺給フ。鋒柄口マデ被レ貫失セ給フ。將、千代松丸御死骸ヲ取認メ、屋形々々ニ火ヲ掛ケ、猛火ノ中ニ飛入御供申ス。誠ニ艶キ哀ヒ也。一業所感之趣、自業自得之道理也。當來之苦報(報歟)思遣レテ哀レナリ。將ニ諸勢亂入リ、政親御首ヲ取リ、大將泰高ノ御目ニ懸ク。唯一目御覽ジ、兎角物ヲハ不レ被レ仰。一首此ク聞ユ。

思キヤ老木ノ花ハ殘リツ、若木ノ櫻先散ントハ

被レ遊。御涙ニ咽ビ給フモ理リ也。老身難面、永ク彼ノ憂目ヲ見ル哀、御歎キ有モ理リ也。其後御首ト死骸トヲ大乘寺ニ送リ被レ申、僧侶數多群集シ、葬送ノ儀式ヲ取行ヒ、奉レ成ニ一堆之灰一、哀ナル事ヒ也。斯ル處ニ及ニ九日之晩一越前口ヨリ註進ス。其趣ハ堀江、南郷、杉若藤左衞門尉、志比、笠松爲ニ大將一五千余人、昨日八日ニ國境ヨリ立花ニ亂入。在々所々ヲ燒拂ヒ、鑿木ヲ振リ要害ヲ搆ヘ陣ヲ取ル。將今朝早天、敷地、福田ノ諸勢、願正入道ヲ爲ニ大將一七千余人打立。時尅ヲ不レ移推寄、火水ニ成テ責戰。入衆戰負、究竟ノ兵數十人討レ、足ヲモ不レ留被ニ追立一。楯鑓ヲ失ヒ具足ヲ脫捨、這々金津ノ上野迄引退ク。何度亂入候ヒ、越前口ノ哀ハ此方ヘ可レ有ニ御任一。註進三ケ所之合戰。何々爲ニ理運一哀。希代不思議之子細也。去ハ從レ古至レ今、佛法破滅ノ企、其罰在ニ立所一。凡佛法王法ハ車ノ兩輪、鳥ノ雙翼雙輪、一闕テ難レ走。片翼豈レ翅レ天。一闕テハ不レ可レ叶。以ニ佛法一護ニ持王法一、以ニ王法一尊ニ敬佛法一。是天下安全之基。國土豐饒之瑞相也。積善之餘慶從ニ信心一來。積惡之殃從ニ不信一來。善ヲ好ム家ニハ春草日日ニ如レ見ニ長生一、福ヲ好ム家ハ如ニ砥磨刀一。時々有ニ損失一云。去バ從ニ三皇五帝一以來代々聖主。以ニ佛法一皈ニ依之一渴ニ仰之一成ニ就現當二世之願望一。唯勘ニ賀陽一逆亂之意趣。闔國之判主。可レ備ニ萬代之龜鏡一者也。

小松軍記

利長與二長重一結レ恨

一豐臣秀吉公、天正、文祿之間數年、軍計ヲ叉トメ、或ハ叛臣ヲ征シ、不庭ノ國ヲ伐スルニ以二武威一、或ハ忠功ヲ賞シ、許レ降、慈愛ヲ以シ給。因レ是、諸侯(候)大夫歸二武命一、初テ天下一統ス。于レ此慶長三年ノ夏ノ比ヨリ加賀國小松城丹羽加賀守長重十二萬石ヲ領シ、三品宰相ニ補任セラレ居レ之。又同國金澤ニハ前田肥前守利長、能登、越中及加賀半國ヲ領シ、殊更武威サカン也。利長モ長重モ俱ニ故信長卿ノ聟ナレバ、隔ナキ中ナリシニ、聊ノ叉有テ怨恨ヲ含ミ及二合戰一。子細ヲ尋ヌレバ、其比大閤(太閤)御異例マシ〳〵ケルニ、御齡ノ上ナレバ、次第ニ憑ナク見エサセ玉フ。因レ是嫡男秀頼僅六歳ニテ渡セ玉ヘバ、暫天下ノ政務ヲ江戸內府家康公ヘ委サセ玉フ。加之諸國之大名小名悉ク伏見ヘ召集、萬代迄ノ叉ヲ殘シ置セ玉ヒテ、慶長三年八月十八日終ニ薨去シ玉フ。利長ノ父大納言利家モ秀頼ノ太傅(傅)ニ約セラレテ、父子共ニ在二伏見一セラレシガ、利家時氣ノ病腦ヲ身ニ受テ、程ナク逝去シ玉ヒヌ。相繼テ利長ノ遺命(衍懃)ヲ守リ、亡父ノ忠義ヲ遂テ、叛國ノ望ナク伏見ニ住セラル。其比天下ノ三奉行ト聞ヘシ石田治部少輔三成、增田右衞門尉長盛、長束大藏大輔正家等、己ガ權柄ニ募リ、幼君ニ叉ヲ寄テ國家ヲ亂ント計ル。然ル內府公ヲ始諸國ノ大名、大坂伏見ニ充滿ノ、彼等ガ謀逆叉行ベクモ不レ見ケレバ、如何ニモノ諸將ヲ國々ヘ下シ、公義ヲ疎クシ、私ノ交ヲ止ムハ自然ト異說起テ、欺安カラント內談ノ、先三奉行等利長ニ向テ云ク、今天下安泰ニノ何ノ用心モナキニ、遠國ノ面々永々ノ在伏見ノ、財寶ヲ費シ、國民勞セシメバ、賊徒諸國ニ起テ、世ノ煩モ成ラン。殊更於二貴所一被レ拘二大國一。加之家督ノ後所知入モ無シ。如何ナル訴訟ノ人、奉公ノ望有者モ候ベシ。國安フノコソ天下泰平ノ功ヲモ立ラレ候ンヅレ。五大老ニ斷有テ、急入國アラレ候ヘト三成指計ヒ、言ヲ巧ニ述ケレバ、利長實モト思ヒ、蒐(兎)モ角モ、面々ノ御指圖次弟(第)タルベシト申サレケレバ、三奉行斯ト披露シケレバ、各モ尤ト同ゼラレ、皈國ノ叉ヲ赦サレケル。利長即金澤ニ下テ、國中ノ制法ヲ出シ、非常ヲ正忠功ヲ賞シ、政道ニ私ナシ。然レバ上下喜悅ノ思ヒナシ、家老出頭人ハ門前ニ市ヲナシ、遠侍匹夫ノ族ハ推奬奬拜ノ三ケ國ノ諸士群參、日夜ノ境ナク、酒肴衣服ハ云ニタラズ、弓馬矢石ニ至ルマデ持運シ馳集ル叉法ニ起テ(超歟)夥シ、三奉行頓テ密ニ金澤ヘ目付ヲ下シ、此樣子ヲ一々ニ記シ付、利長內々人數ヲ揃ヘ兵具ヲ集、叛逆ノ計回有レ之由、洛中、大坂ニ沙汰セサセ、ヨリ〳〵諸大名ト會合ノ、是コソ由々敷大叉ナレバ速カニ誅レ之、向後ノコラシメニセラルベシナド云程コソアレ。內府聞召、利長謀叛實シカラズトイヘモ、卷

說多聞ニ及ブ。利長傳ヘ聞カバ、頓而誤ナキ旨謹デ陳謝有ベキ處ニ、其沙汰ナキハ覺束ナシ。只疾軍勢ヲ集メ、誅伐セルラベキニ議定アル。後ニ子細ヲ尋レバ、三奉行等對二利長一聊遺恨モナシ。此叉ニ託テ軍勢ヲモ催シ、兵器ヲモ集メ、亦利長ハ無双ノ大名ニノ、古利家ヨリ以、來別ノ內府ニ奉レ親、出來ニヲヒテハ、必內府ニ與ノ一方ノ軍將タルベシ。然レバ東北ニ大敵ヲ受テ、叉難儀ナラン。加樣ニ讒シテ先利長ヲ失ヒ、然後ニ內府ヲウチ奉ラント、悉皆治部少輔ガ謀トゾ聞ヘシ。其比三成、福島正則、加藤淸正、池田輝政長岡忠興等ノ諸大名ト不和ノ叉有テ、大坂ニ於テ合戰アルベシトテ騷動ス。雖レ然內府是ヲ宥サセ玉フニ依テ、是ヲ幸トメ三成大坂ヲ退出シ、江州佐和山ノ城ニ籠居シテ、世間ノ體ヲ窺フ。增田長盛、長束正家、小西行長等ハ在二大坂一叉ヲ計ル。內府ハ是ヲ知シ召レズ。丹羽長重ヲ大坂西丸ニ召テ仰ニ曰、利長亡君ノ命ヲ背キ、數通ノ誓紙ヲ破リ、謀叛ノ企不義ノ張本也。御邊ハ親キ中ナレモ、斯ル不道ニハ與シ玉フマジ。急皈城シテ金澤ノ形勢ヲ追々注進セラルベシ。加州ヘ出軍セシムルニ於テハ、可レ被レ仕二先陣一トテ粟田口吉光ノ短刀ヲ給ル。長重無二儀一吾館ニ皈リ、手廻リノ侍少々召具シ、其夜ニ大坂ヲ立テ、日夜ニカケテ小松ニ皈城シ、老臣等ニ談レ之。密ニ金澤ノ樣子ヲ伺ヒケル。利長傳聞ニ意(懃)恨ニ思ハレケルハ、縱バ他門ノ族悪樣ニ取ナスモ、彼ハ親キ中ナレバ、叉ノ實否ヲモ糺シ、若又此叉雖レ爲二實儀一、一旦吾ニ異見ヲモ加ベキ叉ノカシ(アヂ歟)。左コソナカラメ。讒佞ノ輩ト一所ニ成テ、斯ル計コソ返々モ心得ネ。只蒐(兎)ニ角ニ馳登テ虛名ヲ申開ンニハ如ジトテ陰カニ上洛シ、內府ニ咫尺シ奉テ樣々陳謝シ、老母ヲ江戸ヘ人質ニ遣シ、其疑ヲ解玉フ。因レ是三奉行ノ支度相違ス。此節石田佐和山ヨリ折々忍テ大坂ニ來、一味ノ族密會ノ談合度々ニ及ブト云々。同年臘月上旬、三成家臣島左近、朝倉內膳兩使ヲ以奧州會津ニ遣ノ、上杉中納言景勝ニ謂テ云、古公ノ遺命ニ、五老奉行等隔心ナク天下ノ政務ヲ相議シ、秀頼公ヲ可レ奉二守立一旨、自他誓紙ヲ以テ申定ル處ニ、幾程ナキニ內府誓約ヲ破ラレ、權威ニ募リ、諸大名ヲ懷ケ、黨ヲ立サセ、幼主ノ威ヲ奪ハントス。亦秀頼公御爲ヲ存ジ、御後楯ニモ成ベキ忠臣等ヲバ、難題ヲ以テヤ、モスレバ無レ罪ノ誅セラレントス。加賀黃門利長等是也。此次ニ亦貴所一身ノ大叉無レ疑乎。倩內府之所行ヲ見ルニ、往古ノ時政父子、右武衞ノ代ヲ傾ケシ類ニ相同ジ。悲哉、先君ノ遺誡、神明ノ誓ヲ破リ、或一旦ノ慾ニ舊恩ヲ捨テ、義ヲ忘ル族多キ而已。是併彼謀計ニヨル所也。去秋以來世間ノ轉變如二黑白一。此後經二年々一重二月々一爾乎。然則バ誰克久乎。不レ去二兩葉一用二斧柯一云々。誠哉。是ヲ以思レ之ニ、彼悪ヲ退ケ再ビ泰平ヲ致サン叉ハ今也。因レ是肺肝ヲ碎キ雖レ回二密計一、彼ハ猛威ニノ多勢也。事楚忽ニ

有テ不レ可レ利ニ于此一。貴所ハ亡公ノ遺命異レ他。於レ是忠義ノ爲ニ身命ヲナゲウチ、與レ之絶タルヲ繼、廢タルヲ興スノ功ヲ致サレンカ。然ラバ明春ニ至リ於ニ貴國一擧レ兵ラレバ、內府定テ奧州ニ可レ有ニ發向一。其變隙ヲ伺ヒ、畿內、中國、西國ノ催ニ大軍一、幼君ノ御旗ヲ立ラレ、東西一同ニ牒シ合セ、彼黨ヲ夾ニ前後一、可ニ誅戮一條有ニ此時一。是偏ニ天下反覆之功也。然ノ後景勝、輝元執權トノ可レ被レ守ニ立幼君一者也云々。然レバ景勝同レ之、兩使家臣等同席ニ、密カニ軍議有テ、來年初秋ノ比可レ擧レ旗之由、相圖ヲ定テ、亦景勝ヨリ長尾淸七郎、色部主殿助ヲ使トノ、明ル正月中旬、佐和山ニ遣、猶約條ヲ相議云々。三成ガ兩使島、朝倉ハ會津ヲ立テ、常州佐竹右京大夫、信州ノ眞田安房守等ガ許ニ往テ、謀叛ノ相圖ヲ約スト云々。是ヨリ奉行等、密カニ與力ノ輩ヲカタラフニ、備前中納言秀家、筑前中納言秀秋、岐阜中納言秀信ヲ始、毛利輝元、吉川元春、島津、大谷、伊東、秋月等、宗徒ノ大名數十人、同意ノ連判ヲ堅ム。雖レ然深密ノ計回ニノ、秀賴ノ近臣等モ知レ之人ナシ。然ルニ上杉景勝ハ去年數ケ國貶セラレ、被レ迁ニ奧州一百萬石ヲ領ス。其比天下ノ大法ニテ、所領ヲ替シ輩ハ國ノ仕置ノ爲ニトテ、三ケ年上洛赦免スト定置レシ事ナレバ、景勝モ其法ニ任セ、上洛セデ在ケルヲ、大閤(太閤)薨去ノ砌ナレバ、急上洛在ベシト、內府御下知有ト云ヒ不レ用レ之。其上謀叛ノ約條ナレバ、兎角ニ事ヲ寄テ上洛ナシ。剩米澤、福島、白石、白川ヲ初、領內數ケ所ノ城々ニ搆ニ要害一兵粮ヲ集ム。因レ是近國ノ註進アリ。內府聞召、此上ハ謀叛疑ナシ。急ギ征伐有ベシトテ、東海北陸兩道ノ軍兵ヲ催サル。利長モ急皈國有テ、人數ヲ揃テ越後路ヲ經テ、津川口ヨリ攻入ラレヨト也。其外出羽、奧州ノ諸將ニ軍令ヲ下シ玉フテ、內府モ數萬騎ヲ卒シ、慶長五年庚子六月十六日、京都ヲ進發有。海道ヲ經テ攻下ラセタマヒケル。

小松籠城

一斯テ內府七月二日武州江戸ニ著御有テ、御仕置等仰置レ、同廿一日、家康公、秀忠公御父子、十二萬余ノ軍兵ヲ卒シ、奧州ニ向ハセ玉フ。景勝モ兼テ支度ナレバ、城々ヲ堅固ニ守リ、其身モ二萬余騎ニテ白川口ヘ出張ス。利長モ本國ヘ馳下リ、近國ノ勢ヲ催サレ、小松ヘモ其趣ヲ觸送ラル。長重思ハレケルハ、心得ヌ事ヒ哉。去頃利長ヲ疑ヒ玉シ時、內府余儀ナク賴マレケレバコソ、利長ト親ミヲ振捨テ、忠義ニ備ヘシ上ハ、縱利長イカ計ノ陳謝雖レ有レ之、一旦吾ニ知セ玉ヒテコソ、彼ト和睦御座ベキ事也。增テ上杉退治ノ事ハ天下ノ逆徒ナレバ、誰カイナミ可レ申。直ニ催促可レ有事ナルニ、加賀ノ令觸不ニ心得一。利長何トカ計フラン。此頃ノ計畧ヲ遺恨ニ思ヒ、於ニ中途一打果サント思モ不レ知。暫ク世間ノ樣子ヲモ聞ツクロハヾヤト思ヒ、早々打立候ハンズレヒ、所勢ノ事ニテ行步モ身ニ任セズ、其上支度モ半バニ候ヘバ、某ハ後陣ヲ仕ベシ。先其國手先ニテ候ヘバ、出勢有レ候ヘト反答有。利長聞給ヒテ、長重此頃ノ形勢難レ弁。今以テ後陣ノ望イブカシ。兎角ニ彼ガ安否ヲ究メテコソ打立メトテ、不破齋宮之助ト云者ヲ使トノ、奧州退治之事、諸方ノ寄口相圖アリ。催促非レ私。是因ニ貴命一也。如何ナル意趣マシマシテ加樣ニ延引候ゾ。且又人ノ不審モ候ベシ。急出陣有ラレ可レ然ト、催促雖レ及ニ四ケ度一猶豫有ケル處ヘ、大坂ノ三奉行ヨリ秀賴爲レ命謀叛ノ廻文アリ。然ルニ亦內府ヨリ北國ノ事ニ於テハ、强而賴思召トノ羽檄到來ス。長重拜見雖レ爲ニ本望一、利長ノ謀議モ難レ計、如何ト思案最中也。齋宮助馳皈テ、小松ノ體タラク聊心得ガタシト云ケレバ、利長モ早大坂ノ騷動ヲ傳聞、其上謀叛ノ回文到來アリ。偖ハ長重兼テ與レ之ノコソ出陣遲引ト覺ヘタリ。此上ハ早々小松ヲ踏散シ、手本ヲ心易クノ上方ヘ打拔ルカ、奧州ヘ向カ可レ應ニ時宜一トテ、俄ニ七月廿六日ノ申ノ下剋ニ、四万余ノ軍ヲ引卒シ小松表ヘ押出ス。松任ヨリ此方ハ因レ爲ニ小松領一、燒拂テ通レトテ、道筋ノ在家ヲ放火ノ手取川ヲ渡リ、水島、寺井迄押寄タリ。已ニ時過テ曉ニ成ヌ。小松ニハ不ニ思寄一事ナレバ、上下騷亂不レ斜。長重兼テハ內府ニ可レ奉ニ敵對一覺悟ニアラズト云ヒ、今大軍ニ被ニ押懸一。向ニ利長一陳謝スベキニアラザレバ、不レ得レ已籠城有ベシトテ、長重先掛橋口ヘ打出。コノ所ヲ堅固ニ持カタメテコソ防戰ノ評議モセメトテ、安宅川ノ岸ニ付テ柵一重結回シ、ノボリ少々張立サセ取合セタル體ヲ見スル。然レバ加賀ノ先軍侮レ敵、急ニ城ヲ可レ攻ト勇ミ進ム。雖レ然利長思慮ノ曰、惣搆一重ハ一悐モ有マジケレヒ、泥川ヘ打入時分、出丸ヨリ弓鉄炮ニテ打立ラレバ、無ニ左右一責入ガタシ。先陣々ヲ取カタメ、一兩日モ城中ノ位ヲ見テ手立有ベシトテ、小松ノ東ニ當テ、其間三里ヲ隔、鬼波、三谷ト云山ニ二ケ所ノ砦ノ有ケルヲ向城ニ取テ、横・山(山脇歟)城守、山崎長門守、兩家老七千余騎ニテ向レ之。大將利長ハ寺井ノ東ナル三陀山ニ本陣ヲ居ラレケル。諸軍猶近邊ノ山々ニ陣ヲトリ、遠卷ニ攻レ之。斯リケル處ニ、小松方坂井與右衞門ガ手ノ者上田太左衞門ト云者、寺井ノ邊ヘ忍入テ、小屋ガリシケル奴僕等ヲ薙伏セ、首二ツ取テ馳皈ル。長重物初ヨシト悅ビ、上田ニ引出物ヲ玉ハル。此與右衞門ト云フハ、去ル永祿ノ頃八條合戰ノ折カラ、明知、赤座、坂井トテ公方ヲ見次奉リ、七本鑓ト云名ヲ呼レシ剛猛ノ者也シガ、子細有テ長秀ニ仕奉リ、長重ノ代ニ成テ家老ニ備ル。此外若武者、溢レ者モヌケ〳〵ニ忍出、爰彼ニ伏居テ、陣具ヲ求、小屋具ヲ運ブ士卒ヲ追立テ、敵ヲ討事夜々也。寄手モ心得テ相伏ルト見ヘシカバ、長重制法ヲ出シ止レ之。角テ大手ハ無双ノ嶮難ナレバ、寄手左右ナク不ニ取懸一。然モ搦手ハ要害淺間也。若敵之勢ヲ廻ス事モ有ベシ。敵ニ行ヲ

セラレヌ先ニ、此方ヨリ計ヘトテ、惣搆ノ外ナリケル本折町ト云所ヲ十餘町自燒メ引入ト云々。

南部無右衞門、永原松雲喧嘩之事

一城ニハ大手搦手、役所々々之手分メ各持口ヲ堅ケル。籠城ノ法ナレバ、諸士ハ云ニ不レ及、商民ニ至迄人質ヲ可レ出ト相觸ラル。爰ニ其比南部無右衞門ト云者、諸國ヲ武者執行メ廻リシテ、稻葉彦六郎一通ノ口入ヲ以テ、二千石ノ所領ヲ得サセ召置レケル。武勇ニハ達人ナレ𪜈、傍若無人ニメ上下ヲ不レ分、禮法ヲモ不レ知、其行跡ニ任テ狂人ノ如シ。妻女ヲモ不レ持メ、若太夫トテ十六七ナル子一人養育シケルガ、傍輩ノ中ナドニ饗膳ノ事アレバ、誰モ呼ザルニ、若太夫ヲ具足メ兼約ノ輩ト打交リ、亭主ニモ禮セズ、押テ座上ニ打ナヲリ、美食飽マデ食シ、自余ニ無二時宜一、酒打ノミ活計(席)メゾ廻リケル。加レ之家中ノ面々、大守ヘ一獻ヲ進ル席ヘモ如レ此ノ事度々也。長重宣ヒケルハ、彼南部ハ武勇計ヲ賣ケレバ行跡ハ買人ナシ。世間ニ知レヌル形勢ヲ今改テ全ナシ。如何成尾籠有レ之𪜈尤咎ムベカラズト有シカバ、取合人ナシ。又其頃長原十方院松雲ト云法師武者、是モ武者修行トメ諸國ヲ廻リケルガ、近キ比迄ハ、越中ノ守護佐々陸奥守成政ガ家ニ有シガ、佐々沒落ノ後、上方ヘ通リケルヲ、長重對面有テ、故實ノ物語ナドセサセラレケル(抱)ニ、物每功者ナル事多カリケレバ、千石ノ所領ヲ與テ拘

ラル。彼ガ氣性南部ニハ事替リ、一座ノ興體ハ云ニタラズ、茶ノ湯、哥道ニモ立交リ、軍法ニ達シ、文武兩道ノ士也ト人是ヲ崇敬ス。南部是ヲサミシ、物知顏ノ軍法ダテ、弁舌ハ達者也𪜈、敵ニ逢テノ早態ハ其瘦法師ナド、只一ツカミ成ベシナンド笑ケル。長原傳聞テ、南部ゴトキノ荒武者ハ、鑓一本ノ働ニテ大功ヲナス事ナシ。名付テ匹夫ノ勇ト云テ、墓々敷用ニハ立マジキト、互ニイナミ合ケルガ、今般籠城ニ件ノ人質、南部ニモ出スベシト觸ケレバ、某ハ妻女モナク、親類モナシ。養子一人候ヘ𪜈、是ハ今度ノ合戰ニ武勇ノ稽古ヲモ致サセ申ベシ。人質ニ出シ參ラスル事ハ叶マジ、南部程ノ侍ニ野心ノ御氣遣ハ有マジト、荒言吐テ不レ出レ之。猶モ南部思ヒケルハ、人質ノ裁判ハ此頃軍法ダテスル長原法師ニテゾ有ラン。所全キヤツガ直中指通シ(修)羅ノ軍法サセントテ、長原ガ館ニ行向テ案内ヲ請。折節松雲ハ髮ヲ剃テ居ケルガ、南部ガ今ノ音信不二意得一ト思ヒケレバ、留守也ト答フ。南部不レ聞二入之一、ツト入テ障子ヲ突倒シ、松雲ヲ押フセ、胸板ニ乘掛リ、短刀ヲ拔テ心下ヲ刺ントス。松雲ハ强力ノ大入道ナレバ、南部ガ小肱ヲムズト摑デ、短刀ヲ奪テ捨レ之。南部モ力量コソ劣リタレ𪜈、氣勢ナル男ニテ、此法師喰殺メモ捨ン物ヲトテ喉笛ニ喰ツカントス。松雲下ニ伏ナガラ蕓角(兎)ハヅシケル程ニ、鼻ヅラニヒシト喰付ケル。松雲ハ强ク痛ケレ𪜈、手ヲバ放サズ組合ケル處ヘ、松雲ガ下人等落合ケルガ、松雲蕓角(兎)セヨト角セヨト云ントスレ𪜈、急所ヲ喰付レ、殊ニ胸ヲ强ク押レケレバ聲不レ出。無二爲方一メ息ツキ居ケル。松雲ガ下人等モ、上ナル南部ヲ討ンハ最安ケレ𪜈、子細モ不レ知、主人ノ下知モナケレバ、先引分テコソ何樣ニモ計ハメトテ、五六人取付、漸トメ引分タレバ、鼻ハ損メ血流ル。然ト云𪜈遺恨モナキニ無法者ト取合テ命ヲ捨ルニ不レ及メ、樣々ト敎化メ南部ヲバ返シケル。長重傳聞テ、笑シクハ思ハレケレ𪜈、折節籠城ノ最中ナレバ、是非ノ不レ及二沙汰一。後ニ思合スレバ、淺井畷ノ戰ニ、南部ハ江口ガ引ヘタル淺井山ヘ登ントテ、手者計ヲ引具メ、敵ノ眞中魁通リ、難ナク江口ヲ見次ケリ。松雲ハ其時モ江口ガ无手ナル働メ、只今敵ニ返サレナバ一人モ殘マジ。二ノ目ヲ是ニテ待請テ一勝負スベシトテ、一番手ノ軍勢ヲ乘廻テ押ヘ置。然レ𪜈敵ハ江口ニカサヲトラレテ可レ返樣アラザレバ、淺井畷ノ鑓合ニモ遠目使テ止シカバ、松雲手ナリ惡メ小松ヲ去リ、其後ハ軍法、武功ノ沙汰モ取ヲキテ紀州ニ下リ、淺野幸長ニ仕ヘ五百石ノ所領ヲ得テ、伽ノ者ニゾ成ニケル。無法者ノ南部ハ始ヨリ終マデ、二千石ヲ減ゼズ國々ヲ廻リシガ、高知ヲモ得サスベシ、永ク奉公セヨト云人アレ𪜈、立身ノ望ナシトテ不レ留。武勇ノハヤル所ニハ三年マデハコラヘケル。

小松要害、付山口玄番(蕃)叟

一籠城ノ兵士三千ニモ足ザリケレバ、掛橋口ヲ固メンモ僅五六町ニ及ベリ。搦手ノ役所ヘモ此軍勢ヲ分シカバ、堤ヲ超ル大水ヲ手ニテ防ガ如クナリ。角テ五六日ヲゾ送リケル。抑此城郭何ノ世ニ何者ノ取立ケルヤ、由來遠メ知人ナシ。御幸塚ノ岳ヨリ一段低キ地形ニテ、安宅川ノ岸迄ハ七八町モ有ヌベキ泥池ナリ。中ニ少凸ナルヲ平城ニコソ築ケル。西北ノ二方ハ安宅川漲テ大船ヲ出入ス。シカモ切岸高メ石壁ノ如シ。是ヲ大手トス。掛橋口是ナリ。東ト巽ノ角迄ハ、淺井ト云ル在所マデ深田ニ續テ湖水ノ如シ。畷一筋有ケレ𪜈、農夫ノ通フ路ナレバ、無下ニ不通ノ惡所ナリ。搦手南方計コソ平陸ニ續タレ𪜈、本丸ノ地形ノ爲ニ堀上タリシ土ノ跡、數十丈ノ堀ト成テ、左ナガラ深淵ニ不レ異。加程名譽ノ要害ナレバ、何十萬騎寄タリ𪜈何ノ怖カ有ンナレ𪜈、長重當城ニ移ラレテ、本丸地形ヲ高サ九尺築上サセ、水難ニ備ヘタリ。屏ヲ塗、柵ヲ結、櫓ヲ作リ、城戸ヲ建、三重ノ天守ヲ五層ニ再興メ北陸無双ノ城郭ナレバ、寄手左右ナク攻ザリシモ理也。利長ハ小松ヲ攻落サバ、大聖寺ヲ蹈散シ、越前表ヘ打越、丸岡、北庄、敦賀等ヲモ破却メ、江州ヘ出張シ、戰功ニ備ント擬セラレケル。大聖寺ノ城主山口玄番(蕃)允宗永、爲レ遁二其難一來二小松一、謁二長重一云ケルハ、今利長猛威恣ナリ。味方近境ノ城々微勢ニメ區々ノ戰危之。幸當城堅固ノ地、隣鄕ノ面々悉一味メ一所ニ楯籠ナバ、勝

負互ノ運ニヨルベシ。其内ニ大谷吉隆、越前平均メ、後攻有ン支無レ疑。某先人質ヲ出シ、軍兵ヲ引移シ、搦手ノ一方ヲバ預リ候ベシト云々。長重ノ曰、貴方ノ知謀懇切ト云、旁以愚カナラズ。雖レ然一々ト思案ヲ廻ラスニ、最此城要害ヨシト云ヘドモ、利長加程ノ大軍ニテハ力攻ニモスベケレ圧、近憐ノ面々後攻モヤ有ント、敵恐レ之ト見タリ。然ニ今大聖寺ヲ打捨ナバ、大軍ニ聞怖メ居城ヲ開カル、條、貴方ノ後難遁レ難、且又味方ノ謀勇ナキニ似タリ。其上敵軍大聖寺ニ入替テ、味方ノ通路ヲ差塞グベシ。今度ハ俄ノ籠城ナレバ兵粮モ多カラズ。縱人數ハ多圧、糧盡ナバ甲斐有マジ。古今敵ニ不レ被レ斷ニ粮道ニヲ以テ籠城ノ要用トス。彼是以御謀不レ可レ然。急皈城シ玉ヒテ籠城ノ支度有ベシ。敵城ヲ卷詰テ難儀ニ及ン時ハ、近國ノ諸將ト牒シ合テ、後攻ノ謀計弟(第)一也。若又利長爰ヲ捨、指チガヘテ大聖寺ヲ攻ナバ、吾後卷スベシ。御邊モ城ヨリ切出テ一勝負セラレヨ。戰場ニテ對面有ベシ。疾々ト諫テ皈サレケリ。

利長攻二大聖寺一。幷長重後卷攻

一小松ノ要害堅固ナレバ、流石ノ寄手無二爲方一遠卷ニメ、大軍徒ニ旬日ヲ送ル。利長諸臣ヲ集メテ曰、此小城一ツニ費レ日、タメライ居テ其詮ナシ。搦手ヘ打廻リ本折町ヲ燒拂、裸城(拔)ニメ御幸塚ニ押ヘテ置、大聖寺ヲ攻落シ、敵ノ後ヘ打扳テ、計略ヲ以テ此城ヲ攻取ンニ安カルベシトテ、八月二日、三陁山ヲ陣拂メ、鬼波、三谷ノ付城ニハ旌旗ヲ餝リ、人夫少々殘置、押勢ニ見セテ、山背ノ細道ヲ押通シ、御幸塚ヘ打擧リ、本陣ヲ居ラレケル。先手ノ兵千余人、龍ガ馬場ニ打臨テ搆ヲ見レバ、本折町ヲ自燒メ晴々ト切拂、透間モ有バ突出ベキ樣子也。寄手ノ勢案相違メ、楯竹把モ用意セズ、仕寄モ附ヌ其先ニ夜討セラレテ悪カリナン。只此陣ヲ引拂、大聖寺ヲ攻ントテ、押ヘ勢モ不レ殘、同日ノ申ノ剋、大聖寺ヘ押寄ル。長重慕二討之一ト評議スト云モ、老臣等諫曰、敵大軍ニメ、數日當城ヲ圍ムト云圧、矢ノノ(衍歟)一ツヲモ不二射掛一引退ヌ不審多シ。若味方楚忽ニ打出ナバ、取籠テ討レ之トノ支カ。又合戰ヲ仕カケ、荒手ヲ入替テ城内ヘ付入ント欲ルカ。シカモ大軍不二亂行一。繰引ニメ軍ヲ持ト見ヘタリ。其上及二夕日一出レ城如何也。暫ク敵ノ働ヲ見テ、若大聖寺ヲ攻バ、後卷ノ御謀可レ然ト强テ留レ之ト云々。利長ハ其夜中ニ大聖寺ニ著テ、明ルヲ待。然ニ大聖寺ノ有樣、要害モ淺間ナリ。城主山口日來背二人望一、飽マデ金銀珠玉ヲ愛シ、賞罰不レ正バ墓々敷人數モナク、身ニ代リ命ニ替ントスル郎從モナシ。僅一族郎等足輕下部ニ至迄役所ニ集居タルバカリ也。誠ニ憑ナキ籠城ノ有樣哀ニゾ見ヘシ。明レバ八月三日未明ヨリ寄手四萬餘軍發レ鬨、四方ヨリ取懸テ、荒手ヲ入替々々攻口ヲ不レ透(ヌカ)操レ之。終ニ前田孫四郎攻口ヨリ一番ニ乘入、太田但馬守續テ駈入。自レ是惣軍一同ニ亂込ム。城兵等幷レ枕討死ス。然ルニ長重ハ昨日之軍、家臣ノ諫ニ依テ默止ヌル支非二本意一。早夜モ明ヌ、敵大聖寺ヲ攻ルト見ヘタリ。山口サゾヤ侍ヌラン。後詰セデハ叶マジト、近習少々引具シ一騎ガケニ乘出シ玉ヘバ、郎從等追々馳付テ、二千余騎先後ノ軍々モナク駈行程ニ、小松ヨリ大聖寺迄五里余ノ道ヲ、卯中剋ニ出、辰ノ中剋ニ大聖寺ニ著テ、十町計コナタニテ軍ノ手分ヲ定ラル。其間ニ江口三郎右衞門、諸軍ヲ馳拔テ、爲二囘候一布地ノ天神迄打入テ懸リ口ヲ窺處ニ、城ハ早落サレテ敵入替リ、勝テ甲ノ緒ヲシムル。角勝誇タル大軍ニ、味方ノ疲タル小勢、如何ナル手立有圧可レ有レ利トハ不レ見。爰ニテ打負ル程ナラバ、一騎一人モ生テ皈ル者アラジト、此由江口馳皈テ長重ニ告ル。長重猶モ覺束ナクヤ有ケン。自身五六町カケ出能々見レ之。敵ニ緣コソナカラメトテ、怒ヲ押ヘテ引反、其足ニテ金澤領ヘ亂入、海邊ノ在家、本吉ト云處迄燒働キ、老若ヲ不レ撰數百人ヲナデ切ス。附城ニ殘サレタル雜兵等無念ニハ思ケレ圧、墓々敷兵士ハナシ。無二爲方一味方地ヲ蹈亂サレ、徒ニ見物メゾ居タリケル。小松勢モ初ノ程ハ附城ヨリ出モセントアヤブミケルガ、一度モ出ザレバ、扨此城ハ見セ勢ト覺ルゾ、只打捨テ金澤ヘ押寄、可レ放レ火ト折ヲ伺由風聞ス。附城ヨリ利長ヘ此旨注進ス。利長モ根城ヲ(冤)敵ニ蹈込レ、天下ノ嘲ト成ナン。又今更引返ンモ支行ズ。菟角ノ思案ニ十余日ノ日數ヲ大聖寺ニテ送ラレケル。斯リケル處ニ、利長ノ姉婿ニ中川宗半ト云者アリ。此折節在京シケルガ、本國覺束ナクテ下向シケル處、敦賀ノ城主大谷刑部少輔吉隆、越前府中ニテ捕レ之。卽利長ノ許ヘ方便狀ヲ書セケル。宗半難儀ニ雖レ思及二辭退一バ、忽ニ可二殺害一見ヘケレバ、無二是非一敵ノ案紙ニ任テ、謀書ヲ書テ渡シケル。其狀程ナク大聖寺ニ相達ス。利長急ギ披見セラレケルニ、今度大軍ヲ催サレ、近國ヲ打ナビケ、上方發向有レ之由、其聞候。因レ是大坂ヨリ大軍敦賀表ヘ出張ス。加レ之谷刑部、敦賀ヨリ兵船ヲ揃、貴殿出軍ノ跡ヲ加州ノ浦々ヘ亂入セント欲ス。足長ニ出發候テ、海陸前後ニ敵ヲ受玉ヒテハ、始終覺束ナク候。能々御思慮可レ有トノ(ソ歟)書タリケル。宗半ハ無双ノ能書ニテ疑ナキ手跡也。利長コレニ驚、能モ知セタル物哉。此支小松ヘ聞ヘナバ、道ヲサシ塞支有ベシ。支ノ漏ヌ其先ニ金澤ヘ引反シ、上方ノ樣子ヲ聞屆、自國ヲ堅固ニメコソ重テ上方發向ヲモセンズレ。去ナガラ無下ニ引取ナバ、折ヲ得テ長重喰慕支モ有ベシ。先小松ノ城ヲ取卷、夜ニ入テ可二引取一ト評議メ、大聖寺ヲ打捨取テ返ス。又龍ガ馬場、御幸塚ニ陣ヲ取ル。此間ハ籠城ノ族、鬼波、三谷ノ押ヘノ外ハ二三里ガ其間ニ敵ト云者無レバ、外ニハ鵜鷹狩ヲ支トシ、内ニハ酒エン、茶ノ湯ニタハブレ、緩々トシケル處ヘ、亦大勢引反シ取卷ヌ。去圧長重諸卒ニ向テ宣ヒケルハ、最

初ニ寄タリシ時ハ、敵合遠メ引取色ヲモ見ザリシ故ニ長僉儀ニ日ヲ暮シヌ。今度者惣搆ヘ出向待テコソ戰ハメトテ、本城ヨリ七八町隔リタル、町屋ノ外ナル溝堀、飛越ル計ナルニ柵一重結廻シ、今ヤ遲シト待カケタリ。老臣等申テ曰、古今大ヲ以小ヲ討支、奇特モナキ支ナレバ語傳ル支モ無シ。凡又寡ヲ以衆ヲ討事モ其例多ト云ヒ、或ハ天時ノ助ニ因テ風雨ノ紛レニ功ヲ立、或ハ地利ノ嶮ニ居得ニ勝利ヲ、或ハ敵ノ不和ヲ知、由斷ヲ見テ討レ之ト云ヒ、只一旦ノ勵ニ非ズ。應ニ變機一ニ因テ勝支ヲ致セリ。此度ハ大敵堅陣ニメ、味方ニ隣國ノ助モナク、敵可レ討地利モナシ。其上利長無レ二上方ヘ出張有ベキ處ニ、今引返ス條、定テ先日味方ノ燒働ト後卷トノ反報ト覺タリ。然バ此方ハ彌城郭ヲ堅固ニ守、因ニ敵變ニ一戰ノ中ニ大功ヲ立ラレン御謀レ可然ト、口口ニ雖レ諫レ之、長重曰、面々ノ申條、其謂ナキニ非。去ナガラ此敵左右ナク取モカケズ、又營陣ヲ搆ルヒ不レ見、雜駄人夫ヲ引連ル體モナク、陣々ノ透ケルハ退支度ト覺ル也。爰ヲ城中ヘ引入ナバ、敵ノ退ヲモ得知マジ。此時不ニ慕付一ハ弓矢ノ名ヲリト存也。若敵攻懸ナバ、柵際ヘ引カケ、銕炮ヲ揃テ討シラメ、漂ヲ處ヲカケ立〳〵突散スベシト、支モナゲニ下知メ手配ヲセラレケル。江口三郎右衛門、坂井興右衛門ヲ、大將ニテ、一千余騎ヲ二手ニ分テ張出ス。一番ハ江口ガ與、二番ハ坂井ト鬮取ニゾ定リケル。角テ其夜半ヨリ大雨ニメ物音モ聞ヘズ。篝火サヘ燒得ズメ、敵ノ陣處モ知ラレネバ、物見ノ者ヲ遣メモ、一二町ガ程ヲタドリ來テ見定タル者ゾナキ。

小松勢慕附

已ニ其夜モ寅ノ剋計ニ雨少シ止シカバ、利長下知シ玉ヒケルハ、横山山城守ト山崎長門守トハ淺井山ニカサミ居テ、諸軍ヲ退セヨ。敵若シ慕付ナバ、殿ノ軍兵ヒ弱々ト會尺メ、淺井ノ里ノ狹手迄ソロ〳〵ト引付、一度ニ咄ト引反シ、其時山上ノ人數カサヨリ颯トカケ落シ、敵ヲ中ニ取籠、思儘ニ討捕ベシ。敵軍敗亂セバ、乘鹽ヲ延サズ付入ニメ、一時ニ城ヲ乘トルベシト、相圖ヲ定手分メ、大聖寺表ノ先手ナレバ、長九郎左衛門尉、太田但馬守ハ殿ヲ致セトテ、大將打立玉ヘバ、諸軍勢引續テ、備ヲ疊ンデ靜々ト退ニケリ。夜モ明ケレバ、長モ後陣ニ打ベシトテ打立ントシケルヲ、太田但馬守若武者ノ氣早ニテ、大聖寺ニテモ無ニ比類一働メ、人モナゲニ擧動シガ、長ニ向テ云ケルハ、諸軍勢ノ押ケルハ細道ノ支ナレバ、小松ヨリ打出テ先ヲ遮リ候ヒ、カケ通ルベキ道モナシ。所全此町裏ノ細道ヲ直サマニ押通リ、敵打出ナバ願フ處ノ幸也。他ノ勢ヲ不レ交悉打散シ、殘兵等引取バ付入ニメ乘取ベシト云ケレバ、長モ尤ヨカルベシトテ打出ル。亦淺井山ニ備タル横山山城守云ケルハ、諸軍モ最早引取ヌ、彼陣モ漸近付ベシ。道セバキ處ニテ揉合テハ悪カリナン。今ハテキモ慕マジ。引取ベシト云ケレバ、山崎ガ云ク、尤ニテ候ヘヒ、兼テノ軍法ナリ。暫大將ノ御下知ヲ待レ候ヘカシト云ケレバ、イヤ其迄ニ及マジ。御邊ノ所存ノ趣ヲ吾懇ニ申ベシ。只々引取候ベシト云。山崎心得ズナガラソゾロニ山ヲ引下ス。小松ニハ物見ノ者ヲ憑ニテ、未退ヌハ、明ナバ定ヲ取カケベシ。面々ノ持口ヘモ其旨相觸ヨト下知スル處ニ、江口三郎右衛門、若黨七八人引具シ、忍ヤカニ搗搆ノ城戸口ヘ行向テ、柵ノ際ヨリ見テケレバ、敵皆引拂、殿メ、勢ヒ一二町コソ隔リケル。江口モダヘテ此由ヲ註進ス。待揃ベキ時剋モナケレバ、急城戸ヲ明ヨト云ケルヲ、城戸ノ番、足輕大將古田五兵衛、櫻木助左衛門、仰ニテ候ヘヒ、大將ヨリノ直判ヲ參持セズバ、縱江口、坂井ナリヒ、堅ク不レ可レ通ト御下知ニテ候ヘバ、註進ノ使ノ皈リ來ン迄ハ待レ候ヘト云。江口怒テ、其御下知ハ非ニ別義一。若者ヒ忍々ニカセギヲ致故也。今此時某ニ同意メ討死センニ何ノ御咎カ有ベキゾ。早疾明ヨト云ケレバ、櫻木、吉田尤ト同ジ、城戸押開キ、十余人ノ者ヒ鎗引サゲ走出ル。明ボノノ霧間ヨリ引行敵ヲ見ヤリケレバ、其間一二町也。江口銕炮ヲ放カケ、大音ニ下知メ、高名ニ心ナ懸ソ、討捨ニメカケ入ト、自身眞先ニ進ム。引立タル大勢、スハヤ小松ヨリ打出タルハト前後騷動ス。長重モ江口ガ注進ヲ聞ト均ク懸出ラル。一番手ノモノドモ、十方院松雲諸共ニ、柵ノ外ナル藪際ニ備テ立テ有ケルガ、長重ノ馬ノ口ニ取付テ、江口深入仕リ、唯今敵ニ追立ラレ引退候ベシ。是ニテ敵ヲ待請テ勝負ヲ決シ候ベシ。暫御扣ヘ候ヘト頻リニ諫レ之。長重ノ曰ク、面々ハ老功軍練之支ナレバ善カラン樣ニ計ベシ。吾孩提ノ昔ヨリ傳立タリシ江口ナレバ、死生一所トコソ思ヘト云捨テ、諸鐙ヲ合テ馳付ラル。江口吃ト見テ、今ニ初ヌ殿ノ早態哉ト感ジケレバ、汝心强モ出シ拔ツル者哉ト、打笑テ敵軍ヲ見渡シ、如何ニモシテ此方ヨリ淺井山ヲ取ナラバ、引ヲクレタル敵ヒハ、前路ヲ取切レ漂フベシ。假返ス敵有ヒ、カサヨリ會尺スルナラバ、輙ク足ハタメサスマジ。如何ニ江口ト有ケレバ、畏テ候トテ、追々ニ馳付ケル手勢三百人引分テ、羣テ引、敵ノ眞中カケ破リ、難ナク山ヘ取上リ、シドロニ成テ引敵ヲ、カサヨリ懸テ討程ニ、引惱ミタル處ヲ、跡ヨリ長重追スガツテ、透間モナク攻付ラル。一番手ノ中ヨリモ、心カケシ者ヒハ、ヌケ〳〵ニ馳付テ、八百計ノ人數ニテ備ヲ不レ亂追程ニ、金澤勢討ルケ者數ヲ不レ知。加程ニ急ナル其中ニモ、武夫ノ心ホドヤサシキ支ハナシ。江口ガ家人ニ出口某トテ、元來長秀ノ旗サシニテ有ケルガ、度々ノ手柄ヲナセシカヒ、一向ノ無法人ニテ有ケレバ、取立モセデ置レシヲ、江口是ヲ申請テ、二百石ノ所領ヲ與ヘテ召置シガ、今日モ眞先ニ進、思サマニ戰テ、敵一人切伏首取テ有ケルガ、六十有余ノ男ニテ、息ツカレテ休シヲ、何者カハ其首ヲ、十四五人落合テ、理不盡ニ奪ハレケル。爰ニ出口ガ女房、似タルヲ友トスル習ニテ、甲斐々々敷女ナリシ

ガ、糟毛ナル髪ヲカラワニ結ビ、染帷子ニ上帶ノ、酒簟ト茶ノ湯ヲ左右ニ持テ、江口ガ陣所ヲ志シ、敵ノ中ヲ通リ行。引後レタル金澤勢、田ノアゼ道ノ傍ニ芝居ノ休ケルガ、此女房ニ云ヤウハ、姥御前ハ何物ヲ手ニ持テ何方ヘ行玉フゾト問ケレバ、其叟ニ候。向ノ山上ニ陣シ玉フハ、江口殿トテ吾等ガ主君ニテ候也。今朝ヨリノ合戰ニ嘸ヤ勞レ玉フラント存ズレバ、酒マイラセン其爲ニ參ル也ト答ケル。出口是ヲ見付テ大悅ビ、某爰ニ有ト指招ク。去ル女房一向是ヲ見ヤリモセズ通リ行。敵モ是ヲ見、如何ニ姥御前、アノ田ノ畔ニ休ケル武者ノ呼ケルハト云ケレバ、去バコソアノ男ハ吾夫ナリ。殿ノ山上ニマシマスニ、首ノ一ツモ取レカシ。晝寢スル草臥男ニ酒飲セテ用ナシト、サラヌ體ニテ山ニタドリ登リ、御酒迎ニ參リタルトテ、件ノ酒ヲ指出ス。江口是ヲ感ノ、手先遮ル盃ヲ取傳ヘタル處ニ、南部無右衞門、江口ガ寄子ナレバ、見繼ントテ來シガ、江口ニ劣ラヌ上戸ニテ、指受テ呑程ニ、一瓢ハ得タレル、投スベキ流モナクメ一滴モ殘ラネバ、諸軍咽ヲ乾シケル。出口ハ女房ニスゲナフ云レテ、サラバ首持參ノ肴ニシテ酒呑ベシト、太刀打振テ廻シガ、又首取テ提ゲ、淺井山ノ陳ヘ參リ、姥是見ヨトテ投出ス。女房打笑、其首ハ御邊ノ高名ニ非ズ。此酒簟カ仕態也トテ打傾テ見セケレバ、出口頭ヲ抵テ、汝ニタラサレテアダ骨折ツルヨト云ケレバ、江口モ南部モ笑ヒニケリ。

淺井畷合戰

去程ニ金澤勢殿ノ兩大將、遙ニ行延タリケルガ、鋲炮ノ音ヲ聞テ、扨ハ小松ヨリ慕付タルト覺ルゾ。イザ返セト云儘ニ、太田但馬守一番ニ引返ス。松平久兵衞、水越縫殿助、岩田傳左衞門、上坂主馬助、井上勘左衞門續テ咄ト返合。淺井畷橋際ニ鑓ヲ揃テ爭進。此勢ヒニ小松勢暫クシラミテ不ニ懸得一。長重齒ガミメ自ラ鑓ヲ揮テ、キタナキ奴原カナ、後心アル族ハ突殺メ捨ヨト、大聲上テ、左右ヲニラミテ拂立々々、味方ヲイサメ追返サル。於レ是成田助九郎、宮田彦七郎、安彦清右衞門、沛艾次太夫等、手々ニ鑓ヲ提ゲ取テ返シ、蹈込々々突相ケル。敵モ味方モ耻ヲ思ヒ、コネ突ニスル程ニ、不破、寺澤、沛艾ハソコニテ終ニ討レニケリ。金澤勢ハ討レネバ、何レモ痛手ヲ蒙リ、叶フベクモ有ザレバ、首取隙モナク、手負ヲ引立テ退ントス。誠ニ烈シキ鑓合也。斯リケル處ニ、小松勢ノ中ヨリ森次郎右衞門、松村孫三郎ト云母衣ノ者、折節武者押ノ使トシテ、此畷ニ居ザリシガ、鑓ニヲクレタリシヲ口惜ク思テ、龍ガ馬場ヘ打出、御幸塚ノ岳ヨリ淺井ノ方ヲ見渡バ、敵後陣ノ其間、五六町コソ隔リケレ。二人ノ者是ヲ見テ先ヲ爭シカバ、一足モ先立テ乘入タク思シガ、松村ガ乘タリシハ銜ツヨナル馬ナルニ、溝堀ヲ越トテ態ト聲セシカバ一參ニカケ出ル。森ト云シハ信長卿ニテ比類ナキ彌五八ガ嫡子ナリシカバ、少モタメラフベキ。鞭ニ鐙ヲ合セ一向ニ進ム。金澤勢是

見テ、鑓ヲ揃テ待カケタル處ヘ、曾尺モナク乘入シカバ、鑓玉ニ擧ラレテ一人ハニ突落サレテ討レントスルヲ、小池新之丞駈來テ、松村ヲ押ヘシ敵ヲ鑓付ヌ。段七兵衞走リ懸テ首ヲ取リ、松村ヲ引起シ、馬ニ打ノセタリケレバ、森モ敵ヲ打拂ヒ、馬引ヨセ打乘タリ。何モ痛手ハ負ケレハ、命ニハ恙ナク、肩息シテゾ皈リケル。利長三陀山迄取玉ヒシガ、後陣ノ敗軍スルヲ見テ、宵ヨリ手當セラレシ淺井山ハトラレヌ。取テ返シ玉ハンハ道セバシ。地利ヲ失ヒ、兼テノ軍法相違ノ、無念ノ余リ、左ノ指ヲ喰切テ、血ヲ含テ怒ラレケル。小松ノ大手掛橋口ヘ近ケレバ、サラバ是ヘ取カケ、無理攻ニモシテ見ヨトテ、軍ヲ返ノ進メラル。城中ノ族ト二ノ目ヲ待シ者ハ、コノ由淺井ヘ註進ス。長重聞玉ヒテ、城ヲ危ク思ヒナバ、一番手ノ者ハモ城ヘ入テ安堵セヨ。吾江口ヲ捨殺メ引取叟アルマジト返答セラレケレバ、サラバ江口ニ告ヨトテ忝タト云ヤラルル。江口アザ笑テ、某陣處ハ高陽ニテ候ヘバ、三陀山ヨリ大手迄ハ蟻ノ這モ見ヘ候。敵ノ大手ヘ押寄ルハ別儀ニテ候マジ。本城ヘ取カケナバ定テ勢ヲ引取ベシ。然バ敗軍ノ族モ心易ク退ベシトノ謀ト覺タリ。掛橋口ノ番所ニ鋲炮少々置ナラバ、敵何萬騎寄タリモ、破ン叟ハ叶マジ。橋ナドヲ引玉ヒテ、後日ニ笑レ玉フナト叟モナゲナル返叟也。去バ此江口ヲ是程マデ惜マレシモ由緒有ト聞ヘタリ。一年信長卿、明智ガ爲ニ殺サレ玉ヒテ、天下穩カナラザレバ、京都ノ成敗ヲ羽柴、柴田、丹羽三人ヨリ取行ハレタリケレバ、家老ヲ一人宛殘シ置レ、諸司代ニゾ居ラレケル。長秀ヨリハ江口ヲ出サレタリケルガ、柴田退治ノ後マデモ其儘置レタリシヲ、長重十歳ノ時ヨリ部屋住領ト名付テ、府中ノ城ニ居ラレシヲ、安養寺猪之助、坂井與右衞門二人ヲ家老職ニ付ラレタリ。后ノ思案ノ有ケルニヤ、江口ハ京ニ居タリシヲ、秀吉卿ヘ相理リ呼下シ玉ヒテ、長重幼稚ノ叟ナレバ、莵(兎)モ角モ守育セヨ迚付ラレケル。是ヲ思合スレバ、見捨玉ハザリケルモ理リ也シ叟ヒ也。敵モ漸ク引取ヌ。江口モ山ヨリ下リ、打連立テ、馬上ニテ物語メ氣色ヨゲニ皈ラレタリ。利長モ是迄ハ打寄玉ヘヒ、スベキ樣モアラズメ、又三陀山ニ陣ヲ居ラレケル。

和睦之叟

城中ニハ其日ハ休息シケルガ、翌日諸侍ヲ召集テ、軍功ノ品々ニ因テ所領ヲ行ヒ、感狀ヲ出シ、引出物ヲゾセラレケル。是ヨリ後ハ、敵遠卷ニメ寄ル事モナカリケレバ、城ヨリ打出ル事モナシ。只守リ居タル計ニテハ事行ベクモ見ヘザレバ、水責ニセヨトテ、近邊ノ在家ヨリ土俵ヲ多クトリ寄、大木ヲ切懸テ、安宅川ヲ關揚テ、水ヲ仕掛ン用意也。然モ本丸ハ地形ヲ高ク築上タレバ、水ハ堤ヲ越ルヒ城迄ハ及マジ。怨(恐)ナル叟ヲ仕出メハ如何有ント思案有ケル處ヘ、城中ノ家老ヒ相擬メ、三陀山(體)ヘ使者ヲ遣シ、横山、山崎方ヘ云遣シケルハ、此比ノ爲休(體)天下ノ大義ニテモ候ハズ、亦父祖ノ宿恨モナシ。僅ノ恨

ヲ一家ノ御中ニ結レテ、公義ヲ御違背有ン叉、自他ノ御爲ヨカルマジ。枉テ和睦シ玉ハントナラバ、長重ヲモ宥メ可レ申ト有シカバ、横山モ山崎モ尤可レ然トテ、頓テ利長ヘ達シケレバ、自レ是コソ有ベキ叉ナレ。サラバ江口等ト對談ノ、直ニ疑ヲ解シメント宣ヘバ、此由ヲ返答ス。大谷與兵衛モ兼テ利長知玉ヒタレバ、江口、坂井ト打連テ三陀山ヘゾ參ケル。利長出合玉ヒテ、面々ノ計ヒ誠以神妙也。意恨殘ラヌ驗ニハ、舍弟利光ヲ人質ニ出スベシ。能ラン樣ニ計ヘトテ、太刀一振宛給リテ歸サレケル。三家老立皈テ斯ト云シカバ、長重同レ之。舍弟左近將監長元、其時ハ□トテ十歳ニ成ケルト、伯父丹羽九兵衛ガ娘、二歳ニ成ケルヲ人質ニ出スベシト云レケル。江口、坂井、大谷モ、自分ノ人質一人宛相添可レ申ト云遣シケレバ、利長悅ビテ、時尅ヲ不レ可レ移トテ、舍弟御犬殿、八歳ニ成玉ヒシガ、後ハ養子ニメ肥前守利光トゾ申ケル。掛橋口ヘ倡ヒ來テ人質ヲ出サレケル。長重モ定置レシ五人ノ人質ヲ供セラレテ出向、橋ノ上ニテ對面シ、人質ヲ取カハシ、二度親戚ノ契ヲ結バレケルトゾ聞ヘシ。

右小松軍記。以二一本一校合了。

新校羣書類從　卷第三百九十一

新校羣書類從　卷第三百九十二

合戰部廿四

荒山合戰記

能登國石動山衆徒蜂起付同所荒山合戰之事

天正十年六月、能登國ニモ一揆動亂ス。其故ハ、昔日織田信長ノ爲ニ己ガ所領ヲ被二追出一シ諸侯、大夫、或ハ地頭、代官、莊官等、信長ノ横死ヲ聞テ、時ヲ得テ一揆ヲ企ケル。其中ニ能州ノ守護職畠山修理大夫義則ガ八臣、神保安藝守正次、長九郎左衛門尉信實、溫井備前守實正、三宅備後守正數、平式部少輔盛高、遊佐河内守長員、譽田隼人正正豐、伊丹左衛門尉勝詮ト云者アリ。遊佐、溫井、三宅ハ近年長雄喜平次景勝ヲ賴テ越後ニアリ。又溫井ガ郎等ニ小南内匠助、筒井雅樂助、廣瀨隼人正、山莊藤兵衛尉幷三宅ガ郎等馬藏内匠助、小山田甚五兵衛尉ナド云大剛ノ者共アリシ。然ルニ石動山ノ衆徒、幷ニ彼所ノ溢者共ガ方ヨリ、使ヲ越後國ヘ遣シ、遊佐、溫井、三宅等ガ方ヘ云送リケルハ、其地ヘモ定テ聞エ侍リナン。當月二日織田信長卿、明智光秀ガ爲ニ京都本能寺ニ於テ不慮ニ討レサセ給ヒタリ。加樣ノ時節、急ギ能州ヘ御入國候ベシ。當山ノ衆徒等ハ不レ及レ申、國中ノ寺社鄕民モ爭カ舊好ヲバ忘レ侍ルベキ。面々心ヲ一ツニメ合力仕ルベシト、衆儀一決ノ上ニテ、斯ハ申送侍トゾ告タリケル。三人ノ輩大ニ喜悅シ、是天ノ與ル所也トテ則同心ノ反翰ヲゾ遣シケル。大衆是ニ得レ力、サラバ要害ヲ搆ト、密々ニ石動山ヲ要害ニゾ搆ケル。大衆ハ例大悍ナル者ナレバ、敵寄來ラバ、爰ノ詰ニテ兎コソ防ギ、彼ノ坂ニテ角コソ斬崩サントゾ、兵法ニ廣言ヲ吐散シ、恩賞ノ地ニハ何ノ郡ヲ寺領ニ受ン。彼村里ハ上田ナレバ院家領ニセンズルナレト、未其功不レ成以前ヨリ所領分シテ詈諍ヒ、或ハ鄕民等ニモ忠節ヲナサバ、士ニナシテ所知ヲ申賜ンナド、端々口外シテ云語ヒケル程ニ、天ニ口ナシ人ヲ以テイハセヨト、此事次第ニ云廣テ、衆口防ギ難クテ國ニ披露シケルハ、遊佐、溫井、三宅ノ輩、石動山ノ衆徒等ト心ヲ合セ、本國還住ノ謀ヲナシ、先石動山ニ城塹ヲ搆、兵粮ヲ取入、人數ヲ催ス由聞エシカバ、能登ノ守護職前田又左衛門尉菅原利家、此事ヲ傳聞テ大ニ驚キ、吾手勢計ニテハ大敵防ギ難カルベシトテ、越前守護職

檢校保己一集

柴田修理亮勝家、幷其甥佐久間玄蕃允盛政等ガ方ヘ加勢ヲ請ン爲、書翰ヲコソハ送リケレ。其詞ニ、

態以二書翰一伸二愚意一畢。仍雖レ爲二不實之儀一。能州之國士溫井。三宅兄弟。並遊佐輩。近年越後在住候處。聽二信長卿之横死一。窺二時節一相二語於越後勢。成二歸國之望一之處。當國石動山衆徒等渠令二同意一。彼山搆二要害一之由。衆口同音申鳴候。若於二綜實一者。注進次第御加勢奉二賴存一候。恐惶謹言。

天正十年六月十九日

柴田修理亮殿　　前田又左衞門尉利家

佐久間玄蕃允殿

トゾ書タリケル。柴田、佐久間、披見シテ則返、金澤城ニ居タリケルガ、此告ヲ聞ト等ク、勝家ノ方ヘモ委細ヲ注進シ、不レ待二其左右一シテ二千五百余兵ヲ引卒シ、能登國ニ馳向ヒ、高畠ト云所ニ野陣ヲ取テゾ扣タル。溫井、三宅、遊佐ノ三大將ハ石動山般若院快存、大宮坊、火宮坊、大和坊、覺笑等ヲ相語ヒ、都合其勢四千三百余人、荒山要害普請ノ爲出張シタル處ニ、玄蕃允取掛テ相戰ントシケレ𪜈、前田利家息利政等ガ方ヘ出陣ノ事ヲ告タリシ返翰ヲ待シ程ニ、其日ハ既ニ晩景ニ及ビシカバ、徒ニ日ヲ暮シ、其近邊ノ莊官並溢者共ヲ尋出シ、石動山ノ樣躰ヲ尋ケルニ、彼輩答ケルハ、越後國ノ軍兵共ハ荒山ヲ城塁ニ搆ントテ、明朝モ普請ノ爲、此邊ノ鄕民等ヲ雇ベシト相觸候。明朝御出張候ハンニハ、某共御道指南仕ルベシトゾ申ケル。玄蕃允ハ大悅、彼等ニ引出物シ、二心アラント拜鄕五左衞門尉ヲ奉行トメ、起請文ヲ書セケリ。其後山路ノ行程□アルベキト尋ケルニ、石動山マデハ其道五里、荒山マデハ三里ニ余リ候ベシト答ケリ。去バ急キ可二打立一トテ其夜半過ニ悉用意シ、件ノ案内者ニ守護ノ番兵ヲ差副、奴原ニ目ヲ放ナ、油斷スベカラズト潛ニ申合、先陣ニ押立、未夜ノホノ暗ニ、荒山ヨリ五六町程此方ナル坂ノ邊ニ馳差テ、先斥ノ兵ヲ遣、敵ノ樣子ヲ窺ヒケリ。又前田利家モ究竟ノ兵二千六百余人ヲ撰出シ、同日ノ夜半ニ七尾城ヲ打出、石動山ト荒山トノ境ナル柴峠ト云所ニ陣取テ扣ヘケリ。爰ニ溫井、三宅、遊佐ガ軍兵四千三百余人ハ、荒山ノ普請セントテ出張シタリ。前田利家ハ備ヲ立、溫井、三宅等ガ先陣ノ勢ニ向テ鬨ヲ噇ト作テ馳掛ケリ。溫井モ三宅モ平場ノ軍不レ叶トヤ思ヒケン。三千余人ヲ引連テ、荒山ノ要害ヘ取上ル。其外遊佐以下ノ軍勢二千余人ハ、石動山ヘ逃上ル。斯處ニ佐久間盛政ガ斥候ノ者立歸テ、越後勢ト覺テ二千計、荒山ノ要害ヘ楯籠タル由告タリケリ。盛政聞レ之。去バ兵ヲ進テ彼要害ヲ責破ント旗ヲ進、若石動山ヨリ加勢スル支モ有ベケレバ、其勢ヲ防トテ、拜鄕五左衞門尉ニ軍兵ヲ差副、石動山衆徒ノ押トシ、偖荒山ノ先軍ニ上田又作、種村三郎四郎以下押寄。金鼓ヲ鳴シ、貝吹立、山川モ崩計ニ時ノ聲ヲゾ揚タリケル。城中ニハ溫井備前守、三宅備後守、山莊藤兵衞尉、筒井雅樂助、小山田甚五兵衞、廣瀨隼人、鳥藏内匠、並般若院、大宮坊、火宮坊、其外越後ノ加勢、國中ノ溢者相雜リ、同時ヲ合セ、四方ニ目ヲ賦テ喚叫デ戰ヒケリ。鳥銃累ニ發シ貫レ鎧摧レ胄。寄手ハ是ヲ事𪜈セズ、死人ノ上ヲ乘越々々責上ル。荒山ノ軍兵等太刀ヲ拔テ防ギケリ。爰ニ般若院ハ大剛ノ惡僧ニテ、度々ノ合戰ニ名ヲ顯シタル兵ナレバ、其頃ノ俗、異名ヲ付テ今弁慶トゾ申ケル。誠ニ諸人ニ勝レ色黑ク、長ハ六尺三寸、骨太頰車荒テ力モ强カリケルガ、指物ニハ鍬、鎌、熊手、鋸、槌、鉈、鳶觜等ノ七ツ物取付、武具モ亦上ヨリ下マデ眞黑ニ出立タレバ、牛驚程ナルガ、大長刀ヲ水車ニ廻、小躍シ走掛、左右拂前後ヲ薙テ巡タルニ、面ニ進ンダル兵𪜈、忽七八人薙倒シ、佐久間ガ軍兵辟易メ、後足蹈デ不レ得レ進。般若院ハ敵ヲ坂下ヘ追下、小高所ニ立跨坐、歌謠テ掛敵ヲ待居タリ。玄蕃允是ヲ見テ、加樣ノ敵ヲバ射手ヲ揃テ射嘸、打物ノ衆ヲ進セヨト下知シケレバ、足輕ノ射手共大勢立双デ、般若院ヲ雨ノ降ガ如クニ射タリケリ。寄手モ是得レ力、吾先吾先ト進ンデ、曳々聲ヲ出シテ斬合、引組々々討モ有、敵モ味方モ死ヲ忘、爰ヲ先途ト戰ヒシカバ、手負死人骸ヨリ溢血ハ、坂ヨリ下迄瀧鳴テ流レタレバ、江河ヲ渡ニ不レ異。斯處ニ種村三郎四郎ガ郎等杉足九郎左衞門尉、富田勘四郎、並能州ノ住人鈴木因幡守、高河原一學等、横合ヨリ突掛リ、忽七八人突伏タリ。越後勢中ニ臆病ノ弱敵、此形勢ヲ見テ不レ叶トヤ思ヒケン、吾々ハ引退テ石動山ノ敵ヲ防ント云程コソ有ケレ。後ヨリ五人十人打連々々引退トゾ見エシ。殘勢モ落心ヤ付タリケン。一太刀打テハ引退、二太刀打テハ引上リ、佐久間盛政乘レ氣、敵ハ堪兼逃眼ニ成タルゾ、息ナ繼セソ、責ヨ懸ヨト下知シツ、、眞先掛テ責上ル。南方ヲ防ゲル城中ノ軍兵𪜈、暫ク支テ戰ケルガ、是モ備散辭タリ。溫井、三宅兄弟最期ノ軍ヲ見參ニ入レズルゾ。責テハ暫ク留テ見物シ玉ヘ人々ト、罵掛、馳掛々々散々ニ戰ヒケリ。元來究竟ノ强兵ナレバ、立所五三人斬倒シ、仰タル太刀ヲ押直サントスル處ヲ、吉川五右衞門尉得タリヤ賢ト渡合、火花ヲ散テ斬合ケルガ、溫井勢力ヤ疲ケン、終ニ吉川ニコソ討レケレ。三宅備後守ハ長刀ノ名人ニテ、大勢ニ渡合、込手開手裁ツ掛ツ、突ツ斬ツ、蜻蛉返、水車、八方不レ透斬タレバ、目下ニ大勢討レ、進兼タル處ニ、堀田新右衞門尉鎌鎚ニテ渡合、鎌ニテ掛レバ放テ入、入バ退去テ突ントス。掛ツ放ツ、込ツ込ツ戰ヒケレバ、敵モ味方モ見物シテ助ル者コソ勿リケレ。去バ人交モセズメ、二人勝負ト働キケルガ、三宅ガ運ヤ盡タリケン。長刀折テ堀田ガ爲ニ討レケリ。火宮坊ハ溫井、三宅ガ討死ヲ見テ、不レ叶トヤ思ヒケン、石動指テ逃上。般若院大音聲ヲ揚、味方ノ勢ヲ耻メケルハ、溫井、三宅兄弟ニ深被レ憑タル人々ノ、兩人ノ討死ヲ見捨テ逃ト云ヿヤアルベキ。命ガ惜バ初ヨリ戰場ヘ出ヌコソヨケレ。吾ト思ハン人々ハ蹈留テ

討死セヨ。如何ニ敵方ノ軍兵、角云ハ般若院トテ骨斬テ名ヲ近國ニ知レタル大悪僧ノ剛者ナルゾ。首取テ高名セヨト詈掛、二間余十文字鎗ノ柄ノ握太ナルヲ押取延、突ツ掛ツ扣付タルニ、鎗ヲ合スル人モナシ。四角八方ニ當リ、七八人手下ニ突倒タレバ、此勢ニ辟易シテ進者コソ勿リケレ。只遠矢ニ射取トテ、矢衾ヲ作テ射タリケレバ、般若院ガ鎧ニ矢ノ立事簑ヲ逆ニ著タルガ如シ。其中ニ裏掻タル矢三筋、中ニモ喉ノ下ニ立タル矢ヲ掻カナグリ捨ントスルニ、鏃留テ拔ザリシカバ、流石ノ般若院モ目暉(暈)、忙然トシテ鎗ヲ杖ニ突テ立噤タル處ヲ、櫻井勘介鑓付テ般若院ガ首ヲ取。其頃般若院ガ弟子ニ荒中將トテ師匠ニ劣ラヌ悪僧ノ有ケルガ、勘介ガ般若院ガ首提タルヲ見テ、日ノ敵師匠讎遁スマジト云儘ニ、大ノ鉾矢打加セ、能引テ放矢ニ、勘介ガ胸板ヨリ總角付ノ板マデ、筈ノ隱ル程グザト射込タレバ、阿ト云聲トモニ倒タリ。荒中將此敵ニハ目モ不レ掛、差詰々々射ケル矢ニ、死生ハ不レ知、敵十余人矢庭ニ射落シケルガ、矢軍許ハスマジキ物ヲト獨言ノ大勢ノ中ヘ破テ入、石動様ノ袈裟掛ニ成佛セヨト呼デ散々ニ戰ケルニ、面ヲ合スル人モナシ。寄手ハ鏃ヲ揃テ散々ニ射タリケリ。然ル所ニ鐵炮ノ玉一ツ飛來テ、中將ガ傍腹ヲ打貫タレバ犬居ニ倒ケルガ、又起上リタレモ、今ハ不レ叶トヤ思ヒケン、鎧ノ上帶斬捨、忽ニ自害シテ骸ヲ戰場ニ曝ケリ。其外軍兵大衆ハ石動サシテ逃ケルヲ、拜郷五左衞門尉兼テヨリ道筋ヲ取切テ散々ニ責ケレバ、遁者ハ希ニシテ討ル者ハ多カリケリ。山莊藤兵衞尉ハ手疵アマタ負、木陰ニ徘徊居タリケルガ、溫井備前守ガ討死シタルヲ見テ、今ハ是マデト思ヒ、敵ヲ左右ヘ追拂、其死骸ヲ枕トシテ腹掻切テ失ニケリ。筒井雅樂助モ此所ニテ討死ス。角シテ荒山ノ城已ニ落タリシカバ、佐久間玄蕃允盛政ハ勝時三ケ度執行、其後溫井、三宅、般若院、山莊、筒井此五人ガ首共野村勘兵衞尉ニ取持セ、前田利家ガ方ヘ送シカバ、又左衞門尉ハ大ニ悅ビ、盛政ノ働キ莫太(大)ナリト感心シ、様々ノ謝禮ヲ盡シ、使者ニモ則村政ノ刀ヲ引タリケリ。

能州石動山軍付石動山燒失事

能州石動山ヘハ、前田又左衞門尉利家軍兵ヲ引卒シ、天正十年六月廿六日ノ未明ニ押寄タリ。先陣ハ高畑石見守、大行院ノ東谷ヨリ責上ル。前田利家ハ二王門ノ方ヨリ大手ニ被レ向。相從侍大將ニハ長九郎左衞門尉信實、奥村伊與守、同孫助、小塚淡路守以下都合其勢三千余人、石動山ニ押寄タリ。折節朝霧大ニ降テ咫尺ヲ見事アタハザリシ。大衆ハ敵是程火急ニ寄ベシト思ハザリシカバ、越後勢ハ長途ノ疲休ントテ朝寢シ、未起モ上ザリケリ。又石動山ノ衆徒共ハ當山榮久ノ護摩、并利家調伏ノ祈禱シテ緩々トシテ居タリケレバ、遠見ノ兵ヲモ不レ出故ニ、利家ノ軍兵共安々ト山マデ攻上リ、鐵炮ヲ放シ時ヲ作バ、大衆モ武士モ大ニ驚キ、色ヲ變ジ、途ニ迷、若大衆ノ氣早ナルハ武具著暇ノナカリシカバ、徒肌ノマヽニ

テ褊衫ノ袖ヲ結ンデ肩ニ掛、散々ニ斬合タリ。高畑ガ先手栂尾善次郎、今日ノ先登ト名乘テ一番ニ進ンダリ。利家ノ小性(姓)丸尾又五郎、富田助之丞、雜賀金藏等ハ弓手ノ脇ヨリ進デ突テ掛ル。城中ノ軍兵共大勢出合、鎗襖ヲ作テ突掛リシカバ、栂尾突崩サレテ引退ク處ニ、丸尾、富田、雜賀等、得タリヤ逢ト助タリケルガ、雜賀、富田ハ鐵炮ニ當テ討レタリ。栂尾ハ取テ返シケルニ、遊佐孫太郎ガ若黨白井隼人ト名乘テ突出テ戰ヒケルガ、不レ叶トヤ思ヒケン。大行院ノ門ノ内ヘ引入タリ。寄手是ヲ見テ、初白井隼人ト名乘ツルハ何國ヘ逃行ケルゾ。蓬シ返テ勝負セヨト詈處ニ、早田主膳ト云者、三間拵ノ鎗ヲ取テ栂尾ニ突テ掛、火出ル程ゾ戰ヒケル。然ル處ニ丸尾又五郎横鎗ヲ入テ助タリシカバ、早田終ニ栂尾善次郎ニ討レケリ。利家ノ軍兵共吾モ〳〵ト進ケリ。中ニモ長九郎左衞門尉ハ此山案内ヲバ能知タリ。四方ヨリ込入テ遊佐河内守ヲ生捕ニセヨトテ、軍兵ヲ進ケリ。爰ニ如何シタリケン。利家ノ兒小姓篠原出羽守、其頃ハ勘六トテ十七歳ニナリケル初トシテ、小塚八左衞門尉、寺岡兵右衞門尉三人、一番ニ責入テ散々ニ相戰、皆敵ノ首討取テ、猶爰ヲ先途ト責タリケリ。斯處成就院ノ小相摸、大宮坊ノ飛驒、法幢坊ノ同宿中記ト云ル悪僧共數十人、坂中ニ下塞テ石動山ノ大衆等ガ拜斬ニ解脫セヨト廣言吐テ、死狂テゾ働ケル。其中ニモ長七尺許ノ法師、坂ノ上ヨリ敵兵ヲ見下、大長刀ノ二間許有テ、鎗カト覺ル許ナルヲ手本短ク押取延、實乘坊ノ荒讃岐(篠原ノ飛周坊イ)忠快ト名乘テ、簪ヲ以テ庭ヲ掃ガ如ク薙タテタルニ、寄手ノ先陣切立ラレテ四度路ニナリ、逃眼ヲ作後足蹈タル處ニ、寄手ノ中ヨリ鏃炮ヲ以テ僅七八間ガ程ニテ、雷ノ落ルガ如ク放タレバ、響ニ應テ忠快ガ胸板ヲ打貫、後ニ扣タル陽俊坊ガ同宿本宰相ガ眞中ニ中シカバ、二人共ニ弓手妻手ヘ倒タリ。笠間義兵衞尉走リ掛テ忠快ガ首ヲバ捕タリケリ。其外ノ悪僧共、此所ニテ大勢討死シタリケレバ、衆徒ハ引退テ二王門ヲ差堅、此所ニテ防ギケリ。寄手ハ彌氣乘勝鼓討テ時ノ聲ヲ作懸々々、唯一時ニ揉落ント汗水ニ成ツテ責タリケル。前田利家ハ伊賀ノ偷組トテ、五十余人扶持シ置シガ、彼輩ヲ招テ、今敵軍スル躰ヲ見ルニ、物ノ用ニモ可レ立程ノ者ハ打出テ合戰スルト覺エタレバ、坊々院々ニ墓々シキ人ハ有マジキゾ。等忍入テ院々坊々ニ火ヲ放テ燒立、少々老法師小法師原中ニ汝敵對スル者ヲバ斬テモ捨ヨ。去程ナラバ一人モ不レ殘逃失ナン。衆徒等坊中ノ火ヲ見バ、敵早攻入タルハトテ途ヲ失ヒ、敗軍スルヿ疑ナシト下知シケレバ、畏候トテ院々坊々ヘ忍入テ窺ヒミルニ、案ノ如ク手ニ可レ立人ハナシ。小法師原ノ少々殘タルヲ追散シ、十余ケ所ニ火ヲ掛タリ。去程ニ黑煙リ覆レ天。折節魔風頻ニ扇テ院々ヨリ諸堂ニ吹掛タレバ、感陽三月ノ火ヲ一日ニ合セタル歟ト覺エテ夥シ。寄手ハ彌氣ニ乘喚叫デ責掛、利家白旄ヲ打振々々、進ヤ〳〵、敵ニ息繼スナト、自眞前ニ進タレバ、家ノ子郎從、主ヲカバヒ、馬ノ前ニ馳塞々々、死ヲ爭

テ攻シカバ、流石ノ悪僧、溢者共モ後ノ火ニ途ヲ失ヒ、手足モナユル心チヌ防難ク思ヒケレバ、本堂差テ引退ク。是ヲ無三云甲斐一トヤ思ヒケン、阿彌陀院ノ律師俊慶、圓滿院ノ天狗坊、松月坊忠挌、大宮坊ノ飛驒、金藏院ノ中將以下究竟ノ若大衆三十余人、武具ノ上ニ白衣ヲ著シタスキ掛、一様ニ長刀ヲ持テ、二王門ヨリ内少シ窄キ所ニ待受テ、東西ニ開合セ、南北ニ追靡、卷ツ被レ卷ツ曳聲ヲ出メ戰タリ。道ハ狹シ、寄手大勢ト雖モ、脇ヨリ廻テ可レ進樣モナシ。唯童部ノ駒取スルガ如ク、順ニ双テ支タレバ、面ニ立タル者計コソ合戰ヲバシケレ。後陣ノ大勢ハ徒ニ見上見物メゾ扣ケル。寄手鐙ヲ傾身ヲ不レ惜ノ込入バ、大衆長刀ヲ揃、命ヲ捨テ追出ス。追出セバ込入、込入バ追出シ、七八度ガ程揉合タレバ、敵モ味方モ討ル、者其數ヲ知ザリケリ。流血ハ混々トシテ白石忽紅ニ變ジケレバ、火ノ丸カセニ不レ異。青苔朱ニ染ナシ、死骸積デ壘壘タレバ無慙ト云モ余リアリ。似合ヌ僧ノ任侠シテ、衆徒モ大勢討死シ、武士ヲモ多減シケル罪業ノ程コソ薄情ケレ。寄手ハ多ク討レタレモ、大勢ナレバ勢モ不レ透。荒手ヲ入替入替責ル。大衆ハ小勢ナレバ、面ニ立タル悪僧等モ次第々々勢力疲、手庇余多蒙テ討ル、者多カリシカバ、一太刀打テハ引上リ、二太刀討テハ引退ク。寄手ハ彌乘レ氣飽上ニ責重ル。爰ニ大行院ノ東谷ヲ防ギケル遊佐河内守、并ニ越後勢等モ高畑石見守ニ打負、心細ク思フ所ニ、山中ハ悉ク燒立タリ。大手ノ大將溫井、三宅兄弟モ討死シ、大衆等モ二王門ノ軍ニ皆被二討取一タリト聞エシカバ、其實ヤラン、又敵ノ謀ニヤアルラン、實否ヲ極ント軍使ヲ遣ントスル處ニ、軍兵共ハ此左右ヲ聞テ、元來落心ノ付タル者共ナレバ、ナジカハ少モ怯ベキ、吾先吾先ト四角八方ヘ逃散ケリ。遊佐モ彼勢ニ被二引立一、彼ヲ捨テ落行タレバ、能劣ノ一揆ドモ暫時ノ間ニ滅亡ケリ。抑此石動山天平寺ト申ハ、人王四十四代元正天皇ノ御宇、養老元丁巳年泰澄法師ノ建立ニテ、人王三十九代天智ノ勅願所也。佛法修行ノ業ヲコソ專ラトスベキ事ナルニ、延曆寺、根來寺等ノ大衆等ガ佛法ノ奥儀深理ヲ忘却シ、武藝ヲ業ト心得タルヲ、天平寺ノ小法師原モ羨敷事ニ思ヒ、任侠ヲ家業トノ山ヲモ身ヲモ滅シケル、悪業ノ程コソ拙ケレ。去バ今何故ニ石動山ノ大衆等ハ一揆ヲ企ルヤト尋ルニ、織田信長在世ノ時、佞僧賣子ノ諸出家等ガ蛛網ノ術ヲ巧ニシテ、武運長久ハ敵ノ刀及段々壞ノ功力ニアリ、且後生善所ノ望アリ。天下ノ治亂ハ振鈴ノ響ニ應ズ。合戰ノ勝負ハ錫杖ノ靡ニ順フ。安鎭國家ノ法刀爭カ貴ザランヤト檀越ヲ誑ス。愚魯短才ノ守護國司ハ己ガ武勇ヲ脇ニナシ、出家ノ祈禱數珠ノ音ヲ合戰ノ雌雄ニ掛、大莊大郡ヲ寄進シテ味方ノ助トスル故ニ、僧モ社人モ吾法式ヲ執失ヒ、明テモ暮テモ弓箭ヲ專ニ嗜、兵術俗義ヲ宗トシテ、常ニ合戰ヲ心トセリ。去バ一犬誤テ虚ヲ吠トキハ萬犬實ト傳フト云ハ、今ノ世ノ出家ナルベシ。斯ル不實ノ出家ヲコソ天魔破旬トハ云ナンメレ、害有テ益ナシトテ、寺領ノ多キ寺々ヲバ能程ニ減少シテ、其國々ノ侍ガ恩賞ノ地ニゾ被レ行ケル。去バ此石動山モ高五千貫ノ寺領ナリシヲ、信長是ヲ沒收シテ、千貫ノ地ヲ賜ヘラレシ。大衆是ヲ憤、本領ヲ安堵セントテ、斯一揆ヲ企テ、大衆モ多被二討取一、寺院悉ク燒亡シ、伽藍一宇モ殘ラザリシ。誠ニ衆徒ノ我慢放逸ハ、則天魔ノ所行ニヤト淺猿カリシ事共也。

右荒山合戰記。以二篠田信成本一書。依二無類一不レ能二校合一。

末森記

一抑天正十二年、其頃者北國加賀内石川、河北二郡、能登一國、前田又左衞門尉利家卿分國ニテ、加州石川郡金澤ニ居城仕タマフ。佐々内藏助成政越中一國ノ守護トシテ、新川郡富山ニ居城仕タマフ。上方ハ羽柴筑前守秀吉公ト、尾張内大臣信雄卿號後常眞天下ヲアラソヒ取アヒ際モナシ。カヽル時節ヲ内藏助幸トヤ思ヒケン。越中立山ニサラ〳〵越ト云難所ヲ越、供ノ者百計ニテ東美濃ヘ出、其コロ德川家―卿ハ内大臣信雄卿ヲ見付タマフニヨリ、伊勢、美濃境ニテ度々合戰アリシ時、北國ヨリ切テマカリ出、御味方ヲ可レ仕候間、加州、濃州、越前三箇國、御本意ヲトゲラレ候ハヾ、内藏助ニタマヘカシト、内府公ヘモ德川殿ヘモヨク〳〵申入。又サラ〳〵越ヨリ歸リ申サレ候。陣觸ヲモシテ人數出度思ハレケレドモ、又左衞門殿爲ニハ内藏助大敵ナリト、心ノウチニ工夫シテ表裏ヲクハダテ、佐々平左衞門、神保安藝守ナドヲヨビ出シ、評議區區ナリ。成政娘二人有レ之。一人ハ秀吉公ヘ人質ニ出シヲカレ上方ニアリ。其姉一人有レ之ヲ、利家ト古傍輩トイヒ、國ナラビナレバ二男又若利政、後ハ孫四郎殿能登守ヲ婿ニ取、ノチニハ内藏助跡ヲモツガセ可レ申由、下々マデモ風聞セサセタバカル間、内藏助ヨリ佐々平佐衞門出申、利家卿ヨリハ村井又兵衞尉出申。スデニ緣邊相定。ソレヨリ向後ハタガヒニ申入候ハンヨシニテ、先佐々平左衞門ヲ同年七月廿三日ニ使者トシテ金澤ヘマヒラセラレ、祝儀ヲビタヾシク持參シテ、城ノ堅固ヲモ見セラレ候。結句ハ利家卿ヨリコソ先祝儀ヲ可レ被レ遣事成ニ、内藏助ヨリ先ニ參候事、能々チナミヲ深クアリ度躰ト、越中上下ニ申アヘリ。利家卿二心ナキ大將ナレバ、夢ニモ知タマハズ。家老共可レ然儀ト思、事ノ外馳走ニテ又若殿ニ能ヲサセマイラセラレ、引出物ニ刀脇指馬ナドヲ平左衞門ニ給リ返サレケリ。利家卿ヨリ村井又兵衞ヲ禮返ニ可レ被レ遣由、案内被二仰遣一候處ニ、八月祝儀月ニアラズ候間、幾久ト存祝儀ニ候ノ條、九月ニナサレ給リ候ヘノ由ヲ内藏助ヨリ重申來故、先指延ラレ候。加様ニ心ヲトゲ、夜々北ノ屋倉ニテ家老四五人召集評議シテ、取出ヲコシラヒ所ナド相談キハマリ候處ニ、越中方ヨリ付城ヲスル人アリ。利家卿聞給ヒ、此儀僞ト思ナガラ、加様ノ事聞由、斷ジテ末代ノ耻辱ニナル事モアルベキト思召、村井又兵衞、岡島喜三郎、片山内膳、不破彦三ヲ召出サレ御相談アリテ、サラバ加賀、越中ノ境目朝日山ヲ取出ノ城ニコシラエ候ベキ由ニテ、同八月廿二日ニ村井又兵衞ヲ大將トシテ、高畠九藏（ナシイ）、原田又右衞門兩人ヲ差添、其外鐵炮大將四人、都合千五百余ノ人數ニテ、二三日普請シテ柵ヲ付マワシ候時分、同八月廿八日、朝日山口請取ニ越中勢佐々平左衞門尉、前野小兵衞大將トシテ、彼是都合其勢五千餘騎ヲ二手ニ分押來。是モ朝日山ヲ越中ヨリ取出ニコシラヒ可レ被レ申トノ事也。村井ハヤ柵ヲフリ廻タルヲ見テ、平左衞門、小兵衞アンニ相違シテゾ見エケル。兩人申樣ハ、此取出敵俄ニコシラエタル所ナリ。殊ニ越中勢出申事モチボツカナク、人數モ多クアルマジク候間、此取出ヲ責ホシ、加州、越中ノ取合ノ門出ヨシト、成政ノ御感ニ預ラント云マヽニ、小兵衞、平左衞門下知シテ二口ヨリ押來。朝日山大將大方取出モ出來タレバ、居住候用意ニハ、シバシ金澤ヘ歸ナドシテ、有合タル人數七八百人ニハ過ザリケル。然ニ大將又兵衞目ヲクバリ下知シテ、柵ギワヨリ二町計外ニ堀切アリ。アレマデ立出サヽヘ、一合戰シテ勝負ヲ決セント云所ニ、利家御馬廻阿波加藤八郎、江見藤十郎兩人、村井ヲ見廻ニ行合、左右ニ進テ、冥加ニ叶、今日參タル由申勇候處ニ、又兵衞被レ申候ハヽ、利家卿ヘ注進仕度由ニ候所ニ、兩人飛脚ニテ急可レ然由有レ之時、イヤイヤ飛脚ニテハタシカナル儀聞エヌモノナリ。江見、阿波加兩人參、此通被二申上一候ヘト有ケレバ、「兩人（ナシイ）大ニ氣色ヲ損ジ、金澤ニ有レ之候ニ御見廻可レ仕ニ、幸願フ處ナレバ、中々思モヨラズ候ト申切テ進ケル。村井此兩人何トシテ注進ニ返申ベキト、心ノ内ニ思道ニ、ハヤ一揆ヲコリ可レ申候間、氣遣成事ト被レ申ケレバ、其時兩人申樣、此御言葉ヲ承、注進ニ參ズンバ、中々以來ノ耻辱ニモ成ナント、殘多ゲニ馬引寄打ノリケル。誠急成時出タル被レ申樣、ユヽシク覺タリト皆人申アヘリ。朝日ヨリ金澤マデ四里半ノ道ヲ、一刻ニ兩人馳歸リ、此由一々利家卿ヘ申上ケレバ、又兵衞亥、我下知ナクシテモ左樣ノ事仕兼ザル者ニテアリ。然ドモ急ギ後詰セント不破彦三、多野村三郎四郎、片山内膳、岡島喜三郎、原隱岐、武部助十郎ナドヲ先手ノ大將トシテ、其外宗徒ノ軍士共急々打立候ヘト觸サセ、其儘カイヲ立サセ、利家卿出サセ給フ。心懸ノ小性馬廻五六十騎御供ニテ、先小原口ト云所マデイソガレケルコソタノモシケレ。然處ニ朝日山ニテハ、越中勢麓マデ押寄タレモ、大將又兵衞强威ニヤヲソレケン、大雨モ降出ケレバ還卷ニ人數ヲ備ケリ。ソレヨリコソ度々ノ合戰ニナリタリケリ。サテ能登國七尾城ニハ、一國ノ人數過半置タマヒ、本丸ニハ利家卿舍兄前田五郎兵衞尉、子息孫左衞門尉、高畠織部、中河清六、國侍ニ長九郎左衞門尉、其外名アル侍共都合其勢三千余騎入置給フ。加賀、能登、越中三ツワノ境目末森ト云所ニ、利家卿入國ヨリ城有テ、爰ニハ奥村助右衞門尉、千秋主殿助、土井伊豫守ヲ大將トシテ、其外軍士共都合其勢千五百余騎入置給フ。加州津幡ト云所、是ハ利家卿舍弟前田右近將監「人數百人ヲ卒（ナシイ）」城ニ被二入置一加州、越中ノ境山際ニ鳥越ト云所丈夫ニコシラヒ、目賀田又右衞門尉、丹羽源十郎兩人ヲ大將分ニシテ、名アル侍共都合五百余騎入置ル。扨佐々内藏助成政ヨリ俱利加羅峠ヲ取出ニコシラヒ、佐々平左衞門尉、野々村主水兩人大將トシテ其

外名アル侍共都合其勢二千余騎被二入置一。稻見城ニハ前野小兵衞尉ヲ大將トシテ其外軍士共都合二千余騎入置ル。青野城ニハ則國侍菊池伊豆守子息十郎（十六郎イ）大將ニテ千騎計ニテヒカヒタリ。能登、越中境目荒山ト云所ヲ取出ニコシラヒ、能登七尾ノヲサヘトシテ「袋（ナシイ）井隼人、是ハ神保安藝守家司也。神保方ヨリ此城ヲ取立ニヨツテ也。」名アル侍共替ル〳〵番勢ニ入置ル。越中森山城ニ成政、アイヤケ神保安藝守子息清十郎、是ハ成政婿ナリ。大將ニテ自分人數四千余騎ニテ扣タリ。互ニマモリアヒテゾ見エニケリ。内藏助ハ新川郡富山城ニ居住アリテ、爰カシコニ打出働キ給フ。右ノ趣利家卿ヨリ使者ヲ以、其頃マデハ羽柴筑前守秀吉公ヘ被二仰上一候ヘバ、不レ斜御感アツテ、サテモ先年柴田ヲ討果シ候刻、内藏助表裏者ヲ若年ヨリ能知タル間、彼者ヲサヒト思召、又左衞門尉ヲ加州ニ置候事、我目キ、不レ違。右ノ趣神妙ニ思召由ニテ、又左衞門、内藏助武勇智謀能カンガヒ知タリ。皆皆能吾云事ヲ聞テ置候ヘ。又左衞門、内藏助兩方人數ヲ立アワセ一戰ニ及候ハヾ、前田人數小勢ナリ（モ）大利ヲ得ベシ。無二心元一事ノアレバ、又左衞門分國能登、加賀廿里ニ過ホソナガキ國、越中ヨリハ出ヤスキ所ニ候間、能登ヘ助候如何ト計案ジ候。然ドモ利家ソレニ御入候間心安思也。能々越中勢ヲ押（ト）ヘラレ候ヘ。ヤガテ爰許ノ敵共平均ニ申付可レ有二出馬一、彼使者ニ御口上ニモ被二仰聞一、則使者ニ引出物ニ黃金三十兩被レ下ケリ。

一同年九月十一日、末森城ヘ佐々内藏助成政人數ヲ出、我身ハ二里脇ツボヰ山ト云所ニ本陣ヲスヘ、先手山下甚八、佐々平左衞門尉、前野小兵衞尉、野々村主水、菊池伊豆（豆イ）守、同十六郎、寺島甚助、同牛之助、本庄市兵（與イ）衞尉、野入平右衞門尉、齋藤半右衞門尉、佐々與左衞門尉、堀田四郎右衞門尉、櫻勘（甚イ）助、カレラヲ大將ブントシテ都合其勢八千余騎押寄、町ヲ放火セントセシ處ニ、城中ヨリ土井伊豫守、町ヲ破セテハ無念成次第ト云儘ニ、上下二百計ニテ打出、誓防戰、四方八面ニ切テ廻リケレモ、大勢キヲヒ懸リモミニモンデ責ケレバ、何モ不レ殘討死ス。城中ニハ奥村助右衞門尉、子息助十郎、千秋主殿助、瀧澤金右衞門尉、其外勇士共下知テシ目ヲクバリ持カタメケレバ、「寄（モイ）手モ雖二盡粉一不レ及二落城一。」成政被レ申候ハ、定テ利家加州ヨリ後詰スル事可レ有レ之。其押トシテ國侍神保安藝守子息清十郎ヲ大將ニテ四千余騎河尻ト云所ニ差出、山取シテ加州ヨリノ道ヲシ切待懸タリ。然處ニ末森ヨリノ注進利家卿ヘ申處ニ聞入給ト、金澤城ニハ舍兄前田藏人入道、魚住隼人、其外名アル侍共番守トシテ被二殘置一。不破彦三、村井又兵衞兩人ヲ先手大將トシテ金澤ヲ、卽十一日ノ未ノ刻ニ打立結フ。松任ト云所、金澤ヨリ三里上ノ方也。利家卿御子息孫四郎、後ハ肥前守、居城ナレバ、急出ラレ候ヘ、末森ノ後詰スベシト使者ヲ被

レ遣。能州ノ人數モ七尾ニハ前田五郎兵衞父子被レ殘。其外ノ軍士共不レ殘末森ヘ可二出向一ト被二仰遣一。彼是時刻移リ被二打立一候ヘバ未ノ下刻ニ成ニケリ。津幡城マデ四里ノ間ヲ先急ガセ給ヘバ、舍弟右近將監御迎ニ町ハヅレマデ出向被レ申候。少當城ニテ人數ヲモ御ソロヘ、又ハ孫四郎殿ヲモ待請給ヘト被レ申ケレバ、去バトテ城ニ入セ給フ。トカクノ間ニ戌ノ刻ニ利長モ津幡城ニ著セラレ、利家卿、利長卿御父子、先手村井又兵衞、不破彦三郎、其外家老大名小名召寄、軍ノ評議アリ。先輕々ト津幡迄利家出馬アリテ、軍士共ノ心ヲ勇メ給フ事、サスガ信長公ニ若年ヨリ傍近奉公有テ、軍ノ方便能知テ物ナレラレタル大將ト、皆一命ヲ捨テ討死セン事、露ホドモ惜カラジト勇ヲナス事カギリナシ。其時大名小名ナミ居タル中ニテ、利家卿御威言ニハ、内藏助トハ互ニ若年ヨリ度々ノ合戰ニ出會（マヽ）候。然ドモ此利家ヲコス事一度モナカリシ。其上彼者カブイタル武邊ナレバ、敵弱キニハ得二勝利一事モ可レ有レ之。利家ヲ敵ニシテハ中々思モヨラズ。タトヘバ夜中ノ後詰ニテ候ヘバ、味方ノ人數小勢、アナタハ多勢ナリトモ討合候ニ一合戰シテ大利ヲ得ベキ事案ノ内也。カマイテ我下知ノゴトクニ可レ仕ト高ラカニノタマイバ、何レモ夜ノ明タルヤウニ心モ晴テ勇ケリ。扨寺西次兵衞入道、前田右近將監ナド相談シテ、ハヤ末森城ハ落去スル事可レ有レ之。殊ニ神保ヲ四千騎ニテ押ヘハ差出置候バトテモ味方利ヲ失ヒ給フベシ。同ハ末森ハ捨サセ給ヒ、此所ヲ丈夫ニ持堅給ヒ、秀吉公ヘ御注進ナサレ候ハヾ、此表ヘ急ニ出張可レ有レ之。身ヲ全フシテ得二大利一給ヘト被レ申ケレバ、利家卿聞召シテ事ノ外氣色替リ、左樣ノ弱キ異見、軍士氣失フモノ也。人ハ一代名ハ末代、自國ヘ一足ナリトモフミ入ラレ、剩奥村、土井、千秋ヲ捨殺シ候ヘバ、天下ヲ知テモ人ノ嘲リ如何セン。内藏助數萬騎モアラバアレ、我小性馬廻ニテナリトモ一合戰シテ勝負ヲ付ベキトノタマヒテ、頓テ村井又兵衞尉ヲ一間所ヘ召寄ラレ、トニカクニ合戰ト思ハ如何ト被レ仰ケレバ、又兵衞申樣、御意御尤ニ存候。被レ遂二合戰一然ルベキト諫メ申セバ、利家卿エミヲ含ミ給ヒ、吾心ト同事タルハ村井ニシクハナシト被レ仰、ハヤ打立給處ニ、右近將監湯漬御食ヲ取ツクロヒ上ラレ、其内ニ重テ被二申上一候ハ、上手ノ博士御座候間時取ヲモ見セ御立可レ然ト被レ申ケレバ、御氣色不レ吉（ヒ）、如何樣共ト被レ仰候處ニ、五十計ナル山伏罷出候時、利家卿御覽ジテ、博士ハ其方カトノタマヘバ、カシコマツテ候ト、彼山伏フトコロヨリ物ノ本ヲ取出ス。其時トカク後詰ハスル間見ヨト、コハ高ニ被仰ケレバ、彼入道物ノ本ヲフトコロヘ押入、時モヨク御座候ト、利家卿ノ御氣色見申候テ、物ノ本ヲモ見ズシテ申ケレバ、事ノ外御感アリ。サテモ心得タル上手カナ。頓得二大利一歸陣候時褒美ヲ遣スベキト被レ仰、御心ヨゲニ打立給フ。利長卿ハトカ

ク末森ヘハ御後卷ヲ留給ハント思召。御内ノ者ドモ町屋ヘハイリ候故、利家卿俄ニ打立給フ故、利長御馬ジルシヲ津幡町末マデ横山三郎持出給フト聞エシ。兼テノゴトク先手大將不破彦三、村井又兵衛兩人ヲ左右ノ先ヲサセ、其付々ヘ付隨フ侍大將ニハ、原隱岐守、前田又次郎、多野村三郎四郎、武部助十郎、片山内膳、岡島喜三郎、前田慶次、近藤善右衛門、青山與三、其外名アル侍共、勇ニ勇ンデ懸出タリ「川尻（左イ）（无イ）ヨリ一里計此方高松ト云所ニテ、利家甲ノ忍ノ緒ヲ強クシメ、其アマリヲ切テ捨ラレケレバ、何モ殿ハ今日ヲ限リト思召ト見エタリトテ、中々生テ歸ラント思者ハナカリケリ。」爰ニ篠原勘六トテ、利家卿傍近召ツカハレシ者アリ。其頃イマダ廿三歳ニナリシガ、ヨコネヲ煩、起フシサヘ自由ナラズ候ヘドモ、金澤城ニ舍弟前田藏人ト番守仕候ベシ。合戰ノナラヒナレバ、利家討死セバ城ヲ隨分持堅メ、叶ハヌ時ハ城ニ火ヲカケ腹キレト仰ケレドモ、中々請申事ハ不レ及レ申、耳ニモ不ニ聞入一。唯々御供可レ仕由、内々ハ名アル侍共二十騎計、利家卿ヨリ付置レタル者共ヲ引具シ、乘物ニテ河尻マデ懸ツケ、爰ニテ具足著、篠原勘六コソ是マデ早來タルヨト大音ヲ上進タル有様、誠後代マデ名ヲ留メントホメヌ者コソナカリケリ。神保安藝守山取シテ加州勢ノ押ヒトシテ待カケタレバ、利家卿津幡城マデハ出ラレタレドモ、後卷中々ナルベカラザルニ相究リタル由、神保ヨリ付置目付ノ者歸リ申ニ

付テ、ゲニモサゾアラント少由斷シテ居タル處ヲ、利家卿先手ノ彦三、又兵衛所ヘ御出アッテ、三人被レ成ニ御談合一見計ハレ、濱バタヲ一騎討ニ馬ノ舌ヲマカセ懸通。（无イ）此時川端ヘ付候ヲ出シ、神保人數ヲ出スヤ否ヲ見セシム。歸テ告テ曰、敵コソ備テ待候ト云々。次ニ富田越後ニ被レ仰、勘六ヲ物見ニ遣ス。歸テ申云。敵一人モ出ズ。川杭澤山ニシテ如レ人ト云々。利家川杭トハ何ヲ見當ニ仕候ヤト、越後申スハ武者ナラバ竝ソロヒ申マジク候。其上指物モ有ベシ。竝能ソロヒ申候。川中マデ馬ヲノリ入、心靜ニ見屆申候ト云々。諸人尤慥成見様ト感レ之ズ。」無レ難旗本マデカケ過ケリ。或ハコナタカナタ取出ニ居陣シ、又ハヲクレケル侍上下五六百騎、一里バカリモ跡ヨリ進カケツケ候ヲ聞付、神保ハスハ利家コソ只今後詰ニ通ラレ候ト思ヒ、鐵炮ヲ打カケサヽヘケリ。其間利家卿中入シテ人數押給フ御イキヲイ、十商夜百張良ガ勢ヒモ是ニハ如何デ增ルベキト、上下感ゼヌ者ハナカリケル。サテ今濱ト云所ノ古山ナル砂山ヘ乘上ルト、ホノボノト夜明方ニナリケリ。其時利家卿御馬ヲ乘廻下知仕給ヒ、兵粮ツカヒ候ヘトノタマヒテ、味方ノ人數ヲツモリ見給ヘバ、孫四郎殿人數七八百騎計、彦三備七百バカリ、又兵衛備六百騎、御旗本千五百騎余ニハ過ザリケリ。利家卿味方ノ武者イロノ御覽ジテ、ハヤ合戰ニハ勝利ヲエタルゾト被レ仰ケレバ、御近所ニノリタル德山五兵衛入道ナド、御意尤ト申

時、味方人數ハ六千余騎アルベキト見エタリ。夜中ニ是ヘ馳著タル軍士共上下死ヲ輕ジタル者ナリ。敵數萬騎有トモ味方ノ人數增ルベシ。カマヘテ首バシ取ナ、唯忠功ヲハゲマシ、太刀ノ及ノツヾクホド討捨ニスベシト大音聲ニテ仰ラレケレバ、上下氣ヲエテ、夜ノ明タルヤウニ覺候ケリ。扨人數ヲ押給フ處ニ道二筋有レ之。一筋ハ末森ヘ、今一筋ハ内藏助本陣ツボヰ山ト云所ヘノ道ナリ。其ニテ村井又兵衛、利家卿ニ乘向テ申様ハ、ツボヰ山ニ内藏助有レ之。油斷シテアルランナレバ、旗本ヘ切懸リ勝負ヲツケ可レ申由被レ申ケレバ、利家卿尤ニ候ヘドモ、ツボヰ山ニテ定テ足ガカリ能所ヲ見立内藏助陣取ベシ。末森ハ味方ノ城ナレバ、内外モミ合一戰セバ、ナド勝利ヲ得デアルベキトノタマヒケレバ、重而又兵衛身ヲモダヱテ、是非ドモ内藏助旗本ヘ切懸勝負ヲツケ申サバ、大將ヲ討事モ可レ有ト被レ申ケレドモ、利家卿此合戰之儀ハ吾下知次第ニ仕候ヘト怒テ仰ケレバ、村井力ヲヨバズ、末森城ヘ押廻シケル。加様ノ時分、大將ニ勇ヲ付、軍ノ手立申者一人モナカリケリト。扨（脫慮）モユ、シキ家長カナト、利家卿後後迄モ感ジ給ヒケル。然處ニ早村井内ニテ間野新丞首ヲ取テ來ル。小林彌六左衛門、三木十内、屋後太右衛門、其外誰カレト名乘、首十一手ニ提ゲ、又兵衛ニ見セ候處ニ、イソギ御本陣ト被レ申ケレバ、利家卿ノ見參ニ備ヘケリ。物初吉ト御感アッテ、早今日ノ軍大利ヲエンズルシルシニハ、一番首

ノ見様アリト仰ラレ候ヘバ、德山五兵衛入道御尤ニ御座候。但余御言葉メイ〳〵ニ御カケ候テ、御息キレ候ヘバ如何ト申サレケレバ、ゲニモト思召、其後ハ首持テ參ル者ニモ、秀デタル働ナキ者ニハ大形ノ御言葉ナリ。扨不破内不破十左衛門、同四郎左衛門、平野齋、其外誰カレト名乘首八ツ討取。是モ彦三ニ見セ、則利家卿ノ見參ニ入ケレバ、彌御ヨク思召、前後ヲ下知仕給フ。扨モ末森二丸ニアリケル千秋主殿助、瀧澤金右衛門、其外勇士共、越中勢責入ヲフセギ戰モ、度々ニ込入バ追出シ、手柄ヲ盡ストイヘドモ、猛勢ナレバ事トモセズ、終ニ押コマレ、都合百騎計枕ヲナラベ討レニケリ。扨コソ本丸計ニナリニケリ。扨又大手ハ敵味方入亂、村井又兵衛尉、多野村三郎四郎ナド、自身鑓ヲ入、散々戰フ所ニ、村井又兵衛ト越中先手佐々與左衛門ト鑓ヲ合、散々ニツキ合ケル處ニ、村井上鑓ニナリテ與左衛門ヲツキフセケル。越中ニテ先手ノ大將分ナル者ナレバ兵共助來レリ。三十騎計枕ヲナラベ討死ス。彌加州大將又兵衛自身鑓ヲ合勝利ヲエタレバ、ドツトツキ崩シ勝時ヲ上タリケル。搦手ヨリ利家卿ヲ越中ヘ入可レ申トテノボラセ給フ所ニ、成政内ニテモ名ヲエタル軍士共、爰ニモ取合セ、野々村主水、本庄市兵衛、齋藤半右衛門、櫻勘助、堀田次郎右衛門ナド、爰ヲ最後ト防ギ戰フ。中ニモ櫻勘助ハ鐵炮ノ上手ニテハヅル、事サラニナシ。利家卿御近處ニ御小性篠原勘六、富田六左衛門、北村作内、

村井又六、木村久三郎、富田源六郎、御馬廻ニハ半田半兵衛、山崎彦右衛門、野村傳兵衛、小泉彌市郎、井口茂兵衛、奥村彌市郎、阿波加藤八、江見藤十郎、吉川平太、岡本七助、其外勇士五十騎計ツヽイタリ。互ニ見合候處ニ、半田半兵衛ツヽト立、一番鑓ヲ見ヨト云所ヲ、櫻勘助鐵炮ニテ打、半兵衛佐ノ手ヲ肩ヘ懸テ打ヌキ、鑓ヲイダキテコロビケリ。敵味方トハ申ナガラ、半兵衛ト勘助ハ從弟ノ間ナレバ打ハ打タレモ、常々指物ヲモ見知、名乘タル聲ヲモ聞、サテ半兵衛死タルカ、不便ナルト申由、後ニコソ聞エケリ。然處ニ利家卿、加様ノ鐵炮(ヲ慰)スシ足ヲタメサセテハ手負多出來申モノナリ。御馬ジルシヲフリ懸フリカケト下知仕給フ。其時野村傳兵衛、山崎彦右衛門、篠原勘六、富田六左衛門、北村作内ナド鑓ヲ打入、暫シガホド黑煙ヲ立テ突合シガ、越中勢追崩サレ、其口ノ大將分ニハ野々村主水、本庄市兵衛、齋藤半右衛門、堀田次郎右衛門、櫻勘助、其外歴々名乘合、鑓下ニテ七十余騎討死ス。加州勢首共ヲ討捕、勝時噇上タリケル。サテコソ搦手ヨリ利家卿、利長卿城ノ内ヘ入給フ。其後鑓ノ吟味アツテ、半田半兵衛一番ニ鑓場ヲ見立候ヘモ手負申候。山崎彦右衛門、野村傳兵衛、一番鑓ヲ諍ヒ申セシヲ、利家卿御吟味ナサレ、同鑓ト云ナガラ傳兵衛一番鑓ト名乘タル間、傳兵衛ニ一番鑓ト御感狀ヲ被レ下ケル。サテ兩人加増ヲ遣ハサレ千石ヅツニ被レ成間、加様ノ吟味コソ手本ナレト上下申アヘリ。半兵衛モ千石ニナサレ、其上ニ母衣十五人與力ニ付給フ。加様ニ其品々ニ被二仰付一候ヘバ、上下勇ミ命ヲカロンゼザル者モナカリケル。扨又末森後詰ニ利家卿被レ參候由、ツボヰ山ヘ聞エケレバ、内藏助其儘打出、佐々平左衛門其外宗徒ノ人々ヲ前ニアテ、八千騎ニテ成政懸リ來ル處、利家卿願フ所ノ幸也。唯今内藏助ガ首ヲ見ル事ノ何ノ疑アルベシト。其内ハヤ軍法ヲ定ラレ、人數モツレタランヅレモ、又一番合戰ヲ村井又兵衛ニ仕候ヘト被レ仰ケレバ、又兵衛心ヨゲニ御請申ケレバ、サテモ弓矢取テノ面目トウヤラミホメヌ人コソナカリケル。二番城主奥村助右衛門、多野村三郎四郎、三番不破彦三、四番利長卿、五番利家卿旗本也。加様ニ急ナル時軍法ヲ定メ給フ事、タメシスクナキ名大將ト、心アル侍モ感ジアヘリ。カヽル處ニ河尻ニ有ケル神保安藝守、末森ノコトヲ聞付、イソギ馳來。神保ニ押ラレシ加州勢モ、悉末森ヘ來リタリ。爰ニ能州ニ置レシ軍士共ニ、末森ヘ後卷ニ出馬スル間、夜明方ニ參著候ヤウニ、利家卿ヨリ折紙遣サレケレバ、七尾ニハ何レモ馳集リ相談アリシニ、高畠織部ナド、イヤ〳〵軍ノ習、利家卿後詰ナサルベキト思召モ、道マデ敵押可レ申事モ候テ、末森ヘ御越ナキ事モ可レ有レ之。能登ワヅカニ三千騎ニハ過ベカラズ、敵ニ出合一戰モ成間敷候間、今一度ノ御左右ヲ侍可レ申トアリケレバ、何レモ此儀ニ同ジケリ。長九郎左衛門尉、イヤ

イヤ末森ノ後詰有無ノ二ツナリ。利家卿如何ト思召御心アラバ、ヨモ能登ヲ明テ出向候トハ被二仰越一間敷候。トカク人ハトモアレ、利家卿御判形到來シ候上ハ、長ニヲヒテハ末森ヘ罷越候ト云捨テ座敷ヲ立タルヲ、ホメヌ者コソナカリケル。手勢千騎計ニテ急レケレモ、利家卿勝利ヲ得給ヒ候處ヘ、廿町計コナタニ人數相見エ候ヘバ、利家卿見付給ヒ、是ハ能登勢カ、但敵ヨリ能州堺目ニ入置タル人數カ。末森ヲ責ル由ヲ聞、敵見ツギ勢ナラバケチラカセト、物見ヲ則被レ出候ヘバ、長九郎左衛門也。扨々無念ノ仕合、ヲソク參タル事。高畠、中河清六ニ押ラレ、カヽル御合戰ニ不レ合事冥加ニ盡タルト、物見ニ出タル脇田善左衛門、野村七兵衛前ニテ、モトユイヲ切被レ申ケリ。兩人乘歸リ其由ヲ利家卿ヘ申上ケレバ、事ノ外御感アリ。サテモ手柄無二比類一。長一人被レ參候事タグヒ不レ可レ有レ之ト、還テ御感悦ニアヅカリケリ。「此時(无イ)ノ九郎左衛門强サハ百度ノ武邊ト諸人感レ之」。從ニ利家一モ努々越後ト不二思召一。結句不レ殘譽ノ由御慇勤之誓紙ヲ被レ下。九郎左衛門感涙ヲナスト云々」。同十二日辰ノ刻ニ、内藏助人數ヲ引グシ、彌今日合戰ナルベカラズ思ハレ、山手ヘツイテ引退。利家卿人數ヲ付給フベシト思召、先手ヘ御出アツテ村井又兵衛ト御見ツクロヒ候ヘモ、味方ヨリ出候處ハ節所、敵引取處ハ道筋ヨキ處ナレバ、勇ミニ勇ンダル軍士共ヲ制シ留ラレ、人數ヲ御付ナク候。越中勢モ足ヲ不レ亂、成政下知ニテ輕々ト引取、段々ニ備ノキタル事、サスガ内藏助モ物ナレタル大將ト申者モ多カリケリ。然ル處ニ利家卿被レ仰ケルハ、津幡城ニモ無勢ナリ。敵今朝ノ合戰ニ利ヲ失ヒ、無念ニ思、津幡ヲ責ル事モ可レ有レ之トテ、末森城ニハ右ノゴトク、助右衛門ヲ大將ニテ、其外侍大將分五六人加ニ人數一被二殘置一、何時ニヨラズ重テモ内藏助此表ヘ人數出シ候ハバ、不レ移二時日一可二馳來一ト被二仰置一、奥村助右衛門、千秋主殿ナドニ御褒美ヲ給リ、扨又討捕首共記スニ、都合七百五十三也。手柄ノ品々重而可レ有二御吟味一ト被レ仰打立給フ。其時味方ノ勢御覽候ヘバ、勢ヒニ余リテ一萬餘騎ニ成リニケリ。不破、村井兩人ヲ又先手ノ大將トシテ濱邊ヘ差掛、内藏助ガ跡ヲシタヒ御馬ヲ打入給フ處ニ、一向成政津幡ヘハ心懸ナシ。足懸リヨキ所ヲ見合被レ入二人數一ケリ。カヽル所ニ鳥越城ノ近邊ヲ被レ通候。彼城ノ押ヘヲスヘ通ラレ候處ニ、加州ヨリ入置レシ目賀田又右衛門、丹源十郎、彼等兩人ハ末森ニテ利家卿合戰ニ討負給ヒシト風ノ便リニ聞、其日午ノ剋城ヲ明ノキニケリ。成政ヨリノ押ノ者、物見ヲ出シ見セ候ヘバ、明タル城ナレバノボリ計リカザリアレモ、人數ハ見エヌ間、此由内藏助ヘ注進仕ケレバ、是天ノアタヒト、今朝味方利ヲ失ヒシニ有難事ナリトテ、鳥越城ヘ先入セ給フヲバ、利家卿露ホドモ知給ハズ。津幡城迄御著アツテ、其ヨリ取出城ニハ末森ニテ得二大利一人數打入間、彌能

守護仕候ヘト被二仰遣一候處ニ、鳥越ニ參タル小林喜左衞門頓テ乘歸リ、利家卿ヘ鳥越ハ明タルト見申候。敵ノ勢入替リ相見申ト申上候ヘバ、利家卿驚給ヒ、サテモ無念ナル次弟也。則懸返シ一合戰スベシト御身ヲモウデイラテサセ給ヘバ、不破彦三、村井又兵衞入道、片山内膳ナド、御意尤ニ御座候ヘ共、今朝大利ヲエサセ給候上ハ、鳥越ホドノ小城ヲバ其儘ヲカセラレ、先御馬ヲ入ラレ、重テ御手ニ入候事程モ御座有間敷ト申セバ、サラバトモ角モト被レ仰、同十二日酉ノ剋ニハ金澤城ニ打入給フ。御留守ノ侍町人上下町末マデ御迎ニ罷出、是ハ目出度御事ナリト悦申事限ナシ。扨上方ヘ使者ヲ以末森ノ樣子、秀吉公ヘ利家卿ヨリ被レ成ニ注進二候處ニ、彼使者ニ被レ成二御對面一。利家忠節中々申モ愚也ト御感アッテ、前カド内藏助ヨリ人質ヲ被二取置一候。則内藏助息女九ツ成シヲチモロトモニ粟田口ニ磔ニ掛サセラレケレバ、其時上下コゾッテ、サテモ内藏助此上ハ天下ヲ知テモイラザル事、アハレヲ留メ袖ヲシボラヌ者ハナカリケリ。然ル處ニ後ハ無事ニ成御侘言申サレ、秀吉公御下知ニ隨シ時、利家卿ハ不レ及レ申、大名小名ツマハジキヲシテ被レ申候モ理リ也ト申アヘリ。

一同年十月十四日ニ、鳥越近邊エ利家卿人數ヲ被レ出、越中國境目民屋共燒拂ヒ給フ。鳥越山城ナレ共節所ニテ有ケレバ、利家此城可レ責事如何アルベキト仰ケレバ、不破、村井、多野村申ヤウ、攻落申ン事タヤスカルベシ。然レ共城中ニモ二千餘騎入置由承候間、味方一萬騎三分一ハ損ジ可レ申候。内藏助富山城ニ一萬騎ニテ扣申候間、大事御抱ヘ、是程ノ小城ニテ人數ヲツイヤサレ候ハン事如何可二御座一ト被レ申ケレバ、ゲニ〳〵最也ト仰ケル。何トゾシテ、城中ヨリアシ長ニ人數ヲオビキ出シ、付入ニト思召、ヨハ〳〵ト足輕ヲ出シ給ヘド、城ニモ久瀨但馬守ヲ大將トシテ、軍士多籠タレバ、少モ足輕不レ出、諸卒ノ機ヲ勵、トカク城ヲ持堅メ候事肝要トアイシラヒケレバ、利家卿先近所悉燒拂ハセ、人數ヲ打入玉フ。其後北國ノ習ヒ風雪夥シケレバ互ニ矢留ト見エニケリ。

一明レバ天正十三年、山々ノ雪モ消、二月十八日ニナリケレバ、利家卿、村井又兵衞ヲ召テ、鳥越ヲ目賀田、丹羽兩人明ノキ、敵勢入替ル事是無念候間、越中ノ内ヘ押寄深入シテ働度由被レ仰ケレバ、承候トテ村井内家老共呼寄内談シケレバ、則村井内小林大納言、屋後太右衞門ト云者、本國越中ノ生ニテ能案内知タレバ、蓮ノ間ト申テ、安江ト今石動ノ間ニ足懸ヨキ寺アリ。越中ニテノ名所ト、利波中郡兩郡ノ何モモヌケ者モ彼地ニ在レ之間、是ヲ燒立候ハバ、敵ノヨハリニテ可レ有二御座一ト申處ニ、此由ヲ利家卿ヘ申上ケレバ、最ト被レ仰。則私先可レ仕トテ、村井又兵衞一番、二ノ目ハ松任勢、利長卿人數、近藤善右衞門、山崎庄兵衞ナドヲ大將分トシテ八百余騎、右ハ岡島喜三郎、片山内膳、多野村三郎四郎大將ニテ八百余騎、其ヨリ不破彦三、武藤助十郎、前田又次郎、其次々段々ニ備、村井千騎計、四井主馬ト云シ夜トウヲモ引グシテ、件屋後、小林ヲモ案内トシテ、加州境目ヲ打出、越中ノ内ヘ四里ノ間、同二月廿四日戌ノ剋ニ出押寄處ニ、四井申樣、如何ニシテモ此暗キニ無二計方一候之間、今夜ハ先人數御引入候ヘト申セバ、村井被レ申候ハ、利家卿御前ニテ御請申參間、彼蓮ノ間ヘ我ヲツレ行捨テ、各ハ歸リ候ヘト被レ申候。サテ明レバ廿五日ノ曉ニ、蓮ノ間近邊彼大寺一度ニ燒立、アタルヲ幸男女ノキラヒナク三百計切捨ニスル處ニ、如レ案木船、伊奈美近邊ノ城々ヨリヒシト付タリ。本ヨリ村井物ナレタル大剛ノ兵ナレバ、軍士共ノ機ヲ勵シ下知シ輕々引退處ニ、兩城ヨリモミ合ツキ懸、火出ルホドツキ合、村井内ニテ兵共鑓下ニテ、歴々七八人討死シタリケレバ、殘兵共ヅキ立ラレ、村井旗本マデ味方崩ケル處ヲ、又兵衞馬ジルシヲ前ニ押アテフミ留リ、大音聲ヲ上テイタク鑓ヲ合、能武者ヲ五六人突倒シツキタヲシスル處ニ、返シ合タル兵共ニハ、村井與力吉川平太、江見藤十郎、大窪小五郎、屋後太右衞門、阿波加五郎右衞門、小林大納言、其外彼是二十騎計、大將又兵衞左右ニテ鑓ヲ合、吉川江見申ニモ大將ニコサレヌル無念ニ思ヒ、イラチ懸ニツキ合、鑓ヲツキ折、太刀打シテ鑓下ノ首ヲ取、ソノ儘ツキ崩シ、究竟ノ兵共十三首ヲ討取、勝時ヲ噇ト上タリケリ。サテシヅ〳〵ト引退、二ノ目松任勢請取申候。唯今ハ御手柄ナリト云儘ニ、近藤、山崎目ヲクバリ、何レモ利長卿内ニテ勇士共、歴々心ヲ勵シ、鑓ブスマヲ作リ待懸タル處ニ、越中勢村井ニツキ立ラレシ事ホイナシト思、兩城ヨリ出タル兵共二手ニ揉合、三千余騎マン丸ニ成テ突懸リ、黑煙ヲ立テツキ合ケルガ、何トカシタリケン、松任勢ツキ立ラレ引退處ニ、村井物ナレタル兵ニテ、頓テ人數ヲ備ケルニ、如レ案近藤、山崎ツキ立ラレシヲ見テ、横鑓ニツキ懸ケリ。爰ニ岡島喜三郎備ニ、平野五郎右衞門、河村善五郎、長田猪助ト云、利家卿鐵炮大將成ガ、村井取次ノ者ニテアル間、百余人ノ鐵炮ニテ助來リ、彌手イタク打立ツキ立、七八十騎討取、高所ヘ人數ヲ引ノボセ陣取タレバ、兩度ノ戰ニ能兵共百騎計討セ、叶ハジト思、城々ヘ取コミ、森山神保方ヘシキナミノ注進シテ、急ギ後詰有ベシ、加州勢足長ニ是マデ働無念ニ存候間、其内ニ富山ヨリ成政モ可レ有二御出一。一人モモラスマジキ由申遣ケレモ、其間五里ノ道ナレバ神保モハカユカザル間、ユル〳〵ト加州勢サ、メキ立テ引取ケリ。利長卿御父子、越中國内マデ御馬ヲ出サレ、味方自然利ヲ失ヒ候ハバ、後詰可レ有レ之ト待給フ處ヘ、兩度ノ合戰ニ討取首、名アル兵共ハミナ御父子見參ニ入申ケレバ、事ノ外御感有テ、村井事加樣ノ儀不レ珍ト被レ仰。村井具足羽織ニ矢鑓ニテ多ツキツラヌキタルヲ

御覽ジテ、利長卿具足羽織下サレ、御陣ワキザシモ下サレケル所ニ、片山内膳ト云人、今日ノ物語ヲ御前ニテ申トテ、蓮ノ間ノ様子語申。少ヌシノ威言交リ申ケレバ、利家卿其威言ヲ又兵衛ニイハセ度ト被レ仰ケレバ、サラヌテイニモテナシケリ。村井兩度ノ戰ニ利ヲ得ノミナラズ、越中ノ内ヘ四里ノ間、先手殿エ迄シテ十死ノ身ヲ遁レ、殊ニ手柄ヲ盡、歸陣仕タル事ヲモ威言御前ニテ不レ被レ申事、文武ノ侍哉トホメヌ者コソナカリケレ。扨今年ノ軍初心ヨシト悅給フ。利家卿、利長卿御父子サ、メキ立テ人數ヲ打入給ヒ、金澤城マデ村井又兵衛ヲ召テ、今度ノ働一々聞召レ、吉川平太、江見藤十郎、屋後太右衛門、小林大納言（法師武者）、此四人ニ黄金廿兩小袖二宛給リケリ。其外十二人黄金十兩ヅツ被レ下。彼助來タル三人鐵炮大將ニハ米百石宛、小袖道服ナド被レ下ケリ。其品々無二殘所一被レ成二御感一。扨一兩日過候テ、村井又兵衛尉ヲ召テ、二千石ノ加增ノ地ヲアテ行レケル。如レ此御ハカラヒアリシカバ、上ハ不レ及レ申、下ガ下ニ至マデ忠功ヲイタシ度トハゲマヌ者ハナカリケリ。

一同三月廿一日、成政人數ヲ被レ伴、蓮ノ間ヲ燒ル、ノミナラズ、人數ヲ討セ無念ニ思ハレ、加州境目ヘ打出、山手ヘ懸リ一里余リフミ入、鷹栖ト云所ヘ働、民屋少々放火セシ處ニ、彼地ヨリ注進有トヒトシク、金澤城ヨリ三里半山手ナレバ、時剋ヲウツサズ、利家卿觸ニモ不レ及、早ガイヲ立テヨト御身ヲ

モウデ打出給フ。城ニ有合タル小姓馬廻リ、カイヲ聞トヒトシク、心懸ノ侍共五六十騎御供トシテ懸タリケリ。モミニモンデ三十町計馳ツカセ給ヘバ、ホノ〴〵ト夜明ニケリ。扨見給ヘバ金ノ打出ノ小槌ニ赤キノウレン付タル馬印也。サテハ村井又兵衛ニテ有ト見エタリ。扨モ早速出ケルト御感有テ、其ヨリ乘出シ玉ヒ、先ヘ御出アツテ御覽ズレバ、村井百計ニテマツ先ニ懸、不破彦三、多野村三郎四郎、片山内膳ナド二陣ニ、村井ヨリ七八町跡ニ三百計ニテ懸タリケリ。利家卿御覽アツテ、恐ラクハ今朝ノ先懸某ト思ヒツルニ、各ニ先ヲセラレ申事ヨト大ニ御感有テ、イソガセ給ヒケリ。彼者共早懸出スハ何レモ金澤城二三丸ユヘ、一番ガイヲ聞ト、有合セタル兵共計ニテ馬引寄打乘懸タリケル。殊ニ村井ハ二丸ニアリケレバ、彼地ノ注進ヲ聞モアヘズ打出懸タレバ、マツ先ニコソ出ニケリ。如レ右又兵衛急ギケレ共、越中勢深シテイブセキトヤ思ケン。少々在所一二ケ所燒立、輕輕ト引ニケル。然共加州、越中境ニテノキヲクレタル兵共ヲ三十八騎、村井、不破手ヘ討、其ヨリ追討ニ打處ニ、越中ヨリ節所セバミヘ引請、福岡與四郎、佐々平左衛門尉ナドフミ留リ、鑓ヲ入澥引退ケリ。其ヨリ討取タル首共持セラレ、當年兩度ノ戰ニ多ノ首數ヲ見ル事吉例成ト、悅ビサ、メキ立テ人數ヲ打入ラレケリ。

一同卯月八日ニ利家卿、利長卿ヲ先手トシテ段々ニ人數ヲ備、

鳥越ヘ押寄、近邊ノ山々ヘ上リ給ヒ、强弱御覽ジテ責度思召共、足懸アシウシテ人數損ジテイラザル事ト、先人數ヲ寄、鐵炮ヲ打入サセ給フ處ニ、城中ヨリ物見ヲ出シ候ヲ、利長卿先手追拂ヘト追懸、城際マデ追詰候處ニ、近々ト引請、久瀨但馬守其外籠タル勇士共下知シテ、五百騎計童トツイテ出追崩、利長卿旗本近クハラハレケリ。利家卿横合ニ山ノ崎ニ本陣ヲスヘラレケルガ、其様躰ヲ御覽ズル處ニ、旗本ノ若者共、スハ早ヨキ事ト思ヒ噇ト立ントスルヲ見給ヒテ、我下知ナキニ懸ルベカラズト被レ仰。アノ躰ハ未味方足ヲタメラレヌ處也。ヨキ時分ヲ下知スベシトノタマヒケレバ、御目キ、ノ如ク味方追崩シニ、其時アレニ山崎庄兵衛其外誰々カアルラン。モハヤ鑓合時ニテ候ガ、如何々々ト被レ仰候處ニ、御言葉ノ下ヨリ德山五兵衛入道、御諚ノゴトク鑓唯今合セ申候ト相見エテ、地煙立申ケレバ、扨モオイナシ、アレヨリツキ返スベシトノタマヒケリ。誠利家卿御目利露ホドモ違ハザリケリ。然處ニ近邊ノ城々ヨリ助來、歷歷成政内ニテノ兵共、馬上ニ鑓ヲ持五六十騎計相見エ候。加州勢山崎庄兵衛ヨリ七八間先立テ、鷲津九藏ト云者懸出一番鑓ヲ入ケルヲ、庄兵衛見捨テ助ザリケリ。山崎内ノ者共申ケルハ、九藏殿討死ト見エテ候ト云ケレバ、アレヲ討死サセテコソ我一番ニナレト云テ、九藏ツキタヲサレタルヲ見テ返合ハセ鑓ヲ合ス。越中方ニ福岡與四郎一番鑓ヲ合、互ニ名乘合キビシカリケリ。サテ追崩城際マデ追討ニ打ニケリ。半田源太郎、横山大膳、神尾圖書、三輪主水ナドモ手柄ヲシテ戰ケル。カヽル處ニ杉江彦四郎ト云兵、成政内馬廻組頭ヲシテ勇士成ガ、近邊ノ城ニ番勢ニ居タリシガ、鳥越ヲ加州勢候ヲ見付助來ル處ニ、利家卿内ニ九里少藏ト云小姓、其頃蒙二勘當一居タリケルガ、スハダニテ彼彦四郎ニ渡合、引クンデ谷ヘ落ケルガ、上ヲ下ヘト返シケルニ、少藏下ニ成、既ニ首ヲトラントト杉江刀ニ手ヲ懸タル處ヲ、下ヨリ少藏小脇指ニテ草摺ノハヅレヲ二刀サシ通シ、終ニ杉江ヲ押伏ケリ。然共少藏クタビレ息ヲ休メケル處ヲ、片山内膳内ニ伊藤十藏ト云者ノ跡ヨリ來リ、少藏ヲ押除、首ハ相討ト云儘ニ奪取テ、利家卿ノ御前ニ參リ見參ニ入ニケリ。是ヲ初トシテ越中勢倉地猪之助、野間兵部、其外歷々廿七騎討死ス。加州勢手々ニ討取、勝時ヲ咄ト上タリケリ。其ヨリ城ニモ漸門ヲサシ、外樣ニシテ戰間、加州勢サ、メキ立テ、心ヲヨクシテ人數ヲ打入給フ。其夜利家卿御歸陣アツテ、後日ニ其品々有二御吟味一テ、山崎庄兵衛ニ黄金三十兩小袖一重被レ下。其外半田、横山、神尾、三輪ナドニモソレ〴〵ノ被レ下二御褒美一ケリ。扨杉江首穿鑿アツテ、彌少藏取タルニ相究リ、御前ユルサル、ノミナラズ、鞍置馬ヲ下サレケリ。扨越中成政、其頃越中ノ面々召集メ、加州ト取合初ヨリ此方、其品々記付ヲカレ褒美ヲ給ハル。中ニモ佐々平左衛門、前野小兵衛兩人ハ

二千石宛加增アリ。其外黃金十兩二十兩宛ニ小袖道服ナドヲ添給ハリケリ。其中ニモ今度鳥越ニテ一番鑓ヲ合タル福岡與四郎ニハ、今ニ初ヌ働トテ、黃金三十兩刀脇指給ハリケルト後ニゾ聞エケリ。前カド秀吉公上方ニテ注進ノ刻ノタマヒシ如ク、利家卿、成政人數ヲ立合候ハヾ、何時モ利家卿勝利ヲ得給ベシト秀吉公ノ御諚、少モ違ザリケリト申アヘリ。去程ニ弱ヲ捨テ强ニ付事ノウタテサハ、越中靑ニ在城セシ菊池伊豆守、子息十六郎評議シテ、加州越中ノ働度々ニ及ケレ𪜈、初ハ内藏助多勢成ユヘ、押懸テ猛威ヲ振フヤウニ候ヘ𪜈、度々ニ味方利ヲ矢ヒ候事、時ノ仕合ニアラズ、小勢ヲ以多ニ勝給フ事ハ、弟一ニハ御運モ强ク、何時ニヨラズ輕々ト出馬アリ。其身ヲクルシメ家臣ヲ捨給ハズ。賴敷名大將、其上家老ノ面々善兵𪜈ヒカヘタル由ナリ。殊ニハ日月ノ草木ヲ照シ給フゴトク成。智ヲコタラザル武將ナレバ、ハタシテ冥加可レ有レ之。イマダ香バシゲノアル内ニ味方ニ參リ忠功ヲツクシ候ハヾ、ナドカ御感ニアヅカラザルベシト計テ、利家卿御内ニハ誰々トイヘ𪜈、村井又兵衞尉ハ第一、家長ト云フ、武勇智謀モ勝レ、度々ノ合戰ニ猛威ヲフルマヒタル人ナレバ、此人ヲ賴可レ申ト定、シノビ使者ヲ遣シ、此由申ケリ。則利家卿ヘ村井ヒソカニ申上ケレバ、彼者隱ナキ侫人ト聞及ビ候。如何可レ有レ之ト被レ仰ケレバ、村井御諚最ニ御座候ヘ𪜈、先彼者ヲ御味方ニナサレ靑城ヲ請取、近邊御手ニ屬シ候テ、菊池忠功ヲ御感有テ、其上ニテ城ヲモ御預ケ候カ、當座ノ引出物ヲ下サレ候歟、樣子ニヨリ御計ヒ可レ然候ハンヤト申ケレバ、トモカクモ能樣ニ計候ヘト被レ仰候處ニ、村井内ノ家老ヲ遣、能シメシ合、加樣ニ仕置タル由利家卿ヘ申上ケレバ、同年四月二日、俱利加羅城ヘ働給フト觸サセ、津幡ニ人數ヲソロヒ、俱利加羅ヲバ右ニ見テ、末森ト飯山ノ間ヨリ越中靑城ヘサシムケテ、村井又兵衞ヲ先手ノ大將トシテ原隱岐守、片山内膳、岡島喜三郎、多野村三郎四郎、前田宗兵衞尉、其外宗徒ノ人々、都合其勢六千餘騎ニテ靑ヘ馳ツカセ、利家後卿詰トシテ馬ヲヨセ玉フ處ニ、菊池父子只五十騎計ニテ出向。御出馬イマダ相延可レ申ト存候處ニ、存ノ外輕々ト出サセ給フ事、殊ニ惡所ト申御メイヨナリ。又ハ御味方可レ仕ト申上ルニ付テ早速御出馬、忝儀可ニ申上一樣モ無ニ御座一ト申。則靑城ヒラキ渡申。我身ハ五六町計ワキニ居住候處ニ、靑ノ近邊菊池ニ隨ハザル在在所々燒拂セ給フ處、内藏助ヘ森山城主神保方ヨリ此由度度注進イタシケレバ、頓テ森山マデ成政カケ付、菊池儀口惜次第哉ト、一合戰シ勝負ヲ決セント勇、少々足輕ヲ被レ出ケレ𪜈、早靑城ヘハ加州勢入替リ、利家卿モ後詰ニ出馬アリケレバ、叶難ク思ハレ、成政人數ヲ打入ラレケレバ、靑城ニハ前田宗兵衞尉、片山内膳、高畠九藏、鐵炮大將ニハ小塚藤右衞門（十郎イ）、長田權右衞門、都合其勢千余騎被ニ入置一、

先人數打入給ケリ。

一然處ニ利家卿日々月々勢付ケレバ、成政ハヲノヅカラ枯ハツル樣ニ成ニケリ。殊ニ靑城主マデモ利家卿ノ御味方ニ參ケレバ、成政家老ノモノマデニ心モトナク成ニケリ。俱利加羅、鳥越兩城モヲノレトヒラキノキ、森山、木船、伊奈美三箇所取籠、ヲヤヘ川ヲ前ニ當、强々ト城ヲコシラヒ、時剋ヲウカヾヒ合戰スベシト思ハレケル。扨コソ利波郡過半利家卿ノ御手ニ入シカバ、加州勢ノ諸卒ノ機アラタニ成、彌忠孝ヲ盡シ度トノミ思入タル有樣也。其時利波郡今石動ニハ城ヲコシラヘ給ヒ、津幡城ニ居ラレタル前田右近子息又次郎ヲ被ニ入置一、越中國中ヲ見下給フ。成政心ノ内ニハ、謀反人モアリ、利波郡過半利家卿手ニ入候間、定テ勝ニ乘ヲヤヘ川ヲ越、働キツベシ。其時城々ヨリ出モミ合、合戰シテ勝負ヲ付ベシト思レ、番勢共ヲ方々ニ置給フ。先森山城ニハ神保ヲ大將ニシテ四千五百余騎（二イ）、木船城（前野小兵衞イ（左歟））ニハ佐々平右衞門、大將ニシテ二千五百余騎被ニ入置一、增山城ニハ成政馬廻リ、替々番勢ニ被ニ入置一、我身ハ富山ニアリテ一萬計ノ人數ヲ引付、越後ト越中ノ境ニ城アリテ、丹羽權平五百余騎入置レタリ。扨内藏助越中大國トハ申セ𪜈、人數ヲ過分ニ被レ抱シ事、不審ヲ立候事最也。其故前カド書付申ゴトク、一度謀叛ヲ心ニ懸、尾張内府德川殿ト一味シテ、北國ノ大將トヨバレト心中ニ思ハレケレバ、越中山ノ多キ國ナレバ、知行ノ内ニ山野マデモムスビ、或ハ上方ヨリ五千石ト約束シテハ呼下シ、六千石七千石又ハ千石ト云、合テ千五百石ナド判形ヲ被レ出ケレバ、我モワレモト引ツドヒ、越中ヘト心ザシ下リケリ。扨所付ヲミレバ漸一ツ五步二ツニタラヌ物成ニテ、人ノ知タル侍共ハ暇ヲ乞上洛シ、或ハ加州利家卿ニ留ラレ、暇申モ多カリケリ。其内ニ加賀、越中取合出來ケレバ、サスガ兵モ見捨上洛モ成難ク、居トマリ申候ユヘ、思ノ外人數多カリケリ。扨モ成政心ノ中無念ヲ晴サント思ハレケルヲ、利家卿心得給ヒ、利波郡ニ取出ヲ四箇所コシラヘ、勝テ甲ノ緒ヲシメ給フ。誠ニ日比ハ輕々シキ大將ト云、又ハ諸手ニテ勝軍ナルニ、此度ツヽシミ給寢、申モアマリアル御事ト、心アル兵共感ジ申ケリ。

一同年五月ニ木船城ニアリケル佐々平左衞門尉、伊奈美（利波イ）勢ヲ語ヒ、五千騎計ニテ未明ニヲヤヘ河ヲ打越、今石動ノ近邊燒立シ處ニ、城々内ヨリ前田右近、子息又次郎千六百騎計ニテ打出、四方八面ニ下知シテ突合切合、火花ヲチラシテ互ニヲメキサケンデ相戰處ニ、右近内歷々是ヲセンドト防ギ戰ヒケリ。又次郎鑓ヲ入來リ給ヒ、平左衞門先陣追崩、廿騎計討取、勝時ヲ咄ト上タリケル。其比又次郎イマダ十九歲、無ニ比類一働中々申計ナカリケル。其時二陣ニアリケル前野小兵衞入替リ戰ケルニ、荒手ノシルシ多勢ナレバ、右近勢突立ラレテ武者色惡ク、早善兵𪜈十騎計討ニケリ。カヽル

所ニ倶利加羅ノ取手ニ居タル近藤善右衛門、岡島善三郎、原田又右衛門、其外彼是千余騎助來リ、何モ名乘懸々々、モミ合突立打立ケル中ニ、利家卿鐵炮大將平野五郎右衛門マツ先進デ、五十余挺ノ鐵炮ヲ打セシヲホメヌ者コソナカリケル。其時平右衛門(左歟)返合ケレモ、右近、又次郎父子大音聲ヲ上、爰ヲモメト云儘ニモウダリケレバ、越中勢ホウホウヲヤヘ川ヲ越引處ヲ追討ニ五十餘騎討取、右近父子サヽメキ立テ人勢入ケレバ、殘ル人數モ倶利加羅城ヘ引ニケリ。此由利家卿ヘ注進申ケレバ、不レ斜御感ニテ、其時ノ働御吟味アリ、無二殘所一被レ下二御褒美一ケリ。

一同六月上方ヨリ秀吉公御書ヲ以、此上ハ越中表ヘ利家ニ人數ヲ被レ出、聊爾ノ働無用ニ候。度々其表手柄モ首數ノ注文一々承及候。北國ノ仕置ノタメ彼是ニ秀吉公出馬可レ有之間、其心得最ト度々御使者ヲ添テ被二仰付一ケリ。然モ利家卿ハ哀内藏助出候ヘカシト、手立ノミヲ盡レケレモ、成政モサスガノ大將ナレバ、聊爾ニ手出シヲモ仕給ハズトナリ。

一同六月廿四日ニ森山ニ有レ之神保安藝守、子息清十郎、五千騎ヲ引グシ、氷見口ヱ相働候處ニ、青城ニ加州ヨリ被二入置一シ前田宗兵衛、片山内膳、高畠九藏、菊池父子、其外宗徒ノ兵共二千餘騎、民屋ヲ燒セジトカ、ヘケルニ、ハヤ取ツキ切合突合、ヲメキサケンデ敵味方入亂戰シ處ニ、森山勢多勢

ナレバ、青勢ツキタテラレ引色ニナル處ニ、鐵炮大將小塚藤十郎ナド、ヲメキサケンデ鐵炮ヲ高キ所ヘ引上セ、込返々々打セケレバ、森山勢鐵炮ニ當リ少々ヒカヘタル其間ニ、片山、菊池父子ナド下知シテ押返シ、森山勢ヲ突立打立、互ニ首ヲ取モアリ、被レ取モアリ、兩方六七十騎ウタレニケリ。神保旗本千騎鑓ヲ入來テ、誰ニモ目ヲカクルナ、謀叛人菊池父子討取候ハヾ、不レ殘忠功ト聲々ニ呼ハリ、青ノ勢モ是ヲ聞、菊池ウタセテハ面々ノ耻辱ナリトカケ廻シ下知シテ、足懸リ能所ヘ菊池父子差上セ、ヲメキサケンデ戰處ニ、又青ノ勢突立ラレテ、善兵共四五十騎討レニケリ。森山勢ハ彌氣ヲ得テ、モミニモンデ戰青ノ勢危クミユル處ニ、村井又兵衛尉利家卿ノ名代ニ、取出共ノ城々、並爰カシコ堅固ニ守候ヘト、仕置ノタメニ馬ジルシマデニテ上下三百余騎ニテ參リシガ、折節青ヘトイソギ來リ候處ニ、此由ヲミテ、扨モ天ノアタヘカト云モアヘズ、三百余騎ヲマン丸ニ備、馬ジルシヲフリ、横鑓ニ懸レカ、レト下知シテ、我身ハ眞先ニ馬上ニ鑓ヲ持懸ケル。又兵衛大强ノ者ナレバ、青勢是ニ力ヲ得テ取テ返ス。森山勢度々手柄ヲ盡シタル打出ノ小槌ノ馬ジルシヲ見テ、スハヤ村井カト思ニヨリ、サシモニキヲヒタル勢ナレモ、早村井ニ突立ラレ、一サ、エモサ、エズ崩レシテ、中坂ト云處マデ二里ノ間、追討ニ打程ニ、五百余騎討捕勝時ヲ作リ懸、イヤ〳〵余長追シテ、節所ニ行懸リ引シテ大事ト、又兵衛前

ヲ懸廻不知シテ引取ケルモ、村井彌武威イヤマシニ成、肩ヲナフブル(ヲ)モノナカリケル。彼首共ノ内名アル者共八十三、殘首モハ注文マデ利家卿ヘサヽゲ物ニ仕タリケレバ、村井加様ノ働今ニハジメズ候トイヘモ、殊更ヨキ時分青ヘ行合、城ニ置者討セズ候事大慶不レ過レ之候。以來ハカマヘテ〳〵森山勢出タリモ、此方ヘ注進ナク青城ヲ出ベカラズト、青ノ兵共ヘ被二仰遣一。則村井又兵衛尉ニハ黄金百兩、刀則吉、吉例トテ青ノ御馬ヲ給ハリケリ。其勢ヒヲ得テ、能登七尾越中ヨリ入置レシ荒山ト云取出ヲ、七尾勢前田又左衛門尉、中川清六、高畠織部ナド大將ニテ攻ケレバ、折節城中ノ人數神保方ニ相談スル事有テ、三百計殘置、皆森山ヘ呼越時押寄、即時ニ攻ヲトシ、防ギ戰者モ五六十騎首ヲ取、殘者共ハ山中ヘ北入ケレバ、難ナク荒山城燒ハラヒ、七尾城ヘ引返シケリ。是又利家卿聞召御感アリテ、其品々能御吟味アリテ、引出物給リケリ。「是ヨリ先末森ノ城攻ノ時、利家後詰可レ有間、其地引拂(モイ)末森迄出合候ヘト、能州衆ヘ被二仰遣一候處ニ、能州衆七尾ヘ奇合(寄)相談有レ之。皆申候ハ、能州勢漸三千計ニテ參候共、萬一利家無二御出馬一バ、一騎モ殘ベカラズ。今一度加州ヨリノ左右ヲ相待ベシト云々。長九郎左衛門申云、流石ノ利家、能州ヲ拂出ベキト被レ仰、御後卷ヲ可レ被レ止ヤ。某一手計ニテモ末森ヘ向、利家御出陣ニオイテハ、御眼前ニテ御先ヲ可レ仕。モシ無二御出馬一バ我等計ニテモ一戰シテ打死

可レ仕。トカク利家御判形次第ニ可レ仕候トテ、居城德丸ヘ歸リ、相野吉助ト云軍配者ニ吉凶ヲ占ス。吉助申ス。末森ヘ御出大事有二御座一間敷候。但利家ニハ御對面成兼可一申候。子細ハヒジキモト申言葉ニアタリ候間、利家ニハ障子一重ヘダタリ申ト云々。九郎左衛門ガ云、一段ヨシ、障子一重ハ踏破リテ可レ入二見參一云々。然處ニ持病ノ胸虫指起テ出陣難レ成。于レ時家來岡島名兵衛諫テ云、胸虫ノ藥ハ糞ニ不レ如ト。九郎左衛門氣色ヲ損。名兵衛一口飲レ之其風味ヨシトイヒテ進レ之。其時九郎左衛門飲レ之得二快氣一タリ。ワヅカノ人數ヲ以末森ノ城ヘカケツケ、無二比類一强ヲ出ス故、彼七尾衆失二面目一所也。今度荒山之城ヲ落シ、其耻ヲスヽゲリ。」

一同年八月十八日ニ秀吉公、上方大形無事ヲ御究メナサレ、數萬騎ヲ引グシ、加州尾山(金澤)城マデ御著座アリ。後陣ハイマダ越前北ノ庄ニヒカヘタリ。利家卿カイツクロイ善ツクシ美ツクシ給フ。其後成政ハ森山、木船、井波、其外城々ヲ引拂ヒ、富山ジンヅ川ヲ前ニ當、萬死一生ノ合戰シテ討死セントヒカヒケリ。利家卿先陣ニテアンネウ坂ノ上ニ取出ヲ拵、富山ヲ見下也。川涯マデ日々夜々ニ働給フ。秀吉公御本陣ハ吳服山ニスヘ給。内藏助、家老ノ面々召集如何アルベキト、各存ヨリ候通云レ候ヘト被申ケレバ、山下甚八、佐々平左衛門尉進出、秀吉公御出馬候故、山モ堀モ人數ト見テ候。萬死一生ノ御合戰モ叶ガタク存候。無事ノ行有テ秀吉公ヘ

忠功ヲツクサレ候ハヾ、長久思召儘ニアルベシ。其上ニテ時節ヲ可レ有二御待一由申ケレバ、サレバ此儀最ナリト同事内大臣信雄公ヘ御理被レ申。無事ノ佗言被二申上一ケレバ如何可レ有レ之ト龍川下総、土方勘兵衛尉、信雄公ヨリ御使者トシテ秀吉公ヘ被二仰入一候處ニ、秀吉公、トニカクニ内藏助ニ腹ヲキラセ候ヘト御返事アリシ所ニ、重テ兩人ヲ被レ遣、内藏助事信長公ヨリノ者ナレバ、此度ノ儀御ユルシ候ヘト、御本城達テ御佗言アリケレバ、サラバ仰ニ任セ可レ申。然ル又左衛門尉次第ト御意候時、利家卿謹而、忝御意ニ候。然ル兩年ガ間度々戰候ト云ル、一度モ内藏助ニ利ヲ得サセタル儀無二御座一候。其上若年ヨリ互ニ信長公ニ仕ヘ奉シ時分モ、猶以内藏助ニコサレ.ケル事無二御座一候間、其處ハ御心易被二思召一候ヘト被二申上一候ヘバ、何モ大名小名御前ニナミイタルガ、扨モ文武ノ大將カナト、利家卿ヲホメヌ者ハナシ。其上秀吉公被レ仰候ハ、最利家卿ノ被レ申候ゴトク、其方ト内藏助武道クラベ所モナシ。ソレハ被レ申マデモナシ。隱ナキ次第也。此上内藏助禪衣ノ躰ニテ罷出候ヘ、信雄卿ノ御佗言ノ上ハ無二是非一。新川一郡可レ被レ下之由被二仰出一。九月五日ニ内藏助出仕ニ相極、其時利家卿ノ陣所ヲ通リ出仕、申剋、先陣後陣大音聲ニテ咄ト笑ケリ。成政サコソ心中無念ニアルランヅレル、サラヌ躰ニテ出仕申ケル心ノ中哀也。越中國中御仕置無二殘所一被二仰付ケ一、利波郡、中郡、姉負郡、

合三郡ヲバ、利家卿ニ一兩年仕置シテ利長ニ渡可レ申トナリ。則御判形被レ成二頂戴一、新川一郡ハ佐々内藏助ニ給リケル。悉ク境目已下御法度被二仰出一。加州金澤城マデ秀吉公被レ成二御歸陣一。九月十日ニ利家卿ヲ召、今度モ忠功誠ニ不レ淺次第ニ候。内藏助大國ヲ持、謀叛ヲ心ニ懸、人數押ヲ拵、殊ニ緣者ノ結ビヲ企タルタバカリ心ヲトゲサセ、其上多勢ヲ以テ働候處ニ、度々ノ合戰ニ切勝、越中利波郡マデ切取候事、無二比類一手柄ノ段、日本ニヲヰテ武門ノ統領タルベシト御感狀ニ、羽柴筑前守ト御名字御名共其儘被レ下候事、唐土天竺ハシラズ、日本ニヲヰテハ加様ノ手柄アリガタシト、世コゾツテウラヤマザル人ハナカリケル。是ゾ君、君タリ、臣、臣タル御世ナリト申アヘリ。其後利家卿ノ家老面々ヲ被二召出一、御直ニ今度ノ取合ニ各手柄共上方ヘ相聞エ候。尤滿足不レ過レ之ト、利家卿御舍兄前田藏人入道ヲ被二召出一、久々ニ(衍歟)ニテ逢候由御意ニテ、小袖御道服ナド被レ下。扨村井又兵衛被二召出一、今度モ度々骨ヲ折手柄ル聞及ト御意ニテ、黄金百兩、長光ノ御腰物、被レ下二御道服一。不破彦三ニ黄金、御道服、前田右近ニ同被レ下。長九郎左衛門、高畠彌次郎、奥村助右衛門、中川清六、前田五郎兵衛ナドニ黄金五十兩、御道服一重。何レモ其品々被二聞屆一御褒美ナサレ、右ノ外五六人ニ黄金二十兩下サレ候ナリ。誠有難御計ヒト、利家髑髏ヲ地ニ付、御禮被二申上一候テ、扨御歸陣之刻、重テ不破彦三、村井又兵衛尉兩人ヲ秀吉公ヘ被二召出一、度々先陣候由無二比類一働ト被レ仰、御具足羽織ヲ下サレケリ。弓矢取身ノ面目何事カ是ニシカンヤト、諸軍勢見聞ホドノ者ウラマヤザルハナカリケリ。ソレヨリサ、メキ立テ御上洛アリニケリ。其比ヨリ兩年過、越中新川郡モ利家卿代官分ト被二仰出一拜領アリ。其後筑紫御陣ノ時カンシヤクノ城ヲ子息利長卿手柄盡サレ候ヘバ、扨モ父筑前守ノ子也。鷹ハ鳶ヲ生ヌモノナリト、ホメヌ者コソナカリケレ。重テ關東御陣ノ時、利家卿北國ノ大將トシテ出馬アリ。ホドナク上野國松枝ヘ押ツメ、色色城主ヨリ佗言申候間、無事ニシテ城ヲ請取、先勢ヘ大道寺ヲモ被二召加一案内セサセ、武藏國八王寺關八州ノ名城成ヲ、即時ニ攻落シタマヒ、奥州ノ仕置ニ出羽國マデ、利家卿、利長卿御父子御越候時、絹川ヲ早先手ノ人數半分ホドモ川向ヘ越タルニ、俄ニ大水出來テ中々舟ナラデハ通モ成ガタキニ、諸勢見ツクロヒ、川ノコナタニ人數立居タル處ニ、利家卿京ミズト云名馬ニ乘替給ヒ、彼川ヘ乘入給ヘバ、上下アハテサハギテ我先ニト乘入ノリイレ渡スホドニ、川下セキ留ラレテ、一人モ不レ殘向ノ岸ニ懸上ル。其夜ハ利家卿御本陣ヲ河ノコナタニスヘ給ハバ、一揆ヲコリ先ノ人數可二討捕一ト聞エシガ、サテモ昔宇治川ヲ渡セシ先陣ハ家ノタメ身ノタメナリ。今利家卿ハ人數ヲ討セジト、一命ヲ水ニヲボル、ル不レ顧渡シ給ヒシ事、中々古今ニ希ナル名大將ト、其時見ル者ハ不レ及レ申、後々聞人マデモ感申ヌハナカリケル。其後大納言ノ御位ニヘアガリ給ヒ、天下ニヲヰテ肩ヲナラブル人モナカリケリ。夫ヨリ秀頼公御守ニツキマイラセラレ、目出度武將ノ行衛哉ト申サヌ者ハナカリケリ。

右此書ハ依二御懇望一見聞之趣粗書記。致レ進二覽之一候。聊憚二外見一而已。

九月十五日　　岡本慶雲

長見右衛門尉殿

右末森記。以二勢州林崎文庫本一按合。

新校羣書類從　卷第三百九十三

合戰部廿五

赤松記

爰に赤松の初を申さば、人王はじめて六十二代村上天皇と申。其御子具平親王より三代、右大臣顯房の御子、第一は中院左大臣雅房と申、久我殿の御先祖なり。第二丹波守季房の御子のとき、播磨の國佐用庄赤松谷といふ所にながされ給ひて、其子孫住給ふ。かくて五代目を則景と申。此人宇野といふ所を知行し、宇野名字の元祖なり。此時關東に下り給ひて、北條どの緣者となつて、建久四年七月四日、佐用庄地頭職を賴朝の御下文御拜領なり。是よりして宇野播磨權守則景と申。其弟二人あり。第二は宇野新大夫則連、其弟得平三郎これなり。是は佐用庄の內得平名といふを取たるにより、則得平と名乘る。于レ今出井分と申は此所なり。則景より四代目を次郎家則と申。其子則村、赤松と名乘、赤松孫次郎と申。法名圓心、此時播磨、備前、美作、三ヶ國御取候。圓心の御子を則祐律師、天台山大塔宮の候人なり。後に將軍家につかへ大忠ありし人なり。則祐の御子を上總介義則、法名圓齋と申。御せいちいさく御座候て、京童は赤松三尺入道殿と異名に申ける。法名性松とも申。龍德寺殿これなり。其ころ都に不思儀(議)の化生のもの出來て、上下の煩不レ及是非一躰なり。委く子細を尋るに、化生にてはなく人なり。一向に化生の如く馬上にて京中を走廻り、手に當るものを切廻り、手にたまらねば討べき物なし。髮をながく亂し、大なる兒の樣なる物なれば、大わつぱと名付ておぢ恐るゝこと限なし。いかにもして彼をしたがへたらんは、天下の忠義なるべき事と御門よりの宣旨なり。然れどもたやすく從へん樣なし。しかるに三尺入道是非共ねらひてみんと思召、是をば馬にのり、舍弟をもつれず、只一騎こゝかしこをめぐり給ふに、天の御引合せにやあらん、御菩薩(ミツボ)池の邊にて行合給ふ。互に馬上にて渡りあひ、大わつぱをおもひのごとく切落鎭め給ふ。其時の御恩賞に因幡にて知頭郡、但馬にて朝來(アサコ)郡、津國中島給候なり。彼大童子が打太刀のかけはづし、義則の眉のした少あたり血流しに、則御教書戴き給ふにより、彼御教書にも額の血付たり。今彼家の重寶なり。末代の名譽なり。大童子御退治のうち物、則大わつぱと名付て赤松の重代なり。同桶丸の御太刀と二ツ重代と聞えたり。然るに先年義祐と範房御父子、御和談の調有て、三木より小鹽へ義祐御出のとき、三木にて別所孫右衞門重宗に、代々の重書を義祐より御預けにて重宗所に置れ候なり。御父子の御中たがひの儀、いろ〳〵事多く候へども、書入候事不レ入事と存不二書載一候。然るに重宗の宅不慮に自火にてやけ、御重書尊氏公御告文、同二の御太刀、大わつぱ助平、悉く以燒失候。言語道斷の次第にて候よし、御家滅亡の瑞相とみえたり。扨義則の御子をば大膳大夫滿祐と申、法名性具と申是なり。其御子彥治郎□□政と申。父子ともに在京有てかはらず御奉公あり。然るに何者が申出しけん。上意の御間に雜說出來、とかくに滿祐覺悟をかへ給ふ。されども色だちては成がたければ、たばかり申さん爲に御成を申。御所樣を討申さんに定め、庭の泉水の鴨の子爲二御覽一。嘉吉元年六月廿四日に滿祐宅へ御成申。諸大名御供なり。勝定院殿樣義持の御時、定められし御能もあり。わき能に鵜の羽を仕ル。中入の時御庭へ惡馬を放て、安積監物行秀と申者、公方樣普光院殿義敎、へためつけをいたしやうなく討申候。御年四十八にならせ給ふ。御供の人々も手にたまる人なく散々に落給ふ。京極加賀守入道、山名中務卿貴はうたれ給ふ。武衞殿義廉、大內殿持世、門をこえて落給ふ。滿祐父子義敎を討、攝津の中島にて公方の御首を吊申され、宗福寺と申寺に而御葬禮ありて、扨播磨へ下り給ふ。公方樣御敵の事なれば、都は申に及ばず、國々の御勢此國へ攻下り、南は□□□鹽屋あたり迄にてさゝへけれども不レ叶攻入候。北は但馬より大山口へ攻入。我等曾祖父因幡守をはじめ、同名一門一所に十三人討死候。諸口何も後にはあしく候て、漸もくるすと申所の上城山の用害に、御父子滿祐被二稽籠一候。各談合にて此山にて御腹をめさる。父子一所に御果候事口惜候間、彥治郎殿いかやうにも御忍び被レ成候て、時節をまち御はからひ可レ然とて、彥治郎は伊勢の國司村上源氏一性なれば、是を賴みて、勢州へ御忍びのことさま〳〵候へ共不二書入一候。扨又木山には寄手は次第に集りて、叶はずして滿祐御腹切給ふ。彥次郎殿伊勢に御入之事もれ聞え、京都よりの御憤により、國司の御抱も不レ叶終に御自害。悉く赤松どの一家果候。然ば播磨は山名殿賜り、但馬衆廿年知行し、當國の人々はおもひ〳〵に他國の牢人いたし候。我等曾祖父石の大山口にて討死す。其後家懷妊にて丹波へ落、木崎と申所に忍びて堪忍し、木崎にて女子を儲け候。其後赤松の家再興のこと、國の浪人衆談合にて細川殿讃岐守を賴申。いろ〳〵上意を御申くつろげにて、まづ赤松の名字計立られ候はんとて、滿祐の弟常陸守祐之の子息彥五郎則尙と申を、赤松の名跡とて、御出仕計御免候はんよしにて、いまだ御安堵の事はさたにも不レ及候へども、若牢人衆相談候て、彥五郎殿覺悟にて、既に御免のうへは冤角に不レ及と一揆を起し、押而本國播磨へ御下り、國をばいまだ山名衆持候間、備後衆室津に

檢校保己一集

歴歴居候彼衆に渡合て戰負、やみ〳〵と御果候。重而御家督を可レ申様御座なく候。其ころ三條内大臣殿重量公、と申て、上意の御中能御本所御座候。彼御内石見太郎左衞門と申人をかたらひ、三條殿を奉レ頼。上意を重而とゝのへ、次郎法師丸を赤松の家督に被二召出一、五歳に成給ふを取立ける。治郎法師丸は滿祐の弟に伊豫守義雅とて、城山にて腹切給ふ人の子息九歳になりしを、天隱和尚山中にかくし申、其後出家になし性尊坊と申。勝岳の御事これなり。かの性尊坊の御子なり。是も出仕計は御免許にて、中々御國御安堵の事はいまだ不レ調候。爰に南方と申て兩宮御座候。これは太平記の比、位爭の御門の御末ゝ。何様天下を一度御望有て、御兄弟吉野のおく北山と申所に一の宮は御座候。二の宮はかはのの郷と申所に御座候。さて赤松衆□天下第一の忠賞に預り、此家再興をいたさんとの望にて、工夫して此吉野殿をうちはたし神璽を取返し奉るべし。しからば次郎法師丸に御安堵あるべきかと、内々をもつて訴訟申所に、上意の御内證相叶ひ、三條殿を以禁中へも申上。扨よし野どのをねらひ申さん謀に、赤松窄人共身の置所なく、堪忍もつゞかぬ事なれば、吉野どのを頼申よしにて、細々吉野へ參り、何とぞ赤松窄人一味いたし都を攻おとし、一度は都へ御供申さんと、色々申入候へば、御同心の義あり。扨大勢は御隔心なれば夜討に入べき人數をすぐり、間島、中村彈正、同太郎四郎已下大和國宇智郡まで出勢し、康正二年丙子十二月廿日、

吉野へまいり際をうかゞひける。終に次の年長祿元年丁丑十二月二日の夜子の刻、大雪ふり、御油斷の時刻を伺ひ、兩宮へ二手に成一度に攻入、北山にて一の宮をば丹生屋帶刀左衞門、同弟四郎左衞門兄弟にて討申、御頭をば帶刀取申候。彼内裏の御たから神璽をもとりてのき申候。吉野十八郷の者起り、跡より追ひ懸候間、御頸を隱し置候得ば、奇特なることにて、血涌上り其血にてあらはれ、兄弟共に伯母谷と申所にて致討死一候。其時神璽をも取かへされ候。扨又二の宮をも同じ時分に打はたし申候。是は中村彈正御首給り候へども、是も郷民起り致討死一候。兩宮の間大山共隔て道遠く候といへども、赤松衆互に堅く申合、同じ時節に打果し申候。しかれども討手の兵共大形道にてうたれ、たまたま殘るもの雪にうづもれ果て、神璽をとるべきやうなし。小寺藤兵衞入道、大和衆越知と申者をたのみ、種々の謀をめぐらし、郷民をすかし取、次のとし長祿二年八月晦日、神璽を内裏へ備申候。かやうに重々忠節無二比類一候へども、御國安堵は延引し、先御恩賞として加賀半國、富樫次郎成基跡、并備前國新田庄、出雲國宇賀庄、伊勢國高宮保給り候間、各々彼國へおし入、度々の合戰にて或は討死の人もあり。様々の儀にて終に御手に入候つる。其後天下應仁に亂れて、諸大名思ひ〳〵に成行、山名殿も上意を背き給へば、赤松殿味方に參らせ玉へば、何の様もなく三ヶ國安堵被レ成御手に入候。嘉吉元年に山名殿に渡り、廿七年めに取かへし安堵被レ成候。其後次郎法師御元服あり。赤松次郎政則と申。官は左京大夫、後には從三位に上り玉ふ。性善院殿是なり。然ば我々家の叓、大忠の跡にて候とて、御尋に付て木崎に被レ居候後家を被二召出一。丹波にて生れたる娘子に、家督をつがせられ候はんとて、酒見の北條に御入候。能登殿の他腹の兄なれども出家し、荒田の瑞光寺と申寺に御入候を召出し還俗させられ、木崎の息女に申合せ、得平源太則近と申はおほぢ、先に申但馬口にて討死の時まで、保田の庄五十郷少しもまじりなく一圓知行致しつる。其ごとく安堵致し候はん事にて候處に、赤松殿窄人の時分、安田の庄をば細川淡路守知行候。赤松どの事、細川讃州別而其頃御入魂にて候間、細川方へ當分知行の事、はた〳〵と取かへす事延引候。其後境御出陣のみぎり、政則御緣邊定り、細川勝元勝元號二龍安寺殿一の御娘洞松院殿と申て、比丘尼御所にて御座候をおとし被レ申、政則へむかひとり御申候。めし様と申たるは此御事なり。然れば安田、中村、高田三ヶ郷地頭分を勝元よりめし様へまいらせられしにより、めし様わたく（マヽ）領所と被レ仰候。か様に候て漸々ぞかい地頭本所分計手に入候。我等家のはじまり前に申ごとく、權守則景の弟新大夫弟を得平三郎賴景と申。是より始り此分にて代々知行分公方より御下知にて、赤松の扶持にてはなく候。與河の内北河村とあがた、此兩所は上月伊勢守と申人のあとなり。我等祖父則近のとき、性善院殿より被レ下候。則近に子貳人、兄は源次、弟は源三郎と申候。則近死去の後、兄の源次郎あとを相續し候。屋形に女子一人御座候。御名をば松御りやう人と申。政則御煩ひあり。御慰に御鷹野に御出、坂田のくど寺と申を御宿にて彼寺に御逗留候所に、おもひの外御煩取詰候へて、寺にて御他界。御年四十二明應二年四月廿五日ゝ。されどもおもひの外に御家督の事、御病中に御讓狀認めをかれ候。當家嫡流筋七條藏人元久の御曹子才松殿と御料人様と申合せ、御家督にすへ申べき由、御ゆづり狀したゝめ置れ候。其ごとく才松どのを入申候。屋形に御定り候。親にて候源三郎は、御定り當日より御前に詰御奉公被レ申候。才松どの御元服有、赤松次郎義村と申。後には兵部丞殿と申。くわうゐん殿とは此御事なり。上様は後に瑞正院殿どのと申。其後赤松播磨守殿と申人、御一家の中にて御家督を望み謀叛をおこされ候。少々同意の衆も候へども、先壹人□鹽屋のさき山と申を陣にとり、□時日をうつさず御家形御の□れ候て、さき山を取詰。永正四年九月□十□日、播州をはじめ悉討果し申候。扨も其時源次は播磨と一味いたし、さき山にて腹をきり候。跡は闕所になり候處に、弟源三郎別心なく奉公申上は、一かど御扶持有て可レ被二召仕一義にて候。幸に兄のあと式あき所にて候間、兩職御扶持被レ成可レ然の旨、所司代浦上美作守則宗被二申上一候間、源三郎知行分被レ下候。我等親にて候。宮途は左衞門尉眞助と申候。扨次郎殿御若年により、御國の御成敗は御前様、めし様御はからひにて、何事も御印判にて被二仰付一候。此躰に候間訴訟申事相延、次郎殿